

三四郎

夏目漱石

青空文庫

一

うとうととして目がさめると女はいつのまにか、隣のじいさんと話を始めている。このじいさんはたしかに前の前の駅から乗つたいなか者である。発車まぎわに頓狂な声を出して駆け込んで来て、いきなり肌はだをぬいだと思つたら背中にお灸きゆうのあとがいっぱいあつたので、三四郎の記憶に残つてゐる。じいさんが汗をふいて、肌を入れて、女の隣に腰をかけたまでよく注意して見ていたくらいである。

女とは京都からの相乗りである。乗つた時から三四郎の目についた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移つて、だんだん京大阪へ近づいて来るうちに、女の色が次第に白くなるのでいつのまにか故郷を遠のくような哀れを感じていた。それでこの女が車室にはいつて来た時は、なんとなく異性の味方を得た心持ごちがした。この女の色はじつさい九州色であつた。

三輪田のお光さんと同じ色である。国を立つまぎわまでは、お光さんは、うるさい女であつた。そばを離れるのが大いにありがたかつた。けれども、こうしてみると、お光さん

のようなのもけつして悪くはない。

ただ顔だちからいうと、この女のほうがよほど上等である。口に締まりがある。目がはつきりしている。額がお光さんのようにだだつ広くない。なんとなくいい心持ちにできあがつてている。それで三四郎は五分に一度ぐらいは目を上げての方を見ていた。時々は女と自分の目がゆきあたることもあった。じいさんが女の隣へ腰をかけた時などは、もつとも注意して、できるだけ長いあいだ、女の様子を見ていた。その時女はにこりと笑つて、さあおかげと言つてじいさんに席を譲つていた。それからしばらくして、三四郎は眼くなつて寝てしまつたのである。

その寝ているあいだに女とじいさんは懇意になつて話を始めたものとみえる。目をあけた三四郎は黙つて「一人の話を聞いていた。女はこんなことを言う。――

子供の玩具おもちゃはやつぱり広島より京都のほうが安くつていいものがある。京都でちよつと用があつて降りたついでに、蛸薬師たこやくしのそばで玩具を買って来た。久しぶりで国へ帰つて子供に会うのはうれしい。しかしおの仕送りがとぎれて、しかたなしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉くれにいて長らく海軍の職工をしていたが戦争中は旅順りょじゅんの方に行つていた。戦争が済んでからいつたん帰つて来た。まもなくあつちのほうが金がもうかると

いつて、また大連へ出かせぎに行つた。はじめのうちは音信もあり、月々のものもちゃんと送つてきたからよかつたが、この半年ばかり前から手紙も金もまるで来なくなつてしまつた。不実な性質たちではないから、大丈夫だいじょうぶだけれども、いつまでも遊んで食べているわけにはゆかないので、安否のわかるまではしかたがないから、里へ帰つて待つてゐるつもりだ。

じいさんは蛸薬師たこやくしも知らず、玩具にも興味がないとみえて、はじめのうちはただはいはいと返事だけしていたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに気の毒だと言ひだした。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとうあつちで死んでしまつた。いつたい戦争はなんのためにするものだかわからない。あとで景氣でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価じょきは高くなる。こんなばかげたものはない。世のいい時分に出かせぎなどといふものはなかつた。みんな戦争のおかげだ。なにしろ信心しんじんが大切だ。生きて働いているに違ひない。もう少し待つていればきっと帰つて来る。——じいさんはこんな事を言つて、しきりに女を慰めていた。やがて汽車がとまつたら、ではお大事にと、女に挨拶あいさつをして元気よく出て行つた。

じいさんに続いて降りた者が四人ほどあつたが、入れ代つて、乗つたのはたつた一人し

かない。もとから込み合つた客車でもなかつたのが、急に寂しくなつた。日の暮れたせいかもしない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上から灯のついたランプをさしこんでゆく。三四郎は思い出したように前の停車場^{ステーション}で買つた弁当を食いだした。

車が動きだして二分もたつたろうと思うころ、例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行つた。この時女の帯の色がはじめて三四郎の目にはいつた。三四郎は鮎^{あゆ}の煮びたしの頭をくわえたまま女の後姿を見送つていた。便所に行つたんだなといながらしきりに食つている。

女はやがて帰つて來た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもうしまいがけである。下を向いて一生懸命に箸^{はし}を突っ込んで二口三口ほおばつたが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思つて、ひよいと目を上げて見るとやつぱり正面に立つっていた。しかし三四郎が目を上げると同時に女は動きだした。ただ三四郎の横を通つて、自分の座へ帰るべきところを、すぐと前へ来て、からだを横へ向けて、窓から首を出して、静かに外をながめだした。風が強くあたつて、鬚^{ひげ}がふわふわするところが三四郎の目にはいつた。この時三四郎はからになつた弁当の折^{おり}を力いっぱいに窓からほうり出した。女の窓と三四郎の窓は一軒おきの隣であつた。風に逆らつてなげた折の蓋^{ふた}が白く舞いもどつたように見

えた時、三四郎はとんだことをしたのかと気がついて、ふと女の顔を見た。顔はあいにく列車の外に出ていた。けれども、女は静かに首を引っ込めて更紗さらさのハンケチで額のところを丁寧にふき始めた。三四郎はともかくもあやまるほうが安全だと考えた。

「（う）めんなさい」と言つた。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔をふいている。三四郎はしかたなしに黙つてしまつた。女も黙つてしまつた。そうしてまた首を窓から出した。三、四人の乗客は暗いランプの下で、みんな寝ぼけた顔をしている。口をきいている者はだれもない。汽車だけがすさまじい音をたてて行く。三四郎は目を瞑つた。

しばらくすると「名古屋はもうじきでしようか」と言う女の声がした。見るといつのまにか向き直つて、及び腰になつて、顔を三四郎のそばまでもつて来ている。三四郎は驚いた。

「そうですね」と言つたが、はじめて東京へ行くんだからいつこう要領を得ない。

「この分では遅れますでしようか」

「遅れるでしよう」

「あんたも名古屋へお降りで……」

「はあ、降ります」

この汽車は名古屋どまりであつた。会話はすこぶる平凡であつた。ただ女が三四郎の筋向こうに腰をかけたばかりである。それで、しばらくのあいだはまた汽車の音だけになつてしまふ。

次の駅で汽車がとまつた時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言いだした。一人では氣味が悪いからと言つて、しきりに頼む。三四郎ももつともだと思つた。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかつた。なにしろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇したにはしたが、断然断る勇氣も出なかつたので、まあいいかげんな生返事をしてゐた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李は新橋まで預けてあるから心配はない。三四郎はてごろなズツクの鞆と傘だけ持つて改札場を出た。頭には高等学校の夏帽をかぶつてゐる。しかし卒業したしるしに徽章だけはもぎ取つてしまつた。昼間見るとそこだけ色が新しい。うしろから女がついて来る。三四郎はこの帽子に対して少々きまりが悪かつた。けれどもついて來るのだからしかたがない。女のほうでは、この帽子をむろん、ただのきたない帽子と思つてゐる。

九時半に着くべき汽車が四十分ほど遅れたのだから、もう十時はまわつてゐる。けれど

も暑い時分だから町はまだ宵の口のようににぎやかだ。宿屋も目の前に二、三軒ある。ただ三四郎にはちとりつぱすぎるようと思われた。そこで電気燈のついている三階作りの前をすまして通り越して、ぶらぶら歩いて行つた。もちろん不案内の土地だからどこへ出るかわからない。ただ暗い方へ行つた。女はなんともいわずについて来る。すると比較的寂しい横町の角から二軒目に御宿かどおんやどという看板が見えた。これは三四郎にも女にも相應なきたない看板であつた。三四郎はちよつと振り返つて、一口女にどうですと相談したが、女は結構だといふんで、思いきつてずつとはいつた。上がり口で二人連れではないと断るはずのところを、いらっしゃい、——どうぞお上がり——御案内——梅の四番などとのべつにしやべられたので、やむをえず無言のまま二人とも梅の四番へ通されてしまった。

下女が茶を持つて来るあいだ二人はぼんやり向かい合つてすわつっていた。下女が茶を持つて来て、お風呂ふろをと言つた時は、もうこの婦人は自分の連れではないと断るだけの勇気が出なかつた。そこで手ぬぐいをぶら下げて、お先へと挨拶あいさつをして、風呂場へ出て行つた。風呂場は廊下の突き当りで便所の隣にあつた。薄暗くつて、だいぶ不潔のようである。三四郎は着物を脱いで、風呂桶ふろおけの中へ飛び込んで、少し考えた。こいつはやつかいだとじやぶじやぶやつていると、廊下に足音がする。だれか便所へはいった様子である。やがて

出て來た。手を洗う。それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、「ちいと流しましようか」と聞いた。三四郎は大きな声で、

「いえ、たくさんです」と断つた。しかし女は出ていかない。かえつてはいつて來た。そうして帯を解きだした。三四郎といつしょに湯を使う氣とみえる。べつに恥かしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽ゆぶねを飛び出した。そそこからだをふいて座敷へ帰つて、座蒲團ざぶとんの上にすわつて、少なからず驚いていると、下女おんなが宿帳みやこぶんを持つて來た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県京都郡みやこぐん真崎村まさきむら小川三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女のところへいつてまつたく困つてしまつた。湯から出るまで待つていればよかつたと思ったが、しかたがない。下女がちゃんと控えている。やむをえず同県同郡同村同姓花はな二十三年とでたらめを書いて渡した。そうしてしきりに团扇うちわを使つていた。

やがて女は帰つて來た。「どうも、失礼いたしました」と言つている。三四郎は「いいや」と答えた。

三四郎は鞄の中から帳面を取り出して日記をつけだした。書く事も何もない。女がいなければ書く事がたくさんあるように思われた。すると女は「ちよいと出てまいります」と言つて部屋へやを出ていった。三四郎はますます日記が書けなくなつた。どこへ行つたんだろ

うと考え出した。

そこへ下女が床とこをのべに来る。広い蒲団を一枚しか持つて来ないから、床は二つ敷かなくてはいけないと言うと、部屋が狭いとか、蚊帳かやが狭いとか言つてらちがあかない。めんどうがるようにもみえる。しまいにはただいま番頭ばんとうがちよつと出ましたから、帰つたら聞いて持つてまいりましようと言つて、頑固がんこに一枚の蒲団を蚊帳いっぱいに敷いて出て行つた。

それから、しばらくすると女が帰つて來た。どうもおそくなりましてと言う。蚊帳の影で何かしているうちに、がらんがらんという音がした。子供にみやげの玩具が鳴つたに違いない。女はやがて風呂敷包みをものとおりに結んだとみえる。蚊帳の向こうで「お先へ」と言う声がした。三四郎はただ「はあ」と答えたままで、敷居しきに尻しりを乗せて、团扇だんせんを使つていた。いつそのままで夜を明かしてしまおうかとも思った。けれども蚊かがぶんぶん来る。外ではとてもしおぎきれない。三四郎はついと立つて、鞄の中から、キヤラコのシャツとズボン下すはだを出して、それを素肌すはだへ着けて、その上から紺こんの兵児帶へこおびを締めた。それから西洋手拭タウエルを二筋持つたまま蚊帳の中へはいった。女は蒲団の向こうのすみでまだ团扇を動かしている。

「失礼ですが、私は 痢^{かん}症^{しよう}でひとの蒲団に寝るのがいやだから……少し蚤^{のみ}よけの工夫をやるから御免なさい」

三四郎はこんなことを言つて、あらかじめ、敷いてある敷布^{シート}の余つてゐる端^{はじ}を女の寝ている方へ向けてぐるぐる巻きだした。そして蒲団のまん中に白い長い仕切りをこしらえた。女は向こうへ寝返りを打つた。三四郎は西洋手拭^{シーツ}を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかつた。女は一言も口をきかなかつた。女も壁を向いたままじつとして動かなかつた。

夜はようよう明けた。顔を洗つて膳^{ぜん}に向かつた時、女はにこりと笑つて、「ゆうべは蚤^{のみ}は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、ありがとう、おかげさまで」というようなことをまじめに答えながら、下を向いて、お猪口^{ちよく}の葡萄豆^{ぶどうまめ}をしきりに突つつきだした。

勘定^{かんじょう}

勘定^{かんじょう}をして宿を出て、停車場^{ステーション}へ着いた時、女ははじめて関西線で四日市の方へ行くのだということを三四郎に話した。三四郎の汽車はまもなく来た。時間のつごうで女は少し待ち合わせることとなつた。改札場のきわまで送つて来た女は、

「いろいろござつかいになりまして、……ではござげんよう」と丁寧にお辞儀をした。三四郎は鞄と傘を片手に持つたまま、あいた手で例の古帽子を取つて、ただ一言、

「さよなら」と言つた。女はその顔をじつとながめていた、が、やがておちついた調子で、「あなたはよつぱど度胸のないかたですね」と言つて、にやりと笑つた。三四郎はプラットフォームの上へはじき出されたような心持ちがした。車の中へはいつたら両方の耳がいっそうほてりだした。しばらくはじつと小さくなつていた。やがて車掌の鳴らす口笛が長い列車の果から果まで響き渡つた。列車は動きだす。三四郎はそつと窓から首を出した。女はとくの昔にどこかへ行つてしまつた。大きな時計ばかりが目についた。三四郎はまたそつと自分の席に帰つた。乗合いはだいぶいる。けれども三四郎の拳動に注意するような者は一人もない。ただ筋向こうにすわつた男が、自分の席に帰る三四郎をちよつと見た。

三四郎はこの男に見られた時、なんとなくきまりが悪かつた。本でも読んで気をまぎらかそうと思つて、鞄をあけてみると、昨夜の西洋手拭が、上のところにぎつしり詰まつてゐる。そいつをそばへかき寄せて、底のほうから、手にさわつたやつをなんでもかまわず引き出すと、読んでもわからないベーコンの論文集が出た。ベーコンには気の毒なくらい薄っぺらな粗末な仮綴かりどじである。元来汽車の中で読む了見もないものを、大きな行李に入

れそくなつたから、片づけるついでに 提鞆の底へ、ほかの二、三冊といつしょにほうり込んでおいたのが、運悪く当選したのである。三四郎はベーコンの二十三ページを開いた。他の本でも読めそうにはない。ましてベーコンなどはむろん読む気にならない。けれども三四郎はうやうやしく二十三ページを開いて、万遍なくページ全体を見回していた。三四郎は二十三ページの前で一応昨夜のおさらいをする氣である。

元来あの女はなんだろう。あんな女が世の中にいるものだろうか。女というものは、ああおちついて平氣でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それとも無邪氣なのだろうか。要するにいけるところまでいってみなかつたから、見当がつかない。思いきつてもう少しつてみるとよかつた。けれども恐ろしい。別れぎわにあなたは度胸のないかただと言わたった時には、びっくりした。二十三年の弱点が一度に露見したような心持ちであった。親でもああうまく言いあてるものではない。――

三四郎はここまで来て、さらにしょげてしまつた。どこの馬の骨だかわからない者に、頭の上がらないくらいどやされたような気がした。ベーコンの二十三ページに対しても、はなはだ申し訳がないくらいに感じた。

どうも、ああ狼狽ろうばいしちやだめだ。学問も大学生もあつたものじやない。はなはだ人格

に関係してくる。もう少しあはしようがあつたろう。けれども相手がいつでもああ出るとすると、教育を受けた自分には、あれよりほかに受けようがないとも思われる。するとむやみに女に近づいてはならないというわけになる。なんだか意氣地がない。非常に窮屈だ。
まるで不具かたわにでも生まれたようなものである。けれども……：

三四郎は急に氣をかえて、別の世界のことを思い出した。——これから東京に行く。大学にはいる。有名な学者に接触する。趣味品性の備わつた学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采かつさいする。母がうれしがる。というような未来をだらしく考えて、大いに元氣を回復してみると、べつに二十三ページのなかに顔を埋めている必要がなくなつた。そこでひよいと頭を上げた。すると筋向こうにいたさつきの男がまた三四郎の方を見ていた。今度は三四郎のほうでもこの男を見返した。

髭ひげを濃くはやしている。面長おもながのやせぎすの、どことなく神主かんぬしじみた男であつた。ただ鼻筋がまつすぐに通つているところだけが西洋らしい。学校教育を受けつつある三四郎は、こんな男を見るときつと教師にしてしまう。男は白地しろじの紺かすりの下に、鄭重ていちょうに白い襦袢ゆばんを重ねて、紺足袋こんたびをはいていた。この服装からおして、三四郎は先方を中学校の教師と鑑定した。大きな未来を控えている自分からみると、なんだかくだらなく感ぜられる。

男はもう四十だろう。これよりさきももう発展しそうにもない。

男はしきりに煙草たばこをふかしている。長い煙を鼻の穴から吹き出して、腕組うでぐみをしたところはたいへん悠長ゆうちょうに見える。そうかと思うとむやみに便所か何かに立つ。立つ時にうんと伸びをすることがある。さも退屈いたまである。隣に乗り合わせた人が、新聞の読みがらをそばに置くのに借りてみる気も出さない。三四郎はおのずから妙になつて、ベーコンの論文集を伏せてしまつた。ほかの小説でも出して、本気に読んでみようとも考えたが、面倒だからやめにした。それよりは前にいる人の新聞を借りたくなつた。あいにく前的人はぐうぐう寝ている。三四郎は手を延ばして新聞に手をかけながら、わざと「おあきですか」と髭のある男に聞いた。男は平氣な顔で「あいてるでしょう。お読みなさい」と言つた。

新聞を手に取つた三四郎のほうはかえつて平氣でなかつた。

あけてみると新聞にはべつに見るほどの事ものっていない。一、二分で通読してしまつた。律義りぢぎに畳んでもとの場所へ返しながら、ちよつと会釈えしゃくすると、向こうでも軽く挨拶あいさつをして、

「君は高等学校の生徒ですか」と聞いた。

三四郎は、かぶっている古帽子の徽章あいしやうの痕あとが、この男の目に映つたのをうれしく感じた。

「ええ」と答えた。

「東京の？」と聞き返した時、はじめて、

「いえ、熊本です。……しかし……」と言つたなり黙つてしまつた。大学生だと言いたかつたけれども、「言うほどの必要がないからと思つて遠慮した。相手も「はあ、そう」と言つたなり煙草を吹かしている。なぜ熊本の生徒が今ごろ東京へ行くんだともなんとも聞いてくれない。熊本の生徒には興味がないらしい。この時三四郎の前に寝ていた男が「うん、なるほど」と言つた。それでいてたしかに寝ている。ひとりごとでもなんでもない。髭のある人は三四郎を見てにやにやと笑つた。三四郎はそれを機会に、「あなたはどちらへ」と聞いた。

「東京」とゆつくり言つたぎりである。なんだか中学校の先生らしくなくなつてきた。けれども三等へ乗つてゐるくらいだからたいしたものでないことは明らかである。三四郎はそれで談話を切り上げた。髭のある男は腕組をしたまま、時々下駄の前歯で、拍子を取つて、床を鳴らしたりしている。よほど退屈にみえる。しかしこの男の退屈は話したがらない退屈である。

汽車が豊橋へ着いた時、寝ていた男がむつくり起きて目をこすりながら降りて行つた。

よくあんなにつごうよく目をさすことができるものだと思つた。ことによると寝ぼけて停車場を間違えたんだろうと気づかいながら、窓からながめていると、けつしてそうでない。無事に改札場を通過して、正気の^{しょうき}人間のように出で行つた。三四郎は安心して席を向こう側へ移した。これで髭のある人と隣り合わせになつた。髭のある人は入れ代つて、窓から首を出して、水蜜桃^{すいみつとう}を買つてゐる。

やがて二人のあいだに果物^{くだもの}を置いて、

「食べませんか」と言つた。

三四郎は礼を言つて、一つ食べた。髭のある人は好きとみえて、むやみに食べた。三四郎にもつと食べろと言う。三四郎はまた一つ食べた。二人が水蜜桃を食べているうちにだいぶ親密になつていろいろな話を始めた。

その男の説によると、桃は果物のうちでいちばん仙人^{せんにん}めいでいる。なんだか馬鹿^{ばか}みたような味がする。第一核子^{たね}の恰好^{かっぽう}が無器用だ。かつ穴だらけでたいへんおもしろくできあがつていると言う。三四郎ははじめて聞く説だが、ずいぶんつまらないことを言う人だと思つた。

次にその男がこんなことを言いだした。子規^{しき}は果物がたいへん好きだつた。かついくら

でも食える男だつた。ある時大きな樽たる^{がき}柿を十六食つたことがある。それでなんともなかつた。自分などはとても子規のまねはできない。——三四郎は笑つて聞いていた。けれども子規の話だけには興味があるような気がした。もう少し子規のことでも話そうかと思つていると、

「どうも好きなものにはしじんと手が出るものでね。しかたがない。豚ぶたなどは手が出ない代りに鼻が出る。豚をね、縛つて動けないようにしておいて、その鼻の先へ、ごちそうを並べて置くと、動けないものだから、鼻の先がだんだん延びてくるそうだ。ごちそうに届くまでは延びるそうです。どうも一念ほど恐ろしいものはない」と言つて、にやにや笑つてゐる。まじめだか冗談だか、判然と区別しにくいやうな話し方である。

「まあお互に豚でなくつてしまわせだ。そうほしいものの方へむやみに鼻が延びていつたら、今ごろは汽車にも乗れないくらい長くなつて困るに違ひない」

三四郎は吹き出した。けれども相手は存外静かである。

「じつさいあぶない。レオナルド・ダ・ヴィンチという人は桃の幹に砒ひせき石を注射してね、その実へも毒が回るものだらうか、どうだらうかという試験をしたことがある。ところがその桃を食つて死んだ人がある。あぶない。氣をつけないとあぶない」と言いながら、さ

んざん食い散らした水蜜桃の核子やら皮やらを、ひとまとめに新聞にくるんで、窓の外へなげ出した。

今度は三四郎も笑う気が起こらなかつた。レオナルド・ダ・ヴィンチという名を聞いて少しく辟易へきえきしたうえに、なんだかゆうべの女のことを考え出して、妙に不愉快になつたから、謹んで黙つてしまつた。けれども相手はそんなことにいつこう気がつかないらしい。やがて、

「東京はどこへ」と聞きだした。

「じつははじめてで様子がよくわからんのですが……さしあたり国の寄宿舎へでも行こうかと思つています」と言う。

「じゃ熊本はもう……」

「今度卒業したのです」

「はあ、そりや」と言つたがおめでたいとも結構だともつけなかつた。ただ「するとこれから大学へはいるのですね」といかにも平凡であるかのごとく聞いた。

三四郎はいささか物足りなかつた。その代り、

「ええ」という二字で挨拶を片づけた。

「科は?」とまた聞かれる。

「一部です」

「法科ですか」

「いいえ文科です」

「はあ、そりや」とまた言つた。三四郎はこのはあ、そりやを聞くたびに妙になる。向こうが大いに偉いか、大いに人を踏み倒しているか、そうでなければ大学にまつたく縁故も同情もない男に違いない。しかしそのうちのどつちだか見当がつかないので、この男に対する態度もきわめて不明瞭であつた。

浜松で二人とも申し合わせたように弁当を食つた。食つてしまつても汽車は容易に出ない。窓から見ると、西洋人が四、五人列車の前を行つたり来たりしている。そのうちの一組は夫婦とみて、暑いのに手を組み合わせている。女は上^{うえした}下ともまつ白な着物で、たいへん美しい。三四郎は生まれてから今日に至るまで西洋人というものを五、六人しか見たことがない。そのうちの二人は熊本の高等学校の教師で、その二人のうちの一人は運悪くせむしであつた。女では宣教師を一人知つてゐる。ずいぶんとんがつた顔で、鰐または鮒に類していた。だから、こういう派手なきれいな西洋人は珍しいばかりではない。すこ
かます
はで

ぶる上等に見える。三四郎は一生懸命にみとれていた。これではいばるのももつともだと思つた。自分が西洋へ行つて、こんな人のなかにはいつたらさだめし肩身の狭いことだろうとまで考えた。窓の前を通る時二人の話を熱心に聞いてみたがちつともわからない。熊本の教師とはまるで発音が違うようだつた。

ところへ例の男が首を後から出して、

「まだ出そうもないのですかね」と言いながら、今行き過ぎた西洋の夫婦をちょいと見て、「ああ美しい」と小声に言つて、すぐに生欠伸なまあくびをした。三四郎は自分がいかにもいなか者らしいのに気がついて、さつそく首を引き込んで、着座した。男もつづいて席に返つた。そして、

「どうも西洋人は美しいですね」と言つた。

三四郎はべつだんの答も出ないのでただはあと受けて笑つていた。すると髭の男は、

「お互いは哀れだなあ」と言い出した。「こんな顔をして、こんなに弱つていては、いくら日露戦争に勝つて、一等国になつてもだめですね。もつとも建物を見ても、庭園を見ても、いずれも顔相応のところだが、——あなたは東京がはじめてなら、まだ富士山を見たことがないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本にほんいちの一の名物だ。あれよりほ

かに自慢するものは何もない。ところがその富士山は天然自然に昔からあつたものなんだ
からしかたがない。我々がこしらえたものじやない」と言つてまたにやにや笑つてゐる。
三四郎は日露戦争以後こんな人間に出会うとは思いもよらなかつた。どうも日本人じやな
いような気がする。

「しかしこれからは日本もだんだん発展するでしよう」と弁護した。すると、かの男は、
すましたもので、

「滅びるね」と言つた。——熊本でこんなことを口に出せば、すぐなぐられる。悪くする
と国賊取り扱いにされる。三四郎は頭の中のどこのすみにもこういう思想を入れる余裕は
ないような空氣のうちで生長した。だからことによると自分の年の若いのに乗じて、ひと
を愚弄するのではなかろうかとも考えた。男は例のゞとく、にやにや笑つてゐる。そのく
せ言葉つきはどこまでもおちついている。どうも見当がつかないから、相手になるのをや
めて黙つてしまつた。すると男が、こう言つた。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」でちよつと切つたが、三四
郎の顔を見ると耳を傾けてゐる。

「日本より頭の中のほうが広いでしよう」と言つた。「どちらわれちやだめだ。いくら日本

のためを思つたつて、^{ひいき}巣廻の引き倒しになるばかりだ』

この言葉を聞いた時、三四郎は眞實に熊本を出たような心持ちがした。同時に熊本にいた時の自分は非常に卑怯ひきょうであつたと悟つた。

その晩三四郎は東京に着いた。髭の男は別れる時まで名前を明かさなかつた。三四郎は東京へ着きさえすれば、このくらいの男は到るところにいるものと信じて、べつに姓名を尋ねようともしなかつた。

二

三四郎が東京で驚いたものはたくさんある。第一電車のちんちん鳴るので驚いた。それからそのちんちん鳴るあいだに、非常に多くの人間が乗つたり降りたりするので驚いた。次に丸の内で驚いた。もつとも驚いたのは、どこまで行つても東京がなくならないということであつた。しかもどこをどう歩いても、材木がほうり出してある、石が積んである、新しい家が往来から二、三間引つ込んでいる、古い蔵が半分とりくずされて心細く前の方に残つている。すべての物が破壊されつつあるようにみえる。そうしてすべての物がまた

同時に建設されつつあるようみえる。たいへんな動き方である。

三四郎はまったく驚いた。要するに普通のいなか者がはじめて都のまん中に立つて驚くと同じ程度に、また同じ性質において大いに驚いてしまった。今までの学問はこの驚きを予防するうえにおいて、壳薬ほどの効能もなかつた。三四郎の自信はこの驚きとともに四割がた減却した。不愉快でたまらない。

この劇烈な活動そのものがとりもなおさず現実世界だとすると、自分が今日までの生活は現実世界に毫も接触していないことになる。洞が峠で昼寝をしたと同然である。それはきょうかぎり昼寝をやめて、活動の割り前が払えるかというと、それは困難である。自分は今活動の中心に立つてゐる。けれども自分はただ自分の左右前後に起ころる活動を見なければならぬ地位に置きかえられたというまでで、学生としての生活は以前と變るわけはない。世界はかように動搖する。自分はこの動搖を見てゐる。けれどもそれに加わることはできない。自分の世界と現実の世界は、一つ平面に並んでおりながら、どこも接觸していない。そうして現実の世界は、かように動搖して、自分を置き去りにして行つてしまふ。はなはだ不安である。

三四郎は東京のまん中に立つて電車と、汽車と、白い着物を着た人と、黒い着物を着た

人との活動を見て、こう感じた。けれども学生生活の裏面に横たわる思想界の活動には毫も気がつかなかつた。——明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰り返している。

三四郎が動く東京のまん中に閉じ込められて、一人でふさぎこんでいるうちに、国元の母から手紙が来た。東京で受け取つた最初のものである。見るといろいろ書いてある。まず今年は豊作でめでたいというところから始まつて、からだを大事にしなくてはいけないという注意があつて、東京の者はみんな利口で人が悪いから用心しろと書いて、学資は毎月月末に届くようにするから安心しろとあつて、勝田の政さんの従弟に当る人が大学校を卒業して、理科大学とかに出ているそุดだから、尋ねて行つて、万事よろしく頼むがいいで結んである。肝心の名前を忘れたとみえて、欄外というようなところに野々宮宗八そうはちどのと書いてあつた。この欄外にはそのほか一、三件ある。作の青馬さくあが急病で死んだんで、作は大弱りである。三輪田みわたのお光さんみつあゆが鮎あゆをくれたけれども、東京へ送ると途中で腐つてしまふから、家内うちで食べてしまつた、等である。

三四郎はこの手紙を見て、なんだか古ぼけた昔から届いたような気がした。母にはすまないが、こんなものを読んでいる暇はないとまで考えた。それにもかかわらず繰り返して

二へん読んだ。要するに自分がもし現実世界と接觸しているならば、今のところ母よりもかないのだろう。その母は古い人で古いなかにある。そのほかには汽車の中で乗り合わした女がいる。あれは現実世界の稻妻いなずまである。接觸したというには、あまりに短くつてかつあまりに鋭すぎた。——三四郎は母の言いつけどおり野々宮宗八を尋ねることにした。

あくる日は平生よりも暑い日であった。休暇中だから理科大学を尋ねても野々宮君はあるまいと思ったが、母が宿所を知らせてこないから、聞き合せかたがた行つてみようという気になつて、午後四時ごろ、高等学校の横を通つて弥生町やよいちょうの門からはいつた。往来は埃ほこりが二寸も積もつていて、その上に下駄げたの歯や、靴くつの底や、草鞋わらじの裏がきれいにできあがつてゐる。車の輪と自転車のあとは幾筋だかわからない道だつたが、構内へはいるとさすがに木の多いだけに氣分がせいせいした。とつつきの戸をあたつてみたら錠じゆうが下りている。裏へ回つてもだめであつた。しまいに横へ出た。念のためと思つて押してみたら、うまいぐあいにあいた。廊下の四つ角に小使が一人居眠りをしていた。来意を通じると、しばらくのあいだは、正氣を回復するため、上野うえのの森をながめていたが、突然「おいでかもしません」と言つて奥へはいつて行つた。すこぶる閑静で

ある。やがてまた出て來た。

「おいでやす。おはいんなさい」と友だちみたように言う。小使にくつついて行くと四つ角を曲がつて和土の廊下たたきを下へ降りた。世界が急に暗くなる。炎天で目がくらんだ時のようであつたがしばらくすると瞳ひとみがようやくおちついて、あたりが見えるようになつた。穴倉だから比較的涼しい。左の方に戸とがあつて、その戸とがあけ放してある。そこから顔が出た。額の広い目の大きな仏教に縁のある相そうちである。縮みのシャツの上へ背広を着ているが、背広はところどころにしみがある。背はすこぶる高い。やせているところが暑さに釣り合っている。頭と背中を一直線に前の方へ延ばしてお辞儀をした。

「こつちへ」と言つたまま、顔を部屋へやの中へ入れてしまつた。三四郎は戸の前まで来て部屋の中をのぞいた。すると野々宮君はもう椅子いすへ腰をかけている。もう一ぺん「こつちへ」と言つた。こつちへと言うところに台がある。四角な棒を四本立てて、その上を板で張つたものである。三四郎は台の上へ腰をかけて初対面の挨拶をする。それからなにぶんよろしく願いますと言つた。野々宮君はただはあ、はあと言つて聞いている。その様子がいくぶんか汽車の中で水蜜桃すいみつとうを食つた男に似ている。ひとつおり 口こうじょう 上じょう を述べた三四郎はもう何も言う事がなくなつてしまつた。野々宮君もはあ、はあ言わなくなつた。

部屋の中を見回すとまん中に大きな長い檼のテーブルが置いてある。その上にはなんだかこみいつた、太い針金だらけの器械が乗つかつて、そのわきに大きなガラスの鉢に水を入れてある。そのほかにやすりとナイフと襟飾りが一つ落ちている。最後に向こうのすみを見ると、三尺ぐらいの花崗石みかげいしの台の上に、福神漬ふくじんづけの缶ほどな複雑な器械が乗せてある。三四郎はこの缶の横つ腹にあいている二つの穴に目をつけた。穴が蟠蛇うわばみの目玉のように光っている。野々宮君は笑いながら光るでしようと言つた。そうして、こういう説明をしてくれた。

「昼間のうちに、あんな準備し�くをしておいて、夜になつて、交通その他の活動が鈍くなるころに、この静かな暗い穴倉で、望遠鏡の中から、あの目玉のようなものをのぞくのです。そうして光線の圧力を試験する。今年の正月ごろからとりかかつたが、装置がなかなかめんどうなのでまだ思うような結果が出てきません。夏は比較的こらえやすいが、寒夜になると、たいへんしのぎにくい。外套がいとうを着て襟巻をしても冷たくてやりきれない。……」

三四郎は大いに驚いた。驚くとともに光線にどんな圧力があつて、その圧力がどんな役に立つんだか、まったく要領を得るに苦しんだ。

その時野々宮君は三四郎に、「のぞいてごらんなさい」と勧めた。三四郎はおもしろ半

分、石の台の二、三間手前にある望遠鏡のそばへ行つて右の目をあてがつたが、なんにも見えない。野々宮君は「どうです、見えますか」と聞く。「いつこう見えません」と答えると、「うんまだ蓋ふたが取らずにあつた」と言いながら、椅子を立つて望遠鏡の先にかぶせてあるものを除けてくれた。

見ると、ただ輪郭のぼんやりした明るいなかに、物差しの度盛りがある。下に2の字が出た。野々宮君がまた「どうです」と聞いた。「2の字が見えます」と言うと、「いまに動きます」と言いながら向こうへ回つて何かしていようであつた。

やがて度盛りが明るいなかで動きだした。2が消えた。あとから3が出る。そのあとから4が出る。5が出る。とうとう10まで出た。すると度盛りがまた逆に動きだした。10が消え、9が消え、8から7、7から6と順々に1まで来てとまつた。野々宮君はまた「どうです」と言う。三四郎は驚いて、望遠鏡から目を放してしまつた。度盛りの意味を聞く氣にもならない。

丁寧に礼を述べて穴倉を上がつて、人の通る所へ出て見ると世の中はまだかんかんしている。暑いけれども深い息をした。西の方へ傾いた日が斜めに広い坂を照らして、坂の上の両側にある工科の建築のガラス窓が燃えるように輝いている。空は深く澄んで、澄んだ

なかに、西の果から焼ける火の炎が、薄赤く吹き返ってきて、三四郎の頭の上までほてつているように思われた。横に照りつける日を半分背中に受けて、三四郎は左の森の中へはいった。その森も同じ夕日を半分背中に受けている。黒ずんだ青い葉と葉のあいだは染めたよう赤い。太い欅の幹で日暮らしが鳴いている。三四郎は池のそばへ来てしやがんだ。非常に静かである。電車の音もない。赤門の前を通るはずの電車は、大学の抗議で小石川こいしかわを回ることになったと国にいる時分新聞で見たことがある。三四郎は池のはたにしゃがみながら、ふとこの事件を思い出した。電車さえ通さないという大学はよほど社会と離れている。

たまたまその中にはいつてみると、穴倉の下で半年余りも光線の圧力の試験をしている野々宮君のような人もいる。野々宮君はすこぶる質素な服装なりをして、外で会えば電燈会社の技手くらいな格である。それで穴倉の底を根拠地として欣然きんぜんとたゆまずに研究を専念にやっているから偉い。しかし望遠鏡の中の度盛りがいくら動いたって現実世界と交渉のないのは明らかである。野々宮君は生涯しょうがい現実世界と接触する気がないのかもしれない。要するにこの静かな空気を呼吸するから、おのづからああいう気分にもなれるのだろう。自分もいつそのこと気を散らさずに、生きた世の中と関係のない生涯を送つてみようかし

らん。

三四郎がじつとして池の面おもてを見つめていると、大きな木が、幾本となく水の底に映つて、そのまた底に青い空が見える。三四郎はこの時電車よりも、東京よりも、日本よりも、遠くかつはるかな心持ちがした。しかししばらくすると、その心持ちのうちに薄雲のような寂しさがいちめんに広がつてきた。そうして、野々宮君の穴倉にはいつて、たつた一人ですわっているかと思われるほどな寂寥せきりょうを覚えた。熊本の高等学校にいる時分もこれより静かな竜田山たつたやまに上つたり、月見草ばかりはえている運動場に寝たりして、まつたく世の中を忘れた気になつたことは幾度となくある、けれどもこの孤独の感じは今ははじめて起こつた。

活動の激しい東京を見たためだろうか。あるいは——三四郎はこの時赤くなつた。汽車で乗り合わした女の事を思い出したからである。——現実世界はどうも自分に必要らしい。けれども現実世界はあぶなくて近寄れない氣がする。三四郎は早く下宿に帰つて母に手紙を書いてやろうと思つた。

ふと目を上げると、左手の丘の上に女が一人立つてゐる。女のすぐ下が池で、向こう側が高い崖がけの木立こだちで、その後がはでな赤煉瓦あかれんがのゴシック風の建築である。そうして落ちか

かつた日が、すべての向こうから横に光をとおしてくる。女はこの夕日に向いて立つていた。三四郎のしやがんでいる低い陰から見ると丘の上はたいへん明るい。女の一人はまぼしいとみえて、團扇うちわを額のところにかざしている。顔はよくわからない。けれども着物の色、帯の色はあざやかにわかつた。白しろい足袋たびの色も目についた。鼻緒はなおの色はとにかく草履ぞうりで、とにかく草履ぞうりをはいていることもわかつた。もう一人はまつしろである。これは團扇もなにも持つていない。ただ額に少し皺しわを寄せて、向こう岸からおいかぶさりそうに、高く池の面に枝を伸ばした古木の奥をながめていた。團扇を持った女は少し前へ出でている。白いほうは一足土ど堤ていの縁からさがつてている。三四郎が見ると、二人の姿が筋かいに見える。

この時三四郎の受けた感じはただきれいな色彩だということであつた。けれどもいなかもだから、この色彩がどういうふうにきれいなのだが、口にも言えず、筆にも書けない。ただ白いほうが看護婦だと思つたばかりである。

三四郎はまたみとれていた。すると白いほうが動きだした。用事のあるような動き方ではなかつた。自分の足がいつのまにか動いたというふうであつた。見ると團扇を持った女もいつのまにかまた動いている。二人は申し合させたように用のない歩き方をして、坂を降りて来る。三四郎はやつぱり見ていた。

坂の下に石橋がある。渡らなければまっすぐに理科大学の方へ出る。渡れば水ぎわを伝つてこつちへ来る。二人は石橋を渡つた。

団扇はもうかざしていない。左の手に白い小さな花を持つて、それをかぎながら来る。かぎながら、鼻の下にあてがつた花を見ながら、歩くので、目は伏せている。それで三四郎から一間ばかりの所へ来てひよいととまつた。

「これはなんでしよう」と言つて、仰向いた。頭の上には大きな椎の木が、日の目のもないほど厚い葉を茂らして、丸い形に、水ぎわまで張り出していた。

「これは椎」と看護婦が言つた。まるで子供に物を教えるようであつた。

「そう。実はなつていないので」言いながら、仰向いた顔をもとへもどす、その拍子に三四郎を一目見た。三四郎はたしかに女の黒目の動く刹那^{せつな}を意識した。その時色彩の感じはことごとく消えて、なんともいえぬある物に出会つた。そのある物は汽車の女に「あなたは度胸のないかたですね」と言われた時の感じどこか似通つてゐる。三四郎は恐ろしくなつた。

二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。若いほうが今までかいでいた白い花を三四郎の前へ落として行つた。三四郎は一人の後姿をじつと見つめていた。看護婦は先へ行く。若い

ほうがあとから行く。はなやかな色のなかに、白い薄^{すすき}を染め抜いた帯が見える。頭にもまつ白な薔薇^{ばら}を一つさしている。その薔薇が椎の木陰^{こかげ}の下の、黒い髪のなかできわだつて光つっていた。

三四郎はぼんやりしていた。やがて、小さな声で「矛盾だ」と言つた。大学の空気とあの女が矛盾なのだが、あの色彩とあの目つきが矛盾なのだが、あの女を見て汽車の女を思い出したのが矛盾なのだが、それとも未来に対する自分の方針が二道に矛盾しているのか、または非常にうれしいものに對して恐れをいだくところが矛盾しているのか、——このいなか出の青年には、すべてわからなかつた。ただなんだか矛盾であつた。

三四郎は女の落として行つた花を拾つた。そうしてかいでみた。けれどもべつだんのにおいもなかつた。三四郎はこの花を池の中へ投げ込んだ。花は浮いている。すると突然向こうで自分の名を呼んだ者がある。

三四郎は花から目を放した。見ると野々宮君が石橋の向こうに長く立つてゐる。「君まだいたんですか」と言う。三四郎は答をするまえに、立つてのそのそ歩いて行つた。石橋の上まで来て、

「ええ」と言つた。なんとなくまが抜けている。けれども野々宮君は、少しも驚かない。

「涼しいですか」と聞いた。三四郎はまた、「ええ」と言つた。

野々宮君はしばらく池の水をながめていたが、右の手をポケットへ入れて何か搜しだした。ポケットから半分封筒がはみ出している。その上に書いてある字が女の手跡らしい。野々宮君は思う物を捜しあてなかつたとみて、もとのどおりの手を出してぶらりと下げた。そうして、こう言つた。

「きょうは少し装置が狂つたので晩の実験はやめだ。これから本郷の方を散歩して帰ろうと思うが、君どうです、いつしょに歩きませんか」

三四郎は快く応じた。二人で坂を上がつて、丘の上へ出た。野々宮君はさつき女の立っていたあたりでちよつととまつて、向こうの青い木立のあいだから見える赤い建物と、崖の高いわりに、水の落ちた池をいちめんに見渡して、

「ちよつといい景色でしよう。あの建築の角度のところだけが少し出ている。木のあいだから。ね。いいでしよう。君気がついていますか。あの建物はなかなかうまくできていますよ。工科もよくできてるがこのほうがうまいですね」

三四郎は野々宮君の鑑賞力に少々驚いた。実をいうと自分にはどつちがいいかまるでわ

からないのである。そこで今度は三四郎のほうが、はあ、はあと言い出した。

「それから、この木と水の感^{エフフエクト}じがね。——たいしたものじやないが、なにしろ東京のまん中にあるんだから——静かでしよう。こういう所でないと学問をやるにはいけませんね。近ごろは東京があまりやかましくなりすぎて困る。これが御殿^{ごてん}」と歩きだしながら、左手の建物をさしてみせる。「教授会をやる所です。うむなに、ぼくなんか出ないでいいのです。ぼくは穴倉生活をやつていればすむのです。近ごろの学問は非常な勢いで動いているので、少しゆだんすると、すぐ取り残されてしまう。人が見ると穴倉の中で冗談をしているようだが、これでもやつている当人の頭の中は劇的に働いているんですよ。電車よりよっぽど激しく働いているかもしれない。だから夏でも旅行をするのが惜しくってね」と言いながら仰向いて大きな空を見た。空にはもう日の光が乏しい。

青い空の静まり返った、上皮^{うわかわ}に白い薄雲^{はくも}が刷毛先^{はげさき}でかき払つたあとのように、筋かいに長く浮いている。

「あれを知つてますか」と言う。三四郎は仰いで半透明の雲を見た。

「あれは、みんな雪の粉^こですよ。こうやつて下から見ると、ちつとも動いていない。しかしあれで地上に起くる颶風^{ぐふう}以上の速力で動いているんですよ。——君ラスキンを読みまし

たか

三四郎は慄然^{ぶぜん}として読まないと答えた。野々宮君はただ「そうですか」と言つたばかりである。しばらくしてから、「この空^{そら}を写生したらおもしろいですね。——原口^{はらぐち}にでも話してやろうかしら」と言つた。三四郎はむろん原口という画工の名前^{なまへ}を知らなかつた。

二人はベルツの銅像の前から栢殻寺^{かうたちでら}の横を電車の通りへ出た。銅像の前で、この銅像はどうですかと聞かれて三四郎はまた弱つた。表はたいへんにぎやかである。電車がしきりなしに通る。

「君電車はうるさくはないですか」とまた聞かれた。三四郎はうるさいよりすさまじいくらいである。しかしだだ「ええ」と答えておいた。すると野々宮君は「ぼくもうるさい」と言つた。しかしいつこううるさいようにもみえなかつた。

「ぼくは車掌に教わらないと、一人で乗換^{のりかへ}えが自由にできない。この二、三年むやみにふえたのでね。便利になつてかえつて困る。ぼくの学問と同じことだ」と言つて笑つた。

学期の始まりぎわなので新しい高等学校の帽子をかぶつた生徒がだいぶ通る。野々宮君は愉快そうに、この連中^{れんじゆう}を見ている。

「だいぶ新しいのが来ましたね」と言う。「若い人は活氣があつていい。ときに君はいくつですか」と聞いた。三四郎は宿帳へ書いたとおりを答えた。すると、

「それじやぼくより七つばかり若い。七年もあると、人間はたいていの事ができる。しかし月日はたちやすいものでね。七年ぐらいじきですよ」と言う。どつちが本当なんだか、三四郎にはわからなかつた。

四角よつかど近くへ来ると左右に本屋と雑誌屋がたくさんある。そのうちの二、三軒には人が黒山のようにたがつてゐる、そうして雑誌を読んでいる。そうして買わずに行つてしまふ。野々宮君は、

「みんなずるいなあ」と言つて笑つてゐる。もつとも当人もちよいと太陽をあけてみた。

四角へ出ると、左手のこちら側に西洋小間物屋こまものやがあつて、向こう側に日本小間物屋がある。そのあいだを電車がぐるつと曲がつて、非常な勢いで通る。ベルがちんちんちんちんいう。渡りにくいほど雜踏する。野々宮君は、向こうの小間物屋をさして、

「あすこでちよいと買物をしますからね」と言つて、ちりんちりんと鳴るあいだを駆け抜けた。三四郎もくつついて、向こうへ渡つた。野々宮君はさつそく店へはいつた。表に待つていた三四郎が、気がついて見ると、店先のガラス張りの棚たなに櫛くしだの花簪はなかんざしだのが並

べてある。三四郎は妙に思つた。野々宮君が何を買つているのかしらと、不審を起こして、店の中へはいつてみると、蟬の羽根のようなりボンをぶら下げる。
 「どうですか」と聞かれた。三四郎はこの時自分も何か買つて、鮎のあゆお礼に三輪田のお光さんに送つてやろうかと思つた。けれどもお光さんが、それをもらつて、鮎のお礼と思わず、きつとなんだかんだと手前がつての理屈をつけるに違ひないと考えたからやめにした。

それから真砂町まさごまちで野々宮君に西洋料理のごちそうになつた。野々宮君の話では本郷でいちばんうまい家うちだそうだ。けれども三四郎にはただ西洋料理の味がするだけであつた。しかし食べることはみんな食べた。

西洋料理屋の前で野々宮君に別れて、追おい分わけに帰るところを丁寧にもとの四角まで出て、左へ折れた。下駄げたを買おうと思って、下駄屋をのぞきこんだら、白熱ガスの下に、まつ白に塗り立てた娘うちが、石膏せつこうの化物のようすわつていたので、急にいやになつてやめた。それから家うちへ帰るあいだ、大学の池の縁で会つた女の、顔の色ばかり考えていた。——その色は薄く餅もちをこがしたような狐きつね色いろであつた。そうして肌理きめが非常に細かであつた。三四郎は、女の色は、どうしてもあれでなくつてはだめだと断定した。

三

学年は九月十一日に始まつた。三四郎は正直に午前十時半ごろ学校へ行つてみたが、玄関前の掲示場に講義の時間割りがあるばかりで学生は一人もいない。自分の聞くべき分だけを手帳に書きとめて、それから事務室へ寄つたら、さすがに事務員だけは出ていた。講義はいつから始まりますかと聞くと、九月十一日から始まると言つてゐる。すましたものである。でも、どの部屋へやを見ても講義がないようですがと尋ねると、それは先生がいないからだと答えた。三四郎はなるほどと思つて事務室を出た。裏へ回つて、大きな櫻けやきの下から高い空をのぞいたら、普通の空よりも明らかに見えた。熊筐くまざきの中を水ぎわへおりて、例の椎しいの木の所まで来て、またしやがんだ。あの女がもう一ぺん通ればいいくらいに考えて、たびたび丘の上をながめたが、丘の上には人影もしなかつた。三四郎はそれが当然だと考えた。けれどもやはりしゃがんでいた。すると、午砲どんが鳴つたんで驚いて下宿へ帰つた。

翌日は正八時に学校へ行つた。正門をはいると、とつつきの大通りの左右に植えてある

銀杏の並木が目についた。銀杏が向こうの方で尽きるあたりから、だらだら坂に下がつて、正門のきわに立つた三四郎から見ると、坂の向こうにある理科大学は二階の一部しか出ていない。その屋根のうしろに朝日を受けた上野の森が遠く輝いている。日は正面にある。三四郎はこの奥行のある景色を愉快に感じた。

銀杏の並木がこちら側で尽きる右手には法文科大学がある。左手には少しさがつて博物の教室がある。建築は双方ともに同じで、細長い窓の上に、三角にとがつた屋根が突き出している。その三角の縁に当る赤煉瓦と黒い屋根のつぎめの所が細い石の直線でできている。そうしてその石の色が少し青味を帯びて、すぐ下にくるはでな赤煉瓦に一種の趣を添えている。そうしてこの長い窓と、高い三角が横にくつも続いている。三四郎はこのあいだ野々宮君の説を聞いてから以来、急にこの建物をありがたく思っていたが、けさは、この意見が野々宮君の意見でなくつて、初手から自分の持説であるような気がしだした。

ことに博物室が法文科と一直線に並んでいないで、少し奥へ引っ込んでいるところが不規則で妙だと思った。こんど野々宮君に会つたら自分の発明としてこの説を持ち出そうと考えた。

法文科の右のはずれから半町ほど前へ突き出している図書館にも感服した。よくわから

ないがなんでも同じ建築だろうと考えられる。その赤い壁につけて、大きな棕櫚の木を五、六本植えたところが大きいにいい。左手のずっと奥にある工科大学は封建時代の西洋のお城から割り出したように見えた。まつ四角にできあがっている。窓も四角である。ただ四すみと入口が丸い。これは櫓を形取ったんだろう。お城だけにしつかりしている。法文科みたように倒れそうでない。なんだか背の低い相撲取りに似ている。

三四郎は見渡すかぎり見渡して、このほかにもまだ目に入らない建物がたくさんあることを勘定に入れて、どことなく雄大な感じを起こした。「学問の府はこうなくつてはならない。こういう構えがあればこそ研究もできる。えらいものだ」——三四郎は大学者になつたような心持ちがした。

けれども教室へはいってみたら、鐘は鳴つても先生は来なかつた。その代り学生も出で来ない。次の時間もそのとおりであつた。三四郎は癪かんしゃくを起こして教場を出た。そして念のために池の周囲まわりを二へんばかり回つて下宿へ帰つた。

それから約十日ばかりたつてから、ようやく講義が始まつた。三四郎がはじめて教室へはいつて、ほかの学生といつしよに先生の来るのを待つていた時の心持ちはじつに殊しゆしよ勝しうなものであつた。神主かんぬしが装束しょうぞくを着けて、これから祭典でも行なおうとするまぎ

わには、こういう気分がするだらうと、三四郎は自分で自分の了見を推定した。じつさい学問の威厳に打たれたに違いない。それのみならず、先生がベルが鳴つて十五分立つても出て来ないのでますます予期から生ずる敬畏^{けいい}の念を増した。そのうち人品のいいおじいさんの中洋人が戸を開けてはいつてきて、流暢^{りゅうちよう}な英語で講義を始めた。三四郎はその時answer《アンサー》という字はアングロ・サクソン語の and-swaru 《アンド・スワル》から出たんだといふことを覚えた。それからスコットの通つた小学校の村の名を覚えた。いずれも大切に筆記帳^{ボーリド}にしておいた。その次には文学論の講義に出た。この先生は教室にはいつて、ちょっと黒板^{ボーリド}をながめていたが、黒板の上に書いてあるGeschehen 《ゲシエーヘン》という字と Nachbild 《ナハビルド》という字を見て、はあドイツ語かと言つて、笑いながらさつさと消してしまつた。三四郎はこれがためにドイツ語に対する敬意を少し失つたように感じた。先生は、それから古来文学者が文学に対して下した定義をおよそ二十ばかり並べた。三四郎はこれも大事に手帳に筆記しておいた。午後は大教室に出た。その教室には約七、八十人ほどの聽講者がいた。したがつて先生も演説口調^{くちよう}であつた。砲声一発浦賀^{うらが}の夢を破つてという冒頭^{ぼうとう}であつたから、三四郎はおもしろがつて聞いてみると、しまいにはドイツの哲学者の名がたくさん出てきてはなはだ解げにくくなつた。机

の上を見ると、落第という字がみごとに彫つてある。よほど暇に任せて仕上げたものとみて、堅い檼のかしの板をきれいに切り込んだてぎわは素人とは思われない。深刻のできである。隣の男は感心に根気よく筆記をつづけている。のぞいて見ると筆記ではない。遠くから先生の似顔をポンチにかいていたのである。三四郎がのぞくやいなや隣の男はノートを三四郎の方に出して見せた。絵はうまくできているが、そばに久方の雲井の空の子規すと書いてあるのは、なんのことだか判じかねた。

講義が終つてから、三四郎はなんとなく疲労したような氣味で、二階の窓から頬杖を突いて、正門内の庭を見おろしていた。ただ大きな松や桜を植えてそのあいだに砂利を敷いた広い道をつけたばかりであるが、手を入れすぎていいだけに、見ていて心持ちがいい。野々宮君の話によるところは昔はこうきれいではなかつた。野々宮君の先生のなんかいう人が、学生の時分馬に乗つて、ここを乗り回すうち、馬がいうことを聞かないで、意地を悪くわざと木の下を通るので、帽子が松の枝に引っかかる。下駄の歯が鎧にはさまる。先生はたいへん困つていると、正門前の喜多床といふ髪結床の職人がおおぜい出てきて、おもしろがつて笑つていたそうである。その時分には有志の者が醸金して構内に厩をこしらえて、三頭の馬と、馬の先生とを飼つておいた。ところが先生がたいへんな酒

飲みで、とうとう三頭のうちのいちばんいい白い馬を売つて飲んでしまつた。それはナポレオン三世時代の老馬であつたそうだ。まさかナポレオン三世時代でもなかろう。しかしのん気な時代もあつたものだと考えていると、さつきポンチ絵をかいた男が来て、「大学の講義はつまらんない」と言つた。三四郎はいいかげんな返事をした。じつはつまるかつまらないか、三四郎にはちつとも判断ができないのである。しかしこの時からこの男と口をきくようになつた。

その日はなんとなく気が鬱^{うつ}して、おもしろくなかったので、池の周囲^{まわり}を回ることは見合させて家^{うち}へ帰つた。晩食後筆記を繰り返して読んでみたが、べつに愉快にも不愉快にもならなかつた。母に言文一致の手紙を書いた。——学校は始まつた。これから毎日出る。学校はたいへん広いいい場所で、建物もたいへん美しい。まん中に池がある。池の周囲を散歩するのが楽しみだ。電車には近ごろようやく乗り馴れた。何か買つてあげたいが、何がいいかわからぬから、買つてあげない。ほしければそつちから言つてくれ。^{ことし}今年の米はいまに価^ねが出るから、売らずにおくほうが得だらう。三輪田のお光さんにはあまり愛^{あいそ}想よくしないほうがよからう。東京へ来てみると人はいくらでもいる。男も多いが女も多い。というような事を^こた^ごた並べたものであつた。

手紙を書いて、英語の本を六、七ページ読んだらいやになつた。こんな本を一冊ぐらい読んでもだめだと思いだした。床を取つて寝ることにしたが、寝つかれない。不眠症になつたはやく病院に行つて見てもらおうなどと考えているうちに寝てしまつた。

あくる日も例刻に学校へ行つて講義を聞いた。講義のあいだに今年の卒業生がどこそこの地位を競争している噂うわさなどと話している者があつた。三四郎は漠然ばくぜんと、未来が遠くから眼前に押し寄せるようなにぶい圧迫を感じたが、それはすぐ忘れてしまつた。むしろ昇之助しょうのすけがなんとかしたというほうの話がおもしろかつた。そこで廊下で熊本出の同級生をつかまえて、昇之助とはなんだと聞いたら、寄席よせへ出る娘義太夫ぎだゆうだと教えてくれた。それから寄席の看板はこんなもので、本郷のどこにあるということまで言つて聞かせたうえ、今度の土曜にいつしょに行こうと誘つてくれた。よく知つてゐると思ったら、この男はゆうべはじめて、寄席へ、はいつたのだそうだ。三四郎はなんだか寄席へ行つて昇之助が見たくなつた。

昼飯を食いに下宿へ帰ろうと思つたら、きのうポンチ絵をかいた男が来て、おいおいと言ひながら、本郷の通りの淀見軒よどみけんという所に引っ張つて行つて、ライスカレーを食わし

た。淀見軒という所は店で果物くだものを売つてゐる。新しい普請であつた。ポンチ絵をかいた男はこの建築の表を指さして、これがヌーボー式だと教えた。三四郎は建築にもヌーボー式があるものとはじめて悟つた。帰り道に青木堂あおきどうも教わつた。やはり大学生のよく行く所だそうである。赤門をはいつて、二人で池の周囲を散歩した。その時ポンチ絵の男は、死んだ小泉八雲こいずみやくも先生は教員控室へはいるのがきらいで講義がすむといつでもこの周囲をぐるぐる回つて歩いたんだと、あたかも小泉先生に教わつたようなことを言つた。なぜ控室へはいらなかつたのだろうかと三四郎が尋ねたら、

「そりやあたりまえださ。第一彼らの講義を聞いてもわかるじやないか。話せるものは一人もいやしない」と手ひどいことを平氣で言つたには三四郎も驚いた。この男は佐々木与次郎よじろうといつて、専門学校を卒業して、今年また選科へはいつたのだそうだ。東片町ひがしがたまちの五番地の広田ひろたという家にいるから、遊びに来いと言う。下宿かと聞くと、なに高等学校の先生の家だと答えた。

それから当分のあいだ三四郎は毎日学校へ通つて、律義りぢぎに講義を聞いた。必修課目以外のものへも時々出席してみた。それでも、まだもの足りない。そこでついには専攻課目にまるで縁故のないものまでへもおりおりは顔を出した。しかしたいていは二度か三度でや

めてしまつた。一ヶ月と続いたのは少しもなかつた。それでも平均一週に約四十時間ほどになる。いかな勤勉な三四郎にも四十時間はちと多すぎる。三四郎はたえず一種の圧迫を感じていた。しかるにもの足りない。三四郎は楽しまなくなつた。

ある日佐々木与次郎に会つてその話をすると、与次郎は四十時間と聞いて、目を丸くして、「ばかばか」と言つたが、「下宿屋のまずい飯を一日に十ペん食つたらもの足りるようになるか考えてみろ」といきなり警句でもつて三四郎をどやしつけた。三四郎はすぐさま恐れ入つて、「どうしたらよがろう」と相談をかけた。

「電車に乗るがいい」と与次郎が言つた。三四郎は何か寓意ぐういでもあることと思つて、しばらく考えてみたが、べつにこれという思案も浮かばないので、

「本当の電車か」と聞き直した。その時与次郎はげらげら笑つて、

「電車に乗つて、東京を十五、六ペん乗り回しているうちににはおのずからもの足りるようになるさ」と言う。

「なぜ」

「なぜって、そう、生きてる頭を、死んだ講義で封じ込めちや、助からない。外へ出て風を入れるさ。その上にもの足りる工夫はいくらもあるが、まあ電車が一番の初步でかつ

もつとも軽便だ」

その日の夕方、与次郎は三四郎を拉^{ひら}して、四丁目から電車に乗つて、新橋へ行つて、新橋からまた引き返して、日本橋へ来て、そこで降りて、

「どうだ」と聞いた。

次に大通りから細い横町へ曲がつて、平の家^{ひらのや}という看板のある料理屋へ上がって、晩飯を食つて酒を飲んだ。その下女はみんな京都弁を使う。はなはだ纏綿^{てんめん}している。表へ出た与次郎は赤い顔をして、また

「どうだ」と聞いた。

次に本場の寄席^{よせ}へ連れて行つてやると言つて、また細い横町へはいって、木原店^{きはらだな}という寄席を上がつた。ここで小さん^{こさん}という落語家^{はなししか}を聞いた。十時過ぎ通りへ出た与次郎は、また

「どうだ」と聞いた。

三四郎は物足りたとは答えなかつた。しかしまんざらもの足りない気持ちもしなかつた。すると与次郎は大いに小さん論を始めた。

小さんは天才である。あんな芸術家はめつたに出るものじやない。いつでも聞けると思

うから安っぽい感じがして、はなはだ氣の毒だ。じつは彼と時を同じゆうして生きている我々はたいへんなしあわせである。今から少しまえに生まれても小さんは聞けない。少しおくれても同様だ。——円遊も^{えんゆう}うまい。しかし小さんは趣が違つてゐる。円遊のふんした太鼓持^{たいこもち}は、太鼓持になつた円遊だからおもしろいので、小さんのやる太鼓持は、小さんを離れた太鼓持だからおもしろい。円遊の演ずる人物から円遊を隠せば、人物がまるで消滅してしまう。小さんの演ずる人物から、いくら小さんを隠したつて、人物は活発^はは地に躍動するばかりだ。そこがえらい。

与次郎はこんなことを言つて、また

「どうだ」と聞いた。実をいうと三四郎には小さんの味わいがよくわからなかつた。そのうえ円遊なるものはいまだかつて聞いたことがない。したがつて与次郎の説の当否は判定しにくい。しかしその比較のほとんど文学的といいうほどに要領を得たには感服した。

高等学校の前で別れる時、三四郎は、

「ありがとう、大いにもの足りた」と礼を述べた。すると与次郎は、
 「これからさきは図書館でなくつちやもの足りない」と言つて片町^{かたまち}の方へ曲がつてしまつた。この一言で三四郎ははじめて図書館にはいることを知つた。

その翌日から三四郎は四十時間の講義をほとんど半分に減らしてしまった。そうして図書館にはいった。広く、長く、天井が高く、左右に窓のたくさんある建物であつた。書庫は入口しか見えない。こつちの正面からのぞくと奥には、書物がいくらでも備えつけてあるようと思われる。立つて見ていると、書庫の中から、厚い本を二、三冊かかえて、出口へ来て左へ折れて行く者がある。職員閲覧室へ行く人である。なかには必要の本を書棚からとりおろして、胸いっぱいにひろげて、立ちながら調べている人もある。三四郎はうらやましくなつた。奥まで行つて二階へ上がつて、それから三階へ上がつて、本郷より高い所で、生きたものを近づけずに、紙のにおいをかぎながら、——読んでみたい。けれども何を読むかにいたつては、べつにはつきりした考證がない。読んでみなければわからないうが、何かあの奥にたくさんありそうに思う。

三四郎は一年生だから書庫へはいる権利がない。しかたなしに、大きな箱入りの札目録を、こごん^{ろく}で一枚一枚調べてゆくと、いくらめくつてもあとから新しい本の名が出てくる。しまいに肩が痛くなつた。顔を上げて、中休みに、館内を見回すと、さすがに図書館だけあつて静かなものである。しかも人がたくさんいる。そうして向こうのはずれにいる人の頭が黒く見える。目口ははつきりしない。高い窓の外から所々に木が見える。空も

少し見える。遠くから町の音がする。三四郎は立ちながら、学者の生活は静かで深いものだと考えた。それでその日はそのまま帰った。

次の日は空想をやめて、はいるときつそく本を借りた。しかし借りそくなつたので、すぐ返した。あとから借りた本はむずかしすぎて読めなかつたからまた返した。三四郎はこういうふうにして毎日本を八、九冊ずつは必ず借りた。もつともたまにはすこし読んだのもある。三四郎が驚いたのは、どんな本を借りても、きっとだれか一度は目を通しているという事実を発見した時であつた。それは書中ここかしこに見える鉛筆のあとでたしかである。ある時三四郎は念のため、アフラ・ベーンという作家の小説を借りてみた。あけるまでは、よもやと思ったが、見るとやはり鉛筆で丁寧にしるしがつけてあつた。この時三四郎はこれはどうていやりきれないと思つた。ところへ窓の外を楽隊が通つたんで、つい散歩に出る気になつて、通りへ出て、とうとう青木堂へはいった。

はいつてみると客が二組あつて、いずれも学生であつたが、向こうのすみにたつた一人離れて茶を飲んでいた男がある。三四郎がふとその横顔を見ると、どうも上京の節汽車の中で水蜜桃をたくさん食つた人のようである。向こうは気がつかない。茶を一口飲んでは煙草を一吸いすつて、たいへんゆつくり構えている。きょうは白地の浴衣をやめて、背

広を着ている。しかしけつしてりっぱなものじやない。光線の圧力の野々宮君より白シャツだけがましなくらいいなものである。三四郎は様子を見ているうちにたしかに水蜜桃だと物色した。大学の講義を聞いてから以来、汽車の中でこの男の話したことがなんだか急に意義のあるように思われだしたところなので、三四郎はそばへ行つて挨拶あいさつをしようかと思つた。けれども先方は正面を見たなり、茶を飲んでは煙草をふかし、煙草をふかしては茶を飲んでいる。手の出しあうがない。

三四郎はじつとその横顔をながめていたが、突然コップにある葡萄酒ぶどうしゅを飲み干して、表へ飛び出した。そうして図書館に帰つた。

その日は葡萄酒の景気と、一種の精神作用とで、例になくおもしろい勉強ができたので、三四郎は大いにうれしく思つた。二時間ほど読書ざんまい二昧に入つたのち、ようやく気がついて、そろそろ帰るしたくをしながら、いつしょに借りた書物のうち、まだあけてみなかつた最後の一冊を何気なく引っ張がしてみると、本の見返しのあいた所に、乱暴にも、鉛筆でいっぱい何か書いてある。

「ヘーゲルのベルリン大学に哲学を講じたる時、ヘーゲルに毫も哲学を売るの意なし。彼の講義は真を説くの講義にあらず、真を体せる人の講義なり。舌の講義にあらず、心の講

義なり。眞と人と合して 醇化じゅんか一致せる時、その説くところ、言うところは、講義のための講義にあらずして、道のための講義となる。哲学の講義はここに至つてはじめて聞くべし。いたずらに眞を舌頭に転ずるものは、死したる墨をもつて、死したる紙の上に、むなしき筆記を残すにすぎず。なんの意義かこれあらん。……余今試験のため、すなわちパンのために、恨みをのみ涙をのんでこの書を読む。岑々しんしんたる頭をおさえて未来永劫えいごうに試験制度を呪詛じゆそすることを記憶せよ」

とある。署名はむろんない。三四郎は覚えず微笑した。けれどもどこか啓発されたような気がした。哲学ばかりじゃない、文学もこのとおりだらうと考へながら、ページをはぐると、まだある。「ヘーゲルの……」よほどヘーゲルの好きな男とみえる。

「ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方よりベルリンに集まれる学生は、この講義を衣食の資に利用せんとの野心をもつて集まれるにあらず。ただ哲人ヘーゲルなるものありて、講壇の上に、無上普遍の眞を伝うると聞いて、向上求道の念に切なるがため、壇下に、わが不穏底ふおんていの疑義を解釈せんと欲したる清淨じょうじょうしん心の発現にほかならず。このゆえに彼らはヘーゲルを聞いて、彼らの未来を決定けつけじょうしえたり。自己の運命を改造しえたり。のつぺらぼうに講義を聞いて、のつぺらぼうに卒業し去る公ら日本の大学生と同じ事と思う

は、天下の己惚うぬぼれなり。公らはタイプ・ライターにすぎず。しかも欲張つたるタイプ・ライターなり。公らのなすところ、思うところ、言うところ、ついに切実なる社会の活気運に関せず。死に至るまでのつペらぼうなるかな。死に至るまでのつペらぼうなるかな』

と、のつペらぼうを二へん繰り返している。三四郎は默然として考え込んでいた。すると、うしろからちよいと肩をたたいた者がある。例の与次郎であった。与次郎を図書館で見かけるのは珍しい。彼は講義はだめだが、図書館は大切だと主張する男である。けれども主張どおりにはいることも少ない男である。

「おい、野々宮宗八さんが、君を捜していた」と言う。与次郎が野々宮君を知ろうとは思ひがけなかつたから、念のため理科大学の野々宮さんかと聞き直すと、うんという答を得た。さつそく本を置いて入口の新聞を閲覧する所まで出て行つたが、野々宮君がいない。

玄関まで出てみたがやつぱりいない。石段を降りて、首を延ばしてその辺を見回したが影も形も見えない。やむを得ず引き返した。もとの席へ来てみると、与次郎が、例のヘーゲル論をさして、小さな声で、

「だいぶ振ふるつてる。昔の卒業生に違ひない。昔のやつは乱暴だが、どこかおもしろいところがある。実際このとおりだ」とにやにやしている。だいぶ氣に入つたらしい。三四郎は

「野々宮さんはおらんぜ」と言う。

「さつき入口にいたがな」

「何か用があるようだつたか」

「あるようでもあつた」

二人はいつしょに図書館を出た。その時与次郎が話した。——野々宮君は自分の寄寓きぐうしでいる広田先生の、もとの弟子でしでよく来る。たいへんな学問好きで、研究もだいぶある。その道の人なら、西洋人でもみんな野々宮君の名を知つている。

三四郎はまた、野々宮君の先生で、昔正門内で馬に苦しめられた人の話を思い出して、あるいはそれが広田先生ではなかろうかと考えだした。与次郎にその事を話すと、与次郎は、ことによると、うちの先生だ、そんなことをやりかねない人だと言つて笑つていた。

その翌日はちょうど日曜なので、学校では野々宮君に会うわけにゆかない。しかしきのう自分を捜していたことが気がかりになる。さいわいまだ新宅を訪問したことがないから、こつちから行つて用事を聞いてきようという気になつた。

思い立つたのは朝であつたが、新聞を読んでぐずぐずしているうちに昼になる。昼飯ひるを食べたから、出かけようとすると、久しぶりに熊本出の友人が来る。ようやくそれを帰し

たのはかれこれ四時過ぎである。ちとおそくなつたが、予定のとおり出た。

野々宮の家はすこぶる遠い。四、五日前大久保へ越した。しかし電車を利用すれば、すぐに行かれる。なんでも停車場^(ステーション)の近辺と聞いているから、捜すに不便はない。実をいうと三四郎はかの平野家行き以来とんだ失敗をしている。神田^(かんだ)の高等商業学校へ行くつもりで、本郷四丁目から乗つたところが、乗り越して九段^(くだん)まで来て、ついでに飯田橋^(いいだばし)まで持つてゆかれて、そこでようやく外濠線^(そとぼりせん)へ乗り換えて、御茶の水^(おちゃのみず)から、神田橋へ出て、まだ悟らずに鎌倉河岸^(かまくらがし)を数寄屋橋^(すきやばし)の方へ向いて急いで行つたことがある。それより以来電車はとかくぶつそうな感じがしてならないのだが、甲武線^(こうぶせん)は一筋^(ひとつすじ)だと、かねて聞いているから安心して乗つた。

大久保の停車場を降りて、仲百人^(なかひゃくにん)の通りを戸山^(とやま)学校の方へ行かずに、踏切からすぐ横へ折れると、ほとんど三尺ばかりの細い道になる。それを爪先^(つまさき)上がりにだらだらと上がると、まばらな孟宗藪^(もうそうやぶ)がある。その藪の手前と先に一軒ずつ人が住んでいる。野々宮の家はその手前の分であつた。小さな門が道の向きにまるで関係のないような位置に筋かに立つっていた。はいると、家がまた見当違ひの所にあつた。門も入口もまつたくあとからつけたものらしい。

台所のわきにりつぱな生垣いけがきがあつて、庭の方にはかえつて仕切りもなんにもない。ただ大きな萩はぎが人の背より高く伸びて、座敷の椽側えんがわを少し隠していいるばかりである。野々宮君はこの椽側に椅子いすを持ち出して、それへ腰を掛けて西洋の雑誌を読んでいた。三四郎のはいつて来たのを見て、

「こつちへ」と言つた。まるで理科大学の穴倉の中と同じ挨拶である。庭からはいるべきのか、玄関から回るべきのか、三四郎は少しく躊躇ちゅうちょしていた。するとまた

「こつちへ」と催促するので、思い切つて庭から上がることにした。座敷はすなわち書斎で、広さは八畳で、わりあいに西洋の書物がたくさんある。野々宮君は椅子を離れてすわつた。三四郎は閑静な所だとか、わりあいに御茶の水まで早く出られるとか、望遠鏡の試験はどうなりましたとか、——締まりのない当座の話をやつたあと、

「きのう私を捜しておいでだつたそうですが、何か御用ですか」と聞いた。すると野々宮君は、少し氣の毒そうな顔をして、

「なにじつはなんでもないですよ」と言つた。三四郎はただ「はあ」と言つた。

「それでわざわざ来てくれたんですか」

「なに、そういうわけでもありません」

「じつはお国のおつかさんかね、せがれがいろいろお世話になるからと言つて、結構なものがを送つてくださつたから、ちよつとあなたにもお礼を言おうと思つて……」

「はあ、そうですか。何か送つてきましたか」

「ええ赤い魚の粕漬なんですがね」

「じゃひめいちでしよう」

三四郎はつまらんものを送つたものだと思つた。しかし野々宮君はかのひめいちについていろいろな事を質問した。三四郎は特に食う時の心得を説明した。粕ごと焼いて、いざらへうつすという時に、粕を取らないと味が抜けると言つて教えてやつた。

二人がひめいちについて問答をしているうちに、日が暮れた。三四郎はもう帰ろうと思つて挨拶をしかけるところへ、どこからか電報が来た。野々宮君は封を切つて、電報を読んだが、口のうちで、「困つたな」と言つた。

三四郎はすましているわけにもゆかず、といつてむやみに立ち入つた事を聞く氣にもならなかつたので、ただ、

「何かできましたか」と棒のようになつた。すると野々宮君は、

「なにたいしたことでもないのです」と言つて、手に持つた電報を、三四郎に見せてくれた

た。すぐ来てくれとある。

「どこかへおいでになるのですか」

「ええ、妹がこのあいだから病氣をして、大学の病院にはいつているんですが、そいつが
すぐ来てくれと言うんです」といつこう騒ぐ氣色けしきもない。三四郎のほうはかえつて驚いた。
野々宮君の妹と、妹の病氣と、大学の病院をいつしよにまとめて、それに池の周囲で会つ
た女を加えて、それを一どきにかき回して、驚いている。

「じゃ、よほどお悪いんですね」

「なにそういうんじゃないんでしょう。じつは母が看病に行つてゐるんですが、——もし病氣のため
なら、電車へ乗つて駆けて来たほうが早いわけですからね。——なに妹のいたずらでし
ょう。ばかだから、よくこんなまねをします。ここへ越してからまだ一ぺんも行かないも
のだから、きょうの日曜には来ると思つて待つてでもいたのでしょうか、それで」と言つて
首を横に曲げて考えた。

「しかししないでになつたほうがいいでしよう。もし悪いといけません」

「さよう。四、五日行かないうちにそう急に変るわけもなさうですが、まあ行つてみる
か」

「おいでになるにしくはないでしよう」

野々宮は行くことにした。行くときめたについては、三四郎に頼みがあると言いだした。
 万一病気のための電報とすると、今夜は帰れない。すると留守るすが下女一人になる。下女が
 非常に臆おくびょう病びょうで、近所がことのほかぶつそうである。来合わせたのがちょうど幸いだか
 ら、あすの課業にさしつかえがなければ泊とつてくれまいか、もつともただの電報ならばす
 ぐ帰かつてくる。まあからわかつていれば、例の佐々木でも頼むはずだつたが、今からでは
 とても間に合わない。たつた一晩のことではあるし、病院へ泊るか、泊らないか、まだわ
 からないさきから、関係もない人に、迷惑をかけるのはわがますぎて、しいてとは言い
 かねるが、——むろん野々宮はこう流暢りゅうちようには頼まなかつたが、相手の三四郎が、そう
 流暢に頼まれる必要のない男だから、すぐ承知してしまつた。

下女が御飯はというのを、「食わない」と言つたまま、三四郎に「失敬だが、君一人で、
 あとで食つてください」と夕飯まで置き去りにして、出ていった。行つたと思つたら暗い
 落はぎの間から大きな声を出して、

「ぼくの書斎にある本はなんでも読んでいいです。別におもしろいものもないが、何か御
 覧なさい。小説も少しはある」

と言つたまま消えてなくなつた。櫻側まで見送つて三四郎が礼を述べた時は、三坪ほどな孟宗藪の竹が、まばらなだけに一本ずつまだ見えた。

まもなく三四郎は八畳敷の書斎のまん中で小さい膳ぜんを控えて、晩飯を食つた。膳の上を見ると、主人の言葉にたがわず、かのひめいちがついている。久しぶりで故郷ふるさとの香をかいだようであれしかつたが、飯はそのわりにうまくなかつた。お給仕に出た下女の顔を見ると、これも主人の言つたとおり、臆病おくびやうびやうにできた目鼻であつた。

飯が済むと下女は台所へ下がる。三四郎は一人になる。一人になつておちつくと、野々宮君の妹の事が急に心配になつてきた。危篤きじくなような気がする。野々宮君の駆けつけ方がおそいような気がする。そうして妹がこのあいだ見た女のような気がしてたまらない。三四郎はもう一ぺん、女の顔つきと目つきと、服装とを、あの時あのままに、繰り返して、それを病院の寝台ねだいの上に乗せて、そのそばに野々宮君を立たして、二、三の会話をさせたが、兄ではもの足らないので、いつのまにか、自分が代理になつて、いろいろ親切に介抱していた。ところへ汽車がごうと鳴つて孟宗藪のすぐ下を通つた。根太ねだいのぐあいか、土質のせいか座敷が少し震えるようである。

三四郎は看病をやめて、座敷を見回した。いかさま古い建物と思われて、柱に寂さびがある。

その代り唐紙からかみの立てつけが悪い。天井はまつ黒だ。ランプばかりが当世に光っている。野々宮君のような新式の学者が、もの好きにこんな家うちを借りて、封建時代の孟宗藪を見て暮らすのと同格である。もの好きなならば当人の随意だが、もし必要にせまられて、郊外にみずからを放逐したとすると、はなはだ氣の毒である。聞くところによると、あれだけの学者で、月にたつた五十五円しか、大学からもらつていないそうだ。だからやむをえず私立学校へ教えにゆくのだろう。それで妹に入院されではたまるまい。大久保へ越したのも、あるいはそんな経済上のつごうかもしれない。……

宵の口よいではあるが、場所が場所だけにしんとしている。庭の先で虫の音ねがする。ひとりですわつていると、さみしい秋の初めである。その時遠い所でだれか、

「ああああ、もう少しの間だ」

と言う声がした。方角は家の裏手のようにも思えるが、遠いのでしつかりとはわからなかつた。また方角を聞き分ける暇もないうちに済んでしまつた。けれども三四郎の耳には明らかにこの一句が、すべてに捨てられた人の、すべてから返事を予期しない、眞実の独白ひとりごとと聞こえた。三四郎は氣味が悪くなつた。ところへまた汽車が遠くから響いて來た。その音が次第に近づいて孟宗藪の下を通る時には、前の列車よりも倍も高い音を立てて過

ぎ去つた。座敷の微震がやむまでは茫然としていた三四郎は、石火のごとく、さつきの嘆声と今の列車の響きとを、一種の因果で結びつけた。そうして、ぎくんと飛び上がつた。その因果は恐るべきものである。

三四郎はこの時じつと座に着いていることのきわめて困難なのを発見した。背筋から足の裏までが疑惧の刺激でむずむずする。立つて便所に行つた。窓から外をのぞくと、一面の星月夜で、土手下の汽車道は死んだように静かである。それでも竹格子のあいだから鼻を出すくらいにして、暗い所をながめていた。

すると停車場ステーションの方から提灯ちようちんをつけた男がレールの上を伝つてこつちへ来る。話し声で判じると三、四人らしい。提灯の影は踏切から土手下へ隠れて、孟宗藪の下を通る時は、話し声だけになつた。けれども、その言葉は手に取るように聞こえた。

「もう少し先だ」

足音は向こうへ遠のいて行く。三四郎は庭先へ回つて下駄を突つ掛けたまま孟宗藪の所から、一間余の土手を這はい降りて、提灯のあとを追つかけて行つた。

五、六間行くか行かないうちに、また一人土手から飛び降りた者がある。
——
〔轢死れきしじやないですか〕

三四郎は何か答えようとしたが、ちょっと声が出なかつた。そのうち黒い男は行き過ぎた。これは野々宮君の奥に住んでいる家の主人だろうと、後をつけながら考えた。半町ほどくると提灯が留まつてゐる。人も留まつてゐる。人は灯をかざしたまま黙つてゐる。三四郎は無言で灯の下を見た。下には死骸しがいが半分ある。汽車は右の肩から乳の下を腰の上までみごとに引きちぎつて、斜掛けはすかの胴を置き去りにして行つたのである。顔は無傷である。若い女だ。

三四郎はその時の気持ちをいまだに覚えている。すぐ帰ろうとして、踵きびすをめぐらしかけたが、足がすくんではとんど動けなかつた。土手を這はい上がって、座敷へもどつたら、動うき悸きが打ち出した。水をもらおうと思つて、下女を呼ぶと、下女はさいわいになんにも知らないらしい。しばらくすると、奥の家で、なんだか騒ぎ出した。三四郎は主人が帰つたんだなど覺さつた。やがて土手の下ががやがやする。それが済むとまた静かになる。ほとんど堪え難いほどの静かさであつた。

三四郎の目の前には、ありありとさつきの女の顔が見える。その顔と「ああああ……」と言つた力のない声と、その二つの奥に潜んでおるべきはずの無残な運命とを、継ぎ合わして考えてみると、人生という丈夫じょうぶそうな命の根が、知らぬ間に、ゆるんで、いつでも

暗闇くらやみへ浮き出してゆきそうに思われる。三四郎は欲も得もいらないほどこわかつた。ただこうという一瞬間である。そのまえまではたしかに生きていたに違いない。

三四郎はこの時ふと汽車で水蜜桃をくれた男が、あぶないあぶない、氣をつけないとあぶない、と言つたことを思い出した。あぶないあぶないと言いながら、あの男はいやにおちついていた。つまりあぶないあぶないと言いうるほどに、自分はあぶなくない地位に立つていれば、あんな男にもなれるだろう。世の中にいて、世の中を傍観している人はここに面白味おもしろみがあるかもしれない。どうもあの水蜜桃の食いぐあいから、青木堂で茶を飲んでは煙草を吸い、煙草を吸つては茶を飲んで、じつと正面を見ていた様子は、まさにこの種の人物である。——批評家である。——三四郎は妙な意味に批評家という字を使つてみた。使つてみて自分でうまいと感心した。のみならず自分も批評家として、未来に存在しようかとまで考えだした。あのすごい死顔を見るところな気も起こる。

三四郎は部屋のすみにあるテーブルと、テーブルの前にある椅子と、椅子の横にある本箱と、その本箱の中に行儀よく並べてある洋書を見回して、この静かな書斎の主人は、あの批評家と同じく無事で幸福であると思つた。——光線の圧力を研究するために、女を轢されき死させることはあるまい。主人の妹は病氣である。けれども兄の作つた病氣ではない。み

ずからかかった病氣である。などとそれからそれへと頭が移つてゆくうちに、十一時になつた。中野行の電車はもう来ない。あるいは病氣が悪いので帰らないのかしらと、また心配になる。ところへ野々宮から電報が来た。妹無事、あす朝帰るとあつた。

安心して床にはいったが、三四郎の夢はすこぶる危険であつた。——轢死を企てた女は、野々宮に関係のある女で、野々宮はそれと知つて家へ帰つて来ない。ただ三四郎を安心させるために電報だけ掛けた。妹無事とあるのは偽りで、今夜轢死のあつた時刻に妹も死んでしまつた。そうしてその妹はすなわち三四郎が池の端はたで会つた女である。……

三四郎はあくる日例になく早く起きた。

寝つけない所に寝た床のあとをながめて、煙草を一本のんだが、ゆうべの事は、すべて夢のようである。櫻側へ出て、低い廊ひさしの外にある空を仰ぐと、きょうはいい天氣だ。世界が今朗らかになつたばかりの色をしている。飯を済まして茶を飲んで、櫻側に椅子を持ち出して新聞を読んでいると、約束どおり野々宮君が帰つて來た。

「昨夜、そこに轢死があつたそうですね」と言う。停車場か何かで聞いたものらしい。三四郎は自分の経験を残らず話した。

「それは珍しい。めつたに会えないことだ。ぼくも家におればよかつた。死骸はもう片づ

けたろうな。行つても見られないだろうな」

「もうだめでしよう」と一口答えたが、野々宮君ののん気なのには驚いた。三四郎はこの無神経をまつたく夜と昼の差別から起ころものと断定した。光線の圧力を試験する人の性癖が、こういう場合にも、同じ態度で表われてくるのだとはまるで気がつかなかつた。年が若いからだらう。

三四郎は話を転じて、病人のことを尋ねた。野々宮君の返事によると、はたして自分の推測どおり病人に異状はなかつた。ただ五、六日以来行つてやらなかつたものだから、それを物足りなく思つて、退屈紛れに兄を釣り寄せたのである。きょうは日曜だのに来てくれないのはひどいと言つて怒つていたそうである。それで野々宮君は妹をばかだと言つてゐる。本当にばかだと思つてゐるらしい。この忙しいものに大切な時間を浪費させるのは愚だというのである。けれども三四郎にはその意味がほとんどわからなかつた。わざわざ電報を掛けてまで会いたがる妹なら、日曜の一晩や二晩をつぶしたつて惜しくはないはずである。そういう人に会つて過ごす時間が、本当の時間で、穴倉で光線の試験をして暮らす月日はむしろ人生に遠い閑生涯かんじょうようがいといふべきものである。自分が野々宮君であつたならば、この妹のために勉強の妨害をされるのをかえつてうれしく思うだらう。くらいに

感じたが、その時は轢死の事を忘れていた。

野々宮君は昨夜よく寝られなかつたものだから、ぼんやりしていけないと言いだした。きょうはさいわい昼から早稲田の学校へ行く日で、大学のほうは休みだから、それまで寝ようと言つてゐる。「だいぶおそくまで起きていたんですか」と三四郎が聞くと、じつは偶然、高等学校で教わつたもとの先生の広田という人が妹の見舞いに来てくれて、みんなで話をしているうちに、電車の時間に遅れて、つい泊ることにした。広田の家へ泊るべきのを、また妹がだだをこねて、ぜひ病院に泊れと言つて聞かないから、やむをえず狭い所へ寝たら、なんだか苦しくつて寝つかれなかつた。どうも妹は愚物ぐぶつだ。とまた妹を攻撃する。三四郎はおかしくなつた。少し妹のために弁護しようかと思つたが、なんだか言いにくくいのでやめにした。

その代り広田さんの事を聞いた。三四郎は広田さんの名前をこれで三、四へん耳にしている。そうして、水蜜桃の先生と青木堂の先生に、ひそかに広田さんの名をつけてゐる。それから正門内で意地の悪い馬に苦しめられて、喜多床の職人に笑われたのもやはり広田先生にしてある。ところが今承つてみると、馬の件ははたして広田先生であつた。それで水蜜桃も必ず同先生に違ひないと決めた。考えると、少し無理のようでもある。

帰る時に、ついでだから、午前中に届けてもらいたいと言つて、^{あわせ}給を一枚病院まで頼まれた。三四郎は大いにうれしかつた。

三四郎は新しい四角な帽子をかぶつている。この帽子をかぶつて病院に行けるのがちょっと得意である。^{さえざえ}らしい顔をして野々宮君の家を出た。

御茶の水で電車を降りて、すぐ^{くるま}俾に乗つた。いつもの三四郎に似合わぬ所作である。威勢よく赤門を引き込ませた時、法文科のベルが鳴り出した。いつもならノートとインキ壺^{つぼ}を持って、八番の教室にはいる時分である。一、二時間の講義ぐらい聞きそくなつてもかまわないという氣で、まつすぐに青山内科の玄関まで乗りつけた。

上がり口を奥へ、二つ目の角を右へ切れて、突当たりを左へ曲がると東側の部屋^{へや}だと教わつたとおり歩いて行くと、はたしてあつた。黒塗りの札に野々宮よし子と仮名^{かな}で書いて、戸口に掛けてある。三四郎はこの名前を読んだまま、しばらく戸口の所でたたずんでいた。いなか物だからノックするなぞという氣の利いた事はやらない。「この中^きにいる人が、野々宮君の妹で、よし子という女である」

三四郎はこう思つて立つていた。戸を開けて顔が見たくもあるし、見て失望するのがいやでもある。自分の頭の中に往来する女の顔は、どうも野々宮宗八さんに似ていないので

から困る。

うしろから看護婦が草履の音をたてて近づいて來た。三四郎は思い切つて戸を半分ほどあけた。そうして中にいる女と顔を見合せた。（片手にハンドルをもつたまま）

目の大きな、鼻の細い、唇の薄い、鉢が開いたと思うくらいに、額が広くつて顎がこけた女であつた。造作はそれだけである。けれども三四郎は、こういう顔だちから出る、この時にひらめいた咄嗟の表情を生まれてはじめて見た。青白い額のうしろに、自然のままにたれた濃い髪が、肩まで見える。それへ東窓をもれる朝日の光が、うしろからさすので、髪と日光の触れ合う境のところが董色に燃えて、生きた量をしよつてゐる。それでいて、顔も額もはなはだ暗い。暗くて青白い。そのなかに遠い心持ちのする目がある。高い雲が空の奥にいて容易に動かない。けれども動かすにもいられない。ただただれるようになだれる。ただなだれるようになだれる。ただなだれるようになだれる。ただなだれるようになだれる。女が三四郎を見た時は、こういう目つきであつた。

三四郎はこの表情のうちにものうい憂鬱と、隠さざる快活との統一を見いだした。その統一の感じは三四郎にとつて、最も尊き人生の一片である。そうして一大発見である。三四郎はハンドルをもつたまま、——顔を戸の影から半分部屋の中に差し出したままこの刹那の感に自らを放下し去つた。

「おはいりなさい」

女は三四郎を待ち設けたように言う。その調子には初対面の女には見いだすことのできない、安らかな音色ねいろがあつた。純粹の子供か、あらゆる男児に接しつくした婦人でなければ、こうは出られない。なれなれしいのとは違う。初めから古い知り合いなのである。同時に女は肉の豊かでない頬ほおを動かしてにこりと笑つた。青白いうちに、なつかしい暖かみができた。三四郎の足はしぜんと部屋の内へはいった。その時青年の頭のうちには遠い故郷にある母の影がひらめいた。

戸のうしろへ回つて、はじめて正面に向いた時、五十あまりの婦人が三四郎に挨拶あいさつをした。この婦人は三四郎のからだがまだ扉の陰を出ないまえから席を立つて待つていたものとみえる。

「小川さんですか」と向こうから尋ねてくれた。顔は野々宮君に似ている。娘にも似ている。しかしあだ似てゐるというだけである。頼まれた風呂敷包みを出すと、受け取つて、礼を述べて、

「どうぞ」と言いながら椅子をすすめたまま、自分は寝台の向こう側へ回つた。

寝台の上に敷いた蒲団ふとんを見るとまつ白である。上へ掛けるものもまつ白である。それを

半分ほど斜にはぐつて、裾のほうが厚く見えるところを、よけるように、女は窓を背にして腰をかけた。足は床に届かない。手に編針を持っている。毛糸のたまが寝台の下に転がった。女の手から長い赤い糸が筋を引いている。三四郎は寝台の下から、毛糸のたまを取り出してやろうかと思つた、けれども、女が毛糸にはまるで無頓着でいるので控えた。

おつかさんが向こう側から、しきりに昨夜の礼を述べる。お忙しいところをなどと言う。三四郎は、いいえ、どうせ遊んでいますからと言う。二人が話をしているあいだ、よし子は黙っていた。二人の話が切れた時、突然、

「ゆうべの轡死を御覧になつて」と聞いた。見ると部屋のすみに新聞がある。三四郎が、「ええ」と言う。

「こわかつたでしよう」と言いながら、少し首を横に曲げて、三四郎を見た。兄に似て首の長い女である。三四郎はこわいともこわくないとも答えずに、女の首の曲がりぐあいをながめていた。半分は質問があまり単純なので、答に窮したのである。半分は答えるのを忘れたのである。女は気がついたとみえて、すぐ首をまつすぐとした。そうして青白い頬の奥を少し赤くした。三四郎はもう帰るべき時間だと考えた。

挨拶をして、部屋を出て、玄関正面へ来て、向こうを見ると、長い廊下のはずれが四角

に切れて、ぱつと明るく、表の緑が映る上がり口に、池の女が立っている。はつと驚いた三四郎の足は、さつそく歩調に狂いができた。その時透明な空気の画布^{カンバス}の中に暗く描かれた女の影は一足前へ動いた。三四郎も誘われたように前へ動いた。二人は一筋道の廊下のどこかですれ違わねばならぬ運命をもつて互いに近づいて來た。すると女が振り返った。明るい表の空氣の中には、初秋^{はつあき}の緑が浮いているばかりである。振り返った女の目に応じて、四角の中に、現われたものもなければ、これを待ち受けていたものもない。三四郎はそのあいだに女の姿勢と服装を頭の中へ入れた。

着物の色はなんという名かわからない。大学の池の水へ、曇つた常磐木^{ときわぎ}の影が映る時のようにある。それはあざやかな縞^{しま}が、上から下へ貫いている。そうしてその縞が貫きながら波を打つて、互いに寄つたり離れたり、重なつて太くなつたり、割れて二筋になつたりする。不規則だけれども乱れない。上から三分^ぶの一のところを、広い帯で横に仕切つた。帯の感じには暖かみがある。黄を含んでいるためだろう。

うしろを振り向いた時、右の肩が、あとへ引けて、左の手が腰に添つたまま前へ出た。ハンケチを持つている。そのハンケチの指に余つたところが、さらりと開いている。絹のためだろう。——腰から下は正しい姿勢にある。

女はやがてもとのとおりに向き直つた。目を伏せて二足ばかり三四郎に近づいた時、突然首を少しうしろに引いて、まともに男を見た。ふたえまぶた二重瞼の切長きれながおちついた恰好かつけうである。目立つて黒い眉毛まゆげの下に生きている。同時にきれいな歯があらわれた。この歯との顔色とは三四郎にとつて忘るべからざる対照であつた。

きょうは白いものを薄く塗つてゐる。けれども本来の地を隠すほどに無趣味ではなかつた。こまやかな肉が、ほどよく色づいて、強い日光ひにめげないように見える上を、きわめて薄く粉こが吹いている。てらてら照ひかる顔ではない。

肉は頬といわば頸といわばきちりと締まつてゐる。骨の上に余つたものはたんとないくらいである。それでいて、顔全体が柔かい。肉が柔かいのではない骨そのものが柔かいようと思われる。奥行きの長い感じを起こさせる顔である。

女は腰をかがめた。三四郎は知らぬ人に礼をされて驚いたというよりも、むしろ礼のしかたの巧みなのに驚いた。腰から上が、風に乗る紙のようにふわりと前に落ちた。しかも早い。それで、ある角度まで来て苦もなくはつきりととまつた。もちろん習つて覚えたものではない。

「ちよつと伺いますが……」と言う声が白い歯のあいだから出た。きりりとしている。し

かし鷹揚である。ただ夏のさかりに椎の実がなつてゐるかと人に聞きそうには思われなかつた。三四郎はそんな事に気のつく余裕はない。

「はあ」と言つて立ち止まつた。

「十五号室はどの辺になります」

十五号は三四郎が今出て来た部屋である。

「野々宮さんの部屋ですか」

今度は女のほうが「はあ」と言う。

「野々宮さんの部屋はね、その角を曲がつて突き当つて、また左へ曲がつて、二番目の右側です」

「その角を……」と言いながら女は細い指を前へ出した。

「ええ、ついその先の角です」

「どうもありがとうございます」

女は行き過ぎた。三四郎は立つたまま、女の後姿を見守つてゐる。女は角へ來た。曲がろうとするとたんに振り返つた。三四郎は赤面するばかりに狼狽した。女はにこりと笑つて、この角ですかというようなあいづを顔でした。三四郎は思わずうなずいた。女の影

は右へ切れて白い壁の中へ隠れた。

三四郎はぶらりと玄関を出た。医科大学生と間違えて部屋の番号を聞いたのかしらんと思つて、五、六歩あるいたが、急に気がついた。女に十五号を聞かれた時、もう一ぺんよし子の部屋へあともどりをして、案内すればよかつた。残念なことをした。

三四郎はいまさらとつて帰す勇気は出なかつた。やむをえずまた五、六歩あるいたが、今度はぴたりととまつた。三四郎の頭の中に、女の結んでいたリボンの色が映つた。そのリボンの色も質も、たしかに野々宮君が兼安かねやすで買つたものと同じであると考え出した時、三四郎は急に足が重くなつた。図書館の横をのたくるように正門の方へ出ると、どこから来たか与次郎が突然声をかけた。

「おいなぜ休んだ。きょうはイタリ一人がマカロニーをいかにして食うかという講義を聞いた」と言いながら、そばへ寄つて来て三四郎の肩をたたいた。

二人は少しいつしょに歩いた。正門のそばへ来た時、三四郎は、

「君、今ごろでも薄いリボンをかけるものかな。あれは極暑ごくしょに限るんじやないか」と聞いた。与次郎はアハハハと笑つて、

「○○教授に聞くがいい。なんでも知つてる男だから」と言つて取り合わなかつた。

正門の所で三四郎はぐあいが悪いからきようは学校を休むと言い出した。与次郎はいつしょについて来て損をしたといわぬばかりに教室の方へ帰つて行つた。

四

三四郎の魂がふわつき出した。講義を聞いていると、遠方に聞こえる。わるくすると肝要な事を書き落とす。はなはだしい時はひとの耳を損料で借りているような気がする。三四郎はばかばかしくてたまらない。仕方なしに、与次郎に向かつて、どうも近ごろは講義しきがおもしろくないと言い出した。与次郎の答はいつも同じことであつた。

「講義がおもしろいわけがない。君はいなか者だから、いまに偉い事になると思つて、今こ日までしんぼうして聞いていたんだろう。愚の至りだ。彼らの講義は開闢以来こんなものだ。いまさら失望したつてしかたがないや」

「そういうわけでもないが……」三四郎は弁解する。与次郎のへらへら調と、三四郎の重苦しい口のききようが、不釣合ふつりあいではなはだおかしい。

こういう問答を二、三度繰り返しているうちに、いつのまにか半月ばかりたつた。三

四郎の耳は漸々ぜんぜん借りものでないようになつてきた。すると今度は与次郎のほうから、三四郎に向かつて、

「どうも妙な顔だな。いかにも生活に疲れているような顔だ。世紀末の顔だ」と批評し出した。三四郎は、この批評に対しても依然として、

「そういうわけでもないが……」を繰り返していた。三四郎は世紀末などという言葉を聞いてうれしがるほどに、まだ人工的の空気に触れていなかつた。またこれを興味ある玩具として使用しうるほどに、ある社会の消息に通じていなかつた。ただ生活に疲れているという句が少し気にいつた。なるほど疲れだしたようでもある。三四郎は下痢げりのためばかりとは思わなかつた。けれども大いに疲れた顔を標榜ひょうぼうするほど、人生観のハイカラでもなかつた。それでこの会話はそれぎり発展しずくに済んだ。

そのうち秋は高くなる。食欲は進む。二十三の青年がとうてい人生に疲れていることができない時節が來た。三四郎はよく出る。大学の池の周囲まわりもだいぶん回つてみたが、べつだんの変もない。病院の前も何べんとなく往復したが普通の人間に会うばかりである。また理科大学の穴倉へ行つて野々宮君に聞いてみたら、妹はもう病院を出たと言う。玄関で会つた女の事を話そうと思ったが、先方が忙しそうなので、つい遠慮してやめてしまつた。

今度大久保へ行つてゆつくり話せば、名前も素姓もたいていはわかることだから、せかずに引き取つた。そうして、ふわふわして方々歩いている。田端^{たばた}だの、道灌山^{どうかんやま}だの、染井^その墓地^{めい}だの、巣鴨^{すがも}の監獄^{かんごく}だの、護国寺^{ごこくじ}だの、——三四郎は新井^{あらい}の薬師^{やくし}まで行つた。新井の薬師の帰りに、大久保へ出て野々宮君の家へ回ろうと思つたら、落合^{おちあい}の火葬場^{やきば}の辺で道を間違えて、高田^{たかた}へ出たので、目白^{めじろ}から汽車へ乗つて帰つた。汽車の中でみやげに買った栗^{くり}を一人でさんざん食つた。その余りはあくる日与次郎が来て、みんな平らげた。

三四郎はふわふわすればするほど愉快になつてきた。初めのうちはあまり講義に念を入れ過ぎたので、耳が遠くなつて筆記に困つたが、近ごろはたいていに聞いているからなんともない。講義中にいろいろな事を考える。少しごらい落としても惜しい気も起こらない。よく観察してみると与次郎はじめみんな同じことである。三四郎はこれくらいでいいものだろうと思い出した。

三四郎がいろいろ考えるうちに、時々例のリボンが出てくる。そうすると気がかりになる。はなはだ不愉快になる。すぐ大久保へ出かけてみたくなる。しかし想像の連鎖やら、外界の刺激やらで、しばらくするとまぎれてしまう。だからだいたいはのん気である。それで夢を見ている。大久保へはなかなか行かない。

ある日の午後三四郎は例の「ことくぶらついて、団子坂^{だんござか}の上から、左へ折れて千駄木林^{せんだぎ}へ出た。秋晴れといって、このところは東京の空もいなかのように深く見える。こういう空の下に生きていると思うだけでも頭ははつきりする。そのうえ、野へ出れば申し分はない。気がのびのびして魂が大空ほどの大きさになる。それでいてからだ總体がしまつてくる。だらしのない春ののどかさとは違う。三四郎は左右の生垣^{いけがき}をながめながら、生まれてはじめての東京の秋をかぎつつやつて來た。

坂下では菊人形が二、三日前開業したばかりである。坂を曲がる時は幟^{のぼり}さえ見えた。今はただ声だけ聞こえる、どんちゃんどんちゃん遠くからはやしている。それはやしの音が、下の方から次第に浮き上がつてきて、澄み切つた秋の空氣の中へ広がり尽くすと、ついにはきわめて稀薄な波になる。そのまた余波が三四郎の鼓膜^{こまく}のそばまで来てしぜんにとまる。騒がしいというよりはかえつていい心持ちである。

時に突然左の横町から二人あらわれた。その一人が三四郎を見て、「おい」と言う。

与次郎の声はきょうにかぎつて、几帳面^{きちようめん}である。その代り連^{つれ}がある。三四郎はその連を見た時、はたして日ごろの推察どおり、青木堂で茶を飲んでいた人が、廣田さんであるということを悟つた。この人とは水蜜桃^{すいみつとう}以来妙な関係がある。ことに青木堂で茶を飲ん

で煙草をのんで、自分を図書館に走らしてよりこのかた、いつそうよく記憶にしみている。いつ見ても神^{かんぬし}主^しのような顔に西洋人の鼻をつけている。きょうもこのあいだの夏服で、べつだん寒そうな様子もない。

三四郎はなんとか言つて、挨拶^{あいさつ}をしようと思つたが、あまり時間がたつてゐるので、どう口をきいていいかわからない。ただ帽子を取つて礼をした。与次郎に対しては、あまり丁寧すぎる。広田に対しては、少し簡略すぎる。三四郎はどつちつかずの中間にでた。すると与次郎が、すぐ、

「この男は私の同級生です。熊本の高等学校からはじめて東京へ出て來た——」と聞かれもしないさきからいなか者を吹聴^{ふいちょう}しておいて、それから三四郎の方を向いて、「これが広田先生。高等学校の……」とわけもなく双方^{そうほう}を紹介してしまつた。

この時広田先生は「知つてる、知つてる」と二へん繰り返して言つたので、与次郎は妙な顔をしている。しかしなぜ知つてるんですかなどとめんどうな事は聞かなかつた。ただちに、

「君、この辺に貸家はないか。広くて、きれいな、書生部屋のある」と尋ねだした。
「貸家はと……ある」

「どの辺だ。きたなくつちやいけないぜ」

「いやきれいなのがある。大きな石の門が立っているのがある」

「そりやうまい。どこだ。先生、石の門はいいですな。ぜひそれにしようじやありませんか」と与次郎は大いに進んでいる。

「石の門はいかん」と先生が言う。

「いかん？ そりや困る。なぜいかんです」

「なぜでもいかん」

「石の門はいいがな。新しい男爵のようでいいじゃないですか、先生」

与次郎はまじめである。広田先生はにやにや笑っている。とうとうまじめのほうが勝つて、ともかくも見ることに相談ができて、三四郎が案内をした。

横町をあとへ引き返して、裏通りへ出ると、半町ばかり北へ来た所に、突き当りと思われるような小路こうじがある。その小路の中へ三四郎は二人を連れ込んだ。まつすぐに行くと植木屋の庭へ出てしまう。三人は入口の五、六間手前でとまつた。右手にかなり大きな御影みかげの柱が二本立っている。扉は鉄である。三四郎がこれだと言う。なるほど貸家札がついている。

「こりや恐ろしいもんだ」と言いながら、与次郎は鉄の扉をうんと押したが、錠がおりて
いる。「ちよつとお待ちなさい聞いてくる」と言うやいなや、与次郎は植木屋の奥の方へ
駆け込んで行つた。広田と三四郎は取り残されたようなものである。二人で話を始めた。

「東京はどうです」

「ええ……」

「広いばかりできたない所でしよう」

「ええ……」

「富士山に比較するようなものはなんにもないでしよう」

三四郎は富士山の事をまるで忘れていた。広田先生の注意によつて、汽車の窓からはじ
めてながめた富士は、考え出すと、なるほど崇高なものである。ただ今自分の頭の中にござ
たごたしている世相^{せそう}とは、とても比較にならない。三四郎はあの時の印象をいつのまにか
取り落していたのを恥ずかしく思つた。すると、

「君、不二山^{ふじさん}を翻訳してみたことがありますか」と意外な質問を放たれた。

「翻訳とは……」

「自然を翻訳すると、みんな人間に化けてしまうからおもしろい。崇高だとか、偉大だと

か、雄壯だとか」

三四郎は翻訳の意味を了した。

「みんな人格上の言葉になる。人格上の言葉に翻訳することのできないものには、自然が毫も人格上の感化を与えていない」

三四郎はまだあとがあるかと思って、黙つて聞いていた。ところが広田さんはそれでやめてしまつた。植木屋の奥の方をのぞいて、

「佐々木は何をしているのかしら。おそいな」とひとりごとのように言う。

「見てきましようか」と三四郎が聞いた。

「なに、見にいつたつて、それで出てくるような男じやない。それよりここに待つてるほうが手間がかからないでいい」と言って榎殻からたちの垣根の下にしゃがんで、小石を拾つて、土の上へ何かかき出した。のん気なことである。与次郎ののん気とは方角が反対で、程度がほぼ相似ている。

ところへ植込みの松の向こうから、与次郎が大きな声を出した。

「先生先生」

先生は依然として、何かかいている。どうも燈明台とうみょうだいのようである。返事をしないの

で、与次郎はしかたなしに出て來た。

「先生ちよつと見てごらんなさい。いい家だ。^{うち} この植木屋で持つてゐるんです。門をあけさせてもいいが、裏から回つたほうが早い」

三人は裏から回つた。雨戸を開けて、一間一間見て歩いた。中流の人が住んで恥ずかしくないようにできている。家賃が四十円で、敷金が三ヶ月分だという。三人はまた表へ出了た。

「なんで、あんなりっぱな家を見るのだ」と広田さんが言う。

「なんで見るつて、ただ見るだけだからいいじゃありませんか」と与次郎は言う。

「借りもしないのに……」

「なに借りるつもりでいたんです。ところが家賃をどうしても二十五円にしようと言わない……」

広田先生は「あたりまえさ」と言つたぎりである。すると与次郎が石の門の歴史を話し出した。このあいだまである出入りの屋敷の入口にあつたのを、改築のときもらつてきて、すぐあすこへ立てたのだと言う。与次郎だけに妙な事を研究してきた。

それから三人はもとの大通りへ出て、動坂^{どうざか}から田端^{たばた}の谷へ降りたが、降りた時分には

三人ともただ歩いている。貸家の事はみんな忘れてしまった。ひとり与次郎が時々石の門のことを言う。こうじまち 麻町からあれを千駄木まで引いてくるのに、手間が五円ほどかかったてて、ぜんたいだれが借りるだろうなどとよけいなことまで言う。ついには、いまに借手がなくなつてきつと家賃を下げるに違ひないから、その時もう一ぺん談判してぜひ借りようじやありませんかという結論であつた。広田先生はべつに、そういう了見もないとみて、こう言つた。

「君が、あんまりよけいな話ばかりしているものだから、時間がかかつてしかたがない。いいかげんにして出てくるものだ」

「よほど長くかかりましたか。何か絵をかいていましたね。先生もずいぶんのん気だな」「どつちがのんきかわかりやしない」

「ありやなんの絵です」

先生は黙つている。その時三四郎がまじめな顔をして、

「燈台じやないですか」と聞いた。かき手と与次郎は笑い出した。

「燈台は奇抜だな。じや野々宮宗八さんをかいていらしつたんですね」

「なぜ」

「野々宮さんは外国じや光つてるが、日本じやまつ暗だから。——だれもまるで知らない。
それでわざかばかりの月給をもらつて、穴倉へたてこもつて、——じつに割に合わない商
売だ。野々宮さんの顔を見るたびに気の毒になつてたまらない」

「君なぞは自分のすわつている周囲方二尺ぐらいの所をぼんやり照らすだけだから、丸
まるあ
行燈のようなものだ」

丸行燈に比較された与次郎は、突然三四郎の方を向いて、

「小川君、君は明治何年生まれかな」と聞いた。三四郎は簡単に、
「ぼくは二十三だ」と答えた。

「そんなものだろう。——先生ぼくは、丸行燈だの、雁首がんくびだのっていうものが、どうも
きらいですがね。明治十五年以後に生まれたせいかもしれないが、なんだか旧式でいやな
心持ちがする。君はどうだ」とまた三四郎の方を向く。三四郎は、
「ぼくはべつだんきらいでもない」と言つた。

「もつとも君は九州のいなかから出たばかりだから、明治元年ぐらいの頭と同じなんだろ

う」

三四郎も広田もこれに対してべつだんの挨拶をしなかつた。少し行くと古い寺の隣の杉林を切り倒して、きれいに地ならしをした上に、青ペンキ塗りの西洋館を建てていて。広田先生は寺とペンキ塗りを等分に見ていた。

「時代錯誤だ。^{アナクロニズム}日本の物質界も精神界もこのとおりだ。君、九段の燈明台を知っているだろう」とまた燈明台が出た。「あれは古いもので、江戸名所図会に出ている」

「先生冗談言つちやいけません。なんぼ九段の燈明台が古いたつて、江戸名所図会に出ちやたいへんだ」

広田先生は笑い出した。じつは東京名所という錦絵^{にしきえ}の間違いだということがわかつた。先生の説によると、こんなに古い燈台が、まだ残つてゐるそばに、偕行社^{かいこうしゃ}という新式の煉瓦作りができた。二つ並べて見るとじつにばかげてゐる。けれどもだれも気がつかない、平氣でいる。これが日本の社会を代表しているんだと言う。

与次郎も三四郎もなるほどと言つたまま、お寺の前を通り越して、五、六町來ると、大きな黒い門がある。与次郎が、ここを抜けて道灌山^{どうかんやま}へ出ようと言ひ出した。抜けてもいいのかと念を押すと、なにこれは佐竹^{さたけ}の下屋敷^{しもやしき}で、だれでも通れるんだからかまわないと主張するので、二人ともその気になつて門をくぐつて、藪^{やぶ}の下を通つて古い池のそばま

で来ると、番人^{やまと}が出てきて、たいへん三人をしかりつけた。その時与次郎はへいへいと言つて番人にあやまつた。

それから谷中^{やなか}へ出て、根津^{ねづ}を回つて、夕方に本郷の下宿へ帰つた。三四郎は近来にない氣楽な半日を暮らしたように感じた。

翌日学校へ出てみると与次郎がない。昼から来るかと思つたが来ない。図書館へもはいつたがやつぱり見当らなかつた。五時から六時まで純文科共通の講義がある。三四郎はこれへ出た。筆記するには暗すぎる。電燈がつくには早すぎる。細長い窓の外に見える大きな櫻の枝の奥が、次第に黒くなる時分だから、部屋^{へや}の中は講師の顔も聴講生の顔も等しくぼんやりしている。したがつて暗闇^{くらやみ}で饅頭^{まんじゅう}を食うように、なんとなく神秘的である。三四郎は講義がわからないところが妙だと思った。頬杖^{ほおづえ}を突いて聞いていると、神経がぶくなつて、気が遠くなる。これでこそ講義の価値があるような心持ちがする。ところへ電燈がぱつとついて、万事がやや明瞭^{めいりょう}になつた。すると急に下宿へ帰つて飯が食いたくなつた。先生もみんなの心を察して、いいかげんに講義を切り上げてくれた。三四郎は早足で追分^{おいわけ}まで歸つてくる。

着物を脱ぎ換えて膳^{ぜん}に向かうと、膳の上に、茶碗蒸^{ちゃわんむし}といつしょに手紙が一本載せてあ

る。その上封を見たとき、三四郎はすぐ母から来たものだと悟った。すまんことだがこの半月あまり母の事はまるで忘れていた。きのうからきょうへかけては時代錯誤だの、不二山の人格だの、神秘的な講義なので、例の女の影もいつこう頭の中へ出てこなかつた。三四郎はそれで満足である。母の手紙はあとでゆっくり見ることとして、とりあえず食事を済まして、煙草を吹かした。その煙を見るとさつきの講義を思い出す。

そこへ与次郎がふらりと現われた。どうして学校を休んだかと聞くと、貸家搜しで学校どころじやないそうである。

「そんなに急いで越すのか」と三四郎が聞くと、

「急ぐつて先月中に越すはずのところをあさつての天長節まで待たしたんだから、どうしたつてあしたじゆうに搜さなければならぬ。どこか心当たりはないか」と言う。

こんなに忙しがるくせに、きのうは散歩だが、貸家搜しだがわからぬないようにぶらぶらつぶしていた。三四郎にはほとんど合点がいかない。与次郎はこれを解釈して、それは先生がいっしょだからさと言つた。「元来先生が家を捜すなんて間違つている。けつして捜したことのない男なんだが、きのうはどうかしていたに違ひない。おかげで佐竹の邸でひどい目にしかられていい面の皮だ。——君どこかないか」と急に催促する。与次郎が来た

のはまつたくそれが目的らしい。よくよく原因を聞いてみると、今の持ち主が高利貸で、家賃をむやみに上げるのが、業腹ごうはらだというので、与次郎がこつちからたちのきを宣告したのだそうだ。それでは与次郎に責任があるわけだ。

「きようは大久保まで行つてみたが、やつぱりない。——大久保といえ巴、ついでに宗八さんの所に寄つて、よし子さんに会つてきた。かわいそうにまだ色光沢いろつやが悪い。——辣薑らっこう性の美人——おつかさんが君によろしく言つてくれつてことだ。しかしその後はあの辺も穏やかなようだ。轢死れきしもあれぎりないそうだ」

与次郎の話はそれから、それへと飛んで行く。平生から締まりのないうえに、きようは家搜しで少しせきこんでいる。話が一段落つくと、相の手のように、どこかないかないかと聞く。しまいには三四郎も笑い出した。

そのうち与次郎の尻しりが次第におちついてきて、燈火親しむべしなどという漢語かごさえ借用してうれしがるようになつた。話題ははしなく広田先生の上に落ちた。

「君の所の先生の名はなんというのか」

「名は萇ちよう」と指で書いて見せて、「艸くさ 冠かんむり」がよけいだ。字引にあるかしらん。妙な名をつけたものだね」と言う。

「高等学校の先生か」

「昔から今^{こんにち}日に至るまで高等学校の先生。えらいものだ。十年一日の^{じつ}ごとしというが、もう十二、三年になるだろう」

「子供はあるのか」

「子供どころか、まだ^{ひとりみ}独身だ」

三四郎は少し驚いた。あの年まで一人でいられるものかとも疑つた。

「なぜ奥さんをもらわないのだろう」

「そこが先生の先生たるところで、あれでたいへんな理論家なんだ。細君^{さいくん}をもらつてみないさきから、細君はいかんものと理論できまつてているんだそうだ。愚だよ。だからしじゅう矛盾ばかりしている。先生、東京ほどきたない所はないよう言う。それで石の門を見ると恐れをなして、いかんいかんとか、りつぱすぎるとか言うだろう」

「じゃ細君も試みに持つてみたらよかろう」

「大いによしとかなんとか言うかもしれない」

「先生は東京がきたないとか、日本人が醜いとか言うが、洋行でもしたことがあるのか」「なにするもんか。ああいう人なんだ。万事頭のほうが事実より発達しているんだからあ

あるんだね。その代り西洋は写真で研究している。パリの凱旋門^{がいせんもん}だの、ロンドンの議事堂だの、たくさん持っている。あの写真で日本を律するんだからたまらない。きたないわけさ。それで自分の住んでる所は、いくらきたなくつても存外平氣だから不思議だ」

「三等汽車へ乗つておつたぞ」

「きたないきたないって不平を言やしないか」

「いやべつに不平も言わなかつた」

「しかし先生は哲学者だね」

「学校で哲学でも教えているのか」

「いや学校じや英語だけしか受け持つていながね、あの人間が、おのずから哲学にできあがつてゐるからおもしろい」

「著述^{しょじゆ}もあるのか」

「何もない。時々論文を書く事はあるが、ちつとも反響がない。あれじやだめだ。まるで世間が知らないんだからしようがない。先生、ぼくの事を丸^{まる}行燈^{あんどん}だと言つたが、夫子^{ふうし}自身は偉大な暗闇だ」

「どうかして、世の中へ出たらよきそなうなものだな」

「出たらよさそうなものだつて、——先生、自分じやなんにもやらない人だからね。第一ぼくがいなけりや三度の飯さえ食えない人なんだ」

三四郎はまさかといわぬばかりに笑い出した。

「嘘うそじゃない。氣の毒なほどなんにもやらないんでね。なんでも、ぼくが下女に命じて、先生の気にいるように始末をつけるんだが——そんな瑣末さまつな事はとにかく、これから大いに活動して、先生を一つ大学教授にしてやろうと思う」

与次郎はまじめである。三四郎はその大言たいげんに驚いた。驚いてもかまわない。驚いたままに進行して、しまいに、

「引つ越しをする時はぜひ手伝いに来てくれ」と頼んだ。まるで約束のできた家がどうからあるごとき口吻こうぶんである。

与次郎の帰つたのはかれこれ十時近くである。一人ですわつていると、どことなく肌はださむの感じがする。ふと気がついたら、机の前の窓がまだたてずにあつた。障子を開けると月夜だ。目に触れるたびに不愉快な檜にひのき、青い光りがさして、黒い影の縁が少し煙つて見える。檜に秋が来たのは珍しいと思いながら、雨戸をたてた。

三四郎はすぐ床へはいった。三四郎は勉強家といつよりむしろていかいか徊家なので、わりあ

い書物を読まない。その代りある掬すべき情景にあうと、何べんもこれを頭の中で新たにして喜んでいる。そのほうが命に奥行きがあるよう気がする。きょうも、いつもなら、神秘的講義の最中に、ぱつと電燈がつくところなどを繰り返してうれしがるはずだが、母の手紙があるので、まず、それから片づけ始めた。

手紙には新蔵が蜂蜜^{はちみつ}をくれたから、焼酎^{しようちゅう}を混ぜて、毎晩杯に一杯ずつ飲んでいる。新蔵は家の小作人で、毎年冬になると年貢米^{ねんぐまい}を二十俵ずつ持つてくる。いたつて正直者だが、癪^{かんしゃく}が強いので、時々女房を薪^{まき}でなぐことがある。——三四郎は床の中で新蔵が蜂を飼い出した昔の事まで思い浮かべた。それは五年ほどまえである。裏の椎^{しい}の木に蜜蜂^{はちばい}が二、三百匹ぶら下がっていたのを見つけてすぐ糸漏斗^{もひじょうど}に酒を吹きかけて、ことごとく生捕^{いけどり}にした。それからこれを箱へ入れて、出入りのできるような穴をあけて、日当りのいい石の上に据えてやつた。すると蜂がだんだんふえてくる。箱が一つでは足りなくなる。二つにする。また足りなくなる。三つにする。というふうにふやしていつた結果、今ではなんでも六箱か七箱ある。そのうちの一箱を年に一度ずつ石からおろして蜂のために蜜を切り取るといつていた。毎年夏休みに帰るたびに蜜をあげましょくて言わないことはないが、ついに持ってきたためしがなかつた。が、今年は物覚えが急によ

くなつて、年来の約束を履行したものであろう。

平太郎がおやじの石塔を建てたから見にきてくれると頼みにきたとある。行つてみると、木も草もはえていない庭の赤土のまん中に、御影石でできていたそうである。平太郎はその御影石が自慢なのだと書いてある。山から切り出すのに幾日とかかって、それから石屋に頼んだら十円取られた。百姓や何かにはわからないが、あなたのどこの若旦那は大学校へはいつているくらいだから、石の善惡はきっとわかる。今度手紙のついでに聞いてみてくれ、そうして十円もかけておやじのためにこしらえてやつた石塔をほめてもらつてくれと言うんだそうだ。——三四郎はひとりでくすぐす笑い出した。千駄木の石門よりよほど激しい。

大学の制服を着た写真をよこせとある。三四郎はいつか撮つてやろうと思いながら、次へ移ると、案のことく三輪田のお光さんが出でてきた。——このあいだお光さんのおつかさんが来て、三四郎さんも近々大学を卒業なさることだが、卒業したら家の娘をもらつてくれまいかという相談であつた。お光さんは器量もよし気質も優しいし、家に田地もだいぶあるし、その上家と家との今までの関係もあることだから、そうしたら双方ともつごうがよいだろうと書いて、そのあとへ但し書がつけてある。——お光さんもうれしがるだろ

う。——東京の者は気心(きごころ)が知れないから私はいやじや。

三四郎は手紙を巻き返して、封に入れて、枕(まくらもと)元へ置いたまま目を瞑つた。鼠(ねずみ)が急に天井(てんじょう)であはれだしたが、やがて静まつた。

三四郎には三つの世界ができた。一つは遠くにある。与次郎のいわゆる明治十五年以前の香(か)がする。すべてが平穏である代りにすべてが寝ぼけている。もつとも帰るに世話はない。もどろうとすれば、すぐにもどれる。ただいざとならない以上はもどる気がしない。いわば立退場(たちのきば)のようなものである。三四郎は脱ぎ棄てた過去を、この立退場の中へ封じ込めた。なつかしい母さえここに葬つたかと思うと、急にもつたいなくなる。そこで手紙が来た時だけは、しばらくこの世界に徊(ていかい)して旧歡(きゅうがん)をあたためる。

第二の世界のうちには、昔のはえた煉瓦造りがある。片すみから片すみを見渡すと、向こうの人の顔がよくわからないほどに広い閲覧室がある。梯子(はしご)をかけなければ、手の届きかねるまで高く積み重ねた書物がある。手すれ、指の垢(あか)で、黒くなっている。金文字で光っている。羊皮、牛皮、二百年前の紙、それからすべての上に積もつた塵(ぢり)がある。この塵は二、三十年かかるつてようやく積もつた尊い塵である。静かな明日に打ち勝つほどの静かな塵である。

第二の世界に動く人の影を見ると、たいてい不精な髪をはやしている。ある者は空見て歩いている。ある者は俯向いて歩いている。服装は必ずきたない。生計はきっと貧乏である。そうして晏如としている。電車に取り巻かれながら、太平の空気を、通天に呼吸してはばかりない。このなかに入る者は、現世を知らないから不幸で、火宅をのがれながら幸いである。広田先生はこの内にいる。野々宮君もこの内にいる。三四郎はこの内の空気をほぼ解した所にいる。出れば出られる。しかしせつかく解しかけた趣味を思いきつて捨てるのも残念だ。

第三の世界はさんとして春の「ごとくう」でいる。電燈がある。銀匙ぎんさじがある。歎声がある。笑語がある。泡立つシャンパンの杯がある。そしてすべての上の冠として美しい女によしょう性せいがある。三四郎はその女性の一人に口をきいた。一人を二へん見た。この世界は三四郎にとつて最も深厚な世界である。この世界は鼻の先にある。ただ近づき難い。近づき難い点において、天外の稻妻いなずまと一般である。三四郎は遠くからこの世界をながめて、不思議に思う。自分がこの世界のどこかへはいらなければ、その世界のどこかに欠陥ができるような気がする。自分はこの世界のどこかの主人公であるべき資格を有しているらしい。それにもかかわらず、円満の発達をこいねがうべきはずのこの世界がかえつてみずか

らを束縛して、自分が自由に出入すべき通路をふさいでいる。三四郎にはこれが不思議であつた。

三四郎は床のなかで、この三つの世界を並べて、互いに比較してみた。次にこの三つの世界をかき混ぜて、そのなかから一つの結果を得た。——要するに、国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問にゆだねるにこしたことはない。

結果はすこぶる平凡である。けれどもこの結果に到着するまえにいろいろ考えただから、思索の労力を打算して、結論の価値を上下しやすい思索家自身からみると、それほど平凡ではなかつた。

ただこうすると広い第三の世界を**眇たる**一個の細君で代表させることになる。美しい女性はたくさんある。美しい女性を翻訳するといろいろになる。——三四郎は広田先生にならつて、翻訳という字を使ってみた。——いやしくも人格上の言葉に翻訳のできるかぎりは、その翻訳から生ずる感化の範囲を広くして、自己の個性を全からしむるために、なるべく多くの美しい女性に接触しなければならない。細君一人を知つて甘んずるのは、進んで自己の発達を不完全にするようなものである。

三四郎は論理をここまで延長してみて、少し広田さんにかぶれたなと思つた。実際のと

ころは、これほど痛切に不足を感じていなかつたからである。

翌日学校へ出ると講義は例によつてつまらないが、室内の空氣は依然として俗を離れているので、午後三時までのあいだに、すつかり第二の世界の人となりおおせて、さも偉人のような態度をもつて、追分の交番の前まで来ると、ばつたり与次郎に出会つた。

「アハハハ。アハハハ」

偉人の態度はこれがためにまつたくくずれた。交番の巡査さえ薄笑いをしている。

「なんだ」

「なんだもないものだ。もう少し普通の人間らしく歩くがいい。まるでロマンチック・アイロニード」

三四郎にはこの洋語の意味がよくわからなかつた。しかたがないから、

「家はあつたか」と聞いた。

「その事で今君の所へ行つたんだ——あついよいよ引つ越す。手伝いに来てくれ」

「どこへ越す」

「西片町十番地への三号。九時までに向こうへ行つて掃除をしてね。待つててくれ。あ

とから行くから。いいか、九時までだぜ。への三号だよ。失敬」

三四郎は急いで行き過ぎた。三四郎も急いで下宿へ帰った。その晩取つて返して、図書館でロマンチック・アイロニーという句を調べてみたら、ドイツのシュレーゲルが唱えた言葉で、なんでも天才というものは、目的も努力もなく、終日ぶらぶらぶらついていなくつてはだめだという説だと書いてあつた。三四郎はようやく安心して、下宿へ帰つて、すぐ寝た。

あくる日は約束だから、天長節にもかかわらず、例刻に起きて、学校へ行くつもりで西片町十番地へはいつて、への三号を調べてみると、妙に細い通りの中ほどにある。古い家だ。

玄関の代りに西洋間が一つ突き出していて、それと鉤の手に座敷がある。座敷のうしろが茶の間で、茶の間の向こうが勝手、下女部屋と順に並んでいる。ほかに二階がある。ただし何畳だかわからない。

三四郎は掃除を頼られたのだが、べつに掃除をする必要もないと認めた。むろんきれいじゃない。しかし何といつて、取つて捨てべきものも見当らない。しいて捨てれば畳建具ぐらいなものだと考えながら、雨戸だけをあけて、座敷の橡側へ腰をかけて庭をながめていた。

大きな百日紅ひやくじつこうがある。しかしこれは根が隣にあるので、幹の半分以上が横に杉垣すぎがきから、こつちの領分をおかしているだけである。大きな桜がある。これはたしかに垣根の中にはえている。その代り枝が半分往来へ逃げ出して、もう少しすると電話の妨害になる。菊が一株ある。けれども寒菊かんぎくとみえて、いつこう咲いていない。このほかにはなんにもない。氣の毒なような庭である。ただ土だけは平らで、肌理きめが細かではなはだ美しい。三四郎は土を見ていた。じつさい土を見るようにできた庭である。

そのうち高等学校で天長節の式の始まるベルが鳴りだした。三四郎はベルを聞きながら九時がきたんだろうと考えた。何もしないでいても悪いから、桜の枯葉でも掃こうかしらんとようやく気がついた時、また篠ぼうきがないということを考えだした。また橡側へ腰をかけた。かけて二分もしたかと思うと、庭木戸がすうとあいた。そうして思いもよらぬ池の女が庭の中にあらわれた。

二方は生垣いけがきで仕切つてある。四角な庭は十坪に足りない。三四郎はこの狭い囲いの中に立つた池の女を見るやいなや、たちまち悟つた。——花は必ず剪きつて、瓶裏へいりにながむべきものである。

この時三四郎の腰は橡側を離れた。女は折戸を離れた。

「失礼でございますが……」

女はこの句を冒頭に置いて会えしゃく釈した。腰から上を例のとおり前へ浮かしたが、顔はけつして下げる。会釈しながら、三四郎を見つめている。女の咽喉のどが正面から見ると長く延びた。同時にその目が三四郎の眸ひとみに映つた。

二、三日まえ三四郎は美学の教師からグルーズの絵を見せてもらつた。その時美学の教師が、この人のかいだ女の肖像はことごとくヴァオラップチュアスな表情に富んでいると説明した。ヴァオラップチュアス！ 池の女のこの時の目つきを形容するにはこれよりほかに言葉がない。何か訴えている。艶えんなるあるものを訴えている。そうしてまさしく官能に訴えている。けれども官能の骨をとおして髓に徹する訴え方である。甘いものに堪たえうる程度をこえて、激しい刺激と変ずる訴え方である。甘いといわんよりは苦痛である。卑しくこびるのとはむろん違う。見られるもののほうがぜひこびたくなるほどに残酷な目つきである。しかもこの女にグルーズの絵と似たところは一つもない。目はグルーズのより半分も小さい。

「広田さんのお移転になるのは、こちらでございましょうか」

「はあ、ここです」

女の声と調子に比べると、三四郎の答はすこぶるぶつきらぼうである。三四郎も気がついている。けれどもほかに言いようがなかつた。

「まだお移りにならないんでござりますか」女の言葉ははつきりしている。普通のようにあとを濁さない。

「まだ来ません。もう来るでしよう」

女はしばしためらつた。手に大きな籃バスケットをさげている。女の着物は例によつて、わからないい。ただいつものように光らないだけが目についた。地がなんだかぶつぶつしている。それにはじまに縞しまだか模様しまだがある。その模様がいかにもでたらめである。

上から桜の葉が時々落ちてくる。その一つが籃の蓋ふたの上に乗つた。乗つたと思ううちに吹かれていつた。風が女を包んだ。女は秋の中に立つてゐる。

「あなたは……」

風が隣へ越した時分、女が三四郎に聞いた。

「掃除に頼まれて來たのです」と言つたが、現に腰をかけてぽかんとしていたところを見られたのだから、三四郎は自分でおかしくなつた。すると女も笑いながら、

「じゃ私も少しお待ち申しましようか」と言つた。その言い方が三四郎に許諾を求めるよ

うに聞こえたので、三四郎は大いに愉快であつた。そこで「ああ」と答えた。三四郎の了見では、「ああ、お待ちなさい」を略したつもりである。女はそれでもまだ立っている。

三四郎はしかたがないから、

「あなたは……」と向こうで聞いたようなことをこつちからも聞いた。すると、女は籃を椽の上へ置いて、帯の間から、一枚の名刺を出して、三四郎にくれた。

名刺には里見美禰子さとみみねことあつた。本郷真砂町ほんごうまさごちょうだから谷を越すとすぐ向こうである。三四郎がこの名刺をながめているあいだに、女は椽に腰をおろした。

「あなたにはお目にかかりましたな」と名刺を袂たもとへ入れた三四郎が顔をあげた。「はあ。いつか病院で……」と言つて女もこつちを向いた。

「まだある」

「それから池の端はたで……」と女はすぐ言つた。よく覚えている。三四郎はそれで言う事がなくなつた。女は最後に、

「どうも失礼いたしました」と句切りをつけたので、三四郎は、

「いいえ」と答えた。すこぶる簡潔である。二人は桜の枝を見ていた。梢に虫の食つたような葉がわずかばかり残つてゐる。引つ越しの荷物はなかなかやつてこない。

「なにか先生に御用なんですか」

三四郎は突然こう聞いた。高い桜の枯枝を余念なくながめていた女は、急に三四郎の方を振りむく。あらびつくりした、ひどいわ、という顔つきであつた。しかし答は尋常である。

「私もお手伝いに頼まれました」

三四郎はこの時はじめて気がついて見ると、女の腰をかけている椽に砂がいっぱいいたまつている。

「砂でたいへんだ。着物がよごれます」

「ええ」と左右をながめたぎりである。腰を上げない。しばらく椽を見回した目を、三四郎に移すやいなや、「掃除はもうなすったんですか」と聞いた。笑っている。三四郎はその笑いのなかに慣れやすいあるものを認めた。

「まだやらんです」

「お手伝いをして、いつしょに始めましょうか」

三四郎はすぐに立つた。女は動かない。腰をかけたまま、箒やはたきのありかを聞く。

三四郎は、ただてぶらで來たのだから、どこにもない、なんなら通りへ行つて買つてこようかと聞くと、それはむだだから、隣で借りるほうがよからうと言う。三四郎はすぐ隣へ行つた。さつそく簫とはたきと、それからバケツと雑巾まで借りて急いで帰つてくると、女は依然としてもとの所へ腰をかけて、高い桜の枝をながめていた。

「あつて……」と一口言つただけである。

三四郎は簫を肩へかついで、バケツを右の手へぶら下げて「ええありました」とあたりまえのことを答えた。

女は白足袋のまま砂だらけの橡側へ上がつた。歩くと細い足のあとができる。袂から白い前だれを出して帯の上から締めた。その前だれの縁がレースのようにかがつてある。掃除をするにはもつたいいほどきれいな色である。女は簫を取つた。

「いつたんはき出しましよう」と言いながら、袖の裏から右の手を出して、ぶらつく袂を肩の上へかついだ。きれいな手が二の腕まで出た。かついだ袂の端からは美しい襦袢の袖が見える。茫然として立つていた三四郎は、突然バケツを鳴らして勝手口へ回つた。

美禰子が掃くあとを、三四郎が雑巾をかける。三四郎が畳をたたくあいだに、美禰子が障子をはたく。どうかこうか掃除がひととおり済んだ時は一人ともだいぶ親しくなつた。

三四郎がバケツの水を取り換えに台所へ行つたあとで、美禰子がはたきと箒を持つて一段階へ上がつた。

「ちよつと来てください」と上から三四郎を呼ぶ。

「なんですか」とバケツをさげた三四郎が梯子段はしごだんの下から言う。女は暗い所に立つてゐる。前だけがまつ白だ。三四郎はバケツをさげたまま一、三段上がつた。女はじつとしている。三四郎はまた二段上がつた。薄暗い所で美禰子の顔と三四郎の顔が一尺ばかりの距離に來た。

「なんですか」

「なんだか暗くつてわからないの」

「なぜ」

「なぜでも」

三四郎は追窮する気がなくなつた。美禰子のそばをすり抜けて上へ出た。バケツを暗い椽側へ置いて戸を開ける。なるほど桟さんのぐあいがよくわからない。そのうち美禰子も上がつてきた。

「まだあからなくつて」

美禰子は反対の側へ行つた。

「こっちです」

三四郎は黙つて、美禰子の方へ近寄つた。もう少しで美禰子の手に自分の手が触れる所で、バケツに蹴つまずいた。大きな音がする。ようやくのことで戸を一枚あけると、強い日がまともにさし込んだ。まぼしいくらいである。二人は顔を見合させて思わず笑い出した。

裏の窓もあける。窓には竹の格子こうしがついている。家主やぬしの庭が見える。鶏を飼つている。美禰子は例のごとく掃き出した。三四郎は四つ這ばになつて、あとから拭ふき出した。美禰子は箒を両手で持つたまま、三四郎の姿を見て、

「まあ」と言つた。

やがて、箒を畳の上へなげ出して、裏の窓の所へ行つて、立つたまま外面そとをながめている。そのうち三四郎も拭き終つた。ぬれ雑巾をバケツの中へぼちやんとたたきこんで、美禰子のそばへ来て並んだ。

「何を見ているんです」

「あててござらんなさい」

「鶴とりですか」

「いいえ」

「あの大きな木ですか」

「いいえ」

「じゃ何を見ているんです。ぼくにはわからない」

「私さつきからあの白い雲を見ておりますの」

なるほど白い雲が大きな空を渡つてゐる。空はかぎりなく晴れて、どこまでも青く澄んでいる上を、綿の光つたような濃い雲がしきりに飛んで行く。風の力が激しいと見えて、雲の端が吹き散らされると、青い地がすいて見えるほどに薄くなる。あるいは吹き散らされながら、塊まつて、白く柔かな針を集めたように、ささくれだつ。美禰子はそのかたまりを指さして言つた。

「駝鳥だちようの襟卷ボーアに似てゐるでしよう」

三四郎はボーアという言葉を知らなかつた。それで知らないと言つた。美禰子はまた、「まあ」と言つたが、すぐ丁寧にボーアを説明してくれた。その時三四郎は、「うん、あれなら知つとる」と言つた。そうして、あの白い雲はみんな雪の粉で、下から

見てあのくらいに動く以上は、颶風ぐふう以上の速度でなくてはならないと、このあいだ野々宮さんから聞いたとおりを教えた。美禰子は、「あらそう」と言いながら三四郎を見たが、

「雪じやつまらないわね」と否定を許さぬような調子であつた。

「なぜです」

「なぜでも、雲は雲でなくつちやいけないわ。こうして遠くからながめているかいがないじやありませんか」

「そうですか」

「そうですかつて、あなたは雪でもかまわなくつて」

「あなたは高い所を見るのが好きのようですな」

「ええ」

美禰子は竹の格子の中から、まだ空をながめている。白い雲はあとから、あとから、飛んで来る。

ところへ遠くから荷車の音が聞こえる。今静かな横町を曲がつて、こっちへ近づいて来るのが地響きでよくわかる。三四郎は「来た」と言つた。美禰子は「早いのね」と言つた

ままじつとしている。車の音の動くのが、白い雲の動くのに関係でもあるように耳をすましている。車はおちついた秋の中を容赦なく近づいて来る。やがて門の前へ来てとまつた。三四郎は美禰子を捨てて二階を駆け降りた。三四郎が玄関へ出るのと、与次郎が門をはいるのとが同時同刻であつた。

「早いな」と与次郎がまず声をかけた。

「おそいな」と三四郎が答えた。美禰子とは反対である。

「おそいつて、荷物を一度に出したんだからしかたがない。それにぼく一人だから。あとは下女と車屋ばかりでどうすることもできない」

「先生は」

「先生は学校」

二人が話を始めているうちに、車屋が荷物をおろし始めた。下女もはいって来た。台所の方を下女と車屋に頼んで、与次郎と三四郎は書物を西洋間へ入れる。書物がたくさんある。並べるのは一仕事だ。

「里見のお嬢さんは、まだ来ていいなか」「来ている」

「どこに」

「二階にいる」

「三階に何をしている」

「何をしているか、二階にいる」

「冗談じゃない」

与次郎は本を一冊持つたまま、廊下伝いに梯子段の下まで行つて、例のとおりの声で、「里見さん、里見さん。書物をかたづけるから、ちょっと手伝つてください」と言う。

「ただ今参ります」

筈とはたきを持つて、美禰子は静かに降りて來た。

「何をしていたんです」と下から与次郎がせきたてるよう聞く。

「二階のお掃除」と上から返事があつた。

降りるのを待ちかねて、与次郎は美禰子を西洋間の戸口の所へ連れて來た。しゃりき車力のところした書物がいっぱい積んである。三四郎がその中へ、向こうむきにしゃがんで、しきりに何か読み始めている。

「まあたいへんね。これをどうするの」と美禰子が言つた時、三四郎はしゃがみながら振

り返つた。にやにや笑つている。

「たいへんもなにもありやしない。これを部屋の中へ入れて、片づけるんです。いまに先生も帰つて来て手伝うはずだからわけはない。——君、しゃがんで本なんぞ読みだしちゃ困る。あとで借りていつてゆつくり読むがいい」と与次郎が小言を言う。

美禰子と三四郎が戸口で本をそろえると、それを与次郎が受け取つて部屋の中の書棚へ並べるという役割ができた。

「そう乱暴に、出しちゃ困る。まだこの続きが一冊あるはずだ」と与次郎が青い平たい本を振り回す。

「だつてないんですけどもの」

「なにないことがあるものか」

「あつた、あつた」と三四郎が言う。

「どら、拝見」と美禰子が顔を寄せて来る。「ヒストリー・オフ・インテレクチュアル・デベロップメント。あらあつたのね」

「あらあつたもないもんだ。早くお出しなさい」

三人は約三十分ばかり根気に働いた。しまいにはさすがの与次郎もあまりせつつかなく

なつた。見ると書棚の方を向いてあぐらをかいて黙つてゐる。美禰子は三四郎の肩をちょっと突つついた。三四郎は笑いながら、

「おいどうした」と聞く。

「うん。先生もまあ、こんなにいりもしない本を集めてどうする気かなあ。まつたく人泣かせだ。いまこれを売つて株でも買つておくともうかるんだが、しかたがない」と嘆息したまま、やはり壁を向いてあぐらをかいている。

三四郎と美禰子は顔を見合させて笑つた。肝心かんじんの主脳が動かないでの、二人とも書物をそろえるのを控えている。三四郎は詩の本をひねくり出した。美禰子は大きな画帖ひざを膝の上に開いた。勝手の方では臨時雇いの車夫と下女がしきりに論判している。たいへん騒々しい。

「ちよつと御覧なさい」と美禰子が小さな声で言う。三四郎は及び腰になつて、画帖の上へ顔を出した。美禰子の髪あたまで香水のにおいがする。

絵はマーメイドの図である。裸体の女の腰から下が魚になつて、魚の胴がぐるりと腰を回つて、向こう側に尾だけ出でている。女は長い髪を櫛くしですきながら、すき余つたのを手に受けながら、こつちを向いている。背景は広い海である。

「人魚」
「人魚」

頭をすりつけた二人は同じ事をささやいた。この時あぐらをかいていた与次郎がなんと思つたか、

「なんだ、何を見ているんだ」と言いながら廊下へ出て来た。三人は首をあつめて画帖を一枚ごとに繰つていった。いろいろな批評が出る。みんないいかげんである。

ところへ広田先生がフロックコートで天長節の式から帰つてきた、三人は挨拶をする時に画帖を伏せてしまつた。先生が書物だけはやく片づけようというので、三人がまた根気になり始めた。今度は主人公がいるので、そう油を売ることもできなかつたとみえて、一時間後には、どうか、こうか廊下の書物が書棚の中へ詰まつてしまつた。四人は立ち並んできれいに片づいた書物を一応ながめた。

「あとの整理はあしただ」と与次郎が言つた。これでがまんさいといわぬばかりである。
「だいぶお集めになりましたね」と美禰子が言う。

「先生これだけみんなお読みになつたですか」と最後に三四郎が聞いた。三四郎はじつさい参考のため、この事実を確かめておく必要があつたとみえる。

「みんな読めるものか、佐々木なら読むかもしれないが」

与次郎は頭をかいでいる。三四郎はまじめになつて、じつはこのあいだから大学の図書館で、少しづつ本を借りて読むが、どんな本を借りても、必ずだれか目を通している。試しにアフラ・ベーンという人の小説を借りてみたが、やっぱりだれか読んだあとがあるのでは、読書範囲の際限が知りたくなつたから聞いてみたと言う。

「アフラ・ベーンならぼくも読んだ」

広田先生のこの一言には三四郎も驚いた。

「驚いたな。先生はなんでも人の読まないものを読む癖がある」と与次郎が言つた。

広田は笑つて座敷の方へ行く。着物を着換えるためだろう。美禰子もついて出た。あとで与次郎が三四郎にこう言つた。

「あれだから偉大な暗闇だ。なんでも読んでいる。けれどもちつとも光らない。もう少し流行るものを探んで、もう少し出しやばってくれるといいがな」

与次郎の言葉はけつして冷評ではなかつた。三四郎は黙つて本箱をながめていた。すると座敷から美禰子の声が聞こえた。

「（う）ちそうをあげるからお二人ともいらつしやい」

二人が書斎から廊下伝いに、座敷へ来てみると、座敷のまん中に美禰子の持つて来た籃^{バスケット}が据えてある。蓋^{ふた}が取つてある。中にサンドイツチがたくさんはいつている。美禰子はそのそばにすわつて、籃の中のものを小皿へ取り分けている。与次郎と美禰子の問答が始まつた。

「よく忘れずに持つてきましたね」

「だつて、わざわざ御注文ですもの」

「その籃も買つてきたんですか」

「いいえ」

「家にあつたんですか」

「ええ」

「たいへん大きなものですね。車夫でも連れてきたんですか。ついでに、少しのあいだ置いて働くせればいいのに」

「車夫はきょうは使いに出ました。女だつてこのくらいなものは持てますわ」

「あなただから持つんです。ほかのお嬢さんなら、まあやめますね」

「そうでしようか。それなら私もやめればよかつた」

美穂子は食い物を小皿へ取りながら、与次郎と応対している。言葉に少しもよどみがない。しかもゆつくりおちついている。ほとんど与次郎の顔を見ないくらいである。三四郎は敬服した。

台所から下女が茶を持つて来る。籃を取り巻いた連中は、サンドイッチを食い出した。少しのあいだは静かであつたが、思い出したように与次郎がまた広田先生に話しかけた。「先生、ついでだからちよつと聞いておきますがさつきのなんとかベーンですね」

「アフラ・ベーンか」

「ぜんたいなんです、そのアフラ・ベーンというのは」

「英國の けいしゅう 閨秀作家だ。十七世紀の」

「十七世紀は古すぎる。雑誌の材料にやなりませんね」

「古い。しかし職業として小説に従事したはじめての女だから、それで有名だ」

「有名じや困るな。もう少し伺つておこう。どんなものを書いたんですか」

「ぼくはオルノーコという小説を読んだだけだが、小川さん、そういう名の小説が全集のうちにあつたでしょう」

三四郎はきれいに忘れている。先生にその梗概こうがいを聞いてみると、オルノーコという黒

ん坊の王族が英國の船長にだまされて、奴隸どれいに売られて、非常に難儀をする事が書いてあるのだそうだ。しかもこれは作家の実見譚じつけんだんだとして後世に信ぜられているという話である。

「おもしろいな。里見さん、どうです、一つオルノーコでも書いちやあ」と与次郎はまた美禰子の方へ向かつた。

「書いてもよござんすけれども、私にはそんな実見譚がないんですもの」

「黒ん坊の主人公が必要なら、その小川君でもいいじゃありませんか。九州の男で色が黒いから」

「口の悪い」と美禰子は三四郎を弁護するように言つたが、すぐあとから三四郎の方を向いて、

「書いてもよくつて」と聞いた。その目を見た時に、三四郎はけさ籃をさげて、折戸からあらわれた瞬間の女を思い出した。おのずから酔つた心地こゝちである。けれども酔つてすくんだ心地である。どうぞ願いますなどとはむろん言いえなかつた。

広田先生は例によつて煙草をのみ出した。与次郎はこれを評して鼻から哲学の煙の吐くと言つた。なるほど煙の出方が少し違う。悠然ゆうぜんとして太くたくましい棒が二本穴を抜け

て来る。与次郎はその煙柱えんちゅうをながめて、半分背を唐紙からかみに持たしたまま黙つている。

三四郎の目はぼんやり庭の上にある。引つ越しではない。まるで小集のていに見える。談話もしたがつて気楽なものである。ただ美禰子だけが広田先生の陰で、先生がさつき脱ぎ捨てた洋服を畳み始めた。先生に和服を着せたのも美禰子の所為しょいとみえる。

「今のオルノーコの話だが、君はそそつかしいから間違えるといけないからついでに言うがね」と先生の煙がちよつととぎれた。

「へえ、伺つておきます」と与次郎が几帳面きぢょうめんに言う。

「あの小説が出てから、サザーンという人がその話を脚本に仕組んだのが別にある。やはり同じ名でね。それをいつしょにしちゃいけない」

「へえ、いつしょにしやしません」

洋服を畳んでいた美禰子はちよつと与次郎の顔を見た。

「その脚本のなかに有名な句ばあがある。Pity's 『ピチーズ』 akin 『アキン』 to 『ツー』 love 『ラツブ』という句ばあだが……」それだけでまた哲学の煙をさかんに吹き出した。

「日本にもありそうな句ばあですな」と今度は三四郎が言つた。ほかの者も、みんなありそうだと言いだした。けれどもだれにも思い出せない。ではひとつ訳してみたらよからうとい

うことになつて、四人がいろいろに試みたがいつこうにまとまらない。しまいに与次郎が、「これは、どうしても俗謡でいかなくつちゃだめですよ。句の趣が俗謡だもの」と与次郎らしい意見を提出した。

そこで三人がぜんぜん翻訳権を与次郎に委任することにした。与次郎はしばらく考えていたが、

「少しむりですがね、こういうなどうでしよう。かあいそุดたほれたつてことよ」

「いかん、いかん、下劣の極だ」と先生がたちまち苦い顔をした。その言い方がいかにも下劣らしいので、三四郎と美禰子は一度に笑い出した。この笑い声がまだやまないうちに、庭の木戸がぎいと開いて、野々宮さんがはいって来た。

「もうたいてい片づいたんですか」と言いながら、野々宮さんは櫻側の正面の所まで来て、部屋の中にいる四人をのぞくように見渡した。

「まだ片づきませんよ」と与次郎がさつそく言う。

「少し手伝つていただきましょか」と美禰子が与次郎に調子を合わせた。野々宮さんはにやにや笑いながら、

「だいぶにぎやかなようですね。何かおもしろい事がありますか」と言つて、ぐるりと後

向きに椽側へ腰をかけた。

「今ぼくが翻訳をして先生にしかられたところです」

「翻訳を？ どんな翻訳ですか」

「なにつまらない——かわいそうだたほれたつてことよというんです」「くえ」と言つた野々宮君は椽側で筋かいに向き直つた。「いつたいそりやなんですか。ぼくにや意味がわからない」

「だれだつてわからんさ」と今度は先生が言つた。

「いや、少し言葉をつめすぎたから——あたりまえにのばすと、こうです。かあいそうだとはほれたということよ」

「アハハハ。そうしてその原文はなんというのです」

「Pity's 『ピチーズ』 akin 『アキン』 to 『ツー』 love 『ラツブ』」と美禰子が繰り返した。美しいきれいな発音であつた。

野々宮さんは、椽側から立つて、一、二歩庭の方へ歩き出したが、やがてまたぐるりと向き直つて、部屋を正面に留まつた。

「なるほどうまい訳だ」

三四郎は野々宮君の態度と視線とを注意せずにいられなかつた。

美穂子は台所へ立つて、茶碗を洗つて、新しい茶をついで、櫻側の端まで持つて出る。「お茶を」と言つたまま、そこへすわつた。「よし子さんは、どうなすつて」と聞く。

「ええ、からだのほうはもう回復しましたが」とまた腰をかけて茶を飲む。それから、少し先生の方へ向いた。

「先生、せつかく大久保へ越したが、またこっちの方へ出なければならぬようになりそうです」

「なぜ」

「妹が学校へ行き帰りに、戸山の原とやまを通るのがいやだと言ひだしましてね。それにぼくが夜実験をやるものですから、おそくまで待つてゐるのがさむしくつていけないんだそうです。もつとも今のうちには母がいるからかまいませんが、もう少しして、母が国へ帰ると、あとは下女だけになるのですからね。臆病おくびょう者の二人ではとうていしんぼうしきれないのでしよう。——じつにやつかいだな」と冗談半分の嘆声をもらしたが、「どうです里見さん、あなたの所へでも食客いそくろうに置いてくれませんか」と美穂子の顔を見た。

「いつでも置いてあげますわ」

「どっちです。宗八さんのほうをですか、よし子さんのほうをですか」と与次郎が口を出した。

「どちらでも」

三四郎だけ黙っていた。広田先生は少しまじめになつて、

「そうして君はどうする気なんだ」

「妹の始末さえつけば、当分下宿してもいいです。それでなければ、またどこかへ引っ越さなければならない。いつそ学校の寄宿舎へでも入れようかと思うんですがね。なにしろ子供だから、ぼくがしじゅう行けるか、向こうがしじゅう来られる所でないと困るんです」

「それじゃ里見さんの所に限る」と与次郎がまた注意を与えた。広田さんは与次郎を相手にしない様子で、

「ぼくの所の二階へ置いてやつてもいいが、なにしろ佐々木のような者がいるから」と言う。

「先生、二階へはぜひ佐々木を置いてやつてください」と与次郎自身が依頼した。野々宮君は笑いながら、

「まあ、どうかしましよう。——身長ばかり大きくてばかだからじつに弱る。あれで団

子坂の菊人形が見たいから、連れていけなんて言うんだから」

「連れていくておあげなさればいいのに。私だつて見たいわ」

「じゃいつしょに行きましょうか」

「ええぜひ。小川さんもいらつしやい」

「ええ行きましょう」

「佐々木さんも」

「菊人形は御免だ。菊人形を見るくらいなら活動写真を見に行きます」

「菊人形はいいよ」と今度は広田先生が言いだした。「あれほどに人工的なものはおそらく外国にもないだろう。人工的によくこんなものをこしらえたというところを見ておく必要がある。あれが普通の人間にできていたら、おそらく团子坂へ行く者は一人もあるまい。普通の人間なら、どこの家でも四、五人は必ずいる。团子坂へ出かけるにはあたらない」「先生一流の論理だ」と与次郎が評した。

「昔教場で教わる時にも、よくあれでやられたものだ」と野々宮君が言つた。

「じゃ先生もいらつしやい」と美禰子が最後に言う。先生は黙つてゐる。みんな笑いだし
た。

台所からばあさんが「どなたかちよいと」と言う。与次郎は「おい」とすぐ立つた。三四郎はやはりすわっていた。

「どれぼくも失礼しようか」と野々宮さんが腰を上げる。

「あらもうお帰り。ずいぶんね」と美禰子が言う。

「このあいだのものはもう少し待ってくれたまえ」と広田先生が言うのを、「ええ、ようござんす」と受けて、野々宮さんが庭から出ていった。その影が折戸の外へ隠れると、美禰子は急に思い出したように「そうそう」と言いながら、庭先に脱いであつた下駄をはいて、野々宮のあとを追いかけた。表で何か話している。

三四郎は黙つてすわっていた。

五

門をはいると、このあいだの萩が、人の丈より高く茂つて、株の根に黒い影ができる。この黒い影が地の上をはつて、奥の方へゆくと、見えなくなる。葉と葉の重なる裏まで上つてくるようにも思われる。それほど表には濃い日があたつている。手洗水のそばに

南天なんてんがある。これも普通よりは背が高い。三本寄つてひょろひょろしている。葉は便所の窓の上にある。

萩と南天の間に橡側が少し見える。橡側は南天を基点としてはすに向こうへ走っている。萩の影になつた所は、いちばん遠いはずになる。それで萩はいちばん手前にある。よし子はこの萩の影にいた。橡側に腰をかけて。

三四郎は萩とすれすれに立つた。よし子は橡から腰を上げた。足は平たい石の上にある。三四郎はいまさらその背の高いのに驚いた。

「おはいりなさい」

依然として三四郎を待ち設けたような言葉づかいである。三四郎は病院の当時を思い出した。萩を通り越して橡鼻まで來た。

「お掛けなさい」

三四郎は靴をはいている。命のめいごとく腰をかけた。よし子は座蒲團ざぶとんを取つて來た。

「お敷きなさい」

三四郎は蒲団を敷いた。門をはいつてから、三四郎はまだ一言も口を開かない。この単純な少女はただ自分の思うとおりを三四郎に言うが、三四郎からは毫ごうも返事を求めてい

ないようと思われる。三四郎は無邪気なる女王の前に出た心持ちがした。命を聞くだけである。お世辞を使う必要がない。一言でも先方の意を迎えるような事をいえば、急に卑しくなる、唾おしの奴隸のごとく、さきのいうがままにふるまつていれば愉快である。三四郎は子供のようなよし子から子供扱いにされながら、少しもわが自尊心を傷つけたとは感じえなかつた。

「兄ですか」とよし子はその次に聞いた。

野々宮を尋ねて来たわけでもない。尋ねないわけでもない。なんで來たか三四郎にもじつはわからないのである。

「野々宮さんはまだ学校ですか」

「ええ、いつでも夜おそらくでなくつちや帰りません」

これは三四郎も知つてゐる事である。三四郎は挨拶あいさつに窮した。見ると椽側に絵の具箱がある。かきかけた水彩がある。

「絵をお習いですか」

「ええ、好きだからかきます」

「先生はだれですか」

「先生に習うほどじょうずじやないの」

「ちよつと拝見」

「これ？ これまだできていの」とかきかけを三四郎の方へ出す。なるほど自分のうちの庭がかきかけてある。空と、前の家の柿の木と、はいり口の萩だけができる。なかにも柿の木ははなはだ赤くできている。

「なかなかうまい」と三四郎が絵をながめながら言う。

「これが？」とよし子は少し驚いた。本当に驚いたのである。三四郎のようなわざとらしい調子は少しもなかつた。

三四郎はいまさら自分の言葉を冗談にすることもできず、またまじめにすることもできなくなつた。どつちにしても、よし子から軽蔑されそうである。三四郎は絵をながめながら、腹の中で赤面した。

椽側から座敷を見回すと、しんと静かである。茶の間はむろん、台所にも人はいないようである。

「おつかさんはもうお国へお帰りになつたんですか」

「まだ帰りません。近いうちに立つはずですけれど」

「今、いらっしゃるんですか」

「今ちょっと買物に出ました」

「あなたが里見さんの所へお移りになるというのは本当ですか」

「どうして」

「どうしてって——このあいだ広田先生の所でそんな話がありましたから」「まだきまりません。ことによると、そうなるかもしれませんけれど」

三四郎は少しく要領を得た。

「野々宮さんはもとから里見さんと御懇意なんですか」

「ええ。お友だちなの」

男と女の友だちという意味かしらと思ったが、なんだかおかしい。けれども三四郎はそれ以上を聞きたくなかった。

「広田先生は野々宮さんのもとの先生だそうですね」

「ええ」

話は「ええ」でつかえた。

「あなたは里見さんの所へいらっしゃるほうがいいんですか」

「私？ そうね。でも美禰子さんのお兄^{あに}いさんにお気の毒ですか？」

「美禰子さんのにいさんがあるんですか」

「ええ。うちの兄と同年の卒業なんです」

「やっぱり理学士ですか」

「いいえ、科は違います。法学士です。そのまた上の兄さんが広田先生のお友だちだったのですけれども、早くおなくなりになつて、今では恭^{きょう}助^{すけ}さんだけなんです」

「おとつさんやおつかさんは」

よし子は少し笑いながら、

「ないわ」と言つた。美禰子の父母の存在を想像するのは滑稽^{こつけい}であるといわぬばかりである。よほど早く死んだものとみえる。よし子の記憶にはまるでないのだろう。

「そういう関係で美禰子さんは広田先生の家^{うち}_{でいり}へ出入^{うり}をなさるんですね」

「ええ。死んだにいさんが広田先生とはたいへん仲良しだったそうです。それに美禰子さんは英語が好きだから、時々英語を習いにいらつしやるんでしよう」

「こちらへも来ますか」

よし子はいつのまにか、水彩画の続きを書き始めた。三四郎がそばにいるのがまるで苦

になつていない。それでいて、よく返事をする。

「美禰子さん？」と聞きながら、柿の木の下にある藁葺屋根に影をつけたが、

「少し黒すぎますね」と絵を三四郎の前へ出した。三四郎は今度は正直に、

「ええ、少し黒すぎます」と答えた。すると、よし子は画筆に水を含ませて、黒い所を洗いながら、

「いらつしやいますわ」とようやく三四郎に返事をした。

「たびたび？」

「ええたびたび」とよし子は依然として画紙に向かっている。三四郎は、よし子が絵のつづきをかきだしてから、問答がたいへん楽になつた。

しばらく無言のまま、絵のなかをのぞいていると、よし子はたんねんに藁葺屋根の黒い影を洗つていたが、あまり水が多すぎたのと、筆の使い方がなかなか不慣れなので、黒いものがかつてに四方へ浮き出して、せつかく赤くできた柿が、陰干の渋柿のような色になつた。よし子は画筆の手を休めて、両手を伸ばして、首をあとへ引いて、ワットマンとなるべく遠くからながめていたが、しまいに、小さな声で、「もう駄目ね」と言う。じつさいだめなのだから、しかたがない。三四郎は氣の毒になつ

た。

「もうおよしなさい。そうして、また新しくおかきなさい」

よし子は顔を絵に向けたまま、しりめに三四郎を見た。大きな潤いのある目である。三四郎はますます気の毒になつた。すると女が急に笑いだした。

「ばかね。二時間ばかり損をして」と言いながら、せつかくかいた水彩の上へ、横縦に二、三本太い棒を引いて、絵の具箱の蓋をぱたりと伏せた。

「もうよしましよう。座敷へおはいりなさい。お茶をあげますから」と言いながら、自分は上へ上がつた。三四郎は靴を脱ぐのが面倒なので、やはり椽側に腰をかけていた。腹の中では、今になつて、茶をやるという女を非常におもしろいと思っていた。三四郎に度はずれの女をおもしろがるつもりは少しもないのだが、突然お茶をあげますといわれた時には、一種の愉快を感じぬわけにゆかなかつたのである。その感じは、どうしても異性に近づいて得られる感じではなかつた。

茶の間で話し声がする。下女はいたに違いない。やがて襖を開いて、茶器を持って、よし子があらわれた。その顔を正面から見た時に、三四郎はまた、女性中のもつとも女性的な顔であると思つた。

よし子は茶をくんで椽側へ出して、自分は座敷の畳の上へすわった。三四郎はもう帰ろうと思つていたが、この女のそばにいると、帰らないでもかまわないような気がする。病院ではかつてこの女の顔をながめすぎて、少し赤面させたために、さつそく引き取つたが、きようはなんともない。茶を出したのをさいわいに椽側と座敷でまた談話を始めた。いろいろ話しているうちに、よし子は三四郎に妙な事を聞きだした。それは、自分の兄の野々宮が好きかいやかという質問であった。ちよつと聞くとまるでがんぜない子供の言いそうな事であるが、よし子の意味はもう少し深いところにあつた。研究心の強い学問好きの人は、万事を研究する気で見るから、情愛が薄くなるわけである。人情で物をみると、すべてが好ききらいの二つになる。研究する気なぞが起ころるものではない。自分の兄は理学者だものだから、自分を研究していけない。自分を研究すればするほど、自分を可愛がる度は減るのだから、妹に対しても不親切になる。けれども、あのくらい研究好きの兄が、このくらい自分を可愛がつてくれるのだから、それを思うと、兄は日本じゅうでいちばんいい人に違ひないという結論であつた。

三四郎はこの説を聞いて、大いにもつともなような、またどこか抜けているような気がしたが、さてどこが抜けているんだか、頭がぼんやりして、ちよつとわからなかつた。そ

れでおもてむきこの説に対してはべつだんの批評を加えなかつた。ただ腹の中で、これしきの女の言う事を、明瞭に批評しえないのは、男児としてふがいないことだと、いたく赤面した。同時に、東京の女学生はけつしてばかにできないものだということを悟つた。

三四郎はよし子に対する敬愛の念をいだいて下宿へ帰つた。はがきが来ている。「明日午後一時ごろから菊人形を見にまいりますから、広田先生の家までいらつしやい。美穂子」その字が、野々宮さんのポツケツトから半分はみ出していた封筒の上書に似ているので、三四郎は何べんも読み直してみた。

翌日は日曜である。三四郎は昼飯を済ましてすぐ西片町へ來た。新調の制服を着て、光つた靴をはいている。静かな横町を広田先生の前まで来ると、人声がする。

先生の家は門をはいると、左手がすぐ庭で、木戸をあければ玄関へからずに、座敷の椽へ出られる。三四郎は要目垣のかなめがきのあいだに見える棧をはずそうとして、ふと、庭の中の話し声を耳にした。話は野々宮と美穂子のあいだに起こりつつある。

「そんな事をすれば、地面の上へ落ちて死ぬばかりだ」これは男の声である。
「死んでも、そのほうがいいと思います」これは女の答である。

「もつともそんな無謀な人間は、高い所から落ちて死ぬだけの価値は十分ある」

「残酷な事をおつしやる」

三四郎はここで木戸を開けた。庭のまん中に立っていた会話の主は二人ともこつちを見た。野々宮はただ「やあ」と平凡に言つて、頭をうなずかせただけである。頭に新しい茶のなかおればう中折帽なかおりばうをかぶつている。美禰子は、すぐ、

「はがきはいつごろ着きましたか」と聞いた。二人の今までやつていた会話はこれで中絶した。

椽側には主人が洋服を着て腰をかけて、相変らず哲学を吹いている。これは西洋の雑誌を手にしていた。そばによし子がいる。両手をうしろに突いて、からだを空に持たせながら、伸ばした足にはいた厚い草履ぞうりをながめていた。——三四郎はみんなから待ち受けられていたとみえる。

主人は雑誌をなげ出した。

「では行くかな。どうどう引っぱり出された」

「御苦労さま」と野々宮さんが言つた。女は二人で顔を見合わせて、ひとに知れないような笑をもらした。庭を出る時、女が二人つづいた。

「背が高いのね」と美禰子があとから言つた。

「のっぽ」とよし子が一言答えた。門の側で並んだ時、「だから、なりたけ草履をはくの」と弁解をした。三四郎もつづいて庭を出ようとすると、二階の障子ががらりと開いた。与次郎が手欄てすりの所まで出てきた。

「行くのか」と聞く。

「うん、君は」

「行かない。菊細工なんぞ見てなんになるものか。ばかだな」

「いつしょに行こう。うち家にいたつてしようがないじゃないか」

「今論文を書いている。大論文を書いている。なかなかそれどころじゃない」

三四郎はあきれ返つたような笑い方をして、四人のあとを追いかけた。四人は細い横町を三分の二ほど広い通りの方へ遠ざかつたところである。この一団の影を高い空気の下に認めた時、三四郎は自分の今の生活が熊本当時のそれよりも、ずつと意味の深いものになりつつあると感じた。かつて考えた三個の世界のうちで、第二第三の世界はまさにこの一団の影で代表されている。影の半分は薄黒い。半分は花野はなののごとく明らかである。そして三四郎の頭のなかではこの両方が渾然として調和されている。のみならず、自分もいつもまにか、しぜんとこの経緯よこたてのなかに織りこまれている。ただそのうちのどこかにお

ちつかないところがある。それが不安である。歩きながら考えると、いまさき庭のうちで、野々宮と美禰子が話していた。談柄だんぺいが近因である。三四郎はこの不安の念を駆るために、二人の談柄をふたたびほじくり出してみたい気がした。

四人はすでに曲がり角へ来た。四人とも足をとめて、振り返った。美禰子は額に手をかざしている。

三四郎は一分からぬうちに追いついた。追いついてもだれもなんとも言わない。ただ歩きだしだけである。しばらくすると、美禰子が、

「野々宮さんは、理学者だから、なおそんな事をおつしやるんでしょう」と言いだした。話の続きらしい。

「なに理学をやらなくつても同じ事です。高く飛ぼうというには、飛べるだけの装置を考えたうえでなければできないにきまっている。頭のほうかしらがさきに要るに違いないじやありませんか」

「そんなに高く飛びたくない人は、それで我慢するかもしません」

「我慢しなければ、死ぬばかりですもの」

「そうすると安全で地面の上に立っているのがいちばんいい事になりますね。なんだかつ

まらないようだ」

野々宮さんは返事をやめて、広田先生の方を向いたが、「女には詩人が多いですね」と笑いながら言つた。すると広田先生が、「男子の弊はかえつて純粹の詩人になりきれないところにあるだろう」と妙な挨拶あいさつをした。野々宮さんはそれで黙つた。よし子と美禰子は何かお互おひがいいの話を始める。三四郎はようやく質問の機会を得た。

「今のは何のお話なんですか」

「なに空中飛行機の事です」と野々宮さんが無造作に言つた。三四郎は落語のおちを聞くような気がした。

それからはべつだんの会話も出なかつた。また長い会話ができかねるほど、人がぞろぞろ歩く所へ來た。おおがんのん大觀音の前に乞食こじきがいる。額を地にすりつけて、大きな声をのべつにして、哀願をたくましゆうしている。時々顔を上げると、額のところだけが砂で白くなつてゐる。だれも顧みるものがない。五人も平氣で行き過ぎた。五、六間も來た時に、広田先生が急に振り向いて三四郎に聞いた。

「君あの乞食に錢をやりましたか」

「いいえ」と三四郎があとを見ると、例の乞食は、白い額の下で両手を合わせて、相変らず大きな声を出している。

「やる気にならないわね」とよし子がすぐに言つた。

「なぜ」とよし子の兄は妹を見た。たしなめるほどに強い言葉でもなかつた。野々宮の顔つきはむしろ冷静である。

「ああしじゅうせつついていぢや、せつつきばえがしないからだめですよ」と美穂子が評した。

「いえ場所が悪いからだ」と今度は広田先生が言つた。「あまり人通りが多すぎるからいけない。山の上の寂しい所で、ああいう男に会つたら、だれでもやる気になるんだよ」

「その代り一日待つっていても、だれも通らないかもしねい」と野々宮はくすくす笑い出した。

三四郎は四人の乞食に対する批評を聞いて、自分が今日まで養成した徳義上の観念を幾分か傷つけられるような気がした。けれども自分が乞食の前を通る時、一銭も投げてやる了見が起こらなかつたのみならず、実をいえば、むしろ不愉快な感じが募つた事実を反省してみると、自分よりもこれら四人のほうがかえつて己に誠であると思いついた。また

彼らは己に誠でありうるほどな広い天地の下に呼吸する都会人種であるということを悟つた。

行くに従つて人が多くなる。しばらくすると一人の迷子まいごに出会つた。七つばかりの女の子である。泣きながら、人の袖そでの下を右へ行つたり、左へ行つたりうろうろしている。おばあさん、おばあさんとむやみに言う。これには往来の人もみんな心を動かしていいようにもえる。立ちどまる者もある。かあいそうだという者もある。しかしだれも手をつけない。子供はすべての人の注意と同情をひきつつ、しきりに泣きさけんでおばあさんを捜している。不可思議の現象である。

「これも場所が悪いせいじゃないか」と野々宮君が子供の影を見送りながら言つた。

「いまに巡回が始末をつけるにきまつてゐるから、みんな責任をのがれるんだね」と広田先生が説明した。

「わたしのそばまで来れば交番まで送つてやるわ」とよし子が言う。

「じゃ、追つかけて行つて、連れて行くがいい」と兄が注意した。

「追つかけるのはいや」

「なぜ」

「なぜつて——こんなにおおぜいの人がいるんですもの。私にかぎつたことはないわ」

「やっぱり責任をのがれるんだ」と広田が言う。

「やつぱり場所が悪いんだ」と野々宮が言う。男は一人で笑つた。団子坂の上まで来ると、交番の前へ人が黒山のようにたかつてゐる。迷子はどうとう巡査の手に渡つたのである。

「もう安心だいじょうぶです」と美禰子が、よし子を顧みて言つた。よし子は「まあよかつた」という。

坂の上から見ると、坂は曲がつてゐる。刀の切つ先のようである。幅はむろん狭い。右側の二階建が左側の高い小屋の前を半分さえぎつてゐる。そのうしろにはまた高い幟のぼりが何本となく立ててある。人は急に谷底へ落ち込むように思われる。その落ち込むものが、はい上がるものと入り乱れて、道いつぱいにふさがつてゐるから、谷の底にあたる所は幅をつくして異様に動く。見ていて目が疲れるほど不規則にうごめいてゐる。広田先生はこの坂の上に立つて、

「これはたいへんだ」と、さも帰りたそうである。四人はあとから先生を押すようにして、谷へはいつた。その谷が途中からだらだらと向こうへ回り込む所に、右にも左にも、大きな葭簍掛けよしづがけの小屋を、狭い両側から高く構えたので、空さえ存外窮屈にみえる。往来は暗

くなるまで込み合っている。そのなかで木戸番ができるだけ大きな声を出す。「人間から出る声じやない。菊人形から出る声だ」と広田先生が評した。それほど彼らの声は尋常を離れている。

一行は左の小屋へはいった。そ我が討入りうちいりがある。五郎も十郎も頼朝よりとももみな平等に菊の着物を着ている。ただし顔や手足はことごとく木彫りである。その次は雪が降っている。若い女が癱しゃくを起こしている。これも人形の心に、菊をいちめんにはわせて、花と葉が平に隙間なく衣装の恰好かっぽうとなるよう作つたものである。

よし子は余念なくながめている。広田先生と野々宮はしきりに話を始めた。菊の培養法が違うとかなんとかいうところで、三四郎は、ほかの見物に隔てられて、一間ばかり離れた。美禰子はもう三四郎より先にいる。見物は、がいして町家ちょうかの者である。教育のありそうな者はきわめて少ない。美禰子はその間に立つて振り返つた。首を延ばして、野々宮のいる方を見た。野々宮は右の手を竹の手欄てすりから出して、菊の根をさしながら、何か熱心に説明している。美禰子はまた向こうをむいた。見物に押されて、さつさと出口の方へ行く。三四郎は群集ぐんしゅうを押し分けながら、三人を棄てて、美禰子のあとを追つて行つた。

ようやくのことと、美禰子のそばまで来て、

「里見さん」と呼んだ時に、美禰子は青竹の手欄に手を突いて、心持ち首をもどして、三四郎を見た。なんとも言わない。手欄のなかは養老の滝である。丸い顔の、腰に斧をさした男が、瓢箪を持つて、滝壺のそばにかがんでいる。三四郎が美禰子の顔を見た時には、青竹のなかに何があるかほとんど気がつかなかつた。

「どうかしましたか」と思わず言つた。美禰子はまだなんとも答えない。黒い目をさもものうそうに三四郎の額の上にすえた。その時三四郎は美禰子の二重瞼に不可思議なある意味を認めた。その意味のうちには、靈の疲れがある。肉のゆるみがある。苦痛に近き訴えがある。三四郎は、美禰子の答を予期しつつある今の場合を忘れて、この眸ひとみとこの瞼まぶた間にすべてを遺却した。すると、美禰子は言つた。

「もう出ましよう」

眸と瞼の距離が次第に近づくようにみえた。近づくに従つて三四郎の心には女のために出なければならない気がきざしてきた。それが頂点に達したころ、女は首を投げるように向こうをむいた。手を青竹の手欄から離して、出口の方へ歩いて行く。三四郎はすぐあとからついて出た。

二人が表で並んだ時、美禰子はうつむいて右の手を額に当てた。周囲は人が渦を巻いて

いる。三四郎は女の耳へ口を寄せた。

「どうかしましたか」

女は人込みの中を谷中の方へ歩きだした。三四郎もむろんいつしょに歩きだした。半町ばかり来た時、女は人の中で留まつた。

「ここはどこでしよう」

「こつちへ行くと谷中の天王寺てんのうじの方へ出てします。帰り道とはまるで反対です」

「そう。私心持ちが悪くつて……」

三四郎は往来のまん中で助けなき苦痛を感じた。立つて考えていた。

「どこか静かな所はないでしようか」と女が聞いた。

谷中と千駄木が谷で出会うと、いちばん低い所に小川が流れている。この小川を沿うて、町を左へ切れるとすぐ野に出る。川はまっすぐに北へ通かよつていて、三四郎は東京へ来てから何べんもこの小川の向こう側を歩いて、何べんこつち側を歩いたかよく覚えていて。美禰子の立つている所は、この小川が、ちょうど谷中の町を横切つて根津ねづへ抜ける石橋のそばである。

「もう一町ばかり歩けますか」と美禰子に聞いてみた。

「歩きます」

二人はすぐ石橋を渡つて、左へ折れた。人の家の路地のような所を十間ほど行き尽して、門の手前から板橋をこちら側へ渡り返して、しばらく川の縁を上ると、もう人は通らない。広い野である。

三四郎はこの静かな秋のなかへ出たら、急にしゃべり出した。

「どうです、ぐあいは。頭痛でもしますか。あんまり人がおおぜい、いたせいでしょう。あの人形を見ている連中のうちにはずいぶん下等なのがいたようだから——なにか失礼でもしましたか」

女は黙っている。やがて川の流れから目を上げて、三四郎を見た。二重瞼にはつきりと張りがあつた。三四郎はその目つきでなれば安心した。

「ありがとうございます。だいぶよくなりました」と言う。

「休みましようか」

「ええ」

「もう少し歩けますか」

「ええ」

「歩ければ、もう少しお歩きなさい。ここはきたない。あそこまで行くと、ちょうど休むにいい場所があるから」

「ええ」

一丁ばかり来た。また橋がある。一尺に足らない古板を造作なく渡した上を、三四郎は大またに歩いた。女もつづいて通つた。待ち合わせた三四郎の目には、女の足が常の大地を踏むと同じように軽くみえた。この女はすなおな足をまつすぐに前へ運ぶ。わざと女らしく甘えた歩き方をしない。したがつてむやみにこつちから手を貸すわけにはいかない。

向こうに藁屋根がある。屋根の下が一面に赤い。近寄つて見ると、唐辛子を干したのであった。女はこの赤いものが、唐辛子であると見分けのつくところまで来て留まつた。

「美しいこと」と言いながら、草の上に腰をおろした。草は小川の縁にわずかな幅をはえているのみである。それすら夏の半ばのように青くはない。美禰子は派手な着物のよごれるのをまるで苦にしていない。

「もう少し歩けませんか」と三四郎は立ちながら、促すように言つてみた。

「ありがとうございます。これでたくさん」

「やっぱり心持ちが悪いですか」

「あんまり疲れたから」

三四郎もとうとうきたない草の上にすわった。美禰子と三四郎の間は四尺ばかり離れている。二人の足の下には小さな川が流れている。秋になつて水が落ちたから浅い。角の出た石の上に鶴^{セキレイ}が一羽とまつたくらいである。三四郎は水の中をながめていた。水が次第に濁つてくる。見ると川上で百姓が大根を洗つていた。美禰子の視線は遠くの向こうにある。向こうは広い畠で、畠の先が森で森の上が空になる。空の色がだんだん変つてくる。ただ単調に澄んでいたもののうちに、色が幾通りもできてきた。透き通る藍^{あい}の地^じが消えるように次第に薄くなる。その上に白い雲が鈍く重なりかかる。重なつたものが溶けて流れ出す。どこで地が尽きて、どこで雲が始まるかわからないほどにものうい上を、心持ち黄な色がふうと一面にかかっている。

「空の色が濁りました」と美禰子が言つた。

三四郎は流れから目を放して、上を見た。こういう空の模様を見たのははじめてではない。けれども空が濁つたという言葉を聞いたのはこの時がはじめてである。気がついて見ると、濁つたと形容するよりほかに形容のしかたのない色であつた。三四郎が何か答えようとするまえに、女はまた言つた。

「重いこと。^{マーブル}
大理石のよう見えます」

美禰子は二重瞼を細くして高い所をながめていた。それから、その細くなつたままの目を静かに三四郎の方に向けた。そうして、

「大理石のように見えるでしよう」と聞いた。三四郎は、

「ええ、大理石のように見えます」と答えるよりほかはなかつた。女はそれで黙つた。しばらくしてから、今度は三四郎が言つた。

「こういう空の下にいると、心が重くなるが気は軽くなる」

「どういうわけですか」と美禰子が問い合わせ返した。

三四郎には、どういうわけもなかつた。返事はせずに、またこう言つた。

「安心して夢を見ているような空模様だ」

「動くようで、なかなか動きませんね」と美禰子はまた遠くの雲をながめだした。

菊人形で客を呼ぶ声が、おりおり二人のすわつている所まで聞こえる。

「ずいぶん大きな声ね」

「朝から晩までああいう声を出しているんでしょうか。えらいもんだな」と言つたが、三

四郎は急に置き去りにした三人のことを思い出した。何か言おうとしているうちに、美禰

子は答えた。

「商売ですもの、ちょうど大観音の乞食と同じ事なんですよ」

「場所が悪くはないですか」

三四郎は珍しく冗談を言つて、そうして一人でおもしろそうに笑つた。乞食について下した広田の言葉をよほどおかしく受けたからである。

「広田先生は、よく、ああいう事をおっしゃるかたなんですよ」ときわめて軽くひとりごとのように言つたあとで、急に調子をかえて、

「こういう所に、こうしてすわつていたら、大丈夫及第よ」と比較的活発につけ加えた。

そうして、今度は自分のほうでおもしろそうに笑つた。

「なるほど野々宮さんの言つたとおり、いつまで待つっていてもだれも通りそうもありませんね」

「ちようどいいじやありませんか」と早口に言つたが、あとで「おもらいをしない乞食なんだから」と結んだ。これは前句の解釈のためにつけたようにな聞こえた。

ところへ知らん人が突然あらわれた。唐辛子の干してある家の陰から出て、いつのまにか川を向こうへ渡つたものとみえる。二人のすわつている方へだんだん近づいて来る。洋

服を着て鬚をはやして、年輩からいうと広田先生くらいの男である。この男が二人の前へ来た時、顔をぐるりと向け直して、正面から三四郎と美禰子をにらめつけた。その目の中には明らかに憎惡の色がある。三四郎はじつとすわっていにくいほどな束縛を感じた。男はやがて行き過ぎた。その後影を見送りながら、三四郎は、

「広田先生や野々宮さんはさぞあとでぼくらを捜したでしょう」とはじめて気がついたようになに言つた。美禰子はむしろ冷やかである。

「なに大丈夫よ。大きな迷子ですもの」

「迷子だから捜したでしょう」と三四郎はやはり前説を主張した。すると美禰子は、なお冷やかな調子で、

「責任をのがれたがる人だから、ちようどいいでしよう」

「だれが？ 広田先生がですか」

美禰子は答えなかつた。

「野々宮さんがですか」

美禰子はやつぱり答えなかつた。

「もう気分はよくなりましたか。よくなつたら、そろそろ帰りましょうか」

美禰子は三四郎を見た。三四郎は上げかけた腰をまた草の上におろした。その時三四郎はこの女にはとてもかなわないような気がどこかでした。同時に自分の腹を見抜かれたという自覚に伴なう一種の屈辱をかすかに感じた。

「迷子」

女は三四郎を見たままでこの一言^{ひとこと}を繰り返した。三四郎は答えなかつた。

「迷子の英訳を知つていらしつて」

三四郎は知るとも、知らぬとも言いえぬほどに、この問を予期していなかつた。
「教えてあげましょうか」

「ええ」

「迷^{ストレイ・シープ}える子——わかつて？」

三四郎はこういう場合になると挨拶^{あいさつ}に困る男である。咄嗟^{とつさ}の機が過ぎて、頭が冷やかに働きだした時、過去を顧みて、ああ言えよかつた、こうすればよかつたと後悔する。といって、この後悔を予期して、むりに応急の返事を、さもしそんらしく得意に吐き散らすほどに軽薄ではなかつた。だからただ黙つている。そして黙つてることがいかにも半間^{はんま}であると自覚している。

ストレイ・シープ
迷える子という言葉はわかつたようでもある。またわからないようでもある。わかるわからないはこの言葉の意味よりも、むしろこの言葉を使つた女の意味である。三四郎はいたずらに女の顔をながめて黙つていた。すると女は急にまじめになつた。

「私そんなに生意気に見えますか」

その調子には弁解の心持つちがある。三四郎は意外の感に打たれた。今まで霧の中にいた。霧が晴れればいいと思っていた。この言葉で霧が晴れた。明瞭な女が出て來た。晴れたのが恨めしい氣がする。

三四郎は美禰子の態度をもとのようない——二人の頭の上に広がつてゐる、澄むとも濁るとも片づかない空のようない——意味のあるものにしたかつた。けれども、それは女のきげんを取るための挨拶ぐらいで戻せるものではないと思つた。女は卒然として、「じゃ、もう帰りましよう」と言つた。厭味のある言い方ではなかつた。ただ三四郎につて自分は興味のないものとあきらめるように静かな口調であった。

空はまた変つてきた。風が遠くから吹いてくる。広い畠の上には日が限つて、見ていると、寒いほど寂しい。草からあがる地息でからだは冷えていた。気がつけば、こんな所によく今までべつとりすわつていられたものだと思う。自分一人なら、とうにどこかへ行つ

てしまつたに違ひない。美禰子も——美禰子はこんな所へすわる女かもしれない。「少し寒くなつたようですから、とにかく立ちましょう。冷えると毒だ。しかし気分はもうすっかり直りましたか」

「ええ、すっかり直りました」と明らかに答えたが、にわかに立ち上がつた。立ち上がる時、小さな声で、ひとりごとのように、

「迷ストレイ・シープえる子」と長く引っ張つて言つた。三四郎はむろん答えなかつた。

美禰子は、さつき洋服を着た男の出て来た方角をさして、道があるなら、あの唐辛子のそばを通つて行きたいという。二人は、その見当へ歩いて行つた。藁わらぶき葺ふきのうしろにははして細い三尺ほどの道があつた。その道を半分ほど来た所で三四郎は聞いた。

「よし子さんは、あなたの所へ来ることにきまつたんですか」

女は片かた頬ほおで笑つた。そうして問い合わせ返した。

「なぜお聞きになるの」

三四郎が何か言おうとすると、足の前に泥ぬかるみ濱はんがあつた。四尺ばかりの所、土がへこんで水がびたびたにたまつてゐる。そのまん中に足掛かりのためにてごろな石を置いた者がいる。三四郎は石の助けをからずに、すぐに向こうへ飛んだ。そうして美禰子を振り返つ

て見た。美穂子は右の足を泥濘のまん中にある石の上へ乗せた。石のすわりがあまりよくな。足へ力を入れて、肩をゆすって調子を取っている。三四郎はこちら側から手を出した。

「おつかまりなさい」

「いえ大丈夫」と女は笑つてゐる。手を出しているあいだは、調子を取るだけで渡らない。三四郎は手を引つ込めた。すると美穂子は石の上にある右の足に、からだの重みを託して、左の足でひらりとこちら側へ渡つた。あまりに下駄をよごすまいと念を入れすぎたため、力が余つて、腰が浮いた。のめりそうに胸が前へ出る。その勢で美穂子の両手が三四郎の両腕の上へ落ちた。

「迷^{ストレイ・シープ}える子」と美穂子が口の内で言つた。三四郎はその呼吸^{いき}を感じることができた。

六

ベルが鳴つて、講師は教室から出ていった。三四郎はインキの着いたペンを振つて、ノートを伏せようとした。すると隣にいた与次郎が声をかけた。

「おいちよつと借せ。書き落としたところがある」

与次郎は三四郎のノートを引き寄せて上からのぞきこんだ。stray 《ストレイ》 sheep 《シープ》という字がむやみに書いてある。

「なんだこれは」

「講義を筆記するのがいやになつたから、いたずらを書いていた」

「そう不勉強ではいかん。カントの超絶唯心論がバークレーの超絶实在論にどうだとか言つたな」

「どうだとか言つた」

「聞いていなかつたのか」

「いいや」

「まるで stray 《ストレイ》 sheep 《シープ》だ。しかたがない」

与次郎は自分のノートをかかえて立ち上がった。机の前を離れながら、三四郎に、「おいちよつと来い」と言う。三四郎は与次郎について教室を出た。梯子段はしじだんを降りて、玄関前の草原へ来た。大きな桜がある。二人はその下にすわつた。

こは夏の初めになると苜蓿うまいりやしが一面にはえる。与次郎が入学願書を持つて事務へ来

た時に、この桜の下に二人の学生が寝転んでいた。その一人が一人に向かつて、口答試験を都々逸どどいつで負けておいてくれると、いくらでも歌つてみせるがなと言ふと、一人が小声で、粹なさばきの博士の前で、恋の試験がしてみたいと歌つていた。その時から与次郎はこの桜の木の下が好きになつて、なにか事があると、三四郎をここへ引つ張り出す。三四郎はその歴史を与次郎から聞いた時に、なるほど与次郎は俗謡で pity's 『ピチーズ』 love 『ラツブ』を訳すはずだと思つた。きょうはしかし与次郎がことのほかまじめである。草の上にあぐらをかくやいなや、懐中から、文芸時評という雑誌を出してあけたままの一ページさかを逆に三四郎の方へ向けた。

「どうだ」と言う。見ると標題に大きな活字で「偉大なる暗闇くらやみ」とある。下には零余子れいよしと雅号を使つてゐる。偉大なる暗闇とは与次郎がいつでも広田先生を評する語で、三四郎も二、三度聞かされたものである。しかし零余子はまったく知らん名である。どうだと言われた時に、三四郎は、返事をする前提としてひとまず与次郎の顔を見た。すると与次郎はなんにも言わずにその扁平な顔を前へ出して、右の人さし指の先で、自分の鼻の頭を押えてじつとしている。向こうに立つていた一人の学生が、この様子を見てにやにや笑い出した。それに気がついた与次郎はようやく指を鼻から放した。

「おれが書いたんだ」と言う。三四郎はなるほどそうかと悟つた。

「ぼくらが菊細工を見にゆく時書いていたのは、これが」

「いや、ありや、たつた二、三日まえじゃないか。そうはやく活版になつてたまるものか。
あれは来月出る。これは、ずっと前に書いたものだ。何を書いたものか標題でわかるだろ
う」

「広田先生の事か」

「うん。こうして輿論ようろんを喚起しておいてね。そうして、先生が大学へはいれる下地したじを作る

……」

「その雑誌はそんなに勢力のある雑誌か」

三四郎は雑誌の名前さえ知らなかつた。

「いや無勢力だから、じつは困る」と与次郎は答えた。三四郎は微笑わらわざるをえなかつた。

「何部ぐらい売れるのか」

与次郎は何部売れるとも言わない。

「まあいいさ。書かんよりはましだ」と弁解している。

だんだん聞いてみると、与次郎は從来からこの雑誌に関係があつて、ひまさえあればほ

とんど毎号筆を執つてゐるが、その代り雅名も毎号変えるから、一、三の同人のほか、だれも知らないんだと言う。なるほどそうだろう。三四郎は今はじめて与次郎と文壇との交渉を聞いたくらいのものである。しかし与次郎がなんのために、遊戯に等しい匿名いとくめいを用いて、彼のいわゆる大論文をひそかに公けにしつつあるか、そこが三四郎にはわからなかつた。

いくぶんか小遣い取りのつもりで、やつてゐる仕事かと不遠慮に尋ねた時、与次郎は目を丸くした。

「君は九州のいなかから出たばかりだから、中央文壇の趨勢すうせいを知らないために、そんなのん気なことをいうのだろう。今の思想界の中心にいて、その動搖のはげしいありさまを目撃しながら、考えのある者が知らん顔をしていられるものか。じつさい今日の文権はまったく我々青年の手にあるんだから、一言いちごんでも半句でも進んで言えるだけ言わなければ損じやないか。文壇は急転直下の勢いでめざましい革命を受けている。すべてがことごとく動いて、新氣運に向かつてゆくんだから、取り残されちゃたいへんだ。進んで自分からこの氣運をこしらえ上げなくちや、生きてる甲斐かいはない。文学文学つて安っぽいようにいふが、そりや大学なんかで聞く文学のことだ。新しい我々のいわゆる文学は、人生そのも

のの大反射だ。文学の新氣運は日本全社會の活動に影響しなければならない。また現にしつつある。彼らが昼寝をして夢を見ている間に、いつか影響しつつある。恐ろしいものだ。

……」

三四郎は黙つて聞いていた。少しほらのような気がする。しかしほらでも与次郎はなかなか熱心に吹いている。すくなくとも当人だけは至極まじめらしくみえる。三四郎はだいぶ動かされた。

「そういう精神でやつているのか。では君は原稿料なんか、どうでもかまわんのだつたな」「いや、原稿料は取るよ。取れるだけ取る。しかし雑誌が売れないからなかなかよこさない。どうかして、もう少し売れる工夫くふうをしないといけない。何かいい趣向はないだろうか」と今度は三四郎に相談をかけた。話が急に實際問題に落ちてしまった。三四郎は妙な心持ちがする。与次郎は平氣である。ベルが激しく鳴りだした。

「ともかくこの雑誌を一部君にやるから読んでみてくれ。偉大なる暗闇という題がおもしろいだろう。この題なら人が驚くにきまつてゐる。——驚かせないと読まないからだめだ」二人は玄関を上がって、教室へはいつて、机に着いた。やがて先生が来る。二人とも筆記を始めた。三四郎は「偉大なる暗闇」が気にかかるので、ノートのそばに文芸時評をあ

けたまま、筆記のあいまいに先生に知れないように読みだした。先生はさいわい近眼である。のみならず自己の講義のうちにぜんぜん埋没している。三四郎の不心得にはまるで関係しない。三四郎はいい気になつて、こつちを筆記したり、あつちを読んだりしていつたが、もともと二人でする事を一人で兼ねるむりな芸だからしまいには「偉大なる暗闇」も講義の筆記も双方ともに関係がわからなくなつた。ただ与次郎の文章が一句だけはつきり頭にはいつた。

「自然は宝石を作るに幾年の星霜を費やしたか。またこの宝石が採掘の運にあうまでに、幾年の星霜を静かに輝やいていたか」という句である。その他は不得要領に終つた。その代りこの時間には *stray* 『ストレイ』 *sheep* 『シープ』 という字を一つも書かずにすんだ。

講義が終るやいなや、与次郎は三四郎に向かつて、

「どうだ」と聞いた。じつはまだよく読まないと答えると、時間の経済を知らない男だといつて非難した。ぜひ読めという。三四郎は家へ帰つてぜひ読むと約束した。やがて昼になつた。二人は連れ立つて門を出た。

「今晚出席するだろうな」と与次郎が西片町へはいる横町の角で立ち留まつた。今夜は同級生の懇親会がある。三四郎は忘れていた。ようやく思い出して、行くつもりだと答える

と、与次郎は、

「出るまえにちょっと誘つてくれ。君に話す事がある」と言う。耳のうしろへペン軸をはさんでいる。なんとなく得意である。三四郎は承知した。

下宿へ帰つて、湯にはいつて、いい心持ちになつて上がつてみると、机の上に絵はがきがある。小川をかいて、草をもじやもじやはやして、その縁に羊を二匹寝かして、その向こう側に大きな男がステッキを持つて立つているところを写したものである。男の顔がはなはだ獰猛どうもうにできている。まったく西洋の絵にある悪魔デビルを模したもので、念のため、わきにちゃんとデビルと仮名かなが振つてある。表は三四郎の宛名あてなの下に、迷える子と小さく書いたばかりである。三四郎は迷える子の何者かをすぐ悟つた。のみならず、はがきの裏に、迷える子を二匹書いて、その一匹をあんに自分に見立ててくれたのをはなはだうれしく思つた。迷える子のなかには、美禰子みのこのみではない、自分ももとよりはいつていたのである。それが美禰子のおもわくであつたとみえる。美禰子の使つた stray 《ストレイ》 sheep 《シープ》 の意味がこれでようやくはつきりした。

与次郎に約束した「偉大なる暗闇」を読もうと思うが、ちょっと読む気にならない。しきりに絵はがきをながめて考えた。イソップにもないような滑稽こつけい、趣味がある。無邪氣に

もみえる。洒落(しゃらく)でもある。そうしてすべての下に、三四郎の心を動かすあるものがある。手ぎわからいつても敬服の至りである。諸事明瞭にでき上(あが)がつてゐる。よし子のかいた柿の木の比ではない。——と三四郎には思われた。

しばらくしてから、三四郎はようやく「偉大なる暗闇」を読みだした。じつはふわふわして読みだしたのであるが、二、三ページくると、次第に釣り込まれるように気が乗つてきて、知らず知らずのまに、五ページ六ページと進んで、ついに二十七ページの長論文を苦もなく片づけた。最後の一匁を読了した時、はじめてこれでしまいだなと気がついた。目を雑誌から離して、ああ読んだなと思った。

しかし次の瞬間に、何を読んだかと考えてみると、なんにもない。おかしいくらいなんにもない。ただ大いにかつ盛んに読んだ気がする。三四郎は与次郎の技(ぎりょう)に感服した。

論文は現今の文学者の攻撃に始まつて、広田先生の賛辞に終つてゐる。ことに文学文科の西洋人を手痛く罵倒(ばとう)している。はやく適当の日本人を招聘(しょうへい)して、大学相当の講義を開かなくつては、学問の最高府たる大学も昔の寺子屋同然のありさまになつて、煉瓦石のミイラと選ぶところがないようになる。もつとも人がなければしかたがないが、ここに広田先生がある。先生は十年一日のごとく高等学校に教鞭(きょうべん)を執つて薄給と無名に甘ん

じている。しかし真正の学者である。学海の新氣運に貢献して、日本の活社会と交渉のあ
る教授を担任すべき人物である。——せんじ詰めるところだけであるが、そのこれだけが、
非常にもつともらしい 口吻と燐爛たる警句とによつて前後二十七ページに延長してい
る。

その中には「禿はげを自慢するものは老人に限る」とか「ヴィーナスは波から生まれたが、
活眼の士は大学から生まれない」とか「博士を学界の名産と心得るのは、海月くづきを田子の浦たごのうら
の名産と考えるようなものだ」とかいろいろおもしろい句がたくさんある。しかしそれよ
りほかになんにもない。ことに妙なのは、広田先生を偉大なる暗闇にたとえたついでに、
ほかの学者を丸行燈まるあんどうに比較して、たかだか方二尺ぐらいの所をぼんやり照らすにすぎな
いなどと、自分が広田から言われたとおりを書いている。そうして、丸行燈だの雁首な
どはすべて旧時代の遺物で我々青年にはまったく無用であると、このあいだのとおりわざ
わざ断わつてある。

よく考えてみると、与次郎の論文には活氣がある。いかにも自分一人で新日本を代表し
てゐるようであるから、読んでいるうちには、ついその気になる。けれどもまつたく実がな
い。根拠地のない戦争のようなものである。のみならず悪く解釈すると、政略的の意味も

あるかもしれない書き方である。いなか者の三四郎にはてつきりそことこと氣取ることはできなかつたが、ただ読んだあとで、自分の心を探つてみてどこかに不満足があるようになつた。また美禰子の絵はがきを取つて、二匹の羊と例の悪魔デビルをながめだした。するとこつちのほうは万事が快感である。この快感につれてまえの不満足はますます著しくなつた。それで論文の事はそれぎり考えなくなつた。美禰子に返事をやろうと思う。不幸にして絵がかけない。文章にしようと思う。文章ならこの絵はがきに匹敵する文句でなくつてはいけない。それは容易に思いつけない。ぐずぐずしているうちに四時過ぎになつた。

袴はかまを着けて、与次郎を誘いに、西片町へ行く。勝手口からはいると、茶の間に、広田先生が小さな食卓を控えて、晩食ばんめしを食つていた。そばに与次郎がかしこまつてお給仕をしている。

「先生どうですか」と聞いている。

先生は何か堅いものをほおばつたらしい。食卓の上を見ると、袂時計たもとほどな大きさの、赤くつて黒くつて、焦げたものが十ばかり皿さらの中に並んでいる。

三四郎は座に着いた。礼をする。先生は口をもがもがさせる。

「おい君も一つ食つてみろ」と与次郎が箸で皿のものをつまんで出した。てのひら掌へ載せてみる

と、馬鹿貝の剥身の干したのをつけ焼にしたのである。

「妙なものを食うな」と聞くと、

「妙なものつて、うまいぜ食つてみろ。これはね、ぼくがわざわざ先生にみやげに買つてきたんだ。先生はまだ、これを食つたことがないとおっしゃる」

「どこから」

「日本橋から」

三四郎はおかしくなつた。こういうところになると、さつきの論文の調子とは少し違う。

「先生、どうです」

「堅いね」

「堅いけれどもうまいでしよう。よくかまなくつちやいけません。かむと味が出る」

「味が出るまでかんでいちゃ、歯が疲れてしまう。なんでこんな古風なものを買つてきたものかな」

「いけませんか。こりや、ことによると先生にはだめかもしねい。里見の美穂子さんならいいだろう」

「なぜ」と三四郎が聞いた。

「ああおちついていりや味の出るまできつとかんでるに違いない」

「あの女はおちついていて、乱暴だ」と広田が言つた。

「ええ乱暴です。イブセンの女のようなどころがある」

「イブセンの女は露骨ろくつだが、あの女は心しんが乱暴だ。もつとも乱暴といつても、普通の乱暴とは意味が違うが。野々宮の妹のほうが、ちょっと見ると乱暴のようで、やつぱり女らしい。妙なものだね」

「里見のは乱暴の内訌ないこうですか」

三四郎は黙つて二人の批評を聞いていた。どつちの批評もふにおちない。乱暴という言葉が、どうして美禰子の上に使えるか、それからが第一不思議であつた。

与次郎はやがて、袴はきをはいて、改まつて出て来て、

「ちよつと行つてまいります」と言う。先生は黙つて茶を飲んでいる。二人は表へ出た。表はもう暗い。門を離れて二、三間来ると、三四郎はすぐ話しかけた。

「先生は里見のお嬢さんを乱暴だと言つたね」

「うん。先生はかつてな事をいう人だから、時と場合によるとなんでも言う。第一先生が女を評するのが滑稽だ。先生の女における知識はおそらく零だろう。ラツブをしたことが

ないものに女がわかるものか」

「先生はそれでいいとして、君は先生の説に賛成したじやないか」

「うん乱暴だと言つた。なぜ」

「どういうところを乱暴というのか」

「どういうところも、こういうところもありやしない。現代の女性^{によしょう}はみんな乱暴にきまつている。あの女ばかりじやない」

「君はあの人をイブセンの人物に似ていると言つたじやないか」

「言つた」

「イブセンのだれに似ているつもりなのか」

「だれつて……似ているよ」

三四郎はむろん納^{なつとく}得しない。しかし追窮もしない。黙つて一間ばかり歩いた。すると突然与次郎がこう言つた。

「イブセンの人物に似ているのは里見のお嬢さんばかりじやない。今の一般的の女性^{によしょう}はみんな似ている。女性ばかりじやない。いやしくも新しい空気に触れた男はみんなイブセンの人物に似たところがある。ただ男も女もイブセンのよう自由行動を取らないだけだ。

腹のなかではたいていかぶれている」

「ぼくはんまり、かぶれていない」

「いないとみずから欺いているのだ。——どんな社会だつて陥欠かんけつのない社会はあるまい」

「それはないだろう」

「ないとすれば、そのなかに生息している動物はどこかに不足を感じるわけだ。イブセンの人物は、現代社会制度の陥欠をもつとも明らかに感じたものだ。我々もおいおいああなつてくる」

「君はそう思うか」

「ぼくばかりじやない。具眼ぐがんの士はみんなそう思つている」

「君の家の先生もそんな考え方か」

「うちの先生？ 先生はわからない」

「だつて、さつき里見さんを評して、おちついていて乱暴だと言つたじやないか。それを解釈してみると、周囲に調和していくから、おちついていられるので、どこかに不足があるから、底のほうが乱暴だという意味じやないのか」

「なるほど。——先生は偉いところがあるよ。ああいうところへゆくとやつぱり偉い」

と与次郎は急に広田先生をほめだした。三四郎は美穂子の性格についてもう少し議論の歩を進めたかったのだが、与次郎のこの一言でまたくはぐらかされてしまつた。すると与次郎が言つた。

「じつはきょう君に用があると言つたのはね。——うん、それよりまえに、君あの偉大なる暗闇を読んだか。あれを読んでおかないとぼくの用事が頭へはいりにくい」

「きょうあれから家へ帰つて読んだ」

「どうだ」

「先生はなんと言つた」

「先生は読むものかね。まるで知りやしない」

「そうさな。おもしろいことはおもしろいが、——なんだか腹のたしにならないビールを飲んだようだね」

「それでたくさんだ。読んで景気がつきさえすればいい。だから匿名にしてある。どうせ今は準備時代だ。こうしておいて、ちょうどいい時分に、本名を名乗つて出る。——それはそれとして、さつきの用事を話しておこう」

与次郎の用事というのはこうである。——今夜の会で自分たちの科の不振の事をしきり

に慨嘆するから、三四郎もいつしょに慨嘆しなくてはいけないんだそうだ。不振は事実であるからほかの者も慨嘆するにきまつていてる。それから、おおぜいいつしょに挽回策を講ずることとなる。なにしろ適當な日本人を一人大学に入れるのが急務だと言い出す。みんなが賛成する。当然だから賛成するのはむろんだ。次にだれがよからうという相談に移る。その時広田先生の名を持ち出す。その時三四郎は与次郎に口を添えて極力先生を賞賛しろという話である。そうしないと、与次郎が広田の食客いそくろうだということを知つてゐる者が疑いを起こさないともかぎらない。自分は現に食客なんだから、どう思われてもかまわぬが、万一煩いわざらが広田先生に及ぶようではすまんことになる。もつともほかに同志が三、四人はいるから、大丈夫だが、一人でも味方は多いほうが便利だから、三四郎もなるべくしゃべるにしくはないとの意見である。さていよいよ衆議一決の曉は、総代を選んで学長の所へ行く、また総長の所へ行く。もつとも今夜中にそこまでは運ばないかもしない。また運ぶ必要もない。そのへんは臨機応変である。……

与次郎はすこぶる能弁である。惜しいことにその能弁がつるつるしてるので重みがない。あるところへゆくと冗談をまじめに講義していはるかと疑われる。けれども本来が性質たちのいい運動だから、三四郎もだいたいのうえにおいて賛成の意を表した。ただその方法が

少しく細工さいくに落ちておもしろくないと言つた。その時与次郎は往来のまん中へ立ち留まつた。二人はちようど森川町もりかわちょうの神社の鳥居とりいの前にいる。

「細工に落ちるというが、ぼくのやる事は自然の手順が狂わないようにあらかじめ人じんりょ力ちからで装置するだけだ。自然にそむいた没分曉ぼつぶんきょうの事を企てるのとは質たちが違う。細工だつてかまわん。細工が悪いのではない。悪い細工が悪いのだ」

三四郎はぐうの音ねも出なかつた。なんだか文句があるようだけれども、口へ出てこない。与次郎の言いぐさのうちで、自分がまだ考えていなかつた部分だけがはつきり頭へ映つてゐる。三四郎はむしろそのほうに感服した。

「それもそうだ」とすこぶる曖昧あいまいな返事をして、また肩を並べて歩きだした。正門をはいると、急に目の前が広くなる。大きな建物が所々に黒く立つてゐる。その屋根がはつきり尽きる所から明らかな空になる。星がおびただしく多い。

「美しい空だ」と三四郎が言つた。与次郎も空を見ながら、一間ばかり歩いた。突然、「おい、君」と三四郎を呼んだ。三四郎はまたさつきの話の続きかと思つて「なんだ」と答えた。

「君、こういう空を見てどんな感じを起こす」

与次郎に似合わぬことを言つた。無限とか永久とかいう持ち合わせの答はいくらでもあるが、そんなことを言うと与次郎に笑われると思つて三四郎は黙つていた。

「つまらんなあ我々は。あしたから、こんな運動をするのはもうやめにしようかしら。偉大なる暗闇を書いてもなんの役にも立ちそうにもない」

「なぜ急にそんな事を言いだしたのか」

「この空を見ると、そういう考えになる。——君、女にほれたことがあるか」

三四郎は即答ができなかつた。

「女は恐ろしいものだよ」と与次郎が言つた。

「恐ろしいものだ、ぼくも知つていい」と三四郎も言つた。すると与次郎が大きな声で笑いだした。静かな夜の中でもたいへん高く聞こえる。

「知りもしないくせに。知りもしないくせに」

三四郎は慄然としていた。

「あすもよい天氣だ。運動会はしあわせだ。きれいな女がたくさん来る。ぜひ見にくるがいい」

暗い中を二人は学生集会所の前まで来た。中には電燈が輝いている。

木造の廊下を回つて、部屋へはいると、そうそう來た者は、もうかたまつてゐる。そのかたまりが大きいのと小さいのと合わせて三つほどある。なかには無言で備え付けの雑誌や新聞を見ながら、わざと列を離れているものもある。話は方々に聞こえる。話の数はかたまりの数より多いように思われる。しかしわりあいにおちついて静かである。煙草の煙のほうが猛烈に立ち上る。

そのうちだんだん寄つて来る。黒い影が闇の中から吹きさらしの廊下の上へ、ぽつりと現われると、それが一人一人に明るくなつて、部屋の中へはいつて来る。時には五、六人続けて、明るくなることもある。が、やがて人数はほぼそろつた。

与次郎は、さつきから、煙草の煙の中を、しきりにあちこちと往来していた。行く所で何か小声に話している。三四郎は、そろそろ運動を始めたなと思つてながめていた。

しばらくすると幹事が大きな声で、みんなに席へ着けと言う。食卓はむろん前から用意ができていた。みんな、ごたごたに席へ着いた。順序もなにもない。食事は始まった。

三四郎は熊本で赤酒あかざけばかり飲んでいた。赤酒というのは、所でできる下等な酒である。熊本の学生はみんな赤酒を飲む。それが当然と心得ている。たまたま飲食店へ上がれば牛肉屋である。その牛肉屋の牛が馬肉かもしれないという嫌疑けんぎがある。学生は皿に盛つた肉

を手づかみにして、座敷の壁へたたきつける。落ちれば牛肉で、ひつつけば馬肉だという。まるで睨みたような事をしていた。その三四郎にとつて、こういう紳士的な学生親睦会は珍しい。喜んでナイフとフォークを動かしていた。そのあいだにはビールをさかんに飲んだ。

「学生集会所の料理はまずいですね」と三四郎に隣にすわった男が話しかけた。この男は頭を坊主に刈つて、金縁の眼鏡をかけたおとなしい学生であつた。

「そうですな」と三四郎は生返事をした。相手が与次郎なら、ぼくのようないなか者には非常にうまいと正直なところをいうはずであつたが、その正直がかえつて皮肉に聞こえると思つてやめにした。するとその男が、

「君はどこの高等学校ですか」と聞きだした。

「熊本です」

「熊本ですか。熊本にはぼくの従弟もいたが、ずいぶんひどい所だそうですね」

「野蛮な所です」

二人が話していると、向こうの方で、急に高い声がしだした。見ると与次郎が隣席の二、三人を相手に、しきりに何か弁じている。時々ダーテーフアブラと言う。なんの事だかわ

からない。しかし与次郎の相手は、この言葉を聞くたびに笑いだす。与次郎はますます得意になつて、データーフアブラ我々新時代の青年は……とやつてゐる。三四郎の筋向こうにすわつていた色の白い品のいい学生が、しばらくナイフの手を休めて、与次郎の連中をながめていたが、やがて笑いながら II 『イル』 a 『ア』 le 『ル』 diable 『ティアブル』 au 『オー』 corps 『コール』（悪魔が乗り移つてゐる）と冗談半分にフランス語を使つた。向こうの連中にはまつたく聞こえなかつたとみえて、この時ビールのコップが四つばかり一度に高く上がつた。得意そうに祝盃をあげてゐる。

「あの人はたいへんにぎやかな人ですね」と三四郎の隣の金縁眼鏡をかけた学生が言つた。
「ええ。よくしやべります」

「ぼくはいつか、あの人に淀見軒でライスカレーを『ごちそう』になつた。まるで知らないのに、突然来て、君淀見軒へ行こうつて、とうとう引つ張つていつて……」

学生はハハハと笑つた。三四郎は、淀見軒で与次郎からライスカレーを『ごちそう』になつたものは自分ばかりではないんだなど悟つた。

やがてコーヒーが出る。一人が椅子を離れて立つた。与次郎が激しく手をたたくと、ほかの者もたちまち調子を合わせた。

立つた者は、新しい黒の制服を着て、鼻の下にもう髭をはやしている。背がすこぶる高い。立つには恰好のよい男である。演説めいたことを始めた。

我々が今夜ここへ寄つて、懇親のために、一夕の歓をつくすのは、それ自身において愉快な事であるが、この懇親が単に社交上の意味ばかりでなく、それ以外に一種重要な影響を生じうると偶然ながら気がついたら自分は立ちたくなつた。この会合はビールに始まつてコーヒーに終つてゐる。まつたく普通の会合である。しかしこのビールを飲んでコーヒーを飲んだ四十人近くの人間は普通の人間ではない。しかもそのビールを飲み始めてからコーヒーを飲み終るまでのあいだに、すでに自己の運命の膨脹を自覚しえた。

政治の自由を説いたのは昔の事である。言論の自由を説いたのも過去の事である。自由とは単にこれらの表面にあらわれやすい事実のために専有されべき言葉ではない。我ら新時代の青年は偉大なる心の自由を説かねばならぬ時運に際会したと信ずる。

我々は古き日本の圧迫に堪ええぬ青年である。同時に新しき西洋の圧迫にも堪ええぬ青年であるということを、世間に発表せねばいられぬ状況のもとに生きている。新しき西洋の圧迫は社会の上においても文芸の上においても、我ら新時代の青年にとつては古き日本の圧迫と同じく、苦痛である。

我々は西洋の文芸を研究する者である。しかし研究はどこまでも研究である。その文芸のもとに屈従するのとは根本的に相違がある。我々は西洋の文芸にとらわれんがために、これを研究するのではない。とらわれたる心を解脱せしめんがために、これを研究しているのである。この方便に合せざる文芸はいかなる威圧のもとにしいらるるとも学ぶ事をえてせざるの自信と決心とを有している。

我々はこの自信と決心とを有するの点において普通の人間とは異なつてゐる。文芸は技術でもない、事務でもない。より多く人生の根本義に触れた社会の原動力である。我々はこの意味において文芸を研究し、この意味において如^{じよじよう}上^{こうせき}の自信と決心とを有し、この意味において今夕の会合に一般以上の重大なる影響を想見するのである。

社会は激しく動きつつある。社会の産物たる文芸もまた動きつつある。動く勢いに乘じて、我々の理想どおりに文芸を導くためには、零細なる個人を団結して、自己の運命を充実し発展し膨脹しなくてはならぬ。今夕のビールとコーヒーは、かかる隠れたる目的を、一步前に進めた点において、普通のビールとコーヒーよりも百倍以上の価ある尊きビールとコーヒーである。

演説の意味はざつとこんなものである。演説が済んだ時、席にあつた学生はことごとく

喝采した。三四郎はもつとも熱心なる喝采者の一人であつた。すると与次郎が突然立った。

「ダーテーフアブラ、シェクスピヤの使つた字数じかずが何万字だの、イブセンの白髪しらがの数が何千本だのと言つてたつてしかたがない。もつともそんなばかげた講義を聞いたつてとらわれる氣づかいはないから大丈夫だが、大学に氣の毒でいけない。どうしても新時代の青年を満足させるような人間を引っ張つて来なくつちや。西洋人じやだめだ。第一幅がきかない。……」

満堂はまたことごとく喝采した。そうしてことごとく笑つた。与次郎の隣にいた者が、「ダーテーフアブラのために祝盃をあげよう」と言いだした。さつき演説をした学生がすぐとに賛成した。あいにくビールがみな空からである。よろしいと言つて与次郎はすぐ台所の方へかけて行つた。給仕が酒を持つて出る。祝盃をあげるやいなや、

「もう一つ。今度は偉大なる暗闇のために」と言つた者がある。与次郎の周囲にいた者は声を合して、アハハと笑つた。与次郎は頭をかいている。

散会の時刻が来て、若い男がみな暗い夜の中に散つた時に、三四郎が与次郎に聞いた。「ダーテーフアブラとはなんの事だ」

「ギリシア語だ」

与次郎はそれよりほかに答えなかつた。三四郎もそれよりほかに聞かなかつた。二人は美しい空をいただいて家に帰つた。

あくる日は予想のごとく好天氣である。今年は例年より氣候がずっとゆるんでいる。ことさらきようは暖かい。三四郎は朝のうち湯に行つた。ひまじん 閑人の少ない世の中だから、午前はすこぶるすいている。三四郎は板の間にかけてある みつけし 三越呉服店の看板を見た。きれいな女が書いてある。その女の顔がどこか美禰子に似ている。よく見ると目つきが違つてゐる。歯並がわからない。美禰子の顔でもつとも三四郎を驚かしたもののは目つきと歯並である。与次郎の説によると、あの女は反つそっぽ 歯の氣味だから、ああしじゅう歯が出るんだそうだが、三四郎にはけつしてそうは思えない。……

三四郎は湯につかつてこんな事を考えていたので、からだのほうはあまり洗わずに出了。ゆうべから急に新時代の青年という自覺が強くなつたけれども、強いのは自覺だけで、からだのほうはもとのままである。休みになるとほかの者よりずっと樂にしている。きょうは昼から大学の陸上運動会を見に行く氣である。

三四郎は元來あまり運動好きではない。国にいるときうさぎが 兎狩りを二、三度したことがあ

る。それから高等学校の端艇^{ボートき}競漕^{きょうそう}の時に旗振りの役を勤めたことがある。その時青と赤と間違えて振つてたいへん苦情が出た。もつとも決勝の鉄砲を打つ係りの教授が鉄砲を打ちそくなつた。打つには打つたが音がしなかつた。これが三四郎のあわてた原因である。それより以来三四郎は運動会へ近づかなかつた。しかしきようは上京以来はじめての競技会だから、ぜひ行つてみるつもりである。与次郎もぜひ行つてみろと勧めた。与次郎の言うところによると競技より女のほうが見にゆく価値があるのだそうだ。女のうちには野々宮さんの妹がいるだろう。野々宮さんの妹といつしょに美禰子もいるだろう。そこへ行つて、こんちわとかなんとか挨拶^{あいさつ}をしてみたい。

昼過ぎになつたから出かけた。会場の入口は運動場の南のすみにある。大きな日の丸とイギリスの国旗が交差してある。日の丸は合点^{がてん}がいくが、イギリスの国旗はなんのためだかわからない。三四郎は日英同盟のせいかとも考えた。けれども日英同盟と大学の陸上運動会とは、どういう関係があるか、とんと見当がつかなかつた。

運動場は長方形の芝生^{しばふ}である。秋が深いので芝の色がだいぶさめている。競技を見る所は西側にある。後に大きな築山^{つきやま}をいっぱいに控えて、前は運動場の柵で仕切られた中へ、みんなを追い込むしきけになつていて。狭いわりに見物人が多いのではなはだ窮屈である。

さいわいひより日和がよいので寒くはない。しかし外套を着ている者がだいぶある。その代り傘をさして来た女もある。

三四郎が失望したのは婦人席が別になつていて、普通の人間には近寄れないことであつた。それからフロツクコートや何か着た偉そうな男がたくさん集つて、自分が存外幅のきかないようにみえたことであつた。新時代の青年をもつてみずからおる三四郎は少し小さくなつていた。それでも人ととの間から婦人席の方を見渡すことは忘れなかつた。横からだからよく見えないが、ここはさすがにきれいである。ことごとく着飾つている。そのうえ遠距離だから顔がみんな美しい。その代りだれが目立つて美しいということもない。ただ總体が總体として美しい。女が男を征服する色である。甲の女が乙の女に打ち勝つ色ではなかつた。そこで三四郎はまた失望した。しかし注意したら、どこかにいるだろうと思つて、よく見渡すと、はたして前列のいちばん柵に近い所に二人並んでいた。

三四郎は目のつけ所がようやくわかつたので、まず一段落告げたような氣で、安心していると、たちまち五、六人の男が目の前に飛んで出た。二百メートルの競走が済んだのである。決勝点は美禰子とよし子がすわつている真正面で、しかも鼻の先だから、二人を見つめていた三四郎の視線のうちにはぜひともこれらの壯漢がはいつてくる。五、六人はや

がて一二、三人にふえた。みんな呼吸いきをはずませてゐるようみえる。三四郎はこれらの学生の態度と自分の態度と比べてみて、その相違に驚いた。どうして、ああ無分別にかける気になれたものだろうと思つた。しかし婦人連はことごとく熱心に見てゐる。そのうちでも美禰子とよし子はもつとも熱心らしい。三四郎は自分も無分別にかけてみたくなつた。一番に到着した者が、紫の猿股さるまたをはいて婦人席の方を向いて立つてゐる。よく見ると昨夜の親睦会しんぱくかいで演説をした学生に似てゐる。ああ背が高くては一番になるはずである。計測係りが黒板に二十五秒七四と書いた。書き終つて、余りの白墨を向こうへなげて、こつちを向いたところを見ると野々宮さんがあつた。野々宮さんはいつになくまつ黒なフロツクを着て、胸に係り員の徽章きしょうをつけて、だいぶ人品がいい。ハンケチを出して、洋服の袖そでを二、三度はたいたが、やがて黒板を離れて、芝生の上を横切つて來た。ちょうど美禰子とよし子のすわつてゐるまん前の所へ出た。低い柵の向こう側から首を婦人席の中へ延ばして、何か言つてゐる。美禰子は立つた。野々宮さんの所まで歩いてゆく。柵の向こうとこちらで話を始めたように見える。美禰子は急に振り返つた。うれしそうな笑いにみちた顔である。三四郎は遠くから一生懸命に二人を見守つていた。すると、よし子が立つた。また柵のそばへ寄つて行く。二人が三人になつた。芝生の中では砲丸投げが始まつた。

砲丸投げほど力のいるものはなかろう。力のいるわりにこれほどおもしろくないものもたんとない。ただ文字どおり砲丸を投げるのである。芸でもなんでもない。野々宮さんは柵の所で、ちよつとこの様子を見て笑っていた。けれども見物のじやまになると悪いと思つたのであろう。柵を離れて芝生の中へ引き取つた。二人の女も、もとの席へ復した。砲丸は時々投げられている。第一どのくらい遠くまでゆくんだか、ほとんど三四郎にはわからぬ。三四郎はばかばかしくなつた。それでも我慢して立つていた。ようやくのことでは片がついたとみえて、野々宮さんはまた黒板へ十一メートル三八と書いた。

それからまた競走があつて、その次には柵投げが始まつた。三四郎はこの柵投げにいたつて、とうとう辛抱しんぱうがしきれなくなつた。運動会はめいめいかつてに開くべきものである。人に見せべきものではない。あんなものを熱心に見物する女はことごとく間違つているとまで思い込んで、会場を抜け出して、裏の築山の所まで來た。幕が張つてあつて通れない。引き返して砂利の敷いてある所を少し来ると、会場から逃げた人がちらほら歩いてゐる。盛装した婦人も見える。三四郎はまた右へ折れて、爪先上りつまさきのぼを丘のてつぺんまで來た。道はてつぺんで尽きてゐる。大きな石がある。三四郎はその上へ腰をかけて、高い崖がけの下にある池をながめた。下の運動会場でわあというおおぜいの声が

する。

三四郎はおよそ五分ばかり石へ腰をかけたままぼんやりしていた。やがてまた動く気になつたので腰を上げて、立ちながら靴の踵くつのかかとを向け直すと、丘の上りぎわの、薄く色づいた紅葉もみじの間に、さつきの女の影が見えた。並んで丘の裾すそを通る。

三四郎は上から、二人を見おろしていた。二人は枝の隙すきから明らかに日向ひなたへ出て来た。黙つていると、前を通り抜けてしまう。三四郎は声をかけようかと考えた。距離があり過ぎる。急いで二、三歩芝の上を裾の方へ降りた。降り出すといいぐあいに女の一人がこつちを向いてくれた。三四郎はそれでとまつた。じつはこちらからあまりざきげんをとりたくない。運動会が少し癪しゃくにさわっている。

「あんな所に……」とよし子が言いだした。驚いて笑つてゐる。この女はどんな陳腐ちんぶなものを見ても珍しそうな目つきをするように思われる。その代り、いかに珍しいものに出会つても、やはり待ち受けていたような目つきで迎えるかと想像される。だからこの女に会うと重苦しいところが少しもなくつて、しかもおちついた感じが起こる。三四郎は立つたまま、これはまつたく、この大きな、常にぬれている、黒い眸ひとみのおかげだと考えた。

美穂子も留まつた。三四郎を見た。しかしその目はこの時にかぎつて何物をも訴えてい

なかつた。まるで高い木をながめるような目であった。三四郎は心のうちで、火の消えたランプを見る心持ちがした。もとの所に立ちすくんでいる。美禰子も動かない。

「なぜ競技を御覧にならないの」とよし子が下から聞いた。

「今まで見ていたんですが、つまらないからやめて来たのです」

よし子は美禰子を顧みた。美禰子はやはり顔色を動かさない。三四郎は、

「それより、あなたがたこそなぜ出て来たんです。たいへん熱心に見ていたじやありませんか」と当てたような当てないようなことを大きな声で言つた。美禰子はこの時ははじめて、少し笑つた。三四郎にはその笑いの意味がよくわからない。二歩ばかりの方に近づいた。
「もう、^{うち}宅へ帰るんですか」

女は二人とも答えなかつた。三四郎はまた二歩ばかりの方へ近づいた。

「どこかへ行くんですか」

「ええ、ちよつと」と美禰子が小さな声で言う。よく聞こえない。三四郎はどうとう女の前まで降りて來た。しかしどこへ行くとも迫窮もしないで立つていて。会場の方で喝采の声が聞こえる。

「高飛びよ」とよし子が言う。「今度は何メートルになつたでしよう」

美禰子は軽く笑つたばかりである。三四郎も黙つてゐる。三四郎は高飛びに口を出すのをいさぎよしとしないつもりである。すると美禰子が聞いた。

「この上には何かおもしろいものがあつて？」

この上には石があつて、崖があるばかりである。おもしろいものがありようはずがない。「なんにもないです」

「そう」と疑いを残したように言つた。

「ちよいと上がつてみましようか」よし子が、快く言う。

「あなた、まだここを御存じないの」と相手の女はおちついて出た。

「いいからいらつしやいよ」

よし子は先へ上る。二人はまたついて行つた。よし子は足を芝生のはしまで出して、振り向きながら、

「絶壁ね」と大げさな言葉を使つた。「サツフオーデモ飛び込みそな所じやありませんか」

美禰子と三四郎は声を出して笑つた。そのくせ三四郎はサツフオーデモ飛び込みそな所から飛び込んだかよくわからなかつた。

「あなたも飛び込んで『らんない』と美禰子が言う。

「私？ 飛び込みましょうか。でもあんまり水がきたないわね」と言いながら、こつちへ帰つて来た。

やがて女二人のあいだに用談が始まつた。

「あなた、いらしつて」と美禰子が言う。

「ええ。あなたは」とよし子が言う。

「どうしましよう」

「どうでも。なんならわたしよつと行つてくるから、ここに待つていらつしやい」

「そうね」

なかなか片づかない。三四郎が聞いてみると、よし子が病院の看護婦のところへ、ついでだから、ちょっと礼に行つてくるんだと言う。美禰子はこの夏自分の親戚しんせきが入院していた時近づきになつた看護婦を尋ねれば尋ねるのだが、これは必要でもなんでもないのだそうだ。

よし子は、すなおに気の軽い女だから、しまいに、すぐ帰つて来ますと言い捨てて、早は足に一人丘を降りて行つた。止めるほどの必要もなし、いつしょに行くほどの事件でも

ないので、一人はしじん後にのこるわけになつた。二人の消極な態度からいえば、のこるというより、のこされたかたちにもなる。

三四郎はまた石に腰をかけた。女は立つてゐる。秋の日は鏡のように濁つた池の上に落ちた。中に小さな島がある。島にはただ二本の木がはえている。青い松まつと薄い紅葉あかねがぐあいよく枝をかわし合つて、箱庭の趣がある。島を越して向こう側の突き当りがこんもりとどす黒く光つてゐる。女は丘の上からその暗い木陰こかげを指さした。

「あの木を知つていらしつて」と言う。

「あれは椎しい」

女は笑い出した。

「よく覚えていらつしやること」

「あの時の看護婦ですか、あなたが今尋ねようと言つたのは」

「ええ」

「よし子さんの看護婦とは違うんですか」

「違います。これは椎しい——といった看護婦です」

今度は三四郎が笑い出した。

「あすこですね。あなたがあの看護婦といつしょに団扇^{うちわ}を持つて立っていたのは」二人のいる所は高く池の中に突き出している。この丘とはまるで縁のない小山が一段低く、右側を走っている。大きな松と御殿の一角^{ひとかど}と、運動会の幕の一部と、なだらかな芝生が見える。

「熱い日でしたね。病院があんまり暑いものだから、とうとうこらえきれないで出てきたの。——あなたはまたなんであんな所にしやがんでいらしつたんですね」

「熱いからです。あの日ははじめて野々宮さんに会つて、それから、あすこへ来てぼんやりしていたのです。なんだか心細くなつて」

「野々宮さんにお会いになつてから、心細くおなりになつたの」

「いいえ、そういうわけじゃない」と言いかけて、美穂子の顔を見たが、急に話頭を転じた。

「野々宮さんといえば、きょうはたいへん働いていますね」

「ええ、珍しくフロックコートをお着になつて——ずいぶん御迷惑でしょう。朝から晩までですから」

「だつてだいぶ得意のようじやありませんか」

「だが、野々宮さんが。——あなたもずいぶんね」

「なぜですか」

「だつて、まさか運動会の計測係りになつて得意になるようなかたでもないでしよう」

三四郎はまた話頭を転じた。

「さつきあなたの所へ来て何か話していましたね」

「会場で？」

「ええ、運動会の柵の所で」と言つたが、三四郎はこの問を急に撤回したくなつた。女は「ええ」と言つたまま男の顔をじつと見てゐる。少し下唇したくちびるをそらして笑いかけてゐる。三四郎はたまらなくなつた。何か言つてまぎらそうとした時に、女は口を開いた。

「あなたはまだこのあいだの絵はがきの返事をくださらぬいのね」

三四郎はまづきながら「あげます」と答えた。女はくれどもなんとも言わない。

「あなた、原口さんはらぐちといふえかき画工を御存じ?」と聞き直した。

「知りません」

「そう」

「どうかしましたか」

「なに、その原口さんが、きょう見に来ていらしってね、みんなを写生しているから、私たちも用心しないと、ポンチにかかるからって、野々宮さんがわざわざ注意してくださいつたんです」

美穂子はそばへ来て腰をかけた。三四郎は自分がいかにも愚物のような気がした。

「よし子さんはにいさんといっしょに帰らないんですね」

「いつしょに帰ろうつたつて帰れないわ。よし子さんは、きのうから私の家にいるんですもの」

三四郎はその時はじめて美穂子から野々宮のおつかさんが国へ帰ったということを聞いた。おつかさんが帰ると同時に、大久保を引き払つて、野々宮さんは下宿をする、よし子は当分美穂子の家から学校へ通うことに、相談がきまつたんだそうである。

三四郎はむしろ野々宮さんの気楽なのに驚いた。そうたやすく下宿生活にもどるくらいなら、はじめから家を持たないほうがよかろう。第一鍋、釜、^{かま}手桶などという世帶道具の始末はどうつけたろうと、よけいなことまで考えたが、口に出して言うほどのことでもないから、べつだんの批評は加えなかつた。そのうえ、野々宮さんが一家の主人から、あともどりをして、ふたたび純書生と同様な生活状態に復するのは、とりもなおさず家族制

度から一步遠のいたと同じことで、自分にとつては、目前の迷惑を少し長距離へ引き移したような好都合にもなる。その代りよし子が美禰子の家へ同居してしまつた。この兄妹は絶えず往来していないと治まらないようできあがつてゐる。絶えず往来しているうちには野々宮さんと美禰子との関係も次第次第に移つてくる。すると野々宮さんがまたいつなんどき下宿生活を永久にやめる時機がこないともかぎらない。

三四郎は頭のなかに、こういう疑いある未来を、描きながら、美禰子と応対をしている。いつこうに気が乗らない。それを外部の態度だけでも普通のことくつくるおうとすると苦痛になつてくる。そこへうまいぐあいによし子が帰つてきてくれた。女同志のあいだには、もう一ぺん競技を見に行こうかという相談があつたが、短くなりかけた秋の日がだいぶ回つたのと、回るにつれて、広い戸外の肌寒はださむがようやく増してくるので、帰ることに話がきまる。

三四郎も女連れんに別れて下宿へもどろうと思つたが、三人が話しながら、ずるずるべつたりに歩き出したものだから、きわだつた挨拶あいさつをする機会がない。二人は自分を引っ張つてゆくようにみえる。自分もまた引っ張られてゆきたいような氣がする。それで一人にくつついて池の端はたを図書館の横から、方角違ひの赤門の方へ向いてきた。そのとき三四郎は、

よし子に向かつて、

「お兄^{あに}いさんは下宿をなすつたそうですね」と聞いたら、よし子は、すぐ、「ええ。とうとう。ひとを美穂子さんの所へ押しつけておいて。ひどいでしよう」と同意を求めるように言つた。三四郎は何か返事をしようとした。そのままに美穂子が口を開いた。

「宗八さんのようななかたは、我々の考え方やわかりませんよ。ずっと高い所にいて、大きな事を考えていらつしやるんだから」と大いに野々宮さんをほめだした。よし子は黙つて聞いている。

学問をする人がうるさい俗用を避けて、なるべく単純な生活にがまんするのは、みんな研究のためやむをえないんだからしかたがない。野々宮のような外国にまで聞こえるほど仕事をする人が、普通の学生同様な下宿にはいつているのも必^{ひつきよう}竟^{きよう}野々宮が偉いからのこと、下宿がきたなければきたないほど尊敬しなくつてはならない。——美穂子の野々宮に対する賛辞のつづきは、ざつとこうである。

三四郎は赤門の所で二人に別れた。^{おいわけ}追分の方へ足を向けながら考えだした。——なるほど美穂子の言つたとおりである。自分と野々宮を比較してみるとだいぶ段が違う。自分

は田舎から出て大学へはいったばかりである。学問という学問もなければ、見識という見識もない。自分が、野々宮に対するほどな尊敬を美禰子から受けえないのは当然である。そういえばなんだか、あの女からばかにされているようでもある。さつき、運動会はつまらないから、ここにいると、丘の上で答えた時に、美禰子はまじめな顔をして、この上には何かおもしろいものがありますかと聞いた。あの時は気がつかなかつたが、いま解釈してみると、故意に自分を愚弄した言葉かもしれない。——三四郎は気がついて、きょうまで美禰子の自分に対する態度や言語を一々繰り返してみると、どれもこれもみんな悪い意味がつけられる。三四郎は往来のまん中でまつ赤になつてうつむいた。ふと、顔を上げると向こうから、与次郎とゆうべの会で演説をした学生が並んで来た。与次郎は首を縦に振つたぎり黙つている。学生は帽子をとつて礼をしながら、

「昨夜は。どうですか。とらわれちやいけませんよ」と笑つて行き過ぎた。

七

裏から回つてばあさんに聞くと、ばあさんが小さな声で、与次郎さんはきのうからお帰

りなさらないと言う。三四郎は勝手口に立つて考えた。ばあさんは気をきかして、まあおはいりなさい。先生は書斎においてですからと言ひながら、手を休めずに、膳^{ぜんわん}椀^{わんわん}を洗つてゐる。今晚食^{ゆうめし}がすんだばかりのところらしい。

三四郎は茶の間を通り抜けて、廊下伝いに書斎の入口まで來た。戸があいている。中から「おい」と人を呼ぶ声がする。三四郎は敷居のうちへはいった。先生は机に向かつている。机の上には何があるかわからない。高い背^せが研究を隠している。三四郎は入口に近くすわって、

「御勉強ですか」と丁寧に聞いた。先生は顔をうしろへねじ向^{むけ}た。鬚^{ひげ}の影が不明瞭にもじやもじやしている。写真版で見ただれかの肖像に似ている。

「やあ、与次郎かと思つたら、君ですか、失敬した」と言つて、席を立つた。机の上には筆と紙がある。先生は何か書いていた。与次郎の話に、うちの先生は時々何か書いている。しかし何を書いているんだか、ほかの者が読んでもちつともわからない。生きて^{いる}うちに、大著述にでもまとめられれば結構だが、あれで死んでしまつちやあ、反古^{ほご}がたまるばかりだ。じつにつまらない。と嘆息していたことがある。三四郎は広田の机の上を見て、すぐ与次郎の話を思い出した。

「おじやまなら帰ります。べつだんの用事でもありません」

「いや、帰つてもらうほどじやまでもありません。こつちの用事もべつだんのことでもないんだから。そう急に片づけるたちのものをやつていたんじやない」

三四郎はちよつと挨拶あいさつができなかつた。しかし腹のうちでは、この人のような氣分になれたら、勉強も楽にできてよかろうと思つた。しばらくしてから、こう言つた。

「じつは佐々木君のところへ来たんですが、いなかつたものですから……」

「ああ。与次郎はなんでもゆうべから帰らないようだ。時々漂泊して困る」

「何か急に用事でもできたんですか」

「用事はけつしてできる男じやない。ただ用事をこしらえる男でね。ああいうばかは少な

い」

三四郎はしかたがないから、

「なかなか氣楽ですな」と言つた。

「氣楽ならいいけれども。与次郎のは氣楽なのじやない。氣が移るので——たとえば田の中を流れている小川のようなものと思つていれば間違ひはない。浅くて狭い。しかし水だけはしじゅう変つている。だから、する事が、ちつとも締まりがない。縁日へひやかしに

など行くと、急に思い出したように、先生松を一鉢ひとはちお買いなさいなんて妙なことを言う。そうして買うともなんとも言わないうちに値切ねぎつて買つてしまふ。その代り縁日ものを買うことなんぞはじようずでね。あいつに買わせるとたいへん安く買える。そうかと思うと、夏になつてみんなが家を留守するすにするときなんか、松を座敷へ入れたまんま雨戸うどをたてて錠をおろしてしまう。帰つてみると、松が温氣うんきでむれてまつ赤になつてゐる。万事そういうふうでまことに困る」

実をいうと三四郎はこのあいだ与次郎に二十円貸した。二週間後には文芸時評社から原稿料が取れるはずだから、それまで立替たてかえてくれろと言う。事理わけを聞いてみると、気の毒であつたから、国から送つてきたばかりの為替かわせを五円引いて、余りはことごとく貸してしまつた。まだ返す期限ではないが、広田の話を聞いてみると少々心配になる。しかし先生にそんな事は打ち明けられないから、反対に、

「でも佐々木君は、大いに先生に敬服して、陰では先生のためになかなか尽力しています」と言うと、先生はまじめになつて、

「どんな尽力をしているんですか」と聞きだした。ところが「偉大なる暗闇くらやみ」その他すべて広田先生に関する与次郎の所為しょいは、先生に話してはならないと、当人から封じられて

いる。やりかけた途中でそんな事が知れると先生にしかられるにきまつてゐるから黙つていいべきだという。話していい時にはおれが話すと明言しているんだからしかたがない。三四郎は話をそらしてしまつた。

三四郎が広田の家へ来るにはいろいろな意味がある。一つは、この人の生活その他が普通のものと変つてゐる。ことに自分の性情とはまったく容れないようなところがある。そこで三四郎はどうしたらああなるだろうという好奇心から参考のため研究に来る。次にこの人の前に出るとのん気になる。世の中の競争があまり苦にならない。野々宮さんも広田先生と同じく世外の趣はあるが、世外の功名心のために、流俗の嗜欲を遠ざけているかのように思われる。だから野々宮さんを相手に一人ひとりで話してみると、自分もはやく一人前の仕事をして、学海に貢献しなくては済まないような気が起つ。いらっしゃつてたまらない。そこへゆくと広田先生は太平である。先生は高等学校でただ語学を教えるだけで、ほかになんの芸もない——といつては失礼だが、ほかになんらの研究も公けにしない。しかも泰然と取り澄ましている。そこに、こののん気の源は伏在しているのだろうと思う。三四郎は近ごろ女にとらわれた。恋人にとらわれたのなら、かえつておもしろいが、ほれられているんだか、ばかにされているんだか、こわがつていいんだか、さげすんでいいん

だか、よすべきだか、続けべきだかわけのわからないとらわれ方である。三四郎はいまいましくなつた。そういう時は広田さんにかざる。三十分ほど先生と相対していると心持ちが悠揚になる。女の一人や二人どうなつてもかまわないと思う。実をいうと、三四郎が今夜出かけてきたのは七分方ぶがたこの意味である。

訪問理由の第三はだいぶ矛盾している。自分は美禰子に苦しんでいる。美禰子のそばに野々宮さんを置くとなお苦しんでくる。その野々宮さんにもつとも近いものはこの先生である。だから先生の所へ来ると、野々宮さんと美禰子との関係がおのずから明瞭になつてくるだろうと思う。これが明瞭になりさえすれば、自分の態度も判然きめることができる。そのくせ二人の事をいまだかつて先生に聞いたことがない。今夜は一つ聞いてみようかしらと、心を動かした。

「野々宮さんは下宿なすつたそうですね」

「ええ、下宿したそうです」

「家をもつた者が、また下宿をしたら不便だらうと思ひますが、野々宮さんはよく……」

「ええ、そんな事にはいつこう無頓着むどんじやくなほうでね。あの服装を見てもわかる。家庭的な人じやない。その代り学問にかけると非常に神経質だ」

「当分ああやつておいでのつもりなんでしょうか」

「わからない。また突然家を持つかもしない」

「奥さんでもお貴いになるお考えはないんでしようか」

「あるかもしれない。いいのを周旋してやりたまえ」

三四郎は苦笑いをして、よけいな事を言つたと思つた。すると広田さんが、「君はどうです」と聞いた。

「私は……」

「まだ早いですね。今から細君を持つちゃたいへんだ」

「国の者は勧めますが」

「国のだれが」

「母です」

「おつかさんのいうとおり持つ気になりますか」

「なかなかなりません」

広田さんは髭の下から歯を出して笑つた。わりあいにきれいな歯を持っている。三四郎

はその時急になつかしい気持ちがした。けれどもそのなつかしさは美穂子を離れている。

野々宮を離れている。三四郎の眼前の利害には超絶したなつかしさであった。三四郎はこれで、野々宮などの事を聞くのが恥ずかしい気がしだして、質問をやめてしまった。すると広田先生がまた話しだした。――

「おつかさんのいうことはなるべく聞いてあげるがよい。近ごろの青年は我々時代の青年と違つて自我の意識が強すぎていけない。我々の書生をしているころには、する事なす事一として他ひとを離れたことはなかつた。すべてが、君とか、親とか、国とか、社会とか、みんな他ひと本位であつた。それを一口にいうと教育を受けるものがことごとく偽善家であつた。その偽善が社会の変化で、どうどう張り通せなくなつた結果、漸々ぜんぜん自己本位を思想行為の上に輸入すると、今度は我意識が非常に発展しすぎてしまつた。昔の偽善家に対して、今は露悪家ばかりの状態にある。――君、露悪家という言葉を聞いたことがありますか」

「いいえ」

「今ぼくが即席に作った言葉だ。君もその露悪家の一人いちにん――だかどうか、まあたぶんそういうだろう。与次郎の「」ときいたるとその最たるものだ。あの君の知つてゐる里見という女があるでしよう。あれも一種の露悪家で、それから野々宮の妹ね、あれはまた、あれなりに露悪家だから面白い。昔は殿様と親父おやじだけが露悪家ですんでいたが、今日では各自同等

の権利で露悪家になりたがる。もつとも悪い事でもなんでもない。臭いものの蓋ふたをとれば肥桶こえたこで、見事な形式をはぐとたいていは露悪になるのは知れ切っている。形式だけ見事だつて面倒なばかりだから、みんな節約して木地きじだけで用を足している。はなはだ痛快である。天醜爛漫らんまんとしている。ところがこの爛漫が度を越すと、露悪家同志がお互に不便を感じてくる。その不便がだんだん高じて極端に達した時利他主義がまた復活する。それがまた形式に流れて腐敗するとまた利己主義に帰参する。つまり際限はない。我々はそういうふうにして暮らしてゆくものと思えばさしつかえない。そうしてゆくうちに進歩する。英國を見たまえ。この両主義が昔からうまく平衡がとれている。だから動かない。だから進歩しない。イブセンも出なければニイチエも出ない。氣の毒なものだ。自分だけは得意のようだが、はたから見れば堅くなつて、化石しかかつている。……」

三四郎は内心感心したようなものの、話がそれでとんだところへ曲がつて、曲がりなりに太くなつてゆくので、少し驚いていた。すると広田さんもようやく気がついた。

「いったい何を話していたのかな」

「結婚の事です」

「結婚？」

「ええ、私が母の言うことを聞いて……」

「うん、そうそう。なるべくおつかさんの言うことを聞かなければいけない」と言つてにこにこしている。まるで子供に対するようである。三四郎はべつに腹も立たなかつた。

「我々が露悪家なのは、いいですが、先生時代の人が偽善家なのは、どういう意味ですか

「君、人から親切にされて愉快ですか」

「ええ、まあ愉快です」

「きっと？ ぼくはそうでない、たいへん親切にされて不愉快な事がある」

「どんな場合ですか」

「形式だけは親切にかなつてゐる。しかし親切自身が目的でない場合」

「そんな場合があるのでしようか」

「君、元日におめでとうと言われて、じつさいおめでたい気がしますか」

「そりや……」

「しないだろう。それと同じく腹をかかえて笑うだの、ころげかえつて笑うだのというやつに、一人だつてじつさい笑つてゐやつはない。親切もそのとおり。お役目に親切をしてくれるのである。ぼくが学校で教師をしているようなものでね。実際の目的は衣食にある

んだから、生徒から見たらさだめて不愉快だろう。これに反して与次郎の「ときは露悪党の領袖だけに、たびたびぼくに迷惑をかけて、始末におえぬいたずら者だが、悪気がない。可愛らしいところがある。ちょうどアメリカ人の金銭に対して露骨なのと一般だ。それ自身が目的である。それ自身が目的である行為ほど正直なものはなくつて、正直ほど厭味のないものはないんだから、万事正直に出られないような我々時代の、こむずかしい教育を受けたものはみんな気障だ」

ここまで理屈は三四郎にもわかつている。けれども三四郎にとつて、目下痛切な問題は、だいたいにわたつての理屈ではない。実際に交渉のある、ある格段な相手が、正直か正直でないかを知りたいのである。三四郎は腹の中で美禰子の自分に対する素振そぶりをもう一べん考えてみた。ところが氣障か氣障でないかほとんど判断ができない。三四郎は自分の感受性が人一倍鈍いのではなかろうかと疑いだした。

その時広田さんは急にうんと言つて、何か思い出したようである。

「うん、まだある。この二十世紀になつてから妙なのが流行る。利他本位の内容を利己本位でみたすというむずかしいやり口なんだが、君そんな人に出会つたですか」「どんなのです」

「ほかの言葉でいうと、偽善を行ふに露悪をもつてする。まだわからないだろうな。ちと説明し方が悪いようだ。——昔の偽善家はね、なんでも人によく思われたいが先に立つんでしょう。ところがその反対で、人の感触を害するために、わざわざ偽善をやる。横から見ても縦から見ても、相手には偽善としか思われないようにしむけてゆく。相手はむろんいやな心持ちがする。そこで本人の目的は達せられる。偽善を偽善そのままに通用させようとする正直なところが露悪家の特色で、しかも表面上の行為言語はあくまでも善に違いないから、——そら、二位一体というようなことになる。この方法を巧妙に用いる者が近来だいぶふえてきたようだ。きわめて神経の鋭敏になつた文明人種が、もつとも優美に露悪家になろうとすると、これがいちばんいい方法になる。血を出さなければ人が殺せないというのはずいぶん野蛮な話だからな君、だんだん流行らなくなる」

広田先生の話し方は、ちょうど案内者が古戦場を説明するようなもので、実際を遠くからながめた地位にみずからを置いている。それがすこぶる樂天の趣がある。あたかも教場で講義を聞くと一般の感を起させる。しかし三四郎にはこたえた。念頭に美禰子という女があつて、この理論をすぐ適用できるからである。三四郎は頭の中にこの標準を置いて、美禰子のすべてを測つてみた。しかし測り切れないところがたいへんある。先生は口を閉

じて、例のごとく鼻から哲学の煙を吐き始めた。

ところへ玄関に足音がした。案内も乞わずに廊下伝いにはいつて来る。たちまち与次郎が書斎の入口にすわって、

「原口さんがおいでになりました」と言う。ただ今帰りましたという挨拶を省いている。わざと省いたのかもしれない。三四郎にはぞんざいな目礼をしたばかりですぐに出ていった。

与次郎と敷居ぎわですれ違つて、原口さんがはいつて來た。原口さんはフランス式の髭ひげをはやして、頭を五分刈にした、脂肪の多い男である。野々宮さんより年が二つ三つ上に見える。広田先生よりずっときれいな和服を着ている。

「やあ、しばらく。今まで佐々木が家へ来ていてね。いつしょに飯を食つたり何かして—そこれから、どうどう引つ張り出されて……」とだいぶ樂天的な口調である。そばにいるとしじん陽気になるような声を出す。三四郎は原口という名前を聞いた時から、おおかたあの画工^{えかき}だろうと思つていた。それにしても与次郎は交際家だ。たいていな先輩とはみんな知合いになつてゐるからえらいと感心して堅くなつた。三四郎は年長者の前へ出ると堅くなる。九州流の教育を受けた結果だと自分では解釈している。

やがて主人が原口に紹介してくれる。三四郎は丁寧に頭を下げた。向こうは軽く会釈した。三四郎はそれから黙つて二人の談話を承っていた。

原口さんはまず用談から片づけると言つて、近いうちに会をするから出てくれと頼んでいる。会員と名のつくほどのりつぱなものはこしらえないつもりだが、通知を出すものは、文学者とか芸術家とか、大学の教授とか、わずかな人数にかぎつておくからさしつかえはない。しかもたいてい知り合いのあいだから、形式はまつたく不必要である。目的はただおおぜい寄つて晩餐^{ばんさん}を食う。それから文芸上有益な談話を交換する。そんなものである。

広田先生は一口「出よう」と言つた。用事はそれで済んでしまつた。用事はそれで済んでしまつたが、それから後の原口さんと広田先生の会話がすこぶるおもしろかつた。

広田先生が「君近ごろ何をしているかね」と原口さんに聞くと、原口さんがこんな事を言う。

「やつぱり一中節^{いつちゅうぶし}を稽古^{けいこ}している。もう五つほど上げた。花紅葉吉原八景^{はなもみじよしわらはつけい}だの、小稲半兵衛唐崎心中^{こいなはんべえからさきしんじゆう}だのつてなかなかおもしろいのがあるよ。君も少しやってみないか。もつともありや、あまり大きな声を出しちゃいけないんだつてね。本来が四畳半の座

敷にかぎつたものだそうだ。ところがぼくがこのとおり大きな声だろう。それに節回しがあれでなかなか込み入っているんで、どうしてもうまくいかん。こんだ一つやるから聞いてくれたまえ」

広田先生は笑つていた。すると原口さんは続きをこういうふうに述べた。

「それでもぼくはまだいいんだが、里見^{さとみきょうすけ}恭助^{こうすけ}ときたら、まるで形無しだからね。どういうものかしらん。妹はあんなに器用だのに。このあいだはどうとう降参して、もう歌はやめる、その代り何か楽器を習おうと言いだしたところが、馬鹿囃子^{ばかばやし}をお習いなさらなかと勧めた者があつてね。大笑いさ」

「そりや本当かい」

「本当とも。現に里見がぼくに、君がやるならやつてもいいと言つたくらいだもの。あれで馬鹿囃子には八通り囃し方があるんだそうだ」

「君、やつちやどうだ。あれなら普通の人間にでもできそうだ」

「いや馬鹿囃子はいやだ。それよりか鼓^{つづみ}が打つてみたくつてね。なぜだか鼓の音を聞いていると、まったく二十世紀の気がしなくなるからいい。どうして今の世にああ間が抜けていられるだろうと思うと、それだけでたいへんな薬になる。いくらぼくがのん気でも、鼓

の音のような絵はとてもかけないから」

「かこうともしないんじやないか」

「かけないんだもの。今の東京にいる者に悠揚な絵ができるものか。もつとも絵にもかぎるまいかれども。——絵といえば、このあいだ大学の運動会へ行つて、里見と野々宮さんの妹のカリカチュアをかけてやろうと思つたら、とうとう逃げられてしまつた。こんだ一つ本当の肖像画をかけて展覧会にでも出そうかと思つて」

「だれの」

「里見の妹の。どうも普通の日本の女の顔は歌麿式うたまろしきや何かばかりで、西洋の画布カンバスにはうつりが悪くつていけないが、あの女や野々宮さんはいい。両方ともに絵になる。あの女が団扇うちわをかざして、木立こだちをうしろに、明るい方を向いているところを等ライフ身サイズに写してみようかしらと思っている。西洋の扇は厭味いやみでいけないが、日本の団扇は新しくつておもしろいだろう。とにかくはやくしないとだめだ。いまに嫁にでもいかれようものなら、そういうこつちの自由にいかなくなるかもしけないから」

三四郎は多大な興味をもつて原口の話を聞いていた。ことに美穂子が団扇をかざしていする構図は非常な感動を三四郎に与えた。不思議の因縁が二人の間に存在しているのではな

いかと思うほどであった。すると広田先生が、「そんな図はそうおもしろいこともないぢやないか」と無遠慮な事を言いだした。

「でも当人の希望なんだもの。団扇をかざしているところは、どうでしようと言ふから、すこぶる妙でしようと言つて承知したのさ。なに、悪い図どりではないよ。かきようにもよるが」

「あんまり美しくかくと、結婚の申込みが多くなつて困るぜ」

「ハハハじや中ぐらいにかけておこう。結婚といえば、あの女も、もう嫁にゆく時期だね。どうだらう、どこかいい口はないだらうか。里見にも頼まれているんだが」

「君もらつちやどうだ」

「ぼくか。ぼくでよければもらうが、どうもあの女には信用がなくつてね」

「なぜ」

「原口さんは洋行する時にはたいへんな気込みで、わざわざ鰹節かつぶしを買い込んで、これでパリーの下宿に籠城ろうじょうするなんて大いぱりだつたが、パリーへ着くやいなや、たちまち豹ひょうへん変あにきしたそうですねつて笑うんだから始末がわるい。おおかた兄からでも聞いたんだ

ろう

「あの女は自分の行きたい所でなくつちや行きつこない。勧めたつてだめだ。好きな人があるまで独身で置くがいい」

「まつたく西洋流だね。もつともこれから女の人はみんなそなうなるんだから、それもよからう」

それから二人の間に長い絵画談があつた。三四郎は広田先生の西洋の画工の名をたくさん知っているのに驚いた。帰るとき勝手口で下駄げを捜していると、先生が梯子段はしごだんの下へ来て「おい佐々木ちよつと降りて來い」と言つていた。

戸外そとは寒い。空は高く晴れて、どこから露が降るかと思うくらいである。手が着物にさわると、さわった所だけがひやりとする。人通りの少ない小路こうじを二、三度折れたり曲がつたりしてゆくうちに、突然辻占屋つじうらやに会つた。大きな丸い提灯ちようぢんをつけて、腰から下をまつ赤にしている。三四郎は辻占が買つてみたくなつた。しかしあえて買わなかつた。杉垣すぎがきに羽織の肩が触れるほどに、赤い提灯をよけて通した。しばらくして、暗い所をはすに抜けると、追分の通りへ出た。角に蕎麦屋そばやがある。三四郎は今度は思い切つて暖簾のれんをくぐつた。少し酒を飲むためである。

高等学校の生徒が三人いる。近ごろ学校の先生が昼の弁当に蕎麦を食う者が多くなつた

と話している。蕎麦屋の担夫が午砲が鳴ると、蒸籠や種ものを山のように肩へ載せて、急いで校門をはいつてくる。この蕎麦屋はあれでだいぶもうかるだろうと話している。なんとかいう先生は夏でも釜揚餃餄を食うが、どういうものだろうと言つてはいる。おおかた胃が悪いんだろうと言つてはいる。そのほかいろいろの事を言つてはいる。教師の名はたいへい呼び棄てにする。なかに一人広田さんと言つた者がある。それからなぜ広田さんは自身でいるかという議論を始めた。広田さんの所へ行くと女の裸体画がかけてあるから、女がきらいなんじやなかろうという説である。もつともその裸体画は西洋人だからあてにならない。日本の女はきらいかもしれないという説である。いや失恋の結果に違いないとう説も出た。失恋してあんな変人になつたのかと質問した者もあつた。しかし若い美人が出入するという噂うわさがあるが本当かと聞きただした者もあつた。

だんだん聞いてはいるうちに、要するに広田先生は偉い人だということになつた。なぜ偉いか三四郎にもよくわからないが、とにかくこの三人は三人ながら与次郎の書いた「偉大なる暗闇」を読んでいる。現にあれを読んでから、急に広田さんが好きになつたと言つてはいる。時々は「偉大なる暗闇」のなかにある警句などを引用してくる。そうしてさかんに与次郎の文章をほめている。零余子れいよしとはだれだろうと不思議がつてはいる。なにしろよほど

よく広田さんを知っている男に相違ないということには三人とも同意した。

三四郎はそばにいて、なるほどと感心した。与次郎が「偉大なる暗闇」を書くはずである。文芸時評の売れ高の少ないのは当人の自白したとおりであるのに、麗々しく彼のいわゆる大論文を掲げて得意がるのは、虚榮心の満足以外になんのためになるだらうと疑つていたが、これでみると活版の勢力はやはりたいしたものである。与次郎の主張するとおり、一言いちごんでも半句でも言わないほうが損になる。人の評判はこんなところからあがり、またこんなところから落ちると思うと、筆を執るもののが責任が恐ろしくなつて、三四郎は奮麦屋を出た。

下宿へ帰ると、酒はもうさめてしまつた。なんだかつまらなくつていけない。机の前にすわつて、ぼんやりしていると、下女ゆわかしが下から湯沸に熱い湯を入れて持つてきつついでに、封書を一通置いていった。また母の手紙である。三四郎はすぐ封を切つた。きょうは母の手跡を見るのがはなはだうれしい。

手紙はかなり長いものであつたが、べつだんの事も書いてない。ことに三輪田のお光さんについては一口も述べてないので大いにありがたかつた。けれどもなかに妙な助言じよげんがある。

お前は子供の時から度胸がなくつていけない。度胸の悪いのはたいへんな損で、試験の時などにはどのくらい困るかしれない。興津の高さんは、あんなに学問ができて、中学校の先生をしているが、検定試験を受けるたびに、からだがふるえて、うまく答案ができるんで、気の毒なことにいまだに月給が上がらずにいる。友だちの医学士とかに頼んでふるえるのとまる丸薬をこしらえてもらつて、試験前に飲んで出たがやつぱりふるえたそうである。お前のはぶるぶるふるえるほどでもないようだから、平生から持薬じやくに度胸のすわる薬を東京の医者にこしらえてもらつて飲んでみろ。直らないこともなかろうというのである。

三四郎はばかばかしいと思つた。けれどもばかばかしいうちに大いなる感謝を見出した。母は本当に親切なものであると、つくづく感心した。その晩一時ごろまでかかつて長い返事を母にやつた。そのなかには東京はあまりおもしろい所ではないという一句があつた。

八

三四郎が与次郎に金を貸したてんまつは、こうである。

このあいだの晩九時ごろになつて、与次郎が雨のなかを突然やつて来て、あたまから大いに弱つたと言う。見ると、いつになく顔の色が悪い。はじめは秋雨にぬれた冷たい空気に吹かれすぎたからのことと思つていたが、座について見ると、悪いのは顔色ばかりではない。珍しく消沈している。三四郎が「ぐあいでもよくないのか」と尋ねると、与次郎は鹿のような目を二度ほどぱちつかせて、こう答えた。

「じつは金をなくしてね。困つちまつた」

そこで、ちよつと心配そうな顔をして、煙草の煙を二、三本鼻から吐いた。三四郎は黙つて待つてゐるわけにもゆかない。どういう種類の金を、どこでなくなしたのかとだんだん聞いてみると、すぐわかつた。与次郎は煙草の煙の、二、三本鼻から出切るあいだだけ控えていたばかりで、そのあとは、一部始終をわけもなくすらすらと話してしまつた。

与次郎のなくした金は、額で二十円、ただし人のものである。去年広田先生がこのまえの家を借りる時分に、三ヶ月の敷金に窮して、足りないところを一時野々宮さんから用達ようだつてもらつたことがある。しかるにその金は野々宮さんが、妹いもどにバイオリンを買つてやらなくてはならないとかで、わざわざ国元の親父さんおやじから送らせたものだそうだ。それだからきようがきよう必要というほどでない代りに、延びれば延びるほどよし子が困る。よし

子は現に今でもバイオリンを買わずに済ましている。広田先生が返さないからである。先生だって返せればとうに返すんだろうが、日々余裕が一文も出ないうえに、月給以外につしてかせがない男だから、ついそれなりにしてあつた。ところがこの夏高等学校の受験生の答案調べを引き受けた時の手当てあてが六十円このごろになつてようやく受け取れた。それでようやく義理を済ますことになつて、与次郎がその使いを言いつかつた。

「その金をなくなしたんだからすまない」と与次郎が言つている。じつさいすまないような顔つきもある。どこへ落としたんだと聞くと、なに落としたんじやない。馬券ばけんを何枚とか買つて、みんななくなしてしまつたのだと言う。三四郎もこれにはあきれ返つた。あまり無分別の度を通り越しているので意見をする氣にもならない。そのうえ本人が悄然ふたり
はつちとしている。これをいつもの活発澆地はつちと比べると与次郎なるものが一人いるとしか思われない。その対照が激しすぎる。だからおかしいのと氣の毒なのがいつしょになつて三四郎を襲つてきた。三四郎は笑いだした。すると与次郎も笑いだした。

「まあいいや、どうかなるだらう」と言う。

「先生はまだ知らないのか」と聞くと、

「まだ知らない」

「野々宮さんは」

「むろん、まだ知らない」

「金はいつ受け取ったのか」

「金はこの月始まりだから、きょうでちょうど二週間ほどになる」

「馬券を買ったのは」

「受け取つたあくる日だ」

「それからきょうまでそのままにしておいたのか」

「いろいろ奔走したができないんだからしかたがない。やむをえなければ今月末までこのままにしておこう」

「今月末になればできる見込みでもあるのか」

「文芸時評社から、どうかなるだろう」

三四郎は立つて、机の引出しを開けた。きのう母から来たばかりの手紙の中をのぞいて、

「金はここにある。今月は國から早く送つてきた」と言つた。与次郎は、

「ありがたい。親愛なる小川君」と急に元気のいい声で落語家のようなことを言つた。

二人は十時すぎ雨を冒して、追^{おいわけ}分の通りへ出て、角の蕎麦屋へはいった。三四郎が蕎

麦屋で酒を飲むことを覚えたのはこの時である。その晩は一人とも愉快に飲んだ。勘定は与次郎が払つた。与次郎はなかなか人に払わせない男である。

それからきょうにいたるまで与次郎は金を返さない。三四郎は正直だから下宿屋の払いを気にしている。催促はしないけれども、どうかしてくれればいいがと思って、日を過ぎずうちに晦日みそか近くなつた。もう一日二日ふつかしか余つていない。間違つたら下宿の勘定を延ばしておこうなどという考えはまだ三四郎の頭にのぼらない。必ず与次郎が持つて来てくれる——とまではむろん彼を信用していないのだが、まあどうかくめんしてみようくらいの親切気はあるだろうと考えている。広田先生の評によると与次郎の頭は浅瀬の水のようにしじゅう移つているのだそなだが、むやみに移るばかりで責任を忘れるようでは困る。まさかそれほどの事もあるまい。

三四郎は二階の窓から往来をながめていた。すると向こうから与次郎が足早にやつて來た。窓の下まで来てあおむいて、三四郎の顔を見上げて、「おい、おるか」と言う。三四郎は上から、与次郎を見下みおろして、「うん、おる」と言う。このばかみたような挨拶あいさつが上下で一句交換されると、三四郎は部屋へやの中へ首を引っ込める。与次郎は梯子段はしごだんをとんとん上がつてきた。

「待つていやしないか。君のことだから下宿の勘定を心配しているだろうと思つて、だいぶ奔走した。ばかりでいる」

「文芸時評から原稿料をくれたか」

「原稿料つて、原稿料はみんな取つてしまつた」

「だつてこのあいだは月末に取るように言つていたじやないか」

「そうかな、それは間違いだろう。もう一文も取るのはない」

「おかしいな。だつて君はたしかにそう言つたぜ」

「なに、前借りをしようと言つたのだ。ところがなかなか貸さない。ぼくに貸すと返さないと思つてゐる。けしからん。わずか二十円ばかりの金だのに。いくら偉大なる暗闇を書いてやつても信用しない。つまらない。いやになつちまつた」

「じゃ金はできないのか」

「いやほかでこしらえたよ。君が困るだろうと思つて」

「そうか。それは気の毒だ」

「ところが困つた事ができた。金はここにはない。君が取りにいかなくつちや」

「どこへ」

「じつは文芸時評がいけないから、原口だのなんだの二、三軒歩いたが、どこも月末でつ
ごうがつかない。それから最後に里見の所へ行つて——里見というのは知らないかね。里
見恭助。法学士だ。美禰子さんのにいさんだ。あすこへ行つたところが、今度は留守でや
っぱり要領を得ない。そのうち腹が減つて歩くのがめんどうになつたから、とうとう美禰
子さんに会つて話をした」

「野々宮さんの妹がいやしないか」

「なに昼少し過ぎだから学校に行つてる時分だ。それに応接間だからいたつてかまやしな
い」

「そうか」

「それで美禰子さんが、引き受けてくれて、御用立て申しますと言ふんだがね」
「あの女は自分の金があるのかい」

「そりや、どうだか知らない。しかしどにかく大丈夫だよ。引き受けたんだから。あり
や妙な女で、年のいかないくせにねえさんじみた事をするのが好きな性質なんだから、引
き受けさえすれば、安心だ。心配しないでもいい。よろしく願つておけばかまわない。と
ころがいちばんしまいになつて、お金はここにあります、あなたには渡せませんと言う

んだから、驚いたね。ぼくはそんなに不信用なんですかと聞くと、ええと言つて笑つてい
る。いやになつちまつた。じゃ小川をよこしますかなとまた聞いたたら、え、小川さんにお
手渡しいたしましようと言われた。どうでもかつてにするがいい。君取りにいけるかい」

「取りにいかなければ、国へ電報でもかけるんだな」

「電報はよそう。ばかげている。いくら君だつて借りにいけるだらう」

「いける」

これでようやく二十円のうちがあいた。それが済むと、与次郎はすぐ広田先生に関する
事件の報告を始めた。

運動は着々歩を進めつつある。暇さえあれば下宿へ出かけていつて、一人一人に相談す
る。相談は一人一人にかぎる。おおぜい寄ると、めいめいが自分の存在を主張しようとし
て、ややともすれば異^いをたてる。それでなければ、自分の存在を閑却された心持ちになつ
て、初手から冷淡にかまえる。相談はどうしても一人一人にかぎる。その代り暇はいる。
金もいる。それを苦にしていては運動はできない。それから相談中には広田先生の名前を
あまり出さないことにする。我々のための相談でなくつて、広田先生のための相談だと思
われると、事がまとまらなくなる。

与次郎はこの方法で運動の歩を進めているのだそうだ。それできょうまでのところはうまくいった。西洋人ばかりではいけないから、ぜひとも日本人を入れてもらおうというところまで話はきた。これから先はもう一ぺん寄つて、委員を選んで、学長なり、総長なりに、我々の希望を述べにやるばかりである。もつとも会合だけはほんの形式だから略してもいい。委員になるべき学生もだいたいは知れている。みんな広田先生に同情を持つている連中だから、談判の模様によつては、こつちから先生の名を当局者へ持ち出すかもしれない。……

聞いていると、与次郎一人で天下が自由になるように思われる。三四郎は少なからず与次郎の手腕に感服した。与次郎はまたこのあいだの晩、原口さんを先生の所へ連れてきた事について、弁じだした。

「あの晩、原口さんが、先生に文芸家の会をやるから出ると、勧めていたろう」と言う。三四郎はむろん覚えている。与次郎の話によると、じつはあれも自身の発起ほつきにかかるものだそうだ。その理由はいろいろあるが、まず第一に手近なところを言えば、あの会員のうちには、大学の文科で有力な教授がいる。その男と広田先生を接触させるのは、このさい先生にとつて、たいへんな便利である。先生は変人だから、求めてだれとも交際しない。

しかしこつちで相当の機会を作つて、接触させれば、変人なりに付合つてゆく。……

「そういう意味があるのか、ちつとも知らなかつた。それで君が発起人だというんだが、会をやる時、君の名前で通知を出して、そういう偉い人たちがみんな寄つて来るのかな」

与次郎は、しばらくまじめに、三四郎を見ていたが、やがて苦笑いをしてわきを向いた。「ばかいつちやいけない。発起人つて、おもてむきの発起人じやない。ただぼくがそういう会を企てたのだ。つまりぼくが原口さんを勧めて、万事原口さんが周旋するようにこしらえたのだ」

「そうか」

「そうかは 田臭でんしゅう だね。時に君もあの会へ出るがいい。もう近いうちにあるはずだから」「そんな偉い人ばかり出る所へ行つたつてしかたがない。ぼくはよそう」

「また田臭を放つた。偉い人も偉くない人も社会へ頭を出した順序が違うだけだ。なにあんな連中、博士とか学士とかいったつて、会つて話してみるとなんでもないものだよ。第一向こうがそう偉いともなんとも思つてやしない。ぜひ出ておくがいい。君の将来のためだから」

「どこであるのか」

「たぶん上野の精養軒うえのせいようけんになるだろう」

「ぼくはあんな所へ、はいつたことがない。高い会費を取るんだろう」「まあ二円ぐらいだろう。なに会費なんか、心配しなくつてもいい。なければぼくがだしておくから」

三四郎はたちまち、さきの二十円の件を思い出した。けれども不思議におかしくならなかつた。与次郎はそのうち銀座ぎんざのどことかへ天麩羅てんぷらを食いに行こうと言いだした。金はあると言う。不思議な男である。言いなり次第になる三四郎もこれは断つた。その代りいっしょに散歩に出た。帰りに岡野おかのへ寄つて、与次郎は栗饅頭くりまんじゅうをたくさん買つた。これを先生にみやげに持つてゆくんだと言つて、袋をかかえて帰つていった。

三四郎はその晩与次郎の性格を考えた。長く東京にいるとあんなになるものかと思つた。それから里見へ金を借りに行くことを考えた。美禰子の所へ行く用事ができたのはうれしいような気がする。しかし頭を下げて金を借りるのはありがたくない。三四郎は生まれてから今日にいたるまで、人に金を借りた経験のない男である。その上貸すという当人が娘である。独立した人間ではない。たとい金が自由になるとしても、兄の許諾を得ない内証の金を借りたとなると、借りる自分はとにかく、あとで、貸した人の迷惑になるかもしけ

ない。あるいはあの女のことだから、迷惑にならないようにはじめからできているかとも思える。なにしろ会つてみよう。会つたうえで、借りるのがおもしろくない様子だつたら、断わつて、しばらく下宿の払いを延ばしておいて、国から取り寄せれば事は済む。——当用はここまで考えて句切りをつけた。あとは散漫に美禰子の事が頭に浮かんで来る。美禰子の顔や手や、襟や、帯や、着物やらを、想像にまかせて、かわ乗けたり除つたりしていた。じつことにあした会う時に、どんな態度で、どんな事を言うだろうとその光景が十通りにも二通りにもなつて、いろいろに出て来る。三四郎は本来からこんな男である。用談があつて人と会見の約束などをする時には、先方がどう出るだろうということばかり想像する。自分が、こんな顔をして、こんな事を、こんな声で言つてやろうなどとはけつして考えない。しかも会見が済むと後からきつとそのほうを考える。そうして後悔する。

ここに今夜は自分のほうを想像する余地がない。三四郎はこのあいだから美禰子を疑つている。しかし疑うばかりでいつこうらちがあかない。そうかといつて面と向かつて、聞きただすべき事件は一つもないのだから、一刀両断の解決などは思いもよらぬことである。もし三四郎の安心のために解決が必要なら、それはただ美禰子に接触する機会を利用して、先方の様子から、いいかげんに最後の判決を自分に与えてしまうだけである。あしたの会

見はこの判決に欠くべからざる材料である。だから、いろいろに向こうを想像してみる。しかし、どう想像しても、自分につごうのいい光景ばかり出てくる。それでいて、実際はなはだ疑わしい。ちょうどどきたない所をきれいな写真にとつてながめているような気がする。写真是写真としてどこまでも本当に違いないが、実物のきたないことも争われないと一般で、同じでなければならぬはずの二つがけつして一致しない。

最後にうれしいことを思いついた。美禰子は与次郎に金を貸すと言った。けれども与次郎には渡さないと言つた。じつさい与次郎は金銭のうえにおいては、信用しにくい男かもしれない。しかしその意味で美禰子が渡さないのか、どうだか疑わしい。もしその意味でないとすると、自分にはなはだたのもしいことになる。ただ金を貸してくれるだけでも十分の好意である。自分に会つて手渡しにしたいというのは——三四郎はここまで己惚れみてみたが、たちまち、

「やっぱり愚弄ぐろうじゃないか」と考えだして、急に赤くなつた。もし、ある人があつて、その女はなんのために君を愚弄するのかと聞いたら、三四郎はおそらく答ええなかつたろう。しいて考えてみると言われたら、三四郎は愚弄そのものに興味をもつてゐる女だからとまでは答えたかもしれない。自分の己惚れを罰するためとはまつたく考ええなかつたに違い

ない。——三四郎は美禰子のために己惚れしめられたんだと信じてゐる。

翌日はさいわい教師が二人欠席して、昼からの授業が休みになつた。下宿へ帰るものめんどうだから、途中で一品料理の腹をこしらえて、美禰子の家へ行つた。前を通つたことはなんべんもある。けれどもはいるのははじめてである。瓦葺の門の柱に里見恭助という標札が出でている。三四郎はここを通るたびに、里見恭助という人はどんな男だろうと思う。まだ会つたことがない。門は締まつてゐる。潜りからはいると玄関までの距離は存外短かい。長方形の御影石が飛び飛びに敷いてある。玄関は細いきれいな格子でたてきつてある。ベルを押す。取次ぎの下女に、「美禰子さんはお宅ですか」と言つた時、三四郎は自分ながら氣恥ずかしいような妙な心持ちがした。ひとの玄関で、妙齡の女の在否を尋ねたことはまだない。はなはだ尋ねにくい気がする。下女のほうは案外まじめである。しかもうやうやしい。いつたん奥へはいつて、また出て来て、丁寧にお辞儀をして、どうぞと言つて上がると応接間へ通した。重い窓掛けの掛けている西洋室である。少し暗い。

下女はまた、「しばらく、どうか……」と挨拶して出て行つた。三四郎は静かな部屋の中に席を占めた。正面に壁を切り抜いた小さい暖炉がある。その上が横に長い鏡になつてゐる。下女はまた、「しばらく、どうか……」と挨拶して出て行つた。三四郎は静かな部屋の暖炉がある。その上が横に長い鏡になつてゐる。

いて前に蠅燭立ろうそくたてが二本ある。三四郎は左右の蠅燭立のまん中に自分の顔を写して見て、またすわつた。

すると奥の方でバイオリンの音がした。それがどこからか、風が持つて来て捨てて行つたように、すぐ消えてしまつた。三四郎は惜しい氣がする。厚く張つた椅子いすの背によりかかつて、もう少しやればいいがと思つて耳を澄ましていたが、音はそれぎりでやんだ。約一分もたつうちに、三四郎はバイオリンの事を忘れた。向こうにある鏡と蠅燭立をながめている。妙に西洋のにおいがする。それからカソリックの連想がある。なぜカソリックだか三四郎にもわからない。その時バイオリンがまた鳴つた。今度は高い音ねと低い音が二、三度急に続いて響いた。それでぱつたり消えてしまつた。三四郎はまったく西洋の音楽を知らない。しかし今の音は、けつして、まとまつたもの的一部分をひいたとは受け取れない。ただ鳴らしただけである。その無作法にただ鳴らしたところが三四郎の情緒じょうしょによく合つた。不意に天から二、三粒つぶ落ちて来た、でたらめの雹ひょうのようである。

三四郎がなかば感覚を失つた目を鏡の中に移すと、鏡の中に美穂子がいつのまにか立つてゐる。下女がたてたと思つた戸があいてゐる。戸のうしろにかけてある幕を片手で押し分けた美穂子の胸から上が明らかに写つてゐる。美穂子は鏡の中で三四郎を見た。三四郎

は鏡の中の美穂子を見た。美穂子はにこりと笑つた。

「いらっしゃい」

女の声はうしろで聞こえた。三四郎は振り向かなければならなかつた。女と男はじかに顔を見合させた。その時女は廂の広い髪をちょっと前に動かして礼をした。礼をするにはおよばないくらいに親しい態度であつた。男のほうはかえつて椅子から腰を浮かして頭を下げた。女は知らぬふうをして、向こうへ回つて、鏡を背に、三四郎の正面に腰をおろした。

「どうどういらしつた」

同じような親しい調子である。三四郎にはこの一言^{いちげん}が非常にうれしく聞こえた。女は光る絹を着ている。さつきからだいぶ待たしたところをもつてみると、応接間へ出るためにわざわざきれいなのに着換えたのかもしない。それで端然とすわつてゐる。目と口に笑み^{えみ}を帶びて無言のまま三四郎を見守つた姿に、男はむしろ甘い苦しみを感じた。じつとして見らるるに堪えない心の起こつたのは、そのくせ女の腰をおろすやいなやである。三四郎はすぐ口を開いた。ほとんど発作^{ほっさ}に近い。

「佐々木が」

「佐々木さんが、あなたの所へいらしつたでしよう」と言つて例の白い歯を現わした。女のうしろにはさきの蝋燭立がマントルピースの左右に並んでいる。金で細工さいくをした妙な形の台である。これを蝋燭立と見たのは三四郎の臆断おくだんで、じつはなんだかわからない。この不可思議の蝋燭立のうしろに明らかな鏡がある。光線は厚い窓掛けにさえぎられて、十分にはいらない。そのうえ天氣は曇つている。三四郎はこのあいだに美禰子の白い歯を見た。

「佐々木が来ました」

「なんと言つていらっしゃいました」

「ぼくにあなたの所へ行けと言つて来ました」

「そうでしよう。——それでいらしつたの」とわざわざ聞いた。

「ええ」と言つて少し躊躇ちゅうちょした。あとから「まあ、そうです」と答えた。女はまつたく歯を隠した。静かに席を立つて、窓の所へ行つて、外面をながめだした。
「曇りましたね。寒いでしよう、そと戸外は」

「いいえ、存外暖かい。風はまるでありません」

「そう」と言いながら席へ帰つて來た。

「じつは佐々木が金を……」と三四郎から言いだした。

「わかつてゐる」と中途でとめた。三四郎も黙つた。すると
「どうしておなくしになつたの」と聞いた。

「馬券を買つたのです」

女は「まあ」と言つた。まあと言つたわりに顔は驚いていない。かえつて笑つてゐる。
すこしたつて、「悪いかたね」とつけ加えた。三四郎は答えずにいた。

「馬券であるのは、人の心をあてるよりむずかしいじやありませんか。あなたは索引の
ついている人の心さえあててみようとなさらないのん気なかただのに」
「ぼくが馬券を買つたんじやありません」

「あら。だれが買つたの」

「佐々木が買つたのです」

女は急に笑いだした。三四郎もおかしくなつた。

「じゃ、あなたがお金がお入用じやなかつたのね。ばかばかしい」
「いることはぼくがいるのです」

「ほんとうに?」

「ほんとうに」

「だつてそれじやおかしいわね」

「だから借りなくつてもいいんです」

「なぜ。 いやなの？」

「いやじやないが、お兄^{あに}いさんに黙つて、あなたから借りちや、好くないからです」

「どういうわけで？ でも兄は承知しているんですもの」

「そうですか。じゃ借りてもいい。——しかし借りないでもいい。家^{うち}へそう言つてやりさえすれば、一週間ぐらいすると来ますから」

「御迷惑なら、しいて……」

美禰子は急に冷淡になつた。今までそばにいたものが一町ばかり遠のいた気がする。三四郎は借りておけばよかつたと思った。けれども、もうしかたがない。蠅燭立を見てすましている。三四郎は自分から進んで、ひとのきげんをとつたことのない男である。女も遠ざかつたぎり近づいて来ない。しばらくするとまた立ち上がつた。窓から戸外をすかして見て、

「降りそもそもありませんね」と言う。三四郎も同じ調子で、「降りそもそもありません」と

答えた。

「降らなければ、私ちょっと出て来ようかしら」と窓の所で立つたまま言う。三四郎は帰つてくれという意味に解釈した。光る絹を着換えたのも自分のためではなかつた。「もう帰りましょう」と立ち上がつた。美禰子は玄関まで送つて來た。沓脱へ降りて、靴くつをはいていると、上から美禰子が、

「そこまでごいっしょに出ましよう。いいでしよう」と言つた。三四郎は靴の紐ひもを結びながら、「ええ、どうでも」と答えた。女はいつのまにか、和土たたきの上へ下りた。下りながら三四郎の耳のそばへ口を持つてきて、「おこつていらつしやるの」とささやいた。ところへ下女があわてながら、送りに出て來た。

二人は半町ほど無言のまま連れだつて來た。そのあいだ三四郎はしじゅう美禰子の事を考えている。この女はわがままに育つたに違いない。それから家庭にいて、普通の女によしよ性う以上の自由を有して、万事意のとくふるまうに違いない。こうして、だれの許諾も経ずに、自分といっしょに、往来を歩くのでもわかる。年寄りの親がなくつて、若い兄が放任主義だから、こうもできるのだろうが、これがいなかであつたらさぞ困ることだろう。この女に三輪田のお光さんのような生活を送れと言つたら、どうする気かしらん。東京は

いなかと違つて、万事があけ放しだから、こちらの女は、たいていこうなのかもわからな
いが、遠くから想像してみると、もう少しは旧式のようでもある。すると与次郎が美禰子
をイブセン流と評したのもなるほどと思い当る。ただし俗礼にかかわらないところだけが
イブセン流なのか、あるいは腹の底の思想までも、そうなのか。そこはわからない。

そのうち本郷の通りへ出た。いつしょに歩いている二人は、いつしょに歩いていながら、
相手がどこへ行くのだが、まつたく知らない。今までに横町を三つばかり曲がった。曲が
るたびに、二人の足は申し合わせたように無言のまま同じ方角へ曲がつた。本郷の通りを
四丁目の角へ来る途中で、女が聞いた。

「どこへいらつしやるの」

「あなたはどこへ行くんです」

二人はちよつと顔を見合せた。三四郎はじごくまじめである。女はこらえきれずにま
た白い歯をあらわした。

「いつしょにいらつしやい」

二人は四丁目の角を切り通しの方へ折れた。三十間ほど行くと、右側に大きな西洋館が
ある。美禰子はその前にとまつた。帯の間から薄い帳面と、印形を出して、

「お願ひ」と言つた。

「なんですか」

「これでお金を取りつてちようだい」

三四郎は手を出して、帳面を受取つた。まん中に小口当座預金通帳とあつて、横に里見美禰子殿と書いてある。三四郎は帳面と印形を持つたまま、女の顔を見て立つた。「三十円」と女が金高きんだかを言つた。あたかも毎日銀行へ金を取りに行きつけた者に対する口ぶりである。さいわい、三四郎は国にいる時分、こういう帳面を持つてたびたび豊津まで出かけたことがある。すぐ石段を上つて、戸を開けて、銀行の中へはいった。帳面と印形を係りの者に渡して、必要の金額を受け取つて出てみると、美禰子は待つていない。もう切り通しの方へ二十間ばかり歩きだしている。三四郎は急いで追いついた。すぐ受け取つたものを渡そうとして、ポケットへ手を入れると、美禰子が、「丹青会たんせいかいの展覧会を御覧になつて」と聞いた。

「まだ見ません」

「招待券じょうたいけんを二枚もらつたんですけども、つい暇がなかつたものだからまだ行かずにいたんですが、行つてみましようか」

「行つてもいいです」

「行きましよう。もうじき閉会になりますから。私、一ペんは見ておかないと原口さんに済まないのです」

「原口さんが招待券をくれたんですか」

「ええ。あなた原口さんを御存じなの？」

「広田先生の所で一度会いました」

「おもしろいかたでしよう。馬鹿囃子を稽古なさるんですつて」

「このあいだは鼓^{つづみ}をならいたいと言つっていました。それから——」

「それから？」

「それから、あなたの肖像をかくとか言つていました。本当ですか」

「ええ、高等モデルなの」と言つた。男はこれより以上に気の利いたことが言えない性質^{たち}である。それで黙つてしまつた。女はなんとか言つてもらいたかつたらしい。

三四郎はまた隠袋^{かくし}へ手を入れた。銀行の通帳^{かよいちょう}と印形を出して、女に渡した。金は帳面の間にはさんでおいたはずである。しかるに女が、

「お金は」と言つた。見ると、間にはない。三四郎はまたポケットを探つた。中から手

ずれのした札をつかみ出した。女は手を出さない。

「預かっておいてちようだい」と言つた。三四郎はいささか迷惑のような気がした。しかしこんな時に争うことを好まぬ男である。そのうえ往来だからなおさら遠慮をした。せつかく握った札をまたもとの所へ収めて、妙な女だと思つた。

学生が多く通る。すれ違う時にきっと二人を見る。なかには遠くから目をつけて来る者もある。三四郎は池の端へ出るまでの道をすこぶる長く感じた。それでも電車に乗る気にはならない。一人とものそのそ歩いている。会場へ着いたのはほとんど三時近くである。妙な看板が出ている。丹青会という字も、字の周囲についている図案も、三四郎の目にはことごとく新しい。しかし熊本では見ることのできない意味で新しいので、むしろ一種異様の感がある。中はなおさらである。三四郎の目にはただ油絵と水彩画の区別が判然と映するくらいのものにすぎない。

それでも好悪こうおはある。買つてもいいと思うのもある。しかし巧拙はまったくわからない。したがつて鑑別力のないものと、初手からあきらめた三四郎は、いつこう口をあかない。美穂子がこれはどうですかと言うと、そうですなという。これはおもしろいじやありませんかと言うと、おもしろそうですねなどいう。まるで張り合いがない。話のできないばか

か、こつちを相手にしない偉い男か、どつちかにみえる。ばかとすればてらわないところに愛嬌がある。偉いとすれば、相手にならないところが憎らしい。

長い間外国を旅行して歩いた兄妹の絵がたくさんある。双方とも同じ姓で、しかも一つ所に並べてかけてある。美禰子はその一枚の前にとまつた。

「ベニスでしょう」

これは三四郎にもわかつた。なんだかベニスらしい。ゴンドラにでも乗つてみたい心持ちがする。三四郎は高等学校にいる時分ゴンドラという字を覚えた。それからこの字が好きになつた。ゴンドラというと、女といつしょに乗らなければすまないような気がする。黙つて青い水と、水と左右の高い家と、さかさに映る家の影と、影の中にちらちらする赤い片きれどをながめていた。すると、

「兄さんのほうがよほどまいようですね」と美禰子が言つた。三四郎にはこの意味が通じなかつた。

「兄さんとは……」

「この絵は兄さんのほうでしょう」

「だれの？」

美禰子は不思議そうな顔をして、三四郎を見た。

「だつて、あつちのほうが妹さんので、こつちのほうが兄さんのじやありませんか」

三四郎は一步退いて、今通つて来た道の片側を振り返つて見た。同じように外国の景色けしきをかいたものが幾点となくかかつてゐる。

「違うんですか」

「一人と思つていらしめたの」

「ええ」と言つて、ぼんやりしてゐる。やがて二人が顔を見合わした。そうして一度に笑いだした。美禰子は、驚いたように、わざと大きな目をして、しかもいちだんと調子を落とした小声になつて、

「ずいぶんね」と言いながら、一間ばかり、すんずん先へ行つてしまつた。三四郎は立ちどまつたまま、もう一ペんベニスの掘割りをながめだした。先へ抜けた女は、この時振り返つた。三四郎は自分の方を見ていない。女は先へ行く足をぴたりと留めた。向こうから三四郎の横顔を熟視していた。

「里見さん」

だしぬけにだれか大きな声で呼んだ者がある。

美禰子も三四郎も等しく顔を向け直した。事務室と書いた入口を一間ばかり離れて、原口さんが立っている。原口さんのうしろに、少し重なり合つて、野々宮さんが立っている。美禰子は呼ばれた原口よりは、原口より遠くの野々宮を見た。見るやいなや、二、三歩あともどりをして三四郎のそばへ来た。人に目立たぬくらいに、自分の口を三四郎の耳へ近寄せた。そうして何かささやいた。三四郎には何を言つたのか、少しもわからない。聞き直そうとするうちに、美禰子は二人の方へ引き返していく。もう挨拶あいさつをしている。野々宮は三四郎に向かつて、

「妙な連れ」と来ましたね」と言つた。三四郎が何か答えようとするうちに、美禰子が、

「似合うでしよう」と言つた。野々宮さんはなんとも言わなかつた。くるりとうしろを向いた。うしろには畳一枚ほどの大きな絵がある。その絵は肖像画である。そうしていちめんに黒い。着物も帽子も背景から区別のできないほど光線を受けていないなかに、顔ばかり白い。顔はやせて、頬の肉ほおが落ちている。

「模写ですね」と野々宮さんが原口さんに言つた。原口は今しきりに美禰子に何か話している。——もう閉会である。来観者もだいぶ減つた。開会の初めには毎日事務所へ來ていたが、このごろはめつたに顔を出さない。きょうはひさしぶりに、こつちへ用があつて、

野々宮さんを引つ張つて来たところだ。うまく出つくわしたものだ。この会をしまうと、すぐ来年の準備にからなればならないから、非常に忙しい。いつもは花の時分に開くのだが、来年は少し会員のつごうで早くするつもりだから、ちょうど会を二つ続けて開くと同じことになる。必死の勉強をやらなければならぬ。それまでにぜひ美禰子の肖像をかきあげてしまうつもりである。迷惑だろうが大晦日おおみそかでもかかしてくれ。

「その代りここん所へかけるつもりです」

原口さんはこの時はじめて、黒い絵の方を向いた。野々宮さんはそのあいだぽかんとして同じ絵をながめていた。

「どうです。ベラスケスは。もつとも模写ですがね。しかもあまり上できではない」と原口がはじめて説明する。野々宮さんはなんにも言う必要がなくなつた。

「どなたがお写しになつたの」と女が聞いた。

「三井です。三井はもつとうまいんですがね。この絵はあまり感服できない」と一、二歩さがつて見た。「どうも、原画が技巧の極点に達した人のものだから、うまくいかないね」

原口は首を曲げた。三四郎は原口の首を曲げたところを見ていた。

「もう、みんな見たんですか」と画工が美禰子に聞いた。原口は美禰子にばかり話しかけ

る。

「まだ」

「どうです。もうよして、いつしょに出ちゃ。精養軒でお茶でもあげます。なにわたしは用があるから、どうせちょっと行かなければならぬ。——会の事でね、マネジャーに相談しておきたい事がある。懇意の男だから。——今ちょうどお茶にいい時分です。もう少しするとね、お茶にはおそし晩餐デナーには早し、中途はんぱになる。どうです。いつしょにいらっしゃいな」

美穂子は三四郎を見た。三四郎はどうでもいい顔をしている。野々宮は立つたまま関係しない。

「せつかく來たものだから、みんな見てゆきましょう。ねえ、小川さん」

三四郎はええと言つた。

「じゃ、こうなさい。この奥の別室にね。ふかみ深見さんの遺画があるから、それだけ見て、帰りに精養軒へいらつしやい。先へ行つて待つていますから」

「ありがとう」

「深見さんの水彩は普通の水彩のつもりで見ちやいけませんよ。どこまでも深見さんの水

彩なんだから。実物を見る気にならないで、深見さんの氣韻を見る気になつていると、なかなかおもしろいところが出てきます」と注意して、原口は野々宮と出て行つた。美穂子は礼を言つてその後影を見送つた。二人は振り返らなかつた。

女は歩をめぐらして、別室へはいった。男は一足あとから続いた。光線の乏しい暗い部屋である。細長い壁に一列にかかつてゐる深見先生の遺画を見ると、なるほど原口さん 注意したごとくほんと水彩ばかりである。三四郎が著しく感じたのは、その水彩の色が、どれもこれも薄くて、数が少なくて、対照に乏しくつて、日向へでも出きないと引き立たないと思うほど地味にかいてあるという事である。その代り筆がちつとも滯つていない。ほとんど一氣呵成に仕上げた趣がある。絵の具の下に鉛筆の輪郭が明らかに透いて見えるのも、洒落な画風がわかる。人間などになると、細くて長くて、まるで殻竿のようである。ここにもベニスが一枚ある。

「これもベニスですね」と女が寄つて來た。

「ええ」と言つたが、ベニスで急に思い出した。

「さつき何を言つたんですか」

女は「さつき?」と聞き返した。

「さつき、ぼくが立つて、あっちのベニスを見ていい時です」

女はまたまつ白な歯をあらわした。けれどもなんとも言わない。

「用でなければ聞かなくつてもいいです」

「用じやないのよ」

三四郎はまだ変な顔をしている。曇つた秋の日はもう四時を越した。部屋は薄暗くなつてくる。観覽人はきわめて少ない。別室のうちには、ただ男^{なんによ}女^{なんによ}二人の影があるのみである。女は絵を離れて、三四郎の真正面に立つた。

「野々宮さん。ね、ね」

「野々宮さん……」

「わかつたでしよう」

美穂子の意味は、大波のくずれる^ごとく一度に三四郎の胸を浸した。

「野々宮さんを愚弄^{ぐろう}したのですか」

「なんで？」

女の語気はまつたく無邪氣である。三四郎は忽然^{こつぜん}として、あとを言う勇気がなくなつた。無言のまま二、三歩動きだした。女はすがるようについて來た。

「あなたを愚弄したんじゃないのよ」

三四郎はまた立ちどまつた。三四郎は背の高い男である。上から美禰子を見おろした。

「それでいいです」

「なぜ悪いの？」

「だからいいです」

女は顔をそむけた。二人とも戸口の方へ歩いて來た。戸口を出る拍子に互いの肩が触れた。男は急に汽車で乗り合わした女を思い出した。美禰子の肉に触れたところが、夢にうずくような心持ちがした。

「ほんとうにいいの？」と美禰子が小さい声で聞いた。向こうから二、三人連の観覧者が来る。

「ともかく出ましよう」と三四郎が言つた。下足げそくを受け取つて、出ると戸外は雨だ。

「精養軒へ行きますか」

美禰子は答えなかつた。雨のなかをぬれながら、博物館前の広い原のなかに立つた。さいわい雨は今降りだしたばかりである。そのうえ激しくはない。女は雨のなかに立つて、見回しながら、向こうの森をさした。

「あの木の陰へはいりましょう」

少し待てばやみそうである。二人は大きな杉の下にはいった。雨を防ぐにはつごうのよくないう木である。けれども二人とも動かない。ぬれても立っている。二人とも寒くなつた。

女が「小川さん」と言う。男は八の字を寄せて、空を見ていた顔をの方へ向けた。

「悪くつて？　さつきのこと」

「いいです」

「だつて」と言いながら、寄つて來た。「私、なぜだか、ああしたかつたんですもの。野々宮さんに失礼するつもりじゃないんですけども」

女は瞳を定めて、三四郎を見た。三四郎はその瞳のなかに言葉よりも深き訴えを認めた。

——必竟あなたのためにした事じやありませんかと、二重瞼の奥で訴えていた。三四郎は、もう一ぺん、

「だから、いいです」と答えた。

雨はだんだん濃くなつた。しづく雲の落ちない場所はわずかしかない。二人はだんだん一つ所へかたまつてきた。肩と肩とすれ合うくらいにして立ちすくんでいた。雨の音のなかで、美穂子が、

「さつきのお金をお使いなさい」と言つた。

「借りましよう。要るだけ」と答えた。

「みんな、お使いなさい」と言つた。

九

与次郎が勧めるので、三四郎はどうとう精養軒の会へ出た。その時三四郎は黒い紬^{つむぎ}の羽織を着た。この羽織は、三輪田のお光さんのおつかさんが織つてくれたのを、紋付^{もんつき}に染めて、お光さんが縫い上げたものだと、母の手紙に長い説明がある。小包みが届いた時、いちおう着てみて、おもしろくないから、戸棚^{とだな}へ入れておいた。それを与次郎が、もつたいないからぜひ着ろ着ろと言う。三四郎が着なければ、自分が持つていって着そな勢いであつたから、つい着る気になつた。着てみると悪くはないようだ。

三四郎はこのいでたちで、与次郎と二人で精養軒の玄関に立つていた。与次郎の説によると、お客様はこうして迎えべきものだそうだ。三四郎はそんなこととは知らなかつた。第一自分がお客様のつもりでいた。こうなると、紬の羽織ではなんだか安っぽい受け付けの気

がする。制服を着てくれればよかつたと思った。そのうち会員がだんだん来る。与次郎は来る人をつらまえてきつとなんとか話をする。ことごとく旧知のようにあしらつていて。お客様が帽子と外套がいとうを給仕に渡して、広い梯子段はしごだんの横を、暗い廊下の方へ折れると、三四郎に向かつて、今のは誰だれ某それがしだと教えてくれる。三四郎はおかげで知名な人の顔をだいぶ覚えた。

そのうちお客様はほぼ集まつた。約三十人足らずである。広田先生もいる。野々宮さんもいる。——これは理学者だけれども、絵や文学が好きだからというので、原口さんが、むりに引っ張り出したのだそうだ。原口さんはむろんいる。いちばんさきへ来て、世話を焼いたり、愛嬌あいきょうを振りまいたり、フランス式の鬚ひげをつまんでみたり、万事忙しそうである。

やがて着席となつた。めいめいかつてな所へすわる。譲る者もなければ、争う者もない。そのうちでも広田先生はのろいにも似合わずいちばんに腰をおろしてしまつた。ただ与次郎と三四郎だけがいつしょになつて、入口に近く座を占めた。その他はことごとく偶然の向かい合わせ、隣同志であつた。

野々宮さんと広田先生のあいだに縞しまの羽織を着た批評家がすわつた。向こうには庄司しょうじ

という博士が座に着いた。これは与次郎のいわゆる文科で有力な教授である。フロツクを着た品格のある男であった。髪を普通の倍以上長くしている。それが電燈の光で、黒く渦をまいて見える。広田先生の坊主頭と比べるとだいぶ相違がある。原口さんはだいぶ離れて席を取つた。あちらの角だから、遠く三四郎と真向かいになる。折襟に、幅の広い黒襦子を結んださきがぱつと開いて胸いっぱいになつてゐる。与次郎が、フランスの画工チストは、みんなああいう襟飾りを着けるものだと教えてくれた。三四郎は肉汁を吸いながら、まるで兵児帯の結び目のようにだと考へた。そのうち談話がだんだん始まつた。与次郎はビールを飲む。いつものように口をきかない。さすがの男もきようは少々謹んでいるとみえる。三四郎が、小さな声で、

「ちと、データーフアブラをやらないか」と言うと、「きょうはいけない」と答えたが、すぐ横を向いて、隣の男と話を始めた。あなたの、あの論文を拝見して、大いに利益を得ましたとかなんとか礼を述べている。ところがその論文は、彼が自分の前で、さかんに罵倒したものだから、三四郎にはすこぶる不思議の思いがある。与次郎はまたこつちを向いた。

「その羽織はなかなかつぱだ。よく似合う」と白い紋をことさら注意してながめている。

その時向こうの端から、原口さんが、野々宮に話しかけた。元来が大きな声の人だから、遠くで応対するにはつごうがいい。今まで向かい合わせに言葉をかわしていた広田先生と庄司という教授は、二人の応答を途中でさえぎることを恐れて、談話をやめた。その他の人もみんな黙つた。会の中心点がはじめてできあがつた。

「野々宮さん光線の圧力の試験はもう済みましたか」

「いや、まだなかなかだ」

「ずいぶん手数てすうがかかるもんだね。我々の職業も根気仕事だが、君のほうはもつと激しいようだ」

「絵はインスピレーションですぐかけるからいいが、物理の実験はそういうまくはいかない」「インスピレーションには辟易へきえきする。この夏ある所を通つたらばあさんが二人で問答をしていた。聞いてみると梅雨つゆはもう明けたんだろうか、どうだろうかという研究なんだが、ひとりのばあさんが、昔は雷さえ鳴れば梅雨は明けるにきまつていたが、近ごろじやそうはいかないとこぼしている。すると一人がどうしてどうして、雷ぐらいで明けることじやありやしないと憤慨たいへんしていた。——絵もそのとおり、今の絵はインスピレーションぐらいでかけることじやありやしない。ねえ田村さん、小説だつて、そうだろう」

隣に田村という小説家がすわっていた。この男は自分のインスピレーションは原稿の催促以外になんにもないと答えたので、大笑いになった。田村は、それから改まって、野々宮さんに、光線に圧力があるものか、あれば、どうして試験するかと聞きだした。野々宮さんの答はおもしろかつた。――

雲母マイカか何かで、十六武藏じゅうろくむさしぐらいの大きさの薄い円盤を作つて、水晶すいしようの糸で釣るとして、真空しんくうのうちに置いて、この円盤の面めんへ弧光燈アーチランプの光を直角にあてると、この円盤が光に圧おされて動く。と言うのである。

一座は耳を傾けて聞いていた。なかにも三四郎は腹のなかで、あの福神漬ふくじんづけの缶かんのなかに、そんな装置がしてあるのだろうと、上京のさい、望遠鏡で驚かされた昔を思い出した。「君、水晶の糸があるのか」と小さい声で与次郎に聞いてみた。与次郎は頭を振っている。「野々宮さん、水晶の糸がありますか」

「ええ、水晶の粉こをね。酸水素吹管すいさんびきかんの炎で溶かしておいて、両方の手で、左右へ引っ張ると細い糸ができるのです」

三四郎は「そうですか」と言つたぎり、引っ込んだ。今度は野々宮さんの隣にいる縞の羽織の批評家が口を出した。

「我々はそういう方面へかけると、全然無学なんですが、はじめはどうして気がついたものでしような」

「理論上はマクスウェル以来予想されていたのですが、それをレベデフという人がはじめて実験で証明したのです。近ごろあの彗星の尾が、太陽の方へ引きつけられべきはずであるのに、出るたびにいつでも反対の方角になびくのは光の圧力で吹き飛ばされるんじやなかろうかと思いついた人もあるくらいです」

批評家はだいぶ感心したらしい。

「思いつきもおもしろいが、第一大きくていいですね」と言つた。

「大きいばかりじゃない、罪がなくつて愉快だ」と広田先生が言つた。

「それでその思いつきがはずれたら、なお罪がなくつていい」と原口さんが笑つている。

「いや、どうもあたつているらしい。光線の圧力は半径の二乗に比例するが、引力のほうは半径の三乗に比例するんだから、物が小さくなればなるほど引力のほうが負けて、光線の圧力が強くなる。もし彗星の尾が非常に細かい小片からできているとすれば、どうしても太陽とは反対の方へ吹き飛ばされるわけだ」

野々宮は、ついまじめになつた。すると原口が例の調子で、

「罪がない代りに、たいへん計算がめんどくなってきた。やつぱり一利一害だ」と言った。この一言で、人々はもとのとおりビールの気分に復した。広田先生が、こんな事を言う。

「どうも物理学者は自然派じやだめのようだね」

物理学者と自然派の二字は少なからず満場の興味を刺激した。

「それはどういう意味ですか」と本人の野々宮さんが聞き出した。広田先生は説明しなければならなくなつた。

「だつて、光線の圧力を試験するために、目だけあけて、自然を観察していたつて、だめだからさ。自然の献立こんだてのうちに、光線の圧力という事実は印刷されていないようじやないか。だから人工的に、水晶の糸だの、真空だの、雲母マイカだのという装置をして、その圧力が物理学者の目に見えるように仕掛けるのだろう。だから自然派じやないよ」

「しかし浪漫派ローマンはでもないだろう」と原口さんがまぜ返した。

「いや浪漫派だ」と広田先生がもつたいらしく弁解した。「光線と、光線を受けるものとを、普通の自然界においては見出せないような位置関係に置くところがまったく浪漫派じやないか」

「しかし、いつたんそういう位置関係に置いた以上は、光線固有の圧力を観察するだけだから、それからあとは自然派でしょうね」と野々宮さんが言つた。

「すると、物理学者は浪漫的自然派ですね。文学のほうでいうと、イブセンのようなものじやないか」と筋向こうの博士が比較を持ち出した。

「さよう、イブセンの劇は野々宮君と同じくらいな装置があるが、その装置の下に働く人物は、光線のように自然の法則に従つているか疑わしい」これは縞の羽織の批評家の言葉であつた。

「そうかもしけないが、こういうことは人間の研究上記憶しておくべき事だと思う。——すなわち、ある状況のもとに置かれた人間は、反対の方向に働きうる能力と権力とを有している。ということなんだが、——ところが妙な習慣で、人間も光線も同じように器械的の法則に従つて活動すると思うものだから、時々とんだ間違いができる。おこらせようと思つて装置をすると、笑つたり、笑わせようともくろんでかかると、おこつたり、まるで反対だ。しかしどちらにしても人間に違ひない」と広田先生がまた問題を大きくしてしまつた。

「じゃ、ある状況のもとに、ある人間が、どんな所作をしてもしぜんだということになり

ますね」と向こうの小説家が質問した。広田先生は、すぐ、

「ええ、ええ。どんな人間を、どう描いても世界に一人くらいはいるようじゃないですか」と答えた。「じつさい人間たる我々は、人間らしからざる行為動作を、どうしたつて想像できるものじゃない。ただへたに書くから人間と思われないのじゃないですか」

小説家はそれで黙つた。今度は博士がまた口をきいた。

「物理学者でも、ガリレオが寺院の釣りランプの一振動の時間が、振動の大小にかかわらず同じであることに気がついたり、ニュートンが林檎りんごが引力で落ちるのを発見したりするのは、はじめから自然派ですね」

「そういう自然派なら、文学のほうでも結構でしょう。原口さん、絵のほうでも自然派がありますか」と野々宮さんが聞いた。

「あるとも。恐るべきクールベエというやつがいる。〔ve'reite' 《ヴエリテ》 vraie 《ヴレイ》〕なんでも事実でなければ承知しない。しかしそう 猥獈しようけつを極めているものじゃない。ただ一派として存在を認められるだけさ。またそうでなくつちや困るからね。小説だつて同じことだろう、ねえ君。やっぱりモローや、シャバンヌのようなのもいるはずだろうじやないか」

「いるはずだ」と隣の小説家が答えた。

食後には卓上演説も何もなかつた。ただ原口さんが、しきりに九段くくだんの上の銅像の悪口わるくちを言つていた。あんな銅像をむやみに立てられては、東京市民が迷惑する。それより、美しい芸者の銅像でもこしらえるほうが気が利いているという説であつた。与次郎は三四郎に九段の銅像は原口さんと仲の悪い人が作つたんだと教えた。

会が済んで、外へ出るといい月であつた。今夜の広田先生は庄司博士によい印象を与えたろうかと与次郎が聞いた。三四郎は与えたらうと答えた。与次郎は共同水道栓せんのそばに立つて、この夏、夜散歩に来て、あまり暑いからここで水を浴びていたら、巡査に見つかって、擂鉢山すりばちやまへ駆け上がつたと話した。二人は擂鉢山の上で月を見て帰つた。

帰り道に与次郎が三四郎に向かつて、突然借金の言い訳をしだした。月のさえた比較的寒い晩である。三四郎はほとんど金の事などは考えていなかつた。言い訳を聞くのでさえない。どうせ返すことはあるまいと思つてゐる。与次郎もけつして返すとは言わぬ。ただ返せない事情をいろいろに話す。その話し方のほうが三四郎にはよほどおもしろい。——自分の知つてるさる男が、失恋の結果、世の中がいやになつて、とうとう自殺をしようと決心したが、海もいや川もいや、噴火口はなおいや、首をくくるのはもつとも

いやというわけで、やむをえず短銃ピストルを買つてきた。買つてきて、まだ目的を遂行しないうちに、友だちが金を借りにきた。金はないと断つたが、ぜひどうかしてくれと訴えるので、しかたなしに、大事の短銃を貸してやつた。友だちはそれを質に入れて一時をしのいだ。つづこうがついて、質を受け出して返しにきた時は、肝心の短銃の主はもう死ぬ気がなくなつていた。だからこの男の命は金を借りにこられたために助かつたと同じ事である。「そういう事もあるからなあ」と与次郎が言つた。三四郎にはただおかしいだけである。そのほかにはなんらの意味もない。高い月を仰いで大きな声を出して笑つた。金を返されないでも愉快である。与次郎は、

「笑つちやいかん」と注意した。三四郎はなおおかしくなつた。

「笑わないで、よく考えてみろ。おれが金を返さなければこそ、君が美穂子さんから金を借りることができたんだろう」

三四郎は笑うのをやめた。

「それで？」

「それだけでたくさんじやないか。——君、あの女を愛しているんだろう」

与次郎はよく知つてゐる。三四郎はふんと言つて、また高い月を見た。月のそばに白い

雲が出た。

「君、あの女には、もう返したのか」

「いいや」

「いつまでも借りておいてやれ」

のん気な事を言う。三四郎はなんとも答えなかつた。しかしいつまでも借りておく気はもろんなかつた。じつは必要な二十円を下宿へ払つて、残りの十円をそのあくる日すぐ里見の家へ届けようと思つたが、今返してはかえつて、好意にそむいて、よくないと考え直して、せつかく門内に、はいられる機会を犠牲にしてまでも引き返した。その時何かの拍ひ子で、気がゆるんで、その十円をくずしてしまつた。じつは今夜の会費もそのうちから出でている。自分ばかりではない。与次郎のもそのうちから出でている。あとには、ようやく二、三円残つてゐる。三四郎はそれで冬シャツを買おうと思つた。

じつは与次郎がとうてい返しそうもないから、三四郎は思いきつて、このあいだ国元くにもとへ三十円の不足を請求した。十分な学資を月々もらつていながら、ただ不足だからといって請求するわけにはゆかない。三四郎はあまり嘘うそをついたことのない男だから、請求の理由にいたつて困却した。しかたがないからただ友だちが金をなくして弱つていたから、つ

い気の毒になつて貸してやつた。その結果として、今度はこつちが弱るようになつた。どうか送つてくれと書いた。

すぐ返事を出してくれれば、もう届く時分であるのにまだ来ない。今夜あたりはことによると来ているかもしけぬくらいに考えて、下宿へ帰つてみると、はたして、母の手蹟で書いた封筒がちゃんと机の上に乗つてゐる。不思議なことに、いつも必ず書留で來るのが、きょうは三銭切手一枚で済ましてある。開いてみると、中はいつになく短かい。母としては不親切なくらい、用事だけで申し納めてしまつた。依頼の金は野々宮さんの方へ送つたから、野々宮さんから受け取れというさしずにすぎない。三四郎は床を取つてねた。

翌日もその翌日も三四郎は野々宮さんの所へ行かなかつた。野々宮さんのほうでもなんともいつてこなかつた。そうしてゐるうちに一週間ほどたつた。しまいに野々宮さんから、下宿の下女を使いに手紙をよこした。おつかさんから頼まれものがあるから、ちょっと来てくれるとある。三四郎は講義の隙すきを見て、また理科大学の穴倉へ降りていつた。そこで立たちばなし談のあいだに事を済ませようと思つたところが、そううまくはいかなかつた。この夏は野々宮さんだけで専領していた部屋に髭ひげのはえた人が二、三人いる。制服を着た学生も二、三人いる。それが、みんな熱心に、静せい肅しゆくに、頭の上の日のあたる世界をよそに

して、研究をやつてゐる。そのうちで野々宮さんはもつとも多忙に見えた。部屋の入口に顔を出した三四郎をちょっと見て、無言のまま近寄ってきた。

「国から、金が届いたから、取りに来てくれたまえ。今ここに持つていなかから。それからまだほかに話す事もある」

三四郎ははあと答えた。今夜でもいいかと尋ねた。野々宮はすこしく考えていたが、しまいに思いきつてよろしいと言つた。三四郎はそれで穴倉を出た。出ながら、さすがに理学者は根気のいいものだと感心した。この夏見た福神漬ふくじんづけの缶かんと、望遠鏡が依然としてもとのどおりの位置に備えつけてあつた。

次の講義の時間に与次郎に会つてこれこれだと話すと、与次郎はばかだと言わぬいばかりに三四郎をながめて、

「だからいつまでも借りておいてやれと言つたのに。よけいな事をして年寄りには心配をかける。宗八さんにはお談義をされる。これくらい愚な事はない」とまるで自分から事が起こつたとは認めていない申し分である。三四郎もこの問題に関しては、もう与次郎の責任を忘れてしまつた。したがつて与次郎の頭にかかる返事をした。

「いつまでも借りておくのは、いやだから、家へそう言つてやつたんだ」

「君はいやでも、向こうでは喜ぶよ」

「なぜ」

このなぜが三四郎自身にはいくぶんか虚偽の響らしく聞こえた。しかし相手にはなんらの影響も与えなかつたらしい。

「あたりまえじやないか。ぼくを人にしたつて、同じことだ。ぼくに金が余つているとするぜ。そうすれば、その金を君から返してもらうよりも、君に貸しておくほうがいい心持ちだ。人間はね、自分が困らない程度内で、なるべく人に親切がしてみたいものだ」

三四郎は返事をしないで、講義を筆記しはじめた。二、三行書きだすと、与次郎がまた、耳のそばへ口を持つてきた。

「おれだつて、金のある時はたびたび人に貸したことがある。しかしだれもけつして返したものがない。それだからおれはこのとおり愉快だ」

三四郎はまさか、そうかとも言えなかつた。薄笑いをしただけで、またペンを走らしはじめた。与次郎もそれからはおちついて、時間の終るまで口をきかなかつた。

ベルが鳴つて、二人肩を並べて教場を出る時、与次郎が、突然聞いた。

「あの女は君にほれているのか」

二人のあとから続々聴講生が出てくる。三四郎はやむをえず無言のまま梯子段^{はしごだん}を降りて横手の玄関から、図書館わきの空地^{あきち}へ出て、はじめて与次郎を顧みた。

「よくわからない」

与次郎はしばらく三四郎を見ていた。

「そういうこともある。しかしよくわかつたとして、君、あの女の夫^{ハスバンド}になれるか」

三四郎はいまだかつてこの問題を考えたことがなかつた。美禰子に愛せられるという事実そのものが、彼^{かのんな}女^{ハスバンド}の夫^{ハスバンド}たる唯一^{ゆいいつ}の資格のような気がしていた。言われてみると、なるほど疑問である。三四郎は首を傾げた。

「野々宮さんならなれる」と与次郎が言つた。

「野々宮さんと、あの人とは何か今までに関係があるのか」

三四郎の顔は彫りつけたようにまじめであつた。与次郎は一口、「知らん」と言つた。三四郎は黙つている。

「また野々宮さんの所へ行つて、お談義を聞いてこい」と言いすぎて、相手は池の方へ行きかけた。三四郎は愚劣の看板のごとく突つ立つた。与次郎は五、六歩行つたが、また笑いながら帰つてきた。

「君、いつそ、よし子さんをもらわないか」と言いながら、三四郎を引っ張つて、池の方へ連れて行つた。歩きながら、あれならいい、あれならいいと、二度ほど繰り返した。そのうちまたベルが鳴つた。

三四郎はその夕方野々宮さんの所へ出かけたが、時間がまだすこし早すぎるので、散歩かたがた四丁目まで来て、シャツを買いに大きな唐物屋とうぶつやへはいった。小僧が奥からいろいろ持つてきたのをなでてみたり、広げてみたりして、容易に買わない。わけもなく鷹揚おうようにかまえていると、偶然美禰子とよし子が連れ立つて香水を買いに来た。あらと言つて挨拶をしたあとで、美禰子が、

「せんだつてはありがとう」と礼を述べた。三四郎にはこのお礼の意味が明らかにわかつた。美禰子から金を借りたあくる日もう一ぺん訪問して余分をすぐに返すべきところを、ひとまず見合させた代りに、二日ばかり待つて、三四郎は丁寧な礼状を美禰子に送つた。

手紙の文句は、書いた人の、書いた当時の気分をすなおに表わしたものではあるが、むろん書きすぎている。三四郎はできるだけの言葉を層々そうそうと排列して感謝の意を熱烈にいたした。普通の者から見ればほとんど借金の礼状とは思われないくらいに、湯気の立つたものである。しかし感謝以外には、なんにも書いてない。それだから、自然の勢い、感謝

が感謝以上になつたのもある。三四郎はこの手紙をポストに入れる時、時を移さぬ美禰子の返事を予期していた。ところがせつかくの封書はただ行つたままである。それから美禰子に会う機会はきょうまでなかつた。三四郎はこの微弱なる「このあいだはありがとう」という反響に対して、はつきりした返事をする勇気も出なかつた。大きなシャツを両手で目のさきへ広げてながめながら、よし子がいるからああ冷淡なんだろうかと考えた。それからこのシャツもこの女の金で買うんだなと考へた。小僧はどれになさいますと催促した。

二人の女は笑いながらそばへ来て、いつしょにシャツを見てくれた。しまいに、よし子が「これになさい」と言つた。三四郎はそれにした。今度は三四郎のほうが香水の相談を受けた。いつこうわからない。ヘリオトロープと書いてある籠びんを持って、いいかげんに、これはどうですと言うと、美禰子が、「それにしましよう」とすぐ決めた。三四郎は氣の毒なくらいであつた。

表へ出て別れようとすると、女のほうが互いにお辞儀を始めた。よし子が「じや行つてきてよ」と言うと、美禰子が、「お早く……」と言つてゐる。聞いてみて、妹が兄の下宿へ行くところだということがわかつた。三四郎はまたきれいな女と二人連で追分の方へ歩くべき宵よいとなつた。日はまだまったく落ちていない。

三四郎はよし子といつしょに歩くよりは、よし子といつしょに野々宮の下宿で落ち合わねばならぬ機会をいささか迷惑に感じた。いつそのこと今夜は家へ帰つて、また出直そとかと考えた。しかし、与次郎のいわゆるお談義を聞くには、よし子がそばにいてくれるほうが便利かもしけない。まさか人の前で、母から、こういう依頼があつたと、遠慮なしの注意を与えるわけはなかろう。ことによると、ただ金を受け取るだけで済むかもわからぬい。——三四郎は腹の中で、ちよつとずるい決心をした。

「ぼくも野々宮さんの所へ行くところです」

「そう、お遊びに？」

「いえ、すこし用があるんです。あなたは遊びですか」

「いいえ、私も御用なの」

両方が同じようなことを聞いて、同じような答を得た。しかし両方とも迷惑を感じている氣色^{けじき}がさらにはない。三四郎は念のため、じやまじやないかと尋ねてみた。ちつともじやまにはならないそうである。女は言葉でじやまを否定したばかりではない。顔ではむしろなぜそんなことを質問するかと驚いている。三四郎は店先のガスの光で、女の黒い目の中に、その驚きを認めたと思った。事実としては、ただ大きく黒く見えたばかりである。

「バイオリンを買いましたか」

「どうして御存じ」

三四郎は返答に窮した。女は頓着なく、すぐ、こう言つた。
 「いくら兄さんにそう言つても、ただ買ってやる、買つてやると言うばかりで、ちつとも
 買つてくれなかつたんですね」

三四郎は腹の中で、野々宮よりも広田よりも、むしろ与次郎を非難した。
 二人は追分の通りを細い路地に折れた。折れると中に家がたくさんある。暗い道を戸ご
 との軒燈が照らしている。その軒燈の一つの前にとまつた。野々宮はこの奥にいる。

三四郎の下宿とはほどんど一丁ほどの距離である。野々宮がここへ移つてから、三四郎
 は二、三度訪問したことがある。野々宮の部屋は広い廊下を突き当つて、二段ばかりまつ
 すぐ上ると、左手に離れた二間である。南向きによその広い庭をほどんど椽の下に控
 えて、昼も夜も至極静かである。この離れ座敷に立てこもつた野々宮さんを見た時、なる
 ほど家を置んで下宿をするのも悪い思いつきではなかつたと、はじめて来た時から、感心
 したくらい、居心地のいい所である。その時野々宮さんは廊下へ下りて、下から自分の部
 屋の軒を見上げて、ちょっと見たまえ、藁葺わらぶきだと言つた。なるほど珍しく屋根に瓦を置

いてなかつた。

きょうは夜だから、屋根はむろん見えないが、部屋の中には電燈がついている。三四郎は電燈を見るやいなや藁葺を思い出した。そうしておかしくなつた。

「妙なお客が落ち合つたな。入口で会つたのか」と野々宮さんが妹に聞いている。妹はしからざるむねを説明している。ついでに三四郎のようなシャツを買つたらよからうと助言している。それから、このあいだのバイオリンは和製で音が悪くつていけない。買つのをこれまで延期したのだから、もうすこし良いのと買いかえてくれと頼んでいる。せめて美禰子さんくらいのなら我慢すると言つてはいる。そのほか似たりよつたりの駄々だだをしきりにこねている。野々宮さんはべつだんこわい顔もせず、といつて、優しい言葉もかけず、ただそつかうかと聞いてはいる。

三四郎はこのあいだなんにも言わずにいた。よし子は愚な事ばかり述べる。かつ少しも遠慮をしない。それがばかとも思えなければ、わがままとも受け取れない。兄との応待をそばにいて聞いていると、広い日あたりのいい畠へ出たような心持ちがする。三四郎は來たるべきお談義の事をまるで忘れてしまつた。その時突然驚かされた。

「ああ、わたし忘れていた。美禰子さんのお言伝ことづてがあつてよ」

「そうか」

「うれしいでしよう。うれしくなくつて？」

野々宮さんはかゆいような顔をした。そうして、三四郎の方を向いた。

「ぼくの妹はばかですね」と言つた。三四郎はしかたなしに、ただ笑つていた。

「ばかじやないわ。ねえ、小川さん」

三四郎はまた笑つていた。腹の中ではもう笑うのがいやになつた。

「美禰子さんがね、兄さんに文芸協会の演芸会に連れて行つてちようだいつて」

「里見さんといつしょに行つたらよからう」

「御用があるんですつて」

「お前も行くのか」

「むろんだわ」

野々宮さんは行くとも行かないとも答えなかつた。また三四郎の方を向いて、今夜妹を

呼んだのは、まじめの用があるんだのに、あんなのん気ばかり言つて困ると話した。

聞いてみると、学者だけあつて、存外淡泊である。よし子に縁談の口がある。国へそう言つてやつたら、両親も異存はないと返事をしてきつた。それについて本人の意見をよく確か

める必要が起つたのだと言う。三四郎はただ結構ですと答えて、なるべく早く自分のほうを片づけて帰ろうとした。そこで、

「母からあなたにごめんどうを願つたそうで」と切り出した。野々宮さんは、「なに、大してめんどうでもありませんがね」とすぐに机の引出しから、預かつたものを出して、三四郎に渡した。

「おつかさんが心配して、長い手紙を書いてよこしましたよ。三四郎は余儀ない事情で月々の学資を友だちに貸したと言うが、いくら友だちだつて、そうむやみに金を借りるものじやあるまいし、よし借りたつて返すはずだろうつて。いなかの者は正直だから、そういうのもむりはない。それからね、三四郎が貸すにしても、あまり貸し方が大げさだ。親から月々学資を送つてもらう身分でいながら、一度に二十円の三十円のと、人に用立てるなんて、いかにも無分別だとあるんですがね——なんだかぼくに責任があるよう書いてあらから困る。……」

野々宮さんは三四郎を見て、にやにや笑つている。三四郎はまじめに、「お氣の毒です」と言つたばかりである。野々宮さんは、若い者を、極めつけるつもりで言つたんないとみて、少し調子を変えた。

「なに、心配することはありませんよ。なんでもない事なんだから。ただおつかさんは、いなかの相場で、金の価値をつけるから、三十円がたいへん重くなるんだね。なんでも三十円あると、四人の家族が半年^{はんねん}食つていけると書いてあつたが、そんなものかな、君」と聞いた。よし子は大きな声を出して笑つた。三四郎にもばかげているところがすこぶるおかしいんだが、母の言^{いいじょう}条^{じょう}が、まつたく事實を離れた作り話でないのだから、そこに気がついた時には、なるほど軽率な事をして悪かつたと少しく後悔した。

「そうすると、月に五円のわりだから、一人前一円二十五銭にあたる。それを三十日に割りつけると、四銭ばかりだが——いくらいなかでも少し安すぎるようだな」と野々宮さんが計算を立てた。

「何を食べたら、そのくらいで生きていられるでしょう」とよし子がまじめに聞きだした。三四郎も後悔する暇がなくなつて、自分の知つていていなか生活のありさまをいろいろ話して聞かした。そのなかには宮籠り^{みやごり}という慣例もあつた。三四郎の家では、年に一度ずつ村全体へ十円寄付することになつてゐる。その時には六十戸^こから一人ずつ出て、その六十人が、仕事を休んで、村のお宮へ寄つて、朝から晩まで、酒を飲みつづけに飲んで、ごちそうを食いつづけに食うんだという。

「それで十円」とよし子が驚いていた。お談義はこれでどこかへいったらしい。それから少し雑談をして一段落ついた時に、野々宮さんがあらためて、こう言つた。

「なにしろ、おつかさんのほうではね。ぼくが一応事情を調べて、不都合がないと認めたら、金を渡してくれ。そうしてめんどうでもその事情を知らせてもらいたいというんだが、金は事情もなんにも聞かないうちに、もう渡してしまつたしと、——どうするかね。君たしかに佐々木に貸したんですね」

三四郎は美禰子からもれて、よし子に伝わつて、それが野々宮さんに知れているんだと判じた。しかしその金が巡り巡つてバイオリンに変形したものとは、兄妹きょうだいとも気がつかないから一種妙な感じがした。ただ「そうです」と答えておいた。

「佐々木が馬券を買つて、自分の金をなくしたんだつてね」

「ええ」

よし子はまた大きな声を出して笑つた。

「じゃ、いいかげんにおつかさんの所へそう言つてあげよう。しかし今度から、そんな金はもう貸さないことにしたらいいでしよう」

三四郎は貸さないことにするむねを答えて、挨拶をして、立ちかけると、よし子も、も

う帰ろうと言ひ出した。

「さつきの話をしなくつちや」と兄が注意した。

「よくつてよ」と妹が拒絕した。

「よくはないよ」

「よくつてよ。知らないわ」

兄は妹の顔を見て黙つている。妹は、またこう言つた。

「だつてしかたがないじや、ありませんか。知りもしない人の所へ、行くか行かないかつて、聞いたつて。好きでもきらいでもないんだから、なんにも言いようはありやしないわ。だから知らないわ」

三四郎は知らないわの本意をようやく会得した。^{えどく}兄妹をそのままにして急いで表へ出た。人の通らない軒燈ばかり明らかな路地を抜けて表へ出ると、風が吹く。北へ向き直ると、まともに顔へ当る。時を切つて、自分の下宿の方から吹いてくる。その時三四郎は考えた。この風の中を、野々宮さんは、妹を送つて里見まで連れていつてやるだろう。

下宿の二階へ上つて、自分の部屋へはいつて、すわつてみると、やつぱり風の音がする。三四郎はこういう風の音を聞くたびに、運命という字を思い出す。どうと鳴つてくるたび

にすくみたくなる。自分ながらけつして強い男とは思つていなし。考えると、上京以来自分の運命はたいがい与次郎のためにこしらえられている。しかも多少の程度において、和氣靄然たる翻弄ほんろうを受けるようにこしらえられている。与次郎は愛すべき悪戯者いたずらものである。向後もこの愛すべき悪戯者のために、自分の運命を握られていそうに思う。風がしきりに吹く。たしかに与次郎以上の風である。

三四郎は母から來た三十円を枕まくら元もとへ置いて寝た。この三十円も運命の翻弄が生んだものである。この三十円がこれからさきどんな働きをするか、まるでわからない。自分はこれを美禰子に返しに行く。美禰子がこれを受け取る時に、また一ひと煽あおり来るにきまつている。三四郎はなるべく大きく来ればいいと思つた。

三四郎はそれなり寝ついた。運命も与次郎も手を下しようのないくらいすこやかな眠りに入った。すると半鐘の音で目がさめた。どこかで人声がする。東京の火事はこれで二へん目である。三四郎は寝巻の上へ羽織を引っかけて、窓を開けた。風はだいぶ落ちている。向こうの二階屋が風の鳴る中に、まつ黒に見える。家が黒いほど、家のうしろの空は赤かつた。

三四郎は寒いのを我慢して、しばらくこの赤いものを見つめていた。その時三四郎の頭

には運命がありありと赤く映つた。三四郎はまた暖かい蒲団の中にもぐり込んだ。そうして、赤い運命の中で狂い回る多くの人の身の上を忘れた。

夜が明ければ常の人である。制服をつけて、ノートを持つて、学校へ出た。ただ三十円を懐ふところにすることだけは忘れなかつた。あいにく時間割のつごうが悪い。三時までぎつしり詰まつてゐる。三時過ぎに行けば、よし子も学校から帰つて來てゐるだろ。ことによれば里見恭助という兄も在宅かも知れない。人がいては、金を返すのが、まつたくだめのような気がする。

また与次郎が話しかけた。

「ゆうべはお談義を聞いたか」

「なにお談義というほどでもない」

「そうだろう、野々宮さんは、あれで理由のわかつた人だからな」と言つてどこかへ行つてしまつた。二時間後の講義の時にまた出会つた。

「広田先生のことは大丈夫うまくいきそうだ」と言う。どこまで事が運んだか聞いてみると、

「いや心配しないでもいい。いずれゆつくり話す。先生が君がしばらく来ないと言つて、

聞いていたぜ。時々行くがいい。先生は一人ものだからな。我々が慰めてやらんと、いかな。今度何か買って來い」と言いつぱなして、それなり消えてしまつた。すると、次の時間にまたどこからか現われた。今度はなんと思つたか、講義の最中に、突然、

「金受け取つたりや」と電報のようなものを白紙しらかみへ書いて出した。三四郎は返事を書こうと思つて、教師の方を見ると、教師がちゃんとこつちを見ている。白紙を丸めて足の下へなげた。講義が終るのを待つて、はじめて返事をした。

「金は受け取つた、ここにある」

「そうかそれはよかつた。返すつもりか」

「むろん返すさ」

「それがよからう。はやく返すがいい」

「きよう返そうと思う」

「うん昼過ぎおそらくならいるかもしけない」

「どこかへ行くのか」

「行くとも、毎日毎日絵にかかりに行く。もうよっぽどできただろう」

「原口さんの所か」

「うん」

三四郎は与次郎から原口さんの宿所を聞きとつた。

一〇

広田先生が病氣だというから、三四郎が見舞いに来た。門をはいると、玄関に靴くつが一足そろえてある。医者かもしれないと思つた。いつものとおり勝手口へ回るとだれもいない。のそのそ上がり込んで茶の間へ来ると、座敷で話しがする。三四郎はしばらくたたずんでいた。手にかなり大きな風呂敷包みふろしきつつをさげている。中には樽たる柿がきがいっぱいはいつている。今度来る時は、何か買つてこいと、与次郎の注意があつたから、追分の通りで買つて來た。すると座敷のうちで、突然どたりばたりという音がした。だれか組打ちを始めたらしい。三四郎は必定喧嘩けんかと思ひ込んだ。風呂敷包みをさげたまま、仕切りの唐紙からかみを鋭どく一尺ばかりあけてきつとのぞきこんだ。広田先生が茶の袴はかまをはいた大きな男に組み敷かれている。先生は俯伏しの顔をきわどく畳から上げて、三四郎を見たが、にやりと笑いながら、

「やあ、おいで」と言つた。上の男はちょっと振り返つたままである。

「先生、失礼ですが、起きてごらんなさい」と言う。なんでも先生の手を逆に取つて、肘^{ひじ}の関節^{つな}を表から、膝^{ひざ}頭^{がしら}で押さえているらしい。先生は下から、とうてい起きられないむねを答えた。上の男は、それで、手を離して、膝を立てて、袴^{ひだ}の襞^{ひだ}を正しく、いざまいを直した。見ればりっぱな男である。先生もすぐ起き直つた。

「なるほど」と言つている。

「あの流でいくと、むりに逆らつたら、腕を折る恐れがあるから、危険です」

三四郎はこの問答で、はじめて、この両人の今何をしていたかを悟つた。

「御病気だそうですが、もうよろしいんですか」

「ええ、もうよろしい」

三四郎は風呂敷包みを解いて、中にあるものを、二人の間に広げた。

「柿を買って来ました」

広田先生は書斎へ行つて、ナイフを取つて来る。三四郎は台所から包丁^{ほうちょう}を持つて來た。三人で柿を食ひだした。食いながら、先生と知らぬ男はしきりに地方の中學の話を始めた。生活難の事、紛擾^{ふんじょう}の事、一つ所に長くとまつていられぬ事、学科以外に柔術の

教師をした事、ある教師は、下駄の台を買って、鼻緒は古いのを、すげかえて、用いられるだけ用いるぐらいにしている事、今度辞職した以上は、容易に口が見つかりそうもない事、やむをえず、それまで妻を国元へ預けた事——なかなか尽きそうもない。

三四郎は柿の核たねを吐き出しながら、この男の顔を見ていて、情けなくなつた。今の自分と、この男と比較してみると、まるで人種が違うような気がする。この男の言葉のうちに、もう一ぺん学生生活がしてみたい。学生生活ほど気楽なものはないという文句が何度も繰り返された。三四郎はこの文句を聞くたびに、自分の寿命もわずか二、三年のあいだなかしらんと、ぼんやり考へはじめた。与次郎と蕎麦そばなどを食う時のように、気がさえない。

広田先生はまた立つて書斎に入つた。帰つた時は、手に一巻の書物を持っていた。表紙が赤黒くつて、切り口の埃ほこりでよごれたものである。

「これがこのあいだ話したハイドリオタフヒア。退屈なら見ていたまえ」

三四郎は礼を述べて書物を受け取つた。

「寂寞の瞿粟花けいじゆかを散らすやしきりなり。人の記念に対しては、永劫えいごうに価するといなとを問うことなし」という句が目についた。先生は安心して柔術の学士と談話をつづける。――

—中学教師などの生活状態を聞いてみると、みな気の毒なものばかりのようだが、真に気の毒と思うのは当人だけである。なぜというと、現代人は事実を好むが、事実に伴なう情操は切り捨てる習慣である。切り捨てなければならないほど世間が切迫しているのだからしかたがない。その証拠には新聞を見るとわかる。新聞の社会記事は十の九まで悲劇である。けれども我々はこの悲劇を悲劇として味わう余裕がない。ただ事実の報道として読むだけである。自分の取る新聞などは、死人何十人と題して、一日に変死した人間の年齢、戸籍、死因を六号活字で一行ずつに書くことがある。簡潔明瞭の極である。また泥棒どろぼう早見はやみという欄があつて、どこへどんな泥棒がはいつたか、一目にわかるように泥棒がかたまつている。これも至極便利である。すべてが、この調子と思わなくつちやいけない。辞職もそのとおり。当人には悲劇に近いでき事かもしれないが、他人にはそれほど痛切な感じを与えないと覚悟しなければなるまい。そのつもりで運動したらよからう。

「だつて先生くらい余裕があるなら、少しは痛切に感じてもよさそうなものだが」と柔術の男がまじめな顔をして言つた。この時は広田先生も三四郎も、そう言つた当人も一度に笑つた。この男がなかなか帰りそうもないのに三四郎は、書物を借りて、勝手から表へ出した。

「朽ちざる墓に眠り、伝わる事に生き、知らるる名に残り、しからずば滄桑の変に任せ
て、後の世に存せんと思う事、昔より人の願いなり。この願いのかなえるとき、人は天国
にあり。されども真なる信仰の教法よりみれば、この願いもこの満足も無きがごとくには
かなきものなり。生きるとは、再び我に帰るの意にして、再び我に帰るとは、願いにもあ
らず、望みにもあらず、気高き信者の見たるあからさまなる事実なれば、聖徒イノセント
の墓地に横たわるは、なおエジプトの砂中にうずまるがごとし。常住の我身を観じ喜べば、
六尺の狭きもアドリエーナスの大廟たいびょうと異なる所あらず。成るがままに成るとのみ覺悟
せよ」

これはハイドリオタフヒアの末節である。三四郎はぶらぶら白山はくさんの方へ歩きながら、
往来の中で、この一節を読んだ。広田先生から聞くところによると、この著者は有名な名
文家で、この一編は名文家の書いたうちの名文であるそうだ。広田先生はその話をした時
に、笑いながら、もつともこれは私の説じやないよと断わられた。なるほど三四郎にもど
こが名文だかよくわからない。ただ句切りが悪くって、字づかいが異様で、言葉の運び方
が重苦しくって、まるで古いお寺を見るような気持ちがしただけである。この一節だけ読
むにも道程みちのりにすると、三、四町もかかった。しかもはつきりとはしない。

贏かえたところは物寂さない。奈良の大仏の鐘について、そのなごりの響が、東京にいる自分の耳にかすかに届いたと同じことである。三四郎はこの一節のもたらす意味よりも、その意味の上に這いかかる情緒の影をうれしがつた。三四郎は切実に生死の問題を考えることのない男である。考えるには、青春の血が、あまりに暖かすぎる。目の前には眉を焦がすほどな大きな火が燃えている。その感じが、眞の自分である。三四郎はこれから曙の町の原口の所へ行く。

子供の葬式が来た。羽織を着た男がたつた二人ついている。小さい棺はまつ白な布で巻いてある。そのそばにきれいな風車を結いつけた。車がしきりに回る。車の羽弁が五色に塗つてある。それが一色になつて回る。白い棺はきれいな風車を絶え間なく動かして、三四郎の横を通り越した。三四郎は美しい弔いだと思つた。

三四郎は人の文章と、人の葬式をよそから見た。もしだれか来て、ついでに美禰子をよそから見ると注意したら、三四郎は驚いたに違いない。三四郎は美禰子をよそから見ることができないような目になつてゐる。第一よそもよそでないもそんな区別はまるで意識していない。ただ事実として、ひとの死に対しても、美しい穏やかな味わいがあるとともに、生きている美禰子に対しては、美しい享樂の底に、一種の苦悶がある。三四郎はこの

苦悶を払おうとして、まっすぐに進んで行く。進んで行けば苦悶がとれるようだと思つた。苦悶をとるために一足わきへのくことは夢にも案じえない。これを案じえない三四郎は、現に遠くから、寂滅の会を文字の上にながめて、夭折の哀れを、三尺の外に感じたのである。しかも、悲しいはずのところを、快くながめて、美しく感じたのである。

曙町へ曲がると大きな松がある。この松を目標に来いと教わった。松の下へ来ると、家が違つてゐる。向こうを見るとまた松がある。その先にも松がある。松がたくさんある。三四郎は好い所だとと思つた。多くの松を通り越して左へ折れると、生垣にきれいな門がある。はたして原口という標札が出ていた。その標札は木理の込んだ黒っぽい板に、緑の油で名前を派手に書いたものである。字だか模様だかわからないくらい凝つてゐる。門から玄関まではからりとしてなんにもない。左右に芝が植えてある。

玄関には美禰子の下駄がそろえてあつた。鼻緒の二本が右左で色が違う。それでもよく覚えている。今仕事中だが、よければ上がれと言う小女の取次ぎについて、画室へはいつた。広い部屋である。細長く南北にのびた床の上は、画家らしく、取り乱している。まず一部分には絨毯が敷いてある。それが部屋の大きさに比べると、まるで釣り合いが取れないから、敷物として敷いたというよりは、色のいい、模様の雅な織物として

ほうり出したように見える。離れて向こうに置いた大きな虎の皮もそのとおり、すわるための、設けの座とは受け取れない。絨毯とは不調和な位置に筋かいに尾を長くひいている。砂を練り固めたような大きな甕がある。その中から矢が二本出でている。鼠色の羽根と羽根の間が金箔で強く光る。そのそばに鎧もあつた。三四郎は卯の花緜しというのだろうと思つた。向こう側のすみにぱつと目を射るものがある。紫の裾模様の小袖に金糸の刺繡が見える。袖から袖へ幔幕の綱を通して、虫干の時のように釣るした。袖は丸くて短かい。これが元禄かと三四郎も気がついた。そのほかには絵がたくさんある。壁にかけたのばかりでも大小合わせるとよほどになる。額縁をつけない下絵というようなものは、重ねて巻いた端が、巻きくずれて、小口をしだらなくあらわした。

描かれつつある人の肖像は、この彩色の目を乱す間にある。描かれつつある人は、突き当りの正面に団扇をかざして立つた。描く男は丸い背をぐるりと返して、パレットを持ったまま、三四郎に向かつた。口に太いパイプをくわえている。

「やつて來たね」と言つてパイプを口から取つて、小さい丸テーブルの上に置いた。マツチと灰皿がのつてゐる。椅子もある。

「かけたまえ。——あれだ」と言つて、かきかけた画布の方を見た。長さは六尺もある。

カンバス

三四郎はただ、

「なるほど大きなものですね」と言つた。原口さんは、耳にも留めないふうで、「うん、なかなか」とひとりごとのように、髪の毛と、背景の境の所を塗りはじめた。三四郎はこの時ようやく美禰子の方を見た。すると女のかざした団扇の陰で、白い歯がかすかに光つた。

それから二、三分はまつたく静かになつた。部屋は暖炉で暖めてある。きょうは外面で、そう寒くはない。風は死に尽した。枯れた木が音なく冬の日に包まれて立つていて。三四郎は画室へ導かれた時、霞の中へはいったような気がした。丸テーブルに肱を持たして、この静かさの夜にまさる境に、はばかりなき精神をおぼれしめた。この静かさのうちに、美禰子がいる。美禰子の影が次第にでき上がりつつある。肥つた画工の画筆だけが動く。それも目に動くだけで、耳には静かである。肥つた画工も動くことがある。しかし足音はしない。

静かなものに封じ込められた美禰子はまつたく動かない。団扇をかざして立つた姿そのままがすでに絵である。三四郎から見ると、原口さんは、美禰子を写しているのではない。不可思議に奥行きのある絵から、精出して、その奥行きだけを落として、普通の絵に美禰

子を描き直しているのである。にもかかわらず第二の美禰子は、この静かさのうちに、次第と第一に近づいてくる。三四郎には、この二人の美禰子の間に、時計の音に触れない、静かな長い時間が含まれているように思われた。その時間が画家の意識にさえ上らないほどおとなしくたつにしたがつて、第二の美禰子がようやく追いついてくる。もう少しで双方がぴたりと出合つて一つに收まるというところで、時の流れが急に向きを換えて永久の中に注いでしまう。原口さんの画筆^{ブラッジ}はそれより先には進めない。三四郎はそこまでついて行つて、気がついて、ふと美禰子を見た。美禰子は依然として動かさない。三四郎の頭はこの静かな空氣のうちで覚えず動いていた。酔つた心持ちである。すると突然原口さんが笑いだした。

「また苦しくなつたようですね」

女はなんにも言わずに、すぐ姿勢をくずして、そばに置いた安楽椅子へ落ちるようにとんと腰をおろした。その時白い歯がまた光つた。そうして動く時の袖とともに三四郎を見た。その目は流星のように三四郎の眉間^{みけん}通り越していった。

原口さんは丸テーブルのそばまで来て、三四郎に、

「どうです」と言いながら、マツチをすつてさつきのパイプに火をつけて、再び口にくわ

えた。大きな木の雁首を指でおさえて、一吹きばかり濃い煙を髭の中から出したが、やがてまた丸い背中を向けて絵に近づいた。かつてなところを自由に塗つている。

絵はむろん仕上がつていなものだろう。けれどもどこもかしこもまんべんなく絵の具が塗つてあるから、素人しろうとの三四郎が見ると、なかなかつぱである。うまいかまずいかむろんわからない。技巧の批評のできない三四郎には、ただ技巧のもたらす感じだけがある。それすら、経験がないから、すこぶる正鶴せいこうを失しているらしい。芸術の影響に全然無頓着な人間でないとみずからを証拠立てるだけでも三四郎は風流人である。

三四郎が見ると、この絵はいつたいにばつとしている。なんだかいちめんに粉こが吹いて、光沢のない日光ひにあたつたように思われる。影の所でも黒くはない。むしろ薄い紫しづが射している。三四郎はこの絵を見て、なんとなく軽快な感じがした。浮いた調子は猪牙船ちよきぶねに乗つた心持ちがある。それでもどこかおちついている。けんのんではない。苦つたところ、渋つたところ、毒々しいところはむろんない。三四郎は原口さんらしい絵だと思つた。すると原口さんは無造作に画筆を使いながら、こんなことを言う。

「小川さんおもしろい話がある。ぼくの知つた男にね、細君うちがいやになつて離縁を請求した者がある。ところが細君が承知をしないで、私は縁あつて、この家へかたづいたもので

すから、たといあなたがおいやでも私はけつして出てまいりません」

原口さんはそこでちよつと絵を離れて、画筆の結果をながめていたが、今度は、美穂子に向かつて、

「里見さん。あなたが単^{ひとえもの}衣^きを着てくれないものだから、着物がかきにくくつて困る。まるでいいかげんにやるんだから、少し大胆^{だいたん}すぎますね」

「お気の毒さま」と美穂子が言つた。

原口さんは返事もせずにまた画面へ近寄つた。「それでね、細君のお尻^{しり}が離縁するにはあまり重くあつたものだから、友人が細君に向かつて、こう言つたんだとさ。出るのがいやなら、出ないでもいい。いつまでも家にいるがいい。その代りおれのほうが出るから。

——里見さんちよつと立つてみてください。団扇はどうでもいい。ただ立てば。そう。ありがとう。——細君が、私が家におつても、あなたが出ておしまいになれば、後が困るじやありませんかと言うと、なにかまわないさ、お前はかつてに入夫でもしたらよかろうと答えたんだつて」

「それから、どうなりました」と三四郎が聞いた。原口さんは、語るに足りないと思つたものか、まだあとをつけた。

「どうもならないのさ。だから結婚は考え方だよ。離合集散、ともに自由にならない。広田先生を見たまえ、野々宮さんを見たまえ、里見恭助君を見たまえ、ついでにぼくを見たまえ。みんな結婚をしていない。女が偉くなると、こういう独身ものがたくさんできてくる。だから社会の原則は、独身ものが、できない程度内において、女が偉くならなくつちやだめだね」

「でも兄は近々^{きんきん}結婚いたしますよ」

「おや、そうですか。するとあなたはどうなります」

「存じません」

三四郎は美禰子を見た。美禰子も三四郎を見て笑った。原口さんだけは絵に向いている。「存じません。存じません——じゃ」と画筆^{ブラッヂ}を動かした。

三四郎はこの機会を利用して、丸テーブルの側を離れて、美禰子の傍へ近寄った。美禰子は椅子の背に、油氣^{あぶらけ}のない頭を、無造作に持たせて、疲れた人の、身繕いに心なきなげやりの姿である。あからさまに襦袢^{じゆばん}の襟^{えり}のどぐび羽織^{ひざしがみ}をかけた。廂^{ひさしがみ}髪^{ひざしがみ}の上にきれいな裏が見える。

三四郎は懷に三十円入れている。この三十円が二人の間にある、説明しにくいものを代

表している。——と三四郎は信じた。返そうと思つて、返さなかつたのもこれがためである。思いきつて、今返そつとするのもこれがためである。返すと用がなくなつて、遠ざかるか、用がなくなつても、いつそつ近づいて来るか、——普通の人から見ると、三四郎は少し迷信家の調子を帶びている。

「里見さん」と言つた。

「なに」と答えた。仰向いて下から三四郎を見た。顔をもとのごとくにおちつけている。目だけは動いた。それも三四郎の真正面で穏やかにとまつた。三四郎は女を多少疲れていると判じた。

「ちようどついでだから、ここで返しましよう」と言いながら、ボタンを一つはずして、
内懷うちぶところへ手を入れた。

女はまた、

「なに」と繰り返した。もとのとおり、刺激のない調子である。内懷へ手を入れながら、三四郎はどうしようと考えた。やがて思いきつた。

「このあいだの金です」

「今くだすつてもしかたがないわ」

女は下から見上げたままである。手も出さない。からだも動かさない。顔も元のところにおちつけている。男は女の返事さえよくは解^{ひげ}しかねた。その時、「もう少しだから、どうです」と言う声がうしろで聞こえた。見ると、原口さんがこつちを向いて立っている。画筆^{ブラッサム}を指の股^{また}にはさんだまま、三角に刈り込んだ鬚^{ひげ}の先を引っ張つて笑つた。美禰子は両手を椅子の肘にかけて、腰をおろしたなり、頭と背をまっすぐにのばした。三四郎は小さな声で、

「まだよほどかかりますか」と聞いた。

「もう一時間ばかり」と美禰子も小さな声で答えた。三四郎はまた丸テーブルに帰つた。女はもう描かるべき姿勢を取つた。原口さんはまたパイプをつけた。画筆はまた動きだす。背を向けながら、原口さんがこう言つた。

「小川さん。里見さんの目を見てごらん」

三四郎は言われたとおりにした。美禰子は突然額から団扇を放して、静かな姿勢を崩した。横を向いてガラス越しに庭をながめている。

「いけない。横を向いてしまつちや、いけない。今かきだしたばかりだのに」

「なぜよけいな事をおつしやる」と女は正面に帰つた。原口さんは弁解をする。

「ひやかしたんじゃない。小川さんに話す事があつたんです」

「何を」

「これから話すから、まあ元のとおりの姿勢に復してください。そう。もう少し肱を前へ出して。それで小川さん、ぼくの描いた目が、実物の表情どおりできていてるかね」

「どうもよくわからんですが。いつたいこうやつて、毎日毎日描いているのに、描かれる人の目の表情がいつも変らずにいるものでしようか」

「それは変るだろう。本人が変るばかりじゃない、画工えかきのほうの気分も毎日変るんだから、本当を言うと、肖像画が何枚でもできあがらなくつちやならないわけだが、そうはいかない。またたつた一枚でかなりまとまつたものができるから不思議だ。なぜといって見たまえ……」

原口さんはこのあいだじゅう筆を使つてゐる。美穂子の方も見てゐる。三四郎は原口さんの諸機関が一度に働くのを目撃して恐れ入つた。

「こうやつて毎日描いてると、毎日の量が積もり積もつて、しばらくするうちに、描いている絵に一定の氣分ができる。だから、たといほかの氣分で戸外そとから帰つて来ても、画室へはいつて、絵に向かいさえすれば、じきに一種一定の氣分になれる。つまり絵の中

の気分が、こつちへ乗り移るのだね。里見さんだつて同じ事だ。しぜんのままにほうつておけばいろいろの刺激でいろいろの表情になるにきまつてゐるんだが、それがじつさい絵のうえへ大した影響を及ぼさないのは、ああいう姿勢や、こういう乱雜な鼓つつみだとか、鎧よろいだとか、虎とらの皮だとかいう周囲まわりのものが、しぜんに一種一定の表情を引き起こすようになつてきて、その習慣が次第にほかの表情を圧迫するほど強くなるから、まあたいていなら、この目つきをこのまで仕上げていけばいいんだね。それに表情といつたつて……」

原口さんは突然黙つた。どこかむずかしいところへきたとみえる。ふたあし一足ばかり立ちのいて、美穂子と絵をしきりに見比べている。

「里見さん、どうかしましたか」と聞いた。

「いいえ」

この答は美穂子の口から出たとは思えなかつた。美穂子はそれほど静かに姿勢をくずさずにはいる。

「それに表情といったつて」と原口さんがまた始めた。「画工はね、心を描くんぢやない。心が外へ見世みせを出しているところを描くんだから、見世さえ手落ちなく観察すれば、身代はおのずからわかるものと、まあ、そうしておくんだね。見世でうかがえない身代は画工

の担任区域以外とあきらめべきものだよ。だから我々は肉ばかり描いている。どんな肉を描いたつて、靈がこもらなければ、死肉だから、絵として通用しないだけだ。そこでこの里見さんの目もね。里見さん的心を写すつもりで描いているんじゃない。ただ目として描いている。この目が気に入つたから描いている。この目の恰好だの、かっこう二重瞼の影だの、ふたえまぶた眸の深さだの、なんでもぼくに見えるところだけを残りなく描いてゆく。すると偶然の結果として、一種の表情が出てくる。もし出でこなければ、ぼくの色の出しぐあいが悪かつたか、恰好の取り方がまちがつていたか、どつちかになる。現にあの色あの形そのものが一種の表情なんだからしかたがない」

原口さんは、この時また二足ばかりあとへさがつて、美禰子と絵とを見比べた。

「どうも、きょうはどうかしているね。疲れたんでしょう。疲れたら、もうよしましよう。
——疲れましたか」

「いいえ」

原口さんはまた絵へ近寄つた。

「それで、ぼくがなぜ里見さんの目を選んだかというとね。まあ話すから聞きたまえ。西洋画の女の顔を見ると、だれのかいた美人でも、きっと大きな目をしている。おかしく

らい大きな目ばかりだ。ところが日本では観音様をはじめとして、お多福^{たぶく}、能の面、もつとも著しいのは浮世絵^{うきよえ}にあらわれた美人、ことゞとく細い。みんな象に似ている。なぜ東西で美の標準がこれほど違うかと思うと、ちよつと不思議だろう。ところがじつはなんでもない。西洋には目の大きいやつばかりいるから、大きい目のうちで、美的淘汰^{とうた}が行なわれる。日本は鯨の系統ばかりだから——ピエルロチーという男は、日本人の目は、あれでどうしてあけるだろうなんてひやかしている。——そら、そういう国柄^{くにがら}だから、どうして材料の少ない大きな目に対する審美眼が発達しようがない。そこで選択の自由のきく細い目のうちで、理想ができてしまつたのが、歌麿^{うたまろ}になつたり、祐信^{すけのぶ}になつたりして珍重^{めくら}がられている。しかしくら日本的でも、西洋画には、ああ細いのは盲目^{めくら}をかいたようでもつともなくつていけない。といって、ラファエルの聖母^{マドンナ}のようなのは、てんでありやしないし、あつたところが日本人とは言われないから、そこで里見さんを煩わすことになつたのさ。里見さんもう少しですよ」

答はなかつた。美禰子はじつとしている。

三四郎はこの画家の話をはなはだおもしろく感じた。とくに話だけ聞きに来たのならばなお幾倍の興味を添えたろうにと思つた。三四郎の注意の焦点は、今、原口さんの話のう

えにもない、原口さんの絵のうえにもない。むろん向こうに立つてゐる美禰子に集まつてゐる。三四郎は画家の話に耳を傾けながら、目だけはついに美禰子を離れなかつた。彼の目に映じた女の姿勢は、自然の経過を、もつとも美しい刹那せつなに、捕虜とりこにして動けなくしたようである。変らないところに、長い感謝がある。しかるに原口さんが突然首をひねつて、女にどうかしましたかと聞いた。その時三四郎は、少し恐ろしくなつたくらいである。移りやすい美しさを、移さずにすえておく手段が、もう尽きたと画家から注意されたようにな聞こえたからである。

なるほどそう思つて見ると、どうかしているらしくもある。色光沢いろつやがよくない。目尻めじりにたえがたいものうさが見える。三四郎はこの活人画から受ける安慰の念を失つた。同時にもしや自分がこの変化の原因ではなかろうかと考えついた。たちまち強烈な個性的の刺激が三四郎の心をおそつてきた。移り行く美をはかなむという共通性の情緒じょうしょはまるで影をひそめてしまつた。——自分はそれほどの影響をこの女のうえに有しておる。——三四郎はこの自覚のもとにいつさいの己を意識した。けれどもその影響が自分にとつて、利益か不利益かは未決の問題である。

その時原口さんが、とうとう筆をおいて、

「もうよそう。きょうはどうしてもだめだ」と言いだした。美禰子は持っていた団扇を、

うちわ

立ちながら床の上に落とした。椅子にかけた羽織を取つて着ながら、こちらへ寄つて来た。

「きょうは疲れてますね」

「私？」と羽織の袴ゆきをそろえて、紐ひもを結んだ。

「いやじつはぼくも疲れた。またあした天気のいい時にやりましょう。まあお茶でも飲んでゆっくりなさい」

夕暮れには、まだ間まがあつた。けれども美禰子は少し用があるから帰るという。三四郎も留められたが、わざと断つて、美禰子といつしょに表へ出た。日本の社会状態で、こういう機会を、随意に造ることは、三四郎にとつて困難である。三四郎はなるべくこの機会を長く引き延ばして利用しようと試みた。それで比較的人の通らない、閑静な曙町ひとまわを一回り散歩しようじやないかと女をいざなつてみた。ところが相手は案外にも応じなかつた。一直線に生垣の間を横切つて、大通りへ出た。三四郎は、並んで歩きながら、

「原口さんもそう言つていたが、本当にどうかしたんですか」と聞いた。

「私？」と美禰子がまた言つた。原口さんに答えたと同じことである。三四郎が美禰子を知つてから、美禰子はかつて、長い言葉を使つたことがない。たいていの応対は一句か二

句で済ましてゐる。しかもはなはだ簡単なものにすぎない。それでいて、三四郎の耳には一種の深い響を与える。ほとんど他の人からは、聞きうることのできない色が出る。三四郎はそれに敬服した。それを不思議がつた。

「私？」と言つた時、女は顔を半分ほど三四郎の方へ向けた。そうして二重瞼の切れ目から男を見た。その目には暈かざがかかつてゐるように思われた。いつになく感じがなまぬるくきた。頬の色も少し青い。

「色が少し悪いようです」

「そうですか」

二人は五、六歩無言で歩いた。三四郎はどうともして、一人のあいだにかかつた薄い幕のようなものを裂き破りたくなつた。しかしながらといつたら破れるか、まるで分別が出なかつた。小説などにある甘い言葉は使いたくない。趣味のうえからいっても、社交上若い男女の習慣としても、使いたくない。三四郎は事実上不可能の事を望んでいる。望んでいるばかりではない。歩きながら工夫している。

やがて、女のほうから口をききだした。

「きょう何か原口さんに御用がおありだつたの」

「いいえ、用事はなかつたです」

「じゃ、ただ遊びにいらしつたの」

「いいえ、遊びに行つたんじやありません」

「じゃ、なんでいらしつたの」

三四郎はこの瞬間を捕えた。

「あなたに会いに行つたんです」

三四郎はこれで言えるだけの事を「ことば」とく言つたつもりである。すると、女はすこしも刺激に感じない、しかも、いつもの「ことく男を酔わせる調子で、

「お金は、あすこじやいただけないのよ」と言つた。三四郎はがつかりした。

二人はまた無言で五、六間来た。三四郎は突然口を開いた。

「本当は金を返しに行つたのじやありません」

美穂子はしばらく返事をしなかつた。やがて、静かに言つた。

「お金は私もりません。持つていらつしゃい」

三四郎は堪えられなくなつた。急に、

「ただ、あなたに会いたいから行つたのです」と言つて、横に女の顔をのぞきこんだ。女

は三四郎を見なかつた。その時三四郎の耳に、女の口をもれたかすかなため息が聞こえた。

「お金は……」

「金なんぞ……」

二人の会話は双方とも意味をなさないで、途中で切れた。それなりで、また小半町ほど來た。今度は女から話しかけた。

「原口さんの絵を御覧になつて、どうお思いなすつて」

答え方がいろいろあるので、三四郎は返事をせずに少しのあいだ歩いた。

「あんまりでき方が早いのでお驚きなさりやしなくつて」

「ええ」と言つたが、じつははじめて気がついた。考へると、原口が広田先生の所へ来て、美穂子の肖像をかく意志をもらしてから、まだ一か月ぐらいにしかならない。展覧会で直接に美穂子に依頼していたのは、それよりのちのことである。三四郎は絵の道に暗いから、あんな大きな額が、どのくらいな速度で仕上げられるものか、ほとんど想像のほかにあつたが、美穂子から注意されてみると、あまり早くできすぎているように思われる。

「いつから取りかかつたんです」

「本当に取りかかつたのは、ついこのあいだですけれども、そのまえから少しづつ描いて

いただいていたんですね」

「そのまえつて、いつごろからですか」

「あの服装なりでわかるでしよう」

三四郎は突然として、はじめて池の周囲で美禰子に会った暑い昔を思い出した。

「そら、あなた、椎の木の下にしゃがんでいらしつたじやありませんか」

「あなたは团扇をかざして、高い所に立っていた」

「あの絵のとおりでしよう」

「ええ。あのとおりです」

二人は顔を見合わした。もう少しで白山の坂の上へ出る。

向こうから車がかけて来た。黒い帽子をかぶって、金縁の眼鏡をかけて、遠くから見ても色光沢のいい男が乗っている。この車が三四郎の目にはいつた時から、車の上の若い紳士は美禰子の方を見つめているらしく思われた。二、三間先へ来ると、車を急にとめた。前掛けを器用にはねのけて、蹴込みから飛び降りたところを見ると、背のすらりと高い細面のりっぱな人であつた。髪をきれいにすつている。それでいて、まつたく男らしい。

「今まで待つていたけれども、あんまりおそいから迎えに來た」と美禰子のまん前に立つ

た。見おろして笑っている。

「そう、ありがとう」と美禰子も笑つて、男の顔を見返したが、その目をすぐ三四郎の方へ向けた。

「どなた」と男が聞いた。

「大学の小川さん」と美禰子が答えた。

男は軽く帽子を取つて、向こうから挨拶あいさつをした。

「はやく行こう。にいさんも待つている」

いいぐあいに三四郎は追分へ曲がるべき横町の角に立つていた。金はどうとう返さずに別れた。

一一

このごろ与次郎が学校で文芸協会の切符を売つて回つている。一、三日かかつて、知つた者へはほぼ売りつけた様子である。与次郎はそれから知らない者をつかまえることにした。たいていは廊下でつかまえる。するとなかなか放さない。どうかこうか、買わせてし

まう。時には談判中にベルが鳴つて取り逃すこともある。与次郎はこれを時利あらずと号している。時には相手が笑つていて、いつまでも要領を得ないことがある。与次郎はこれを人利あらずと号している。ある時便所から出て来た教授をつかまえた。その教授はハンケチで手をふきながら、今ちよつとと言つたまま急いで図書館へはいつてしまつた。それぎりけつして出て来ない。与次郎はこれを——なんとも号しなかつた。後影を見送つて、あれは腸力タルに違いないと三四郎に教えてくれた。

与次郎に切符の販賣方はんばいかたを何枚頼まれたのかと聞くと、何枚でも売れるだけ頼まれたのだと言う。あまり売れすぎて演芸場にはいりきれない恐れはないかと聞くと、少しはあると言う。それでは売つたあとで困るだろうと念をおすと、なに大丈夫だいじょうぶだ、なかには義理で買う者もあるし、事故で来ないのもあるし、それから腸力タルも少しほどできるだろうと言つて、すましている。

与次郎が切符を売るところを見ていると、引きかえに金を渡す者からはむろん即座に受け取るが、そうでない学生にはただ切符だけ渡している。気の小さい三四郎が見ると、心配になるくらい渡して歩く。あとから思うとおりお金が寄るかと聞いてみると、むろん寄らないという答だ。きちようめん 几帳面にわずか売るよりも、だらしなくたくさん売るほうが、大体

のうえにおいて利益だからこうすると言つてゐる。与次郎はこれをタイムス社が日本で百科全書を売つた方法に比較してゐる。比較だけはりつぱに聞こえたが、三四郎はなんだか心もとなく思つた。そこで一応与次郎に注意した時に、与次郎の返事はおもしろかつた。

「相手は東京帝国大学学生だよ」

「いくら学生だつて、君のように金にかけるとのん気なのが多いだらう」

「なに善意に払わないのは、文芸協会のほうでもやかましくは言わないはずだ。どうせい
くら切符が売れたつて、とどのつまりは協会の借金になることは明らかだから」

三四郎は念のため、それは君の意見か、協会の意見かとただしてみた。与次郎は、むろんぼくの意見であつて、協会の意見であるとつづのいいことを答えた。

与次郎の説を聞くと、今度は演芸会を見ない者は、まるでばかのような気がする。ばかの
ような気がするまで与次郎は講釈をする。それが切符を売るためだか、じつさい演芸会
を信仰しているためだか、あるいはただ自分の景氣をつけて、かねて相手の景氣をつけ、
次いでは演芸会の景氣をつけて、世上一般の空氣ができるだけにぎやかにするためだか、
そこのところがちょっと明確に区別が立たないものだから、相手はばかのような気がす
るにもかかわらず、あまり与次郎の感化をこうむらない。

与次郎は第一に会員の練習に骨を折つてゐる話をする。話どおりに聞いていると、会員の多數は、練習の結果として、当日前に役に立たなくなりそうだ。それから背景の話をす。その背景が大したもので、東京にいる有為の青年画家をことごとく引き上げて、ことごとく自分の技倆を振るわしたようなことになる。次に服装の話をする。その服装が頭から足の先まで故実ずくめにでき上がつてゐる。次に脚本の話をする。それが、みんな新作で、みんなおもしろい。そのほかいくらでもある。

与次郎は広田先生と原口さんに招待券を送つたと言つてゐる。野々宮兄妹きょうだいと里見兄妹には上等の切符を買わせたと言つてゐる。万事が好都合だと言つてゐる。三四郎は与次郎のために演芸会万歳を唱えた。

万歳を唱える晩、与次郎が三四郎の下宿へ來た。昼間とはうつて變つて、堅くなつて火鉢ひばちのそばへすわつて寒い寒いと言う。その顔がただ寒いのではないらしい。はじめは火鉢へ乗りかかるように手をかざしていたが、やがて懷手ふところになつた。三四郎は与次郎の顔を陽気にするために、机の上のランプを端から端へ移した。ところが与次郎は頸あごをがつくり落して、大きな坊主頭だけを黒く灯ひに照らしている。いつこうさえない。どうかしたかと聞いた時に、首をあげてランプを見た。

「この家うちではまだ電気を引かないのか」と顔つきにはまったく縁のないことを聞いた。

「まだ引かない。そのうち電気にするつもりだそうだ。ランプは暗くていかんね」と答えていると、急に、ランプのことは忘れたとみえて、

「おい、小川、たいへんな事ができてしまつた」と言いだした。

一応理由わけを聞いてみる。与次郎は懐から皺しわだらけの新聞を出した。二枚重なつてある。

その一枚をはがして、新しく置たたみ直して、ここを読んでみると差しつけた。読むところを指の頭で押えている。三四郎は目をランプのそばへ寄せた。見出しに大学の純文科とある。

大学の外国文学科は從来西洋人の担当で、当事者はいつさいの授業を外国教師に依頼していたが、時勢の進歩と多数学生の希望に促されて、今度いよいよ本邦人の講義も必須課目として認めるに至つた。そこでこのあいだじゅうから適當の人物を選んであったが、ようやく某氏に決定して、近々きんきん発表になるそうだ。某氏は近き過去において、海外留学の命を受けたことのある秀才だから至極適任だろうという内容である。

「広田先生じやなかつたんだな」と三四郎が与次郎を顧みた。与次郎はやつぱり新聞の上を見ている。

「これはたしかなのか」と三四郎がまた聞いた。

「どうも」と首を曲げたが、「たいてい大丈夫だろうと思つていたんだがな。やりそくなつた。もつともこの男がだいぶ運動をしているという話は聞いたこともあるが」と言う。「しかしこれだけじや、まだ風説じやないか。いよいよ発表になつてみなければわからぬいのだから」

「いや、それだけならむろんかまわない。先生の関係したことじやないから、しかし」と言つて、また残りの新聞を畳み直して、標題みだしを指の頭で押えて、三四郎の目の下へ出した。

今度の新聞にもほぼ同様の事が載つている。そこだけはべつだんに新しい印象を起こしようもないが、そのあとへ来て、三四郎は驚かされた。広田先生がたいへんな不徳義漢のようにも書いてある。十年間語学の教師をして、世間にはよう杳として聞こえない凡材のくせに、大学で本邦人の外国文学講師を入れると聞くやいなや、急にこそそ運動を始めて、自分の評判記こうばいしを学生間に流布ふるした。のみならずその門下生をして「偉大なる暗闇くらやみ」などという論文を小雑誌こざっしに草せしめた。この論文は零余子れいよしなる匿名のもとにあらわれたが、じつは広田の家に出入する文科大学生小川三四郎なるものの筆であることまでわかつてゐる。と、どうとう三四郎の名前が出て來た。

三四郎は妙な顔をして与次郎を見た。与次郎はまえから三四郎の顔を見ている。ふたり

もしばらく黙っていた。やがて、三四郎が、「困るなあ」と言つた。少し与次郎を恨んでいる。与次郎は、そこはあまりかまつていない。

「君、これをどう思う」と言う。

「どう思うとは」

「投書をそのまま出したに違いない。けつして社のほうで調べたものじやない。文芸時評の六号活字の投書にこんなのが、いくらでも来る。六号活字はほとんど罪悪のかたまりだ。よくよく探つてみると嘘うそが多い。目に見えた嘘をついているのもある。なぜそんな愚な事をやるかというとね、君。みんな利害問題たちが動機になつてゐるらしい。それでぼくが六号活字を受持つてゐる時には、性質たちのよくないのは、たいてい屑籠くずかごへ放り込んだ。この記事もまつたくそれだね。反対運動の結果だ」

「なぜ、君の名が出ないで、ぼくの名が出たものだろうな」

与次郎は「そうさ」と言つてゐる。しばらくしてから、

「やつぱり、なんだろう。君は本科生でぼくは選科生だからだろう」と説明した。けれども三四郎には、これが説明にもなんにもならなかつた。三四郎は依然として迷惑である。

「ぜんたいぼくが零余子なんてけちな号を使わずに、堂々と佐々木与次郎と署名しておけばよかつた。じつさいあの論文は佐々木与次郎以外に書ける者は一人もないんだからなあ」
与次郎はまじめである。三四郎に「偉大なる暗闇」の著作権を奪われて、かえつて迷惑しているのかもしねい。三四郎はばかばかしくなつた。

「君、先生に話したか」と聞いた。

「さあ、そこだ。偉大なる暗闇の作者なんか、君だつて、ぼくだつて、どちらだつてかまわないが、こと先生の人格に關係してくる以上は、話さずにはいられない。ああいう先生だから、いつこう知りません、何か間違いでしよう、偉大なる暗闇という論文は雑誌に出ましたが、匿名です、先生の崇拜者が書いたものですから御安心なさいくらいに言つておけば、そうかで、すぐ済んでしまうわけだが、このきいそうはいかん。どうしたつてぼくが責任を明らかにしなくつちや。事がうまくいって、知らん顔をしているのは、心持ちがいいが、やりそくなつて黙つているのは不愉快でたまらない。第一自分が事を起こしておいて、ああいう善良な人を迷惑な状態に陥らして、それで平気に見物がしておられるものじやない。正邪曲直なんてむずかしい問題は別として、ただ氣の毒で、いたわしくつていけない」

三四郎ははじめて与次郎を感心な男だと思つた。

「先生は新聞を読んだんだろうか」

「家へ来る新聞にやない。だからぼくも知らなかつた。しかし先生は学校へ行つていろいろな新聞を見るからね。よし先生が見なくつてもだれか話すだろう」

「すると、もう知つてるな」

「むろん知つてるだろう」

「君にはなんとも言わないか」

「言わない。もつともろくに話をする暇もないんだから、言わないはずだが。このあいだから演芸会の事でしじゅう奔走しているものだから——ああ演芸会も、もういやになつた。やめてしまおうかしらん。おしろいをつけて、芝居しばいなんかやつたつて、何がおもしろいものか」

「先生に話したら、君、しかられるだろう」

「しかられるだろう。しかられるのはしかたがないが、いかにも氣の毒でね。よけいな事をして迷惑をかけるんだから。——先生は道楽のない人でね。酒は飲まず、煙草は」と言いかけたが途中でやめてしまつた。先生の哲学を鼻から煙にして吹き出す量は月に積も

ると、莫大なものである。

「煙草だけはかなりのむが、そのほかになんにもないぜ。釣りをするじやなし、碁ごを打つじやなし、家庭の楽しみがあるじやなし。あれがいちばんいけない。子供でもあるといいんだけれども。じつに枯淡だからなあ」

与次郎はそれで腕組をした。

「たまに、慰めようと思つて、少し奔走すると、こんなことになるし。君も先生の所へ行つてやれ」

「行つてやるどころじゃない。ぼくにも多少責任があるから、あやまつてくる」

「君はあやまる必要はない」

「じゃ弁解してくる」

与次郎はそれで帰つた。三四郎は床にはいつてからたびたび寝返りを打つた。国にいるほうが寝やすい心持ちがする。偽りの記事——広田先生——美禰子——美禰子を迎えて連れていつたりっぱな男——いろいろの刺激がある。

夜中からぐつすり寝た。いつものように起きるのが、ひどくつらかつた。顔を洗う所で、同じ文科の学生に会つた。顔だけは互いに見知り合いである。失敬という挨拶あいさつのうちに、

この男は例の記事を読んでいるらしく推した。しかし先方ではむろん話頭を避けた。三四郎も弁解を試みなかつた。

暖かい汁の香をかいでいる時に、また故里の母からの書信に接した。また例のことく、長かりそうだ。洋服を着換えるのがめんどうだから、着たままの上へ袴をはいて、懷へ手紙を入れて、出る。戸外は薄い霜で光つた。

通りへ出ると、ほとんど学生ばかり歩いている。それが、みな同じ方向へ行く。ことごとく急いで行く。寒い往来は若い男の活気でいっぱいになる。そのなかに霜降りの外套を着た広田先生の長い影が見えた。この青年の隊伍に紛れ込んだ先生は、歩調においてすでに時代錯誤である。左右前後に比較するとすこぶる緩漫に見える。先生の影は校門のうちに隠れた。門内に大きな松がある。巨大の傘のようにならかさに枝を広げて玄関をふさいでいる。三四郎の足が門前まで来た時は、先生の影がすでに消えて、正面に見えるものは、松と、松の上にある時計台ばかりであつた。この時計台の時計は常に狂っている。もしくは留まつている。

門内をちよつとのぞきこんだ三四郎は、口の中で「ハイドリオタフヒア」という字を一度繰り返した。この字は三四郎の覚えた外国語のうちで、もつとも長い、またもつともむ

ずかしい言葉の一つであつた。意味はまだわからない。広田先生に聞いてみるつもりでいる。かつて与次郎に尋ねたら、おそらくダーテーフアブラのたぐいだろうと言つていた。けれども三四郎からみると二つのあいだにはたいへんな違いがある。ダーテーフアブラはおどるべき性質のものと思える。ハイドリオタフヒアは覚えるのにさえ暇がいる。二へん繰り返すと歩調がおのずから緩漫になる。広田先生の使うために古人が作つておいたような音^{おん}がする。

学校へ行つたら、「偉大なる暗闇」の作者として、衆人の注意を一身に集めている氣色^{そと}がした。戸外^{そと}へ出ようとしたが、戸外は存外寒いから廊下にいた。そうして講義のあいだに懐から母の手紙を出して読んだ。

この冬休みには帰つて来いと、まるで熊本にいた当時と同様な命令がある。じつは熊本にいた時分にこんなことがあつた。学校が休みになるか、ならないのに、帰れという電報^{いなりさま}が掛かつた。母の病気に違いないと思い込んで、驚いて飛んで帰ると、母のほうではこつちに変がなくつて、まあ結構だつたといわぬばかりに喜んでいる。訳を聞くと、いつまで待つっていても帰らないから、お稻荷様^{いなりさま}へ伺いを立てたら、こりや、もう熊本をたつているという御託宣であつたので、途中でどうかしはせぬだろうかと非常に心配していたのだ

と言う。三四郎はその当時を思いだして、今度もまた伺いを立てられることかと思つた。
しかし手紙にはお稲荷様のことは書いてない。ただ三輪田のお光さんも待つていると割
注ゆうみたようなものがついている。お光さんは豊津の女学校をやめて、家へ帰つたそうだ。
またお光さんに縫つてもらつた綿入れが小包で来るそうだ。大工の角三とよつが山で賭博ばくちを打
つて九十八円取られたそうだ。——そのてんまつが詳くわしく書いてある。めんどうだからい
いかげんに読んだ。なんでも山を買いたいという男が三人連づれで入り込んで来たのを、角三かくぞう
が案内あんないをして、山を回つて歩いているあいだに取られてしまつたのだそうだ。角三かくぞうは家うちへ
帰つて、女房にいつのまに取られたかわからないと弁解した。すると、女房がそれじやお
前さん眠り薬でもかがされたんだろうと言つたら、角三が、うんそういうえばなんだかかい
だようだと答えたそうだ。けれども村の者はみんな賭博ばくちをして巻き上げられたと評判して
いる。いなかでもこうだから、東京にいるお前なぞは、本当によく気をつけなくてはいけ
ないという訓くん誠まことがついている。

長い手紙を巻き收めていると、与次郎がそばへ来て、「やあ女の手紙だな」と言つた。
ゆうべよりは冗談よのぎをいうだけ元氣がいい。三四郎は、

「なに母からだ」と、少しつまらなそうに答えて、封筒ごと懐へ入れた。

「里見のお嬢さんからじやないのか」

「いいや」

「君、里見のお嬢さんのことを見いたか」

「何を」と問い合わせているところへ、一人の学生が、与次郎に、演芸会の切符をほしいと
いう人が階下したに待つていると教えに来てくれた。与次郎はすぐ降りて行つた。

与次郎はそれなり消えてなくなつた。いくらつらまえようと思つても出て来ない。三四郎はやむをえず精出して講義を筆記していった。講義が済んでから、ゆうべの約束どおり広田先生の家へ寄る。相変らず静かである。先生は茶の間に長くなつて寝ていた。ばあさんに、どうかなすつたのかと聞くと、そうじやないのでしょう、ゆうべあまりおそくなつたので、眠いと言つて、さつきお帰りになると、すぐに横におなりなすつたのだと言う。長いからだの上に小夜着こよぎが掛けてある。三四郎は小さな声で、またばあさんに、どうして、そうおそくなつたのかと聞いた。なにいつでもおそいのだが、ゆうべのは勉強じやなくつて、佐々木さんと久しくお話ををしておいでだつたという答である。勉強が佐々木に代つたから、昼寝をする説明にはならないが、与次郎が、ゆうべ先生に例の話をした事だけはこれで明瞭になつた。ついでに与次郎が、どうしかられたかを聞いておきたいのだが、それ

はばあさんが知らうはずがないし、肝心の与次郎は学校で取り逃してしまつたからしかたがない。きょうの元気のいいところをみると、大した事件にはならずに済んだのだろう。もつとも与次郎の心理現象はどうてい三四郎にはわからないのだから、じつさいどんなことがあつたか想像はできない。

三四郎は長火鉢の前へすわつた。鉄瓶がちんちん鳴つてゐる。ばあさんは遠慮をして下女部屋へ引き取つた。三四郎はあぐらをかいて、鉄瓶に手をかざして、先生の起きるのを待つてゐる。先生は熟睡してゐる。三四郎は静かでいい心持ちになつた。爪で鉄瓶をたたいてみた。熱い湯を茶碗についてふうふう吹いて飲んだ。先生は向こうをむいて寝てゐる。二、三日まえに頭を刈つたとみえて、髪がはなはだ短かい。髭のはじが濃く出でいる。鼻も向こうを向いてゐる。鼻の穴がすうすう言う。安眠だ。

三四郎は返そつと思つて、持つて来たハイドリオタフヒアを出して読みはじめた。ぽつぽつ拾い読みをする。なかなかわからない。墓の中に花を投げることが書いてある。ローマ人は薔薇を affect 『アツフェクト』すると書いてある。なんの意味だかよく知らないが、おおかた好むとでも訳するんだろうと思つた。ギリシア人は Amaranth 『アマランス』を用いると書いてある。これも明瞭でない。しかし花の名には違ひない。それから少しき

へ行くと、まるでわからなくなつた。ページから目を離して先生を見た。まだ寝ている。なんでこんなむずかしい書物を自分に貸したものだらうと思つた。それから、このむずかしい書物が、なぜわからないながらも、自分の興味をひくのだらうと思つた。最後に広田先生は、**必竟**^{ひつきよう}ハイドリオタフヒアだと思つた。

そうすると、広田先生がむくりと起きた。首だけ持ち上げて、三四郎を見た。

「いつ来たの」と聞いた。三四郎はもつと寝ておいでなさいと勧めた。じつさい退屈ではなかつたのである。先生は、

「いや起きる」と言つて起きた。それから例の「ごとく哲学の煙を吹きはじめた。煙が沈黙のあいだに、棒になつて出る。

「ありがとう。書物を返します」

「ああ。——読んだの」

「読んだけれどもよくわからんです。第一標題がわからんです」

「ハイドリオタフヒア」

「なんのことですか」

「なんのことかぼくにもわからない。とにかくギリシア語らしいね」

三四郎はあとを尋ねる勇気が抜けてしまった。先生はあくびを一つした。

「ああ眠かつた。いい心持ちに寝た。おもしろい夢を見てね」

先生は女の夢だと言つてゐる。それを話すのかと思つたら、湯に行かないかと言ひだした。二人は手ぬぐいをさげて出かけた。

湯から上がって、二人が板の間にすえてある器械の上に乗つて、身長たけを測つてみた。広

田先生は五尺六寸ある。三四郎は四寸五分しかない。

「まだのびるかもしれない」と広田先生が三四郎に言つた。

「もうだめです。三年来このとおりです」と三四郎が答えた。

「そうかな」と先生が言つた。自分をよっぽど子供のように考へてゐるのだと三四郎は思つた。家へ帰つた時、先生が、用がなければ話していつてもかまわないと、書斎の戸をあけて、自分がさきへはいつた。三四郎はとにかく、例の用事を片づける義務があるから、続いてはいつた。

「佐々木は、まだ帰らないようですな」

「きょうはおそらくるとか言つて断わつていた。このあいだから演芸会のことだいぶん奔走しているようだが、世話好きなんだか、駆け回ることが好きなんだか、いつこう要領

を得ない男だ」

「親切なんですよ」

「目的だけは親切なところも少しあるんだが、なにしろ、頭のできがはなはだ不親切なものだから、ろくなことはしでかさない。ちよつと見ると、要領を得てている。むしろ得すぎている。けれども終局へゆくと、なんのために要領を得てきたのだか、まるでめちゃやくちやになつてしまふ。いくら言つても直さないからほうつておく。あれは悪戯いたずらをしに世の中へ生まれて来た男だね」

三四郎はなんとか弁護の道がありそうなものだと思つたが、現に結果の悪い実例があるんだから、しようがない。話を転じた。

「あの新聞の記事を御覧でしたか」

「ええ、見た」

「新聞に出るまではちつとも御存じなかつたのですか」

「いいえ」

「お驚きなすつたでしよう」

「驚くつて——それはまったく驚かないこともない。けれども世の中の事はみんな、あん

なものだと思つてゐるから、若い人ほど正直に驚きはしない」
 「御迷惑でしよう」

「迷惑でないこともない。けれどもぼくくらい世の中に住み古した年配の人間なら、あの記事を見て、すぐ事実だと思い込む人ばかりもないから、やつぱり若い人ほど正直に迷惑とは感じない。与次郎は社員に知つた者があるから、その男に頼んで真相を書いてもらうの、あの投書の出所でどころを捜して制裁を加えるの、自分の雑誌で十分反駁はんぱくをいたしますのと、善後策の了見でくだらない事をいろいろ言うが、そんな手数てかずをするならば、はじめからよけいな事を起こさないほうが、いくらいいかわかりやしない」

「まったく先生のためを思つたからです。悪気じやないです」

「悪氣でやられてたまるものか。第一ぼくのために運動をするものがさ、ぼくの意向も聞かないで、かつてな方法を講じたりかつてな方針を立てたひには、最初からぼくの存在を愚弄ぐろうしていると同じことじやないか。存在を無視されているほうが、どのくらい体面を保つにつづこうがいいかしれやしない」

三四郎はしかたなしに黙つていた。

「そうして、偉大なる暗闇なんて愚にもつかないものを書いて。——新聞には君が書いた

としてあるが實際は佐々木が書いたんだってね」

「そうです」

「ゆうべ佐々木が自白した。君こそ迷惑だろう。あんなばかな文章は佐々木よりほかに書く者はありやしない。ぼくも読んでみた。実質もなければ、品位もない、まるで救世軍の太鼓のようなものだ。読者の悪感情を引き起こすために、書いてるとしか思われやしない。徹頭徹尾故意だけで成り立っている。常識のある者が見れば、どうしてもためにするところがあつて起稿したものだと判定がつく。あれじやぼくが門下生に書かしたと言われるはずだ。あれを読んだ時には、なるほど新聞の記事はもつともと思つた」

広田先生はそれで話を切つた。鼻から例によつて煙をはく。与次郎はこの煙の出方で、先生の氣分をうかがうことができると言つている。濃くまつすぐにほとばしる時は、哲学の絶好頂に達したさいで、ゆるくぐずれる時は、心氣平穩、ことによるとひやかされる恐れがある。煙が、鼻の下に ていかい 徘して、髭に未練があるよう見える時は、瞑想に入る。もしくは詩的感興がある。もつとも恐るべきは穴の先の渦である。渦が出ると、たいへんにしかられる。与次郎の言うことだから、三四郎はむろんあてにはしない。しかしこのさいだから気をつけて煙の形状かたちをながめていた。すると与次郎の言ったような判然たる煙は

ちつとも出て来ない。その代り出るものは、たいていな資格をみんなそなえている。

三四郎がいつまでたつても、恐れ入ったように控えているので、先生はまた話しあげ始めた。

「済んだ事は、もうやめよう。佐々木も昨夜ことごとくあやまつてしまつたから、きょうあたりはまた晴々として例のごとく飛んで歩いているだろう。いくら陰で不心得を責めたつて、当人が平氣で切符なんぞ売つて歩いていてはしかたがない。それよりもつとおもしろい話をしよう」

「ええ」

「ぼくがさつき昼寝をしている時、おもしろい夢を見た。それはね、ぼくが生涯にたつた一ぺん会つた女に、突然夢の中で再会したという小説じみたお話だが、そのほうが、新聞の記事より聞いていても愉快だよ」

「ええ。どんな女ですか」

「十二、三のきれいな女だ。顔に黒子がある」

三四郎は十二、三と聞いて少し失望した。

「いつごろお会いになつたのですか」

「一十年ばかりまえ」

三四郎はまた驚いた。

「よくその女ということがわかりましたね」

「夢だよ。夢だからわかるさ。そうして夢だから不思議でいい。ぼくがなんでも大きな森の中を歩いている。あの色のさめた夏の洋服を着てね、あの古い帽子をかぶつて。——そその時はなんでも、むずかしい事を考えていた。すべて宇宙の法則は変わらないが、法則に支配されるすべて宇宙のものは必ず変る。するとその法則は、物のほかに存在していなくてはならない。——さめてみるとつまらないが夢の中だからまじめにそんな事を考えて森の下を通つて行くと、突然その女に会つた。行き会つたのではない。向こうはじつと立つていた。見ると、昔のとおりの顔をしている。昔のとおりの服装^{なり}をしている。髪も昔の髪である。黒子もむろんあつた。つまり二十年まえ見た時と少しも変らない十二、三の女である。ぼくがその女に、あなたは少しも変らないというと、その女はぼくにたいへん年をお取りなすつたという。次にぼくが、あなたはどうして、そう変らずにいるのかと聞くと、この顔の年、この服装の月、この髪の日がいちばん好きだから、こうしていると言う。それはいつの事かと聞くと、二十年まえ、あなたにお目にかかる時だという。それなら

ぼくはなぜこう年を取つたんだろうと、自分で不思議がると、女が、あなたは、その時よりも、もつと美しいほうへほうへとお移りなさりたがるからだと教えてくれた。その時ぼくが女に、あなたは絵だと言うと、女がぼくに、あなたは詩だと言つた

「それからどうしました」と三四郎が聞いた。

「それから君が来たのさ」と言う。

「三十年まえに会つたというのは夢じやない、本当の事実なんですか」

「本当の事実なんだからおもしろい」

「どこでお会いになつたんですか」

先生の鼻はまた煙を吹き出した。その煙をながめて、当分黙つている。やがてこう言つた。

「憲法發布は明治二十二年だつたね。その時森文部大臣が殺された。君は覚えていまい。いくつかな君は。そう、それじや、まだ赤ん坊の時分だ。ぼくは高等学校の生徒であつた。大臣の葬式に参列するのだと言つて、おおぜい鉄砲をかついで出た。墓地へ行くのだと思つたら、そうではない。体操の教師が竹橋内たけばしうちへ引つ張つて行つて、道ばたへ整列さした。我々はそこへ立つたなり、大臣の柩ひづきを送ることになつた。名は送るのだけれども、じつは

見物したのも同然だつた。その日は寒い日でね、今でも覚えている。動かず立っていると、靴の下で足が痛む。隣の男がぼくの鼻を見ては赤い赤いと言つた。やがて行列が来た。なんでも長いものだつた。寒い目の前を静かな馬車や陣くるまが何台となく通る。そのうちにに話した小さな娘がいた。今、その時の模様を思い出そうとしても、ぼうとしてとても明瞭に浮かんで来ない。ただこの女だけは覚えている。それも年をたつにしたがつてだんだん薄らいで來た、今では思い出すこともめつたにない。きょう夢を見るまえまでは、まるで忘れていた、けれどもその当時は頭の中へ焼きつけられたように熱い印象を持つていた。

——妙なものだ

「それからその女にはまるで会わんんですね

「まるで会わん

「じゃ、どこのだれだかまったくわからないんですね

「もちろんわからない

「尋ねてみなかつたですか

「いいや

「先生はそれで……」と言つたが急につかえた。

「それで？」

「それで結婚をなさらないんですか」

先生は笑いだした。

「それほど浪漫的^{ロマンチック}な人間じやない。ぼくは君よりもはるかに散文的にできている」

「しかし、もしその女が来たらおもらいになつたでしよう」

「そうさね」と一度考えたうえで、「もらつたろうね」と言つた。三四郎は氣の毒なような顔をしている。すると先生がまた話し出した。

「そのために独身を余儀なくされたというと、ぼくがその女のために不具にされたと同じ事になる。けれども人間には生まれついて、結婚のできない不具もあるし。そのほかいろいろ結婚のしにくい事情を持つている者がある」

「そんなに結婚を妨げる事情が世の中にたくさんあるでしようか」

先生は煙の間から、じつと三四郎を見ていた。

「ハムレットは結婚したくなかったんだろう。ハムレットは一人しかいないかも知れないが、あれに似た人はたくさんいる

「たとえばどんな人です」

「たとえば」と言つて、先生は黙つた。煙がしきりに出る。「たとえば、ここに一人の男がいる。父は早く死んで、母一人を頼りに育つたとする。その母がまた病氣にかかつて、いよいよ息を引き取るという、まぎわに、自分が死んだら誰だれそれがし某わけの世話になれという。子供が会つたこともない、知りもしない人を指名する。理由わけを聞くと、母がなんとも答えない。しいて聞くとじつは誰某がお前の本当のおとつさんだとかすかな声で言つた。——まあ話だが、そういう母を持つた子がいるとする。すると、その子が結婚に信仰を置かなくなるのはむろんだろう」

「そんな人はめつたにないでしよう」

「めつたには無いだろうが、いることはいる」

「しかし先生のは、そんなのじやないでしよう」

先生はハハハハと笑つた。

「君はたしかおつかさんがいたね」

「ええ」

「おとつさんは」

「死にました」

「ぼくの母は憲法發布の翌年に死んだ」

一一一

演芸会は比較的寒い時に開かれた。年はようやく押し詰まつてくる。人は二十日足らずの目のさきに春を控えた。いちち市に生きるものは、忙しからんとしている。おつかめねんはかりごと越年の計は貧者の頭こうべに落ちた。演芸会はこのあいだにあって、すべてののどがなるものと、余裕あるものと、春と暮の差別を知らぬものとを迎えた。

それが、いくらでもいる。たいていは若い男女である。いちじつめなんによ一日目に与次郎が、三四郎に向かつて大成功と叫んだ。三四郎は二日目の切符ふつかめを持っていた。与次郎が広田先生を誘つて行けと言う。切符が違うだろうと聞けば、むろん違うと言う。しかし一人でほうつておくと、けつして行く気づかいがないから、君が寄つて引っ張り出すのだと理由を説明して聞かせた。三四郎は承知した。

夕刻に行つてみると、先生は明るいランプの下に大きな本を広げていた。

「おいでになりませんか」と聞くと、先生は少し笑いながら、無言のまま首を横に振つた。

子供のような所作をする。しかし三四郎には、それが学者らしく思われた。口をきかないところがゆかしく思われたのだろう。三四郎は中腰になつて、ぼんやりしていた。先生は断わつたのが氣の毒になつた。

「君行くなら、いつしょに出よう。ぼくも散歩ながら、そこまで行くから」

先生は黒い回套まわしを着て出た。懷ふところ手らしいがわからない。空そぞくが低くたれてい。星の見えない寒さである。

「雨になるかもしねない」

「降ると困るでしょう」

「出入りにね。日本の芝居小屋しばいごやは下足げそくがあるから、天気のいい時ですらたいへんな不便だ。

それで小屋の中は、空気が通わなくつて、煙草が煙つて、頭痛がして、——よく、みんな、あれで我慢ができるものだ

「ですけれども、まさか戸外こがいでやるわけにもいかないからでしょう」

「お神樂かぐらはいつでも外でやつている。寒い時でも外でやる」

三四郎は、こりや議論にならないと思つて、答を見合わせてしまつた。

「ぼくは戸外がいい。暑くも寒くもない、きれいな空の下で、美しい空気を呼吸して、美

しい芝居が見たい。透明な空気のような、純粹で簡単な芝居ができるそうなものだ」「先生の御覧になつた夢でも、芝居にしたらそんなものができるでしよう」

「君ギリシアの芝居を知つているか」

「よく知りません。たしか戸外でやつたんですね」

「戸外。まつ昼間。さぞいい心持ちだつたろうと思う。席は天然の石だ。堂々としている。与次郎のようなものは、そういう所へ連れて行つて、少し見せてやるといい」

また与次郎の悪口わるくちが出た。その与次郎は今ごろ窮屈な会場のなかで、一生懸命に、奔走しつゝあつせん旋して大得意なのだからおもしろい。もし先生を連れて行かなかろうものなら、先生はたして来ない。たまにはこういう所へ来て見るのが、先生のためににはどのくらいいかわからないのだのに、いくらぼくが言つても聞かない。困つたものだなあ。と嘆息するにきまつてゐるからなおもしろい。

先生はそれからギリシアの劇場の構造を詳しく話してくれた。三四郎はこの時先生から、〔Theatron 《テアトロン》, Orche[^]stra 《オルケストラ》, Ske[^]ne[^] 《スケーネ》, Proske[^]nion 《プロスケニオン》〕などという字の講釈を聞いた。なんとかいうドイツ人の説による」とアテンの劇場は一万七千人をいれる席があつたといふことも聞いた。それは小さいほう

である。もつとも大きいのは、五万人をいれたということも聞いた。入場券は象牙と鉛と二通りあつて、いずれも賞牌メダルみたような恰好かつこうで、表に模様が打ち出してあつたり、彫刻が施してあるということも聞いた。先生はその入場券の価まで知っていた。一日だけの小芝居は十二銭で、三日続きの大芝居は三十五銭だと言つた。三四郎がへえ、へえと感心しているうちに、演芸会場の前へ出た。

さかんに電燈がついている。入場者は続々寄つて来る。与次郎の言つたよりも以上の景氣である。

「どうです、せつかくだからおはいりになりませんか」

「いやはいらぬ」

先生はまた暗い方へ向いて行つた。

三四郎は、しばらく先生の後影を見送つていたが、あとから、車で乗りつける人が、下足札を受け取る手間も惜しそうに、急いではいつて行くのを見て、自分も足早に入場した。前へ押されたと同じことである。

入口に四、五人用のない人が立つてゐる。そのうちの袴はかまを着けた男が入場券を受け取つた。その男の肩の上から場内をのぞいて見ると、中は急に広くなつてゐる。かつはなはだ

明るい。三四郎は眉に手を加えないばかりにして、導かれた席に着いた。狭い所に割り込みながら、四方を見回すと、人間の持つて来た色で目がちらちらする。自分の目を動かすからばかりではない。無数の人間に付着した色が、広い空間で、たえずめいめいに、かつかつてに、動くからである。

舞台ではもう始まっている。出てくる人物が、みんな冠をかむつて、沓をはいていた。

そこへ長い輿をかついで来た。それを舞台のまん中でとめた者がある。輿をおろすと、中からまた一人あらわれた。その男が刀を抜いて、輿を突き返したのと斬り合いを始めた。

——三四郎にはなんのことかまるでわからない。もつとも与次郎から梗概を聞いたことはある。けれどもいいかげんに聞いていた。見ればわかるだろうと考えて、うんなるほどと言っていた。ところが見れば毫もその意を得ない。三四郎の記憶にはただ入鹿の大臣という名前が残っている。三四郎はどうが入鹿だろうかと考えた。それはとうてい見込みがつかない。そこで舞台全体を入鹿のつもりでながめていた。すると冠でも、沓でも、筒袖の衣服でも、使う言葉でも、なんとなく入鹿臭くなってきた。実をいうと三四郎には確然たる入鹿の観念がない。日本歴史を習つたのが、あまりに遠い過去であるから、古い入鹿の事もつい忘れてしまった。推古天皇の時のようもある。欽明天皇の御代で

もさしつかえない気がする。応神天皇や聖武天皇ではけつしてないと思う。三四郎はただ入鹿じみた心持ちを持つてゐるだけである。芝居を見るにはそれでたくさんだと考えて、唐めいた装束や背景をながめていた。しかし筋はちつともわからなかつた。そのうち幕になつた。

幕になる少しまえに、隣の男が、そのまた隣の男に、登場人物の声が、六畳敷で、親子差向かいの談話のようだ。まるで訓練がないと非難していた。そつち隣の男は登場人物の腰が据わらない。ことゞとくひよろひよろしていると訴えていた。二人は登場人物の本名をみんな暗んじている。三四郎は耳を傾けて二人の談話を聞いていた。二人ともりつぱな服装をしていて。おおかた有名な人だろうと思つた。けれどももし与次郎にこの談話を聞かせたらさだめし反対するだらうと思つた。その時うしろの方でうまいうまいなかなかうまいと大きな声を出した者がある。隣の男は二人ともうしろを振り返つた。それぎり話をやめてしまつた。そこで幕がおりた。

あすこ、ここに席を立つ者がある。花道から出口へかけて、人の影がすこぶる忙しい。三四郎は中腰になつて、四方をぐるりと見回した。来ているはずの人はどこにも見えない。本当をいうと演芸中にもできるだけは気をつけていた。それで知れないから、幕になつた

らばと内々心あてにしていたのである。三四郎は少し失望した。やむをえず目を正面に帰した。

隣の連中^{れんじゆう}はよほど世間が広い男たちとみえて、左右を顧みて、あすこにはだれがいる。ここにはだれがいるときりに知名の人の名を口にする。なかには離れながら、互いに挨拶^{あいさつ}をしたのも、一、二人ある。三四郎はおかげでこれら知名な人の細君を少し覚えた。そのなかには新婚したばかりの者もあつた。これは隣の一人にも珍しかつたとみえて、その男はわざわざ眼鏡^{めがね}をふき直して、なるほどなるほどと言つて見ていた。

すると、幕のおりた舞台の前を、向こうの端^{はじ}からこつちへ向けて、小走りに与次郎がかけて來た。三分の二ほどの所で留まつた。少し及び腰になつて、土間の中をのぞき込みながら、何か話している。三四郎はそれを見当にねらいをつけた。——舞台の端に立つた与次郎から一直線に、二、三間隔てて美穂子の横顔が見えた。

そのそばにいる男は背中を三四郎に向けている。三四郎は心のうちに、この男が何かの拍子に、どうかしてこつちを向いてくれればいいと念じていた。うまいぐあいにその男は立つた。すわりくたびれたとみえて、柾^{ます}の仕切りに腰をかけて、場内を見回しはじめた。その時三四郎は明らかに野々宮さんの広い額と大きな目を認めることができた。野々宮さ

んが立つとともに、美禰子のうしろにいたよし子の姿も見えた。三四郎はこの三人のほかに、まだ連がいるかいないかを確かめようとした。けれども遠くから見ると、ただ人がぎつしり詰まつてゐるだけで、連といえば土間全体が連とみえるまでだからしかたがない。美禰子と与次郎のあいだには、時々談話が交換されつつあるらしい。野々宮さんもおりおり口を出すと思われる。

すると突然原口さんが幕の間から出て來た。与次郎と並んでしきりに土間の中をのぞきこむ。口はむろん動かしているのだろう。野々宮さんは合い図のような首を縦に振つた。その時原口さんはうしろから、平手で、^{ひらて}与次郎の背中をたたいた。与次郎はくるりと引つ繰り返つて、幕の裾すそをもぐつてどこかへ消えうせた。原口さんは、舞台を降りて、人と人との間を伝わつて、野々宮さんのそばまで來た。野々宮さんは、腰を立てて原口さんを通した。原口さんはぽかりと人の中へ飛び込んだ。美禰子とよし子のいるあたりで見えなくなつた。

この連中の一挙一動を演芸以上の興味をもつて注意していた三四郎は、この時急に原口流の所作がうらやましくなつた。ああいう便利な方法で人のそばへ寄ることができようとは毫も思いつかなかつた。自分もひとつまねてみようかしらと思つた。しかしまねるとい

う自覚が、すでに実行の勇気をくじいたうえに、もうはいる席は、いくら詰めても、むずかしかろうという遠慮が手伝つて、三四郎の尻は依然として、もとの席を去りえなかつた。そのうち幕があいて、ハムレットが始まつた。三四郎は広田先生のうちで西洋のなんとかいな名優のふんしたハムレットの写真を見たことがある。今三四郎の目の前にあらわれたハムレットは、これとほぼ同様の服装をしている。服装ばかりではない。顔まで似ている。両方とも八の字を寄せている。

このハムレットは動作がまったく軽快で、心持ちがいい。舞台の上を大いに動いて、また大いに動かせる。能掛りの入鹿とはたいへん趣を異にしている。ことに、ある時、ある場合に、舞台のまん中に立つて、手を広げてみたり、空をにらんでみたりするときは、観客の眼中にほかのものはいつさい入り込む余地のないくらい強烈な刺激を与える。

その代り台詞は日本語である。西洋語を日本語に訳した日本語である。口調には抑揚がある。節奏もある。あるところは能弁すぎると思われるくらい流暢に出る。文章もりっぱである。それでいて、気が乗らない。三四郎はハムレットがもう少し日本人じみたことを言つてくれればいいと思つた。おつかさん、それじゃおとつさんにするまいじやありませんかと言いそうなところで、急にアポロなどを引合いに出して、のん気にやつてしま

う。それでいて顔つきは親子とも泣きだしそうである。しかし三四郎はこの矛盾をただ隠^お
ぼろげ氣に感じたのみである。けつしてつまらないと思^いきるほどの勇氣は出なかつた。

したがつて、ハムレットに飽きた時は、美禰子の方を見ていた。美禰子が人の影に隠れて見えなくなる時は、ハムレットを見ていた。

ハムレットがオフェリヤに向かつて、尼寺へ行け尼寺へ行けと言うところへきた時、三四郎はふと広田先生のことを考え出した。広田先生は言つた。——ハムレットのようなものに結婚ができるか。——なるほど本で読むとそぞららしい。けれども、芝居では結婚してもよさそうである。よく思案してみると、尼寺へ行けとの言い方が悪いのだろう。その証拠には尼寺へ行けと言われたオフェリヤがちつとも氣の毒にならない。

幕がまたおりた。美禰子とよし子が席を立つた。三四郎もつづいて立つた。廊下まで来てみると、二人は廊下の中ほどで、男と話をして^いいる。男は廊下から出はいりのできる左側の席の戸口に半分からだを出した。男の横顔を見た時、三四郎はあとへ引き返した。席へ返らずに下足を取つて表へ出た。

本来は暗い夜である。人の力で明るくした所を通り越すと、雨が落ちているように思う。風が枝を鳴らす。三四郎は急いで下宿に帰つた。

夜半から降りだした。三四郎は床の中へ、雨の音を聞きながら、尼寺へ行けという一句を柱にして、その周囲にぐるぐる 徻した。広田先生も起きているかもしれない。先生はどんな柱を抱いているだろう。与次郎は偉大なる暗闇の中に正体なく埋まつていてるに違いない。……

あくる日は少し熱がする。頭が重いから寝ていた。昼飯は床の上に起き直つて食つた。また一寝入りすると今度は汗が出た。気がうとくなる。そこへ威勢よく与次郎がはいつて来た。ゆうべも見えず、けさも講義に出ないようだからどうしたかと思つて尋ねたと言う。三四郎は礼を述べた。

「なに、ゆうべは行つたんだ。行つたんだ。君が舞台の上に出てきて、美禰子さんと、遠くで話をしていたのも、ちゃんと知つている」

三四郎は少し酔つたような心持ちである。口をききだすと、つるつると出る。与次郎は手を出して、三四郎の額をおさえた。

「だいぶ熱がある。薬を飲まなくつちゃいけない。風邪を引いたんだ」

「演芸場があまり暑すぎて、明るすぎて、そうして外へ出ると、急に寒すぎて、暗すぎるからだ。あれはよくない」

「いけないたつて、しかたがないじやないか」

「しかたがないつたつて、いけない」

三四郎の言葉はだんだん短くなる、与次郎がいいかげんにあしらつているうちに、すうすう寝てしまつた。一時間ほどしてまた目をあけた。与次郎を見て、

「君、そこにいるのか」と言う。今度は平生の三四郎のようである。気分はどうかと聞くと、頭が重いと答えただけである。

「風邪だろう」

「風邪だろう」

両方で同じ事を言つた。しばらくしてから、三四郎が与次郎に聞いた。

「君、このあいだ美禰子さんの事を知つてるかとぼくに尋ねたね」

「美禰子さんの事を？ どこで？」

「学校で」

「学校で？ いつ」

与次郎はまだ思い出せない様子である。三四郎はやむをえずその前後の当時を詳しく説

明した。与次郎は、

「なるほどそんな事があつたかもしれない」と言つてゐる。三四郎はずいぶん無責任だと思つた。与次郎も少し氣の毒になつて、考へ出そうとした。やがてこう言つた。

「じゃ、なんじやないか。美禰子さんが嫁に行くという話じやないか」

「きまつたのか」

「きまつたように聞いたが、よくわからない」

「野々宮さんの所か」

「いや、野々宮さんじやない」

「じゃ……」と言いかけてやめた。

「君、知つてるのか」

「知らない」と言い切つた。すると与次郎が少し前へ乗り出してきた。

「どうもよくわからぬ。不思議な事があるんだが。もう少したたないと、どうなるんだ
か見当がつかない」

三四郎は、その不思議な事を、すぐ話せばいいと思うのに、与次郎は平氣なもので、一人でのみこんで、一人で不思議がつてゐる。三四郎はしばらく我慢していたが、とうとう焦れつたくなつて、与次郎に、美禰子に関するすべての事実を隠さずに話してくれと請求

した。与次郎は笑いだした。そうして慰謝のためかなんだか、とんだところへ話頭を持つていつてしまつた。

「ばかだなあ、あんな女を思つて。思つたつてしかたがないよ。第一、君と同年ぐらいいじやないか。同年ぐらいの男にほれるのは昔の事だ。八百屋お七時代の恋だ」

三四郎は黙つていた。けれども与次郎の意味はよくわからなかつた。

「なぜというに。二十前後の同じ年の男女を二人並べてみろ。女のほうが万事上手だあれ。男は馬鹿にされるばかりだ。女だつて、自分の軽蔑する男の所へ嫁へ行く気は出ないやね。もつとも自分が世界でいちばん偉いと思つてる女は例外だ。軽蔑する所へ行かなければ独身で暮らすよりほかに方法はないんだから。よく金持ちの娘や何かにそんなんがあるじやないか、望んで嫁に来ておきながら、亭主を軽蔑しているのが。美穂子さんはそれよりずっと偉い。その代り、夫として尊敬のできない人の所へははじめから行く気はないんだから、相手になるものはその気でいなくつちやいけない。そういう点で君だのぼくだのは、あの女の夫になる資格はないんだよ」

三四郎はどうとう与次郎といつしよにされてしまつた。しかし依然として黙つていた。
「そりや君だつて、ぼくだつて、あの女よりはるかに偉いさ。お互にこれでも、なあ。

けれども、もう五、六年たなくつちや、その偉さ加減がかの女の目に映つてこない。しかして、かの女は五、六年じつとしている気づかいはない。したがつて、君があの女と結婚する事は風馬牛^{ふうばぎゅう}だ」

与次郎は風馬牛という熟字を妙なところへ使つた。そうして一人で笑つている。

「なに、もう五、六年もすると、あれより、ずっと上等なのが、あらわれて来るよ。^{にほん}日本じや今女のほうが余つてゐるんだから。風邪なんか引いて熱を出したつてはじまらない。——なに世の中は広いから、心配するがものはない。じつはぼくにもいろいろあるんだが、ぼくのほうであんまりうるさいから、御用で長崎へ出張すると言つてね」

「なんだ、それは」

「なんだつて、ぼくの関係した女さ」

三四郎は驚いた。

「なに、女だつて、君なんぞのかつて近寄つたことのない種類の女だよ。それをね、長崎へ黴菌^{ぱいきん}の試験に出張するから当分だめだつて断わつちまつた。ところがその女が林檎^{りんご}を持って停車場^{ステーション}まで送りに行くと言いだしたんで、ぼくは弱つたね」

三四郎はますます驚いた。驚きながら聞いた。

「それで、どうした」

「どうしたか知らない。林檎を持つて、停車場に待っていたんだろう」

「ひどい男だ。よく、そんな悪い事ができるね」

「悪い事で、かあいそうな事だとは知つてゐるけれども、しかたがない。はじめから次第次第に、そこまで運命に持つていかれるんだから。じつはどうのさきからぼくが医科の学生になつていたんだからなあ」

「なんで、そんなよけいな嘘うそをつくんだ」

「そりや、またそれぞれの事情のあることなのさ。それで、女が病氣の時に、診断を頼まれて困つたこともある」

三四郎はおかしくなつた。

「その時は舌を見て、胸をたたいて、いいかげんに『まかしたが、その次に病院へ行つて、見てもらいたいがいいかと聞かれたには閉口した』

三四郎はどうとう笑いだした。与次郎は、

「そういうこともたくさんあるから、まあ安心するがよからう」と言つた。なんの事だかわからない。しかし愉快になつた。

与次郎はその時はじめて、美禰子に関する不思議を説明した。与次郎の言うところによると、よし子にも結婚の話がある。それから美禰子もある。それだけならばいいが、よし子の行く所と、美禰子の行く所が、同じ人らしい。だから不思議なのだそうだ。

三四郎も少しばかにされたような気がした。しかしよし子の結婚だけはたしかである。現に自分がその話をそばで聞いていた。ことによるとその話を美禰子のと取り違えたのかかもしれない。けれども美禰子の結婚も、まつたく嘘ではないらしい。三四郎ははつきりしたところが知りたくなつた。ついでだから、与次郎に教えてくれと頼んだ。与次郎はわけなく承知した。よし子を見舞いに来るようにしてやるから、じかに聞いてみろという。うまい事を考えた。

「だから、薬を飲んで、待つていなくつてはいけない」

「病気が直つても、寝て待つている」

二人は笑つて別れた。帰りがけに与次郎が、近所の医者に来てもらう手続きをした。

晩になつて、医者が来た。三四郎は自分で医者を迎えた覚えがないんだから、はじめは少し狼狽ろうばいした。そのうち脈を取られたのでようやく気がついた。年の若い丁寧な男である。三四郎は代診と鑑定した。五分ののち病症はインフルエンザときまつた。今夜頓服とんぶく

を飲んで、なるべく風にあたらないようにしろという注意である。

翌日目がさめると、頭がだいぶ軽くなっている。寝ていれば、ほとんど常体に近い。ただ枕を離れると、ふらふらする。下女が来て、だいぶ部屋の中が熱臭いと言つた。三四郎は飯も食わずに、仰向けに天井をながめていた。時々うとうと眠くなる。明らかに熱と疲れとにとらわれたありさまである。三四郎は、とらわれたまま、逆らわずに、寝たりさめたりするあいだに、自然に従う一種の快感を得た。病症が軽いからだと思った。

四時間、五時間とたつうちに、そろそろ退屈を感じだした。しきりに寝返りを打つ。外はいい天氣である。障子にあたる日が、次第に影を移してゆく。すずめ雀が鳴く。三四郎はきようも与次郎が遊びに来てくれればいいと思つた。

ところへ下女が障子を開けて、女のお客様だと言う。よし子が、そう早く来ようとは待ち設けなかつた。与次郎だけに敏捷びんしょくな働きをした。寝たまま、あけ放しの入口に目をつけていると、やがて高い姿が敷居の上へ現われた。きょうは紫の袴はかまをはいている。足は両方とも廊下にある。ちよつとはいのを躊躇ちゆうちよした様子が見える。三四郎は肩を床から上げて、「いらつしやい」と言つた。

よし子は障子をたてて、枕まくらもと元へすわつた。六畳の座敷が、取り乱してあるうえに、

けさは掃除^{そうじ}をしないから、なお狭苦しい。女は、三四郎に、

「寝ていらっしゃい」と言つた。三四郎はまた頭を枕へつけた。自分だけは穏やかである。「奥くはないですか」と聞いた。

「ええ、少し」と言つたが、べつだん臭い顔もしなかつた。「熱がおありなの。なんなんでしょう、御病氣は。お医者はいらしつて」

「医者はゆうべ来ました。インフルエンザだそうです」

「けさ早く佐々木さんがおいでになつて、小川が病氣だから見舞いに行つてやつてください。何病だかわからないが、なんでも軽くはないようだつておつしやるものだから、私も美禰子さんもびっくりしたの」

与次郎がまた少しほらを吹いた。悪く言えば、よし子を釣り出したようなものである。

三四郎は人がいいから、氣の毒でならない。「どうもありがとう」と言つて寝ている。よし子は風呂敷^{ふろしき}包みの中から、蜜柑^{みかん}の籠^{かご}を出した。

「美禰子さんの御注意があつたから買つてきました」と正直な事を言う。どつちのお見舞^{みやげ}

だかわからぬ。三四郎はよし子に対して礼を述べておいた。

「美禰子さんもあがるはずですが、このごろ少し忙しいのですから——どうぞよろしく

つて……」

「何か特別に忙しいことができたのですか」

「ええ。できたの」と言つた。大きな黒い目が、枕についた三四郎の顔の上に落ちている。三四郎は下から、よし子の青白い額を見上げた。はじめてこの女に病院で会つた昔を思い出した。今でもものうげに見える。同時に快活である。頼りになるべきすべての慰謝を三四郎の枕の上にもたらしてきた。

「蜜柑をむいてあげましようか」

女は青い葉の間から、果物くだものを取り出した。かわ渴いた人は、香かにほとばしる甘い露を、しだたかに飲んだ。

「おいしいでしょう。美禰子さんのお見舞よ」

「もうたくさん」

女は袂たもとから白いハンケチを出して手をふいた。

「野々宮さん、あなたの御縁談はどうなりました」

「あれぎりです」

「美禰子さんにも縁談の口があるそうじゃありませんか」

「ええ、もうまとまりました」

「だれですか、さきは」

「私をもううと言つたかたなの。ほほほおかしいでしよう。美禰子さんのお兄いさんのお友だちよ。私近いうちにまた兄といつしょに家を持ちますの。美禰子さんが行つてしまふと、もうご厄介になつてゐるわけにゆかないから」

「あなたはお嫁には行かないんですね」

「行きたい所がありさえすれば行きますわ」

女はこう言い捨てて心持ちよく笑つた。まだ行きたい所がないにきまつてゐる。

三四郎はその日から四日ほど床を離れなかつた。五日目にこわごわながら湯にはいつて、鏡を見た。亡者もうじやの相がある。思い切つて床屋へ行つた。そのあくる日は日曜である。

朝飯後、シャツを重ねて、外套がいとうを着て、寒くないようにして美禰子の家へ行つた。玄関によし子が立つて、今沓脱くつぬぎへ降りようとしている。今兄の所へ行くところだと言う。美禰子はいない。三四郎はいつしょに表へ出た。

「もうすっかりいいんですか」

「ありがとうございました。——里見さんはどこへ行つたんですか」

「にいさん？」

「いいえ、美禰子さんです」

「美禰子さんは会堂」

美禰子の会堂へ行くことは、はじめて聞いた。どこの会堂か教えてもらつて、三四郎はよし子に別れた。横町を三つほど曲がると、すぐ前へ出た。三四郎はまつたく耶蘇教に縁のない男である。会堂の中はのぞいて見たこともない。前へ立つて、建物をながめた。説教の掲示を読んだ。鉄柵^{てつさく}の所を行つたり来たりした。ある時は寄りかかつてみた。三四郎はともかくもして、美禰子の出てくるのを待つつもりである。

やがて唱歌の声が聞こえた。贊美歌^{さんびか}というものだろうとを考えた。締め切つた高い窓のうちのでき事である。音量から察するとよほどの人数らしい。美禰子の声もそのうちにある。三四郎は耳を傾けた。歌はやんだ。風が吹く。三四郎は外套の襟^{えり}を立てた。空に美禰子の好きな雲が出た。

かつて美禰子といつしょに秋の空を見たこともあつた。所は広田先生の二階であつた。田端の小川の縁^{ふち}にすわつたこともあつた。その時も一人ではなかつた。^{ストレイ・シープ}迷^ス羊^{トレイ・シープ}。雲が羊の形をしている。

忽然として会堂の戸が開いた。中から人が出る。人は天国から浮世へ帰る。美禰子は終りから四番目であった。縞の呉妻コートを着て、うつ向いて、上り口の階段を降りて來た。寒いとみえて、肩をすぼめて、両手を前で重ねて、できるだけ外界との交渉を少なくしている。美禰子はこのすべてにあがらざる態度を門ぎわまで持続した。その時、往来の忙しさに、はじめて気がついたように顔を上げた。三四郎の脱いだ帽子の影が、女の目に映つた。二人は説教の掲示のある所で、互いに近寄つた。

「どうなすつて」

「今お宅までちょっと出たところです」

「そう、じゃいらつしやい」

女はなかば歩をめぐらしかけた。相変らず低い下駄げたをはいている。男はわざと会堂の垣かきに身を寄せた。

「ここでお目にかかるはそれでよい。さつきから、あなたの出て来るのを待つていた」

「おはいりになればよいのに。寒かつたでしょう」

「寒かつた」

「お風邪はもうよいの。大事になさらないと、ぶり返しますよ。まだ顔色がよくないよう

ね」

男は返事をしずに、外套の隠袋から半紙に包んだものを出した。

「拝借した金です。ながながありがとう。返そう返そうと思つて、ついおそくなつた」

美禰子はちよつと三四郎の顔を見たが、そのまま逆らわずに、紙包みを受け取つた。しかし手に持つたなり、しまわざにながめている。三四郎もそれをながめている。言葉が少しのあいだ切れた。やがて、美禰子が言つた。

「あなた、御不自由じやなくつて」

「いいえ、このあいだからそのつもりで国から取り寄せておいたのだから、どうか取つてください」

「そう。じゃいただいておきましょう」

女は紙包みを懐へ入れた。その手を吾妻コートから出した時、白いハンケチを持つていた。鼻のところへあてて、三四郎を見ている。ハンケチをかぐ様子もある。やがて、その手を不意に延ばした。ハンケチが三四郎の顔の前へ来た。鋭い香^{かおり}がふんとする。

「ヘリオトロープ」と女が静かに言つた。三四郎は思わず顔をあとへ引いた。ヘリオトロープの罐^{びん}。四丁目の夕暮。
迷^{ストレイ・シープ}羊^{ストレイ・シープ}。迷^{ストレイ・シープ}羊^{ストレイ・シープ}。空には高い日が明らかにかかる。

「結婚なさるそうですね」

美禰子は白いハンケチを袂たもとへ落とした。

「御存じなの」と言いながら、二重瞼ふたえまぶたを細目にして、男の顔を見た。三四郎を遠くに置いて、かえつて遠くにいるのを気づかいすぎた目つきである。そのくせ眉だけははつきりおちついている。三四郎の舌が上顎うわあごへひつついてしまった。

女はややしぶらく三四郎をながめたのち、聞きかねるほどのため息をかすかにもらした。やがて細い手を濃い眉の上に加えて言つた。

「我はわが愆とがを知る。わが罪は常にわが前にあり」

聞き取れないくらいな声であつた。それを三四郎は明らかに聞き取つた。三四郎と美禰子はかようにして別れた。下宿へ帰つたら母からの電報が来ていた。あけて見ると、いつ立つとある。

一三一

原口さんの絵はでき上がつた。丹青会はこれを一室の正面にかけた。そうしてその前に

長い腰掛けを置いた。休むためもある。絵を見るためもある。休みかつ味わうためもある。丹青会はこうして、この大作に 徹する多くの観覧者に便利を与えた。特別の待遇である。絵が特別のできだからという。あるいは人の目をひく題だからともいう。少數のものは、あの女を描いたからだといった。会員の一、二はまつたく大きいからだと弁解した。大きいには違いない。幅五寸に余る金の縁をつけて見ると、見違えるように大きくなつた。

原口さんは開会の前日検分のためちよつと来た。腰掛けに腰をおろして、久しいあいだパイプをくわえてながめていた。やがて、ぬつと立つて、場内を一巡丁寧に回つた。それからまたもとの腰掛けへ帰つて、第二のパイプをゆっくり吹かした。

「森の女」の前には開会の当日から人がいっぱいいたかった。せつかくの腰掛けは無用の長物となつた。ただ疲れた者が、絵を見ないために休んでいた。それでも休みながら「森の女」の評をしていた者がある。

美禰子は夫に連られて二日目に来た。原口さんが案内をした。「森の女」の前へ出た時、原口さんは「どうです」と二人を見た。^{ふたり}夫は「結構です」と言つて、眼鏡の奥からじつと眸^{めがね}を凝らした。

「この団扇をかざして立つた姿勢がいい。さすが専門家は違いますね。よくここに気がついたものだ。光線が顔へあたるぐあいがうまい。陰と日向の段落がかつきりして——顔だけでも非常におもしろい変化がある」

「いや皆御当人の好みだから。ぼくの手柄てがらじゃない」

「おかげさまで」と美禰子が礼を述べた。

「私も、おかげさまで」と今度は原口さんが礼を述べた。

夫は細君の手柄だと聞いてさもうれしそうである。三人のうちでいちばんていちよう鄭重な礼を述べたのは夫である。

開会後第一の土曜の昼過ぎにはおおぜいいつしょに来た。——広田先生と野々宮さんと与次郎と三四郎と。四人よつたりはよそをあと回しにして、第一に「森の女」の部屋へやにはいった。与次郎が「あれだ、あれだ」と言う。人がたくさんたかっている。三四郎は入口でちよつと躊躇ちゆううちよした。野々宮さんは超然としてはいった。

おおぜいのうしろから、のぞきこんだだけで、三四郎は退いた。腰掛けによつてみんなを待ち合わせていた。

「すてきに大きなもの描いたな」と与次郎が言つた。

「佐々木に買つてもらうつもりだそうだ」と広田先生が言つた。

「ぼくより」と言いかけて、見ると、三四郎はむずかしい顔をして腰掛けにもたれている。与次郎は黙つてしまつた。

「色の出し方がなかなか洒落しゃれていますね。むしろ意氣な絵だ」と野々宮さんが評した。

「少し気がききすぎているくらいだ。これじや鼓つづみの音のよう^ねにぽんぽんする絵はかけないと自白するはずだ」と広田先生が評した。

「なんですぽんぽんする絵というのは」

「鼓の音のように間が抜けていて、おもしろい絵の事さ」

二人は笑つた。二人は技巧の評ばかりする。与次郎が異を立てた。

「里見さんを描いちや、だれが描いたつて、間が抜けてるようには描けませんよ」

野々宮さんは目録へ記号しるしをつけるために、隠袋かくしへ手を入れて鉛筆を捜した。鉛筆がなくて、一枚の活版刷りのはがきが出てきた。見ると、美穂子の結婚披露ひろうの招待状であつた。披露はとうに済んだ。野々宮さんは広田先生といつしょにフロツクコートで出席した。三四郎は帰京の当日この招待状を下宿の机の上に見た。時期はすでに過ぎていた。

野々宮さんは、招待状を引き千切つて床の上に捨てた。やがて先生とともにほかの絵の

評に取りかかる。与次郎だけが三四郎のそばへ来た。

「どうだ森の女は」

「森の女という題が悪い」

「じゃ、なんとすればよいんだ」

三四郎はなんとも答えなかつた。ただ口の中で

迷^{ストレイ}・^{シープ}、

迷^{ストレイ}・^{シープ}

と繰り返し

た。

青空文庫情報

底本：「三三四郎」角川文庫クラシックス、角川書店

1951（昭和26）年10月20日初版発行

1997（平成9）年6月10日127刷

初出：「朝日新聞」

1908（明治41）年9月1日～12月29日

入力：古村充

校正：かとうかおり

2000年7月1日公開

2014年6月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

三四郎

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>